語り継ぐ５

４歳で体験した阪神・淡路大震災を

高校３年生の言葉で語る

兵庫県立舞子高等学校

環境防災科３年

夢 に 感動 し 未来 に託す

兵庫県立舞子高等学校長
新　居　　寛

平成７年１月 17 日未明、兵庫県南部を襲った地震は、一瞬にして多くの尊い人命と財産を奪い去った。阪神・淡路大震災は、自然への畏敬の念や共同体意識が希薄となった都市生活の脆弱さを明らかにし、これまで効率と成長を重視した物質的な豊かさを追求し、安全と安心の視点をおろそかにし、心の豊かさを軽視してきた社会に大きな警告を発した。

私たちは、この経験から、命の尊さ・大切さを再確認するとともに、地域での助け合いや国内外からのボランティアの支援等を通じて、人と人とが支え合うことの大切さを改めて実感した。

県民、民間団体、市町、県、国等が一体となって創造的復興を目指した 10 年とその後の４年間に、高齢者等を地域で見守る活動や県民一人ひとりの主体的な社会活動など今後の成熟社会を支える、安全で安心できる社会を築いていく災害文化ともいうべきものが芽生え、県は活動支援の延長を企画している。14 年の年月が新しい継承者を求めているともいえよう。

このことを踏まえて、阪神・淡路大震災の経験と教訓をいつまでも忘れることなく、今後、安全で安心な社会づくりを推進するとともに、国内外で発生する災害による被害の軽減にも貢献していく市民のリーダーが育つことを夢見ている。

阪神・淡路大震災の経験を継承し、地域社会における災害への備えに関する活動、人と人とが支え合う地域社会づくりに貢献する活動を目指す専門学科として全国唯一の存在であるが故にその使命を自覚し、「伝える」ために、ここに「語り継ぐ　５」を編集した。

過去を背負って前進するのが使命である若い人たちのエネルギーは眼には見えないけれど、肌で感じとることができる。明日を担う君たちのこころ・夢に感動し、理想の実現を未来に託すのだ。

も　く　じ

題　　名	震災所の住所	名　　前	ページ
助け合い	神戸市垂水区本多聞	井上　　桂	1
私の震災体験	明石市貴崎	井上　茉美	5
近くて遠いもの。	神戸市中央区旭通	井原みの里	9
子供から見た震災	神戸市垂水区千代が丘	井本　晶子	13
家族	神戸市北区北五葉	江澤　奈美	17
阪神・淡路大震災を体験して	兵庫県西宮市前開町	木田　勝久	20
いつかは私がしあわせを…	神戸市垂水区五色山	久保　絢菜	24
「こころ」と震災	神戸市西区春日台	黒田　琢真	28
体験していない故の無知	加古川市東神吉町	幸川　拓矢	32
あの日、そして未来へ向かって…	加古郡稲美町	小林　哲平	37
震災の記憶	神戸市垂水区乙木	栄　　瑞希	42
絆	神戸市須磨区	澤井　翔太	46
道と記憶	神戸市垂水区旭が丘	柴田　塁斗	50
私の家族	神戸市長田区北町	鈴木　有人	54
いのち、ひとつ…	神戸市垂水区学ヶ丘	瀬尾　明子	58
いのち、むすびつなぐ思い	神戸市須磨区東落合	田仲　　愛	62
共に生きる	神戸市垂水区桃山台	谷口　智子	67
私が生きる意味	神戸市垂水区上高丸	谷口　麻衣	71
震災からの贈り物	神戸市長田区大谷町	筒井　公美	75
震災の記憶	神戸市垂水区本多聞	東矢　祐輝	79
幸せ降りそそぐように	神戸市垂水区千代が丘	鳥越　美紀	83
記憶のカケラをたどって…	明石市鳥羽	中川　夏姫	88
事実	神戸市垂水区桃山台	西村　仁志	92
「語り継ぐ」という言葉	神戸市須磨区北落合	服部　征司	96
記憶	神戸市長田区高東町	濱　　裕磨	100
未来のために	宍粟市千種町	雛倉　伸也	105
4 歳の私・17 歳の私	神戸市灘区新在家南町	藤原　由希	109
忘れてはいけない、あの日	神戸市垂水区舞子台	細岡　亜衣	113
語り継ぐ	加古川市野口町	前原　　葵	117
少し変わった生活	神戸市垂水区海岸通	桝井　　諒	121
阪神・淡路大震災の記憶	神戸市垂水区	松井　絢也	125
阪神・淡路大震災、そしてこれから	兵庫県三田市中町	松尾　美佳	128
震災からもらったもの	加古川市野口町	松嶋さくら	132
記憶と想い	明石市硯町	丸山　知美	136
あの日を振り返って	神戸市垂水区つつじヶ丘	三木　陽平	140
阪神・淡路大震災と私の家族	明石市二見町	三好　彩香	144
語り継ぐ	神戸市垂水区舞子台	山口　郁美	148
震災から・・	神戸市垂水区学が丘	山中麻衣子	152
震災の記憶	神戸市垂水区学が丘	吉田　菜摘	156
これからの未来のために	神戸市垂水区小束山	吉村　昇悟	160

助け合い

神戸市垂水区本多聞
井上　桂

● 震災前

僕の親は大きな災害にあった経験もなく、過去に起こった地震の分布状況から、近畿地方に地震はあまり来ないと思っていたし、災害や防災に関する知識など何もなかったため、防災として停電の時のために懐中電灯を用意していたぐらいで、地震への備えとして非常用持ち出し袋や家具の固定などの防災が何一つできていなかった。今考えると危険な状態で日々過ごしていた。今では、阪神・淡路大震災の教訓を生かして、貴重品をまとめ、家具の固定や消火器の設置、寝所を安全な場所にしたりしているため災害に少しは備えているものの、震災に何一つ備えていなかった当時、大きな被害にあわなくて本当に良かったと思う。

● ５：４６

１９９５年１月１７日、阪神・淡路大震災が起こった。当時３歳だった僕は、築６年ほどの一軒家に住んでいた。５人家族で、１階に父と兄が、２階で母と姉と僕が同じ部屋で寝ていた。僕は阪神・淡路大震災後の生活のことはほとんど記憶していないけれど、なぜか地震が起きた瞬間のことは、はっきりと鮮明に覚えている。

ドン・ガタガタガタガタ・ゴゴーっていうすさまじい音と、下から何かに突き上げられるような大きな揺れで僕は目が覚めた。地震の揺れは２０秒ぐらいだったらしいけれど、恐怖からかもっと長かったように思えた。地震に気付いた母は僕と姉に覆いかぶさっていたそうだ。姉は地震に気付かずまだ寝ていた。姉を起こし、「１階に下りるで。」と母に言われた。まだ３歳だったため、地震ということも分からず、何が起きたのかも分らずに、ただ家がかってに揺れただけなのだと思っていた。だから、身の危険も感じず、なぜ１階に下りなければいけないのかよく分らないまま、ただ母について１階に下りて行った。父と兄が寝ていた１階の寝室には大きなタンスがあった。もちろん倒れてきたら命に危険があるのは間違いないし、もちろん当時は家具の固定もしていなかった。けれど３歳の僕にはそんなことも分からなかった。１階に降りると電気がつかないため、父と兄がロウソクを持っていた。家具が倒れず父と兄が生きていたのは、本当に奇跡だったとも思える。ろうそくの明かりで周りを見渡すと、除湿機が倒れておりカーペットが水で濡れていた。当時よく遊んでいたおもちゃや、人形がいたるところに散らばっていた。その散らばり方が異様で、まったく別の部屋にも飛んだりしていたため、現実的ではないことが今起こっていることが分かって、恐怖を感じたのを覚えている。その他気付いたことだけれど、震災前のお祭りでもらった金魚の水槽が落ちて割れていて、金魚が死んでいた。そのころは生き物を飼うのが初めてでかなり可愛がっていて、餌をあげたりするのを楽しみにしていた分、金魚が死んだという事実はかなりショックだった。

● 震災直後

震度７という大きな揺れにあったが、家に２か所ほど１メートルほどのヒビがいったぐらいで、幸い食器が割れたり、棚やタンスが倒れることはなかった。しかし、ガス・電気・水道などのライフラインは使えなくなっていた。父や母もかなり大きな地震が来たということしか分らないため、情報を得ようと、テレビをつけたけれど電気が切断されているため見ることができなかった。しかしラジオをつけると情報が取れ、大きな地震が神戸や淡路島を震源に起こったということが分かった。今後の余震に備えるためにも、周りがどのような状態なのか確認するためにも、１度家の外に出ることにした。夜明け前だったので外は真っ暗だった。近所の人達がかなり不安そうな顔をしていたが、周りに家が倒壊しているところもなく、近所の人たちは全員怪我なく無事ということを確認した。その日の朝の食事は、インスタントのもので済ませた。このような震災で、生き埋めになってしまった方や、ご飯などを食べられる状況でない人もいたはずなのに、少しでもご飯が食べられたことはかなり幸せなことだったと今になって思った。

震災日は、火曜日で普段なら幼稚園の登校日で、兄や姉は小学校があったはずだけれど、休みになった。休みという連絡が、親同士の連絡網で回ったのではなく、子どもを、学校や幼稚園に行かせられる

ような状態ではないという気持ちを皆が持っていて自然と休みになったそうだ。日常でたまに起こる災害が起こった時、普通なら学校があるか確認したり、連絡が回ってきたりするけれど、このことを聞いた時、阪神・淡路大震災が、今までにない大地震だったということが分かった。

朝の混乱していた気持ちも治まりはじめた頃、東灘に住んでいる祖父母から電話がかかってきた。祖父母の家の近くには、倒壊している家があったらしいけれど、祖父母の家は、家が少し傾き半壊で、食器が割れたり、ライフラインが止まったりしたものの、命は無事だということだった。それを聞いてかなりほっとした。もう一方の祖父母は神崎町に住んでおり、多少家は揺れたものの震源地からかなり距離があるので被害はなかった。

そして、今後の食料を確保するため、近くにあるローソンに買い物に行った。ローソンには同じように食料を確保するため人がたくさんいて、今までに目にしたことのないぐらいの、かなりの列が並んでいて、皆かなり多くの量を買っていたけれど、並んだおかげでおにぎりをたくさん買うことができた。このとき、非常用持ち出し袋を用意していたら、あわてて買い物に行かなくても済んだはず。阪神・淡路大震災以前から、非常用持ち出し袋を用意していた人は何人いただろうか。

地震後２日間ぐらいはローソンなどに食料は余りなかったけれど、しばらくすると店にもたくさん食料が並ぶようになったし、神崎町に住んでいる祖父母から食料を送ってもらったので、食料に困ることは無かった。

- 復旧

電気

電気はどれくらいだったか忘れたけれど２・３日で復旧した。電気が復旧したことによって１番役に立ったのは情報を得られるテレビである。テレビを付けてニュースを見ると、まだあの神戸の悲惨な状態の映像は余り放送されていなかった。しばらくすると、ニュースで長田の町が映し出されていた。住宅が密集している長田の町に何本もの黒煙が空に向かって伸びている様子がヘリコプターによって映し出されていたし、他に阪神高速道路が横倒しになっているところや、三宮のビルが傾いていたり、倒れているのが映し出されていた。当時好きだった、ウルトラマンがそこで戦ったのではないかと思ってしまうほど悲惨な状態であった。そのような場所から、不安そうな顔で公園や学校に避難する人を見て、垂水の街とは世界が違っていて、自分たちはかなり救われていて、被害が小さい方なのだと思った。テレビでは死者の方の名前が挙げられていて、この地震がいかに大きなものだったのかが、当時の僕にも分った。このような地震に関する情報を収集するためだけに、テレビが役立ったのではなく、地震の恐怖で不安になった僕たちは、テレビのアニメなどを見ることによって、楽な気持ちになり落ち着くことができるようにもなった。電気の復旧で役に立ったのはテレビだけではなく、石油ファンヒーターもそうである。震災は１月の真冬に起こり、夜は特に寒かったけれど、石油ファンヒーターによって１月の寒さを少しは和らげることができた。しかし、ファンヒーターの数にも限りがあり、兄弟で取り合いになってしまった事もあった。

水道

水道は切断された後、約２週間程度復旧しなかった。水が止まっている間は、近所の人や水道局に少し水をもらいに行った。その他、近所を流れている山田川の水を引き上げた事もあった。頂ける水にも限りがあるので大切に使った。コップ１杯の水で顔を洗い、歯を磨いたこともあった。川の水はトイレを流すために使った。普段は少し汚い川だけれど震災時には僕たちの生活を助けてくれた。もちろん水が出ないので、お風呂に入ることができなかったので、加古川にある父の親戚の方にお風呂を貸してもらいに行った。当時幼稚園児だった僕はただ何となく今まで通りお風呂に入ったけれど、今思うと、感謝の気持ちでいっぱいだ。その他家の近くにある、銭湯に行った。銭湯は震災ということもあって無料だった。利用者も多いので、平日の昼間に家族全員で行くこともあった。

ガス

ライフラインの中で一番ガスの復旧が遅かった。ガスが復旧する前はご飯がまともに作れない状態で近くの店で、料理せずに食べられる、おにぎりやパンをたくさん買って食べていたので、飽きてきた。それらの食べ物を見るのも嫌になったことがあったので、電気鍋や、電気ポット、カセットコンロを買い温かいご飯を作った。ガスが復旧した後は震災前とほぼ同じ生活に戻ったけれど、電気鍋や電気ポットでご飯を作るよりガスコンロで作ったご飯のほうがおいしく感じた。

● 震災後の生活

震災後の復旧活動中の生活で僕は主に２つ、今までと違う生活に困らされた。
１つ目は、幼稚園が休園になってしまったことだ。当時幼稚園の友達や先生と、毎日ボールを使って野球をしたりサッカーをしたりして遊ぶのを楽しみにしていた。けれど幼稚園はしばらく休園になり、皆と遊ぶことが出来なくなった。震災後に予定されていた演劇の発表会なども練習できないため中止になり、楽しみにしていることが無くなった。
２つ目は、公園が公園でなくなったことだ。僕が住んでいる本多聞では倒壊している家はほとんどなかったけれど、家の近くの本多聞公園に仮設住宅ができていた。この公園は大きなグランドと小さなグランドでできており、僕はいつも大きなグランドのほうで父や友達と野球をして遊んでいたし、年に一回、地域のお祭りがあって毎年楽しみにしていた。しかし大きなグランドのほうに仮設住宅が作られ、当時は何の知識もないため、野球ができないし遊べないし、お祭りは中止になったりして、嫌だな～と思っていた。早く公園を開けてほしいという気持ちがあった。今考えれば、その仮設住宅に住んでいた人たちの中には、自分の家をなくしてしまった人や、家族や知人を亡くしてしまい、つらい思いをした人もいるはずなのにこのような気持ちを思ってしまったことを恥ずかしく思う。

● 今後に備えて

阪神・淡路大震災大きな揺れを経験し、震災後にある余震もあり、地震に脅えながら暮らす生活がしばらく続いた。ニュースで１階がつぶれ１階で寝ていた人が多数亡くなったということがわっかたので、僕たちは２階にあるタンスなどのない１つの部屋に家族５人が集まって川の字になって寝ていた。その時はもちろん、非常用持ち出し袋のようなものは枕元に置いていた。
震災後しばらくたち、生活も元に戻ってきたころ、２階に置いてある大きなタンスを１階に置き、１階にある小さなタンスを２階に上げる作業をしていた。当時僕はただリフォームのような感じでたんすを動かしているのだとおもっていたけれど、今後の震災に備え、阪神・淡路大震災の教訓を生かすためだったそうだ。

● 震災を乗り越える

震災後のつらい生活の中、阪神・淡路大震災で傷ついた神戸の方たちや僕を勇気づけてくれたのが、当時地元神戸のプロ野球チームであったオリックス・ブルーウェーブだったと思う。僕自身震災後の生活は遊び回ることも出来ずに、楽しいことが何一つなかったけれど、オリックスの試合を見に行くことが楽しみになっていった。オリックスは「がんばろう KOBE」をスローガンに快進撃を続け優勝した。過去の成績でいうと、弱小チームだったオリックスが、みんなの力を合わせれば何にでも打ち勝てるということを証明してくれたと思う。
その他、僕自身が震災を乗り越えることができたのは、幼稚園児だったからだと思うことがある。高校生にもなると、いろんな社会があることを理解はするものの、より豊かな生活を求めてしまうと思う。だから、ライフラインなどが止まって普段通りの生活が出来なくなると、我慢できなくなってしまったり、ストレスがたまってしまうと思う。けれど、幼稚園児だった当時、不便な生活を強いられても、何も考えずに、１日１日をただたんに何となく、深くものを考えることが出来ないまま生活していたから乗り越えられたと思う。

● 阪神・淡路大震災を振り返って

震災前、家、食料、電気、ガス、水道などのライフラインがある日常生活。そんな生活に慣れてしまい、ライフラインがある生活が当たり前だと思っていた。突然起こった大地震で、ライフラインの大切さを学んだし、かなり普段の生活が恵まれていることや、この非日常の生活が日常になった時の大変さを学んだ。ライフラインがない国に住んでいる人もいるはず。だからもっとありがたい気持ちでライフラインを使い、衣食住できることに感謝しないといけないと思う。

● 今後に備えて

阪神・淡路大震災では自然の強さと怖さを学んだ。たった２０秒ほど地面が揺れただけで、６０００

人以上もの人が死に、多数の家が倒壊し、高速道路までもが倒れた。巨大な自然の力に防災の力が勝たなければ、また被災者を出してしまうことになる。社会の防災力を上げていくためには、防災を行政に任せるのではなく、僕たち一人一人が災害に備え、防災力を高めていかなくてはならない。

僕はこの「語り継ぐ」で「助け合った震災体験」という題名にしたのは、助け合いの素晴らしさや、大切さを、阪神・淡路大震災を体験したことによって理解できたからである。

僕たち自身、近所の人に水をもらったり、親戚に食料を送ってもらったり、親が仕事に行き子供一人になってしまった近所の子供を、家で預かったり、いろんな方たちと助け合い、支えあった。

このような震災にあうと、全ての人が同じような被害にあうのではなく、一人一人が違う被害に合う。例えば、家が倒壊し何もできない人、家は無事だがライフラインが使えない人、被害が少なかった人、それぞれいろんな人がいる。そんな中で、被害が少なかった人が支援をしていかなければいけないと思う。それは、家族・友人・親戚・近所の人、いろんな方がいる。このような方たちと、コミュニケーションをとることが必要である。普段の生活で「自分は一人でも生きていける」と思っている人もいるかもしれないし、思いがちだが、このような災害の場合一人では生きていけない。だから普段の生活から助け合って生活していけなければいけない。

阪神・淡路大震災前は、家具の固定や、非常用持ち出し袋の準備などの防災をしていなかったけれど、この地震で防災の大切さを知ることが出来た。この地震では６０００人以上もの多数の人が無くなったけれど、家具の固定や、寝る場所を考えるなどの防災をしておけば、よりたくさんの人の命を救うことが出来たと思う。だから僕は、この環境防災科で学んだことを、今後の災害への備えに活かす、得た知識を地域の人に伝え地域ぐるみで防災をしていかなくてはならないと思う。

私の震災体験

明石市貴崎
井上　茉美

● 家族構成

当時私は、明石市の貴崎というところに住んでいて、わりと新しい団地で、かなりの数が密集していた。そして同じ幼稚園に通う子もたくさんいた。兄弟はいないので父と母の３人暮らしをしていた。父方の祖母と祖父も明石市に住んでいて、林というところだけど、車では５分ぐらいのところでなかなか近場で暮らし、祖母と祖父は今もそこで暮らしている。当時地震が起こる前の夏に近所の夏祭りですくった金魚を小さな金魚鉢に入れて飼っていた。金ちゃんという名前を付けて。そこの団地はペット禁止だったので、金魚だけでもいいから飼いたいという私のわがままを聞いてもらって、家族３人でとても可愛がっていて、私は金ちゃんが大好きだった。

● 家の状況

当時私はまだ小さかったのでダブルベッドに家族３人で川の字になって寝ていた。もちろん地震対策など何もしていなく、家具の固定なんてもってのほかで水や食料の確保もしていなかった。私が赤ちゃんの時の写真や家族で海に行った時などの写真を拡大して大きな額に入れてタンスの上や壁にたくさん飾ってあった。かわいい小物を集めたり、トールペイントが趣味だった母はあらゆるものを飾っていて、わりとごちゃごちゃした家だったのではないかと思うが、なに１つ固定なんてしていなかった。
でも、唯一良かった点は団地の住民同士の近所付き合いはとてもよく、夏の夜には一緒に花火をしたり、銭湯に行ったりしていた。だから、隣の棟ぐらいまでならどこに誰々さんが何人家族で住んでいるということは把握できていたそうだ。

● 当日の朝

私はもともと小さな揺れでもすごく臆病だったので、あの地震の時は頭が真っ白になって地震だということが分かっていなかったと思う。父は祖父の自営業の運搬業のダンプに乗って仕事をしているので毎日朝の４時半や５時には家を出ていた。だから朝に父の姿を見るのは日曜日しかなく、毎朝母と２人で朝食を食べ、自転車に乗せてもらって幼稚園まで送ってもらっていた。母は父が仕事に行く前に弁当を作り、父を送ってから私を起こすポンキッキーが始まる時間（おそらく８時だったと思う）までまたしばらく寝るという生活をしていた。だから地震が起きたのは５時４６分だったので１時間も寝たか寝ていないか、もしくはまだ眠りにつけていない時だったのではないかと思う。

● 地震が来た

そんな平和な毎日を過ごしている時、みんなが寝静まっている時にゴジラのような怪物でも悪魔でもなんでもない、人間の力ではどうすることもできない「地震」が起きたのだ。私は揺れで起きたのではない。揺れで起きるならならいつもゴジラのような母に起こされている。とてつもない衝撃で目を覚ましたのだ。私が赤ちゃんのころに撮った写真を入れている大きな額が顔面に落ちてきた衝撃だ。その時の傷は今でも左まゆげのなかにひっそりと残っている。目立たないところでよかったなぁと本当に思う。私は痛さと驚きでひたすら泣き叫んでいた。
母はとっさに逃げ口の確保をするために玄関のドアをあけに行ったそうだ。これは、地震が起こるちょっと前にテレビで「地震が起きたら逃げ道の確保をしなさい」という特集をやっていたからだそうだ。そのことを母は覚えていて、とっさに行動に移したのだ。貴崎はそれほどひどい揺れではなかったが、もしも大きな揺れの地域に住んでいたと思うと、母のこの行動には本当に感謝している。母は、逃げ道を確保したあと、私を布団の中に潜らせ、けがをした私の額を抑えながら「大丈夫、大丈夫」と落ち着かそうとしてくれた。
揺れがおさまってしばらくしてから、母が懐中電灯を探しに行った時に、金魚鉢が倒れていて金魚の金ちゃんがどこかに飛んで行ってしまっていたそうだ。母は金ちゃんを探しに行こうかと思ったが、もしも余震が来て自分が家具などの下敷きになったらいけないので、冷静に考えて私たちの安全のために

「金ちゃん、ごめんね」と思いながら金ちゃんの命は諦めたそうだ。

● 地震直後

団地で被災したので、自分に家の玄関の先にはもう１つの家庭があり、いつも親同士も子同士も仲良くやっていた。向かいの家の家族構成は、父母、それから子供が私と同い年の子が１人と２つ下の妹とまだ１歳か２歳ぐらいの小さな弟がいた。私と同い年の子は私と同じ幼稚園に通っていて、毎日のように互いの家でディズニーのビデオを見たりおままごとをしたりして遊んでいた。地震が起きてまず最初に、その向かいの家に私は連れて行かれた。母は片付けもあるし、私やその向かいの家の子供たちが怖い思いがちょっとでも楽になるように一緒にいさせたのだ。でも、私の家では額や飾りなどがばらばらと落ち、家の中がぐちゃぐちゃになった程度だったが、向かいの家では食器棚の扉があき、食器類のほとんどが割れてしまった状態で、地震が来たときは音もすごく怖かったのではないかと思う。それでも子ども組はしばらくの間みんなで１つの部屋に一緒に布団に入って眠っていたりしていた。
その時に、林に住んでいた祖母は信号も付いていない道路に車を走らせ、私と母の様子を見に来てくれた。祖父も自営業のダンプに乗っていたので父と同じように、地震が起きた時には既に仕事に行ってしまっていた。祖母は家にいる３匹の犬を常連のペットショップに預けて、貴崎まで来てくれたそうだ。でも母は、私を祖母に会わせてくれなかった。それどころか、祖母が様子を見に来てくれたことを知ったのは地震が来てから２、３年たった後だった。「なぜ会わせてくれなかったの？」と聞いてみたところ、その時に会わせてしまうと、祖母も自分に家の片付けがあるというのになかなか帰れなくなってしまうし、私も祖母に帰らないでと駄々をこねてしまうから、というのが理由だった。だから祖母が来たときは「茉美は向かいの家で寝ていて、ちょっとおでこにケガをしたけど大丈夫だから」といって祖母をすぐに帰らせたそうだ。母はいつだって冷静だった。しっかりした母親で本当によかったと思う。

● ４歳の私の不満

私が当時不満を言っていたのは、お年玉を使われたことだった。地震が起きたときはお正月のちょっと後だったので、親戚が少ない私にとっては友達よりはもらえる金額は少ないけれど、だからこそお年玉をすごく大切にしていた。そのお年玉の使い道は、パンやおにぎりを買う食費だった。いま思えばそんなこと何の不満にもならないが、まだまだ子供だった私にとってはすごく腹が立つことだったのだ。「絶対に返すから、ごめんね」と言われつつ、私のお年玉は大活躍をしていたそうだ。そのパンを私は向かいの家の布団の中でみんなで食べていた。普通なら布団の中でご飯を食べるなんてすごく怒られるのに、その時は特別に許されて、しかも「布団の中で食べなさい」と言われたので、とても嬉しくてわくわくして友達と一緒にパンを食べていたのを覚えている。その時は楽しかったけれど、今思い返すと余震の心配があったから常に布団にいたんだなぁと思うと少し悲しい気持ちになる。それほど、母にとっては怖い地震だったのだろうと思う。

● 高速道路

父はダンプに乗っているので、当然道路を走っていた。大きな高速道路が横倒しになっている写真をよく見かけるが、もちろんその高速道路なんて父にとっては毎日走る道で見慣れた景色だった。揺れが来たとき、父はその高速道路を走っていた。揺れにハンドルを取られ、横や前後に走っている車やダンプやトラックがみんな酔っぱらいのような、それ以上に不安定な運転になったそうだ。横や前後の車とぶつからないようにするのに必死だった。とっさにブレーキをかける運転手もいれば、ぶつからないように必死に走る運転手もいる。そんな中、父と同じようにダンプやトラックでは当然石や砂、荷物などをたくさん積んでいるので、その重みに耐え切れなくなって横転してしまうものもあった。横転はしなくとも砂や石がその辺にたくさん散らばったそうだ。普段のちょっときつい風でも石が飛んでいったりするのに、あの揺れの中でどんなことがあったかなんて想像するだけでも怖い。今のテレビ番組の特集ではこんなことを伝えている番組なんてない。だから、私が伝えていかなくてはならない。
揺れがおさまって、父がダンプから降り、ダンプ仲間と「今の地震すごかったなぁ」と話しながらすこし後方を見ると、道なんてつながっていなかった。あんなにも頑丈に作られていた高速道路が横倒しになっていたのだ。会社は違っても、同じ職業柄の仲間がその被害になっていると考えると、胸が締め付けられる思いだったそうだ。その日祖父は「今日の仕事はいいから家に帰れ」と無線で指示を出した。父はその場で仕事を切り上げ、ダンプを駐車場に置きにいって自宅用の車に乗り換えてすぐに家に帰っ

てきてくれた。もちろん、信号も付いていない大混乱の道路を走って。

● ４歳の死

それから時間がたって、死亡者の名前がテレビで流されていた。延々と同じスピードでスクロールされる画面を家族３人でながめていたら、隣の幼稚園で１人の園児が亡くなっていた。私と同い年だ。母はそれを見てしずかに涙を流していたのを覚えている。どうして、今まで毎日幼稚園の友達と平凡に遊んでいて、人生これからという時に、なにも殺されるようなことなんてしていないのに、地震というものに何の前ぶれもなく命を奪われるのだろう、と４歳の私でも考えさせられた。普通に地震もなく平凡に生活している園児の４歳が「命」について考えるだろうか。きっとあの時は少なくとも私と同年代の友達は、「命」について考えただろう。本当に残酷な話だと思う。その子がどのような理由で亡くなったかは知らないけれど、きっと苦しかったのだろうなぁ、と思うと、今あの時の気持ちを思い出すだけで涙が出そうになる。

● 震災後

だんだんと町の様子も落ち着いてきた。いつごろから幼稚園に通いだしたかは全然知らないけれど、いつも家から幼稚園まで母の自転車の後ろのかごに乗せられて通園していた。通園道の途中の散髪屋さんの前にリードでつながれた少し大きめの柴犬の「ゴン」と名付けられた犬が飼われていて、その前を通るたびにいったん自転車から降り、「ゴンー、おはよー！！」と言って頭をなでに行くのが日課だった。だから、震災後も日課であるゴンの頭をなでに行ったのである。すると、ガブッと指を噛まれたのだ。ゴンの牙が指に刺さって、すぐに病院に行って縫うけがをしてしまったのだ。
私はすごく悲しかった。指の怪我の痛さよりも、いつもしっぽをふって喜んでいたゴンが怖い顔をしていたのを見て怖かったのと、ショックが大きくて私はずっと泣いていた。今になって考えると、被災したのは人間だけじゃないんだ、と思う。犬だって猫だって動物園の動物たちだって、あの大きな地震の揺れを経験して、ちょっとした揺れで震えあがるような怖い思いをするようになってしまった動物たちだっているし、もちろん「命」を奪われた動物たちだっている。人間は「地震」というものがどんなものかを知っているけど、動物たちは「地震」というものなんて全く知らないしそんな知識なんて持っていないのだ。もちろん人間だってあんな大きな地震が起きるなんて思っていなかった。それでも、こんなに大きな被害を受けてしまったのだ。だとすると、動物達には経済的な被害はないけれど、人間と同じような「心のケア」が必要になってくるんじゃないかと思う。それに、大好きな飼い主や動物園の飼育員の「命」を奪われたペットや動物たちもたくさんいるだろう。その後のペットはどうなったのだろうか。他の家族がのこっていたり、親戚に引き取ってもらえたり、友人が引き取ってくれたりする家庭のペットは飼われ続けることができるけど、どこにも飼ってくれる人がいないペットは、きっと保健所に連れて行かれたのではないか。これこそが二次被害なのではないかと思う。地震は恐ろしいものだ。

● 記憶

私はいま、被災した当時の家には住んでいなくて２回ほど引っ越しをした。けれど、祖母と祖父の家に行く時の途中の道のりや、たまたま団地の前を通り過ぎるとき、「懐かしいなぁ」と思ってぼぉっと団地を眺める。その時には絶対にあの悲惨な阪神・淡路大震災のことを思い出し、近所の人のことや金魚の金ちゃんのことを思いだす。なんだか涙が出るような思いになる。特別大きな被害を受けたわけではないけれど、たくさんの犠牲者の方々のことや、会ったことはないけれど、隣の幼稚園の子が１人亡くなった子のことを、「その子が生きていたら今どんなふうに生きているのだろう、どこの学校に行って何を目指していたのだろう」とか考えたり、当時幼かった私の目に焼きついたあの時の光景や、新聞記事の写真や、犠牲者の名前が次々とテレビでスクロールされていたあのテレビ画面がふっと鮮明に思い出される。
当時まだ４歳だった私で、震災後 13 年たった今でもこんな思いをしてしまうのだ。家族や親せき、ペット、恋人、友達を亡くした人、生徒を亡くした先生、また逆に大好きな先生を亡くした生徒・・・とたくさんの人たちを失った人たちは、きっと今でも私以上に１３年前のことを思い出し、胸を締め付けられる思いをしているに違いない。
さきほど、その当時住んでいた団地の前をたまに通ると言ったが、あのころ楽しかった風景と違うところが１つだけある。それは、団地のあらゆる場所がヒビだらけになっていることである。あの後に生ま

れた子供たちや、震災後に引っ越してきた人たちは、「ただ団地自体が古いからだろう」と思っている人たちも多いのかもしれない。これは、私が住んでいた団地だけとは限らない。どこの建物にだってあり得ることだ。実際に私もこの舞子高校のヒビを、建物が古いからだと思っていた。しかし、先生に「当時の傷跡だ」といわれ、なんだか切ない気持になったのを覚えている。こんなにも見た目は頑丈に作られている学校でも、ひびがいって、情けない姿になってしまう。家だって、普段普通に生活しているだけでは、全壊した姿なんて想像もつかない。

● 今

あの震災の年に生まれた子供たちも、もう今年で１３才になる。早いものだ。きっとその子たちや、そのあとに生まれた子供たちや、私でも震災の記憶は曖昧なので、私よりも年下の子たちにとったら「阪神・淡路大震災」は「歴史」にしか過ぎないのかも知れない。他県の子供たちとは言わないから、せめて神戸の子供たちなら学校であの当時のことを学んでいると信じていたい。風化してほしくない。
そんなことを言っている私でも、団地の場所はわかるけれど幼稚園の場所や行き方がどうしても思い出せないでいる。ゴンがいた散髪屋さんの風景や、ガードレールや電柱など、ちょっとしたポイントは覚えているが道はつながらない。今度、両親にお願いして幼稚園の前まで連れて行ってほしいと思っている。あの当時通っていた幼稚園をどうしても思い出したいのだ。震災後引っ越しをして、また新たに通った幼稚園は卒園後しばらくして廃園になってしまったので、私の唯一の母園は当時通っていた幼稚園だけになる。だから、そんな大切な幼稚園を忘れることなんてできないのだ。風化させてはいけないことである。
今、気になっていることが２つある。まず１つ目は、団地の向かいに住んでいた同い年の友達と、２つ年下の妹と当時１歳ぐらいだった弟はどんなふうに生活しているかだ。１番下の弟も今では１３歳とか１４歳になっているはずだ。まだあの団地に住んでいるのか、元気にしているのか、どこの学校に行ってどんな生活をしているのかすごく気になる。あの団地自体も当時は新しかったけれど今では古い建物になっているし、なにしろ借家だったのでもうあの団地から引っ越しているかもしれない。本当に会いたいなぁと思う。団地の向かいに住んでいた友達ではなく、同じ団地に住んでいて同じ幼稚園に通っていた幼馴染みに、この間私の中学校時代の友達の友達であるということをきっかけに再会した。今でも当時の名残は残っていて、元気に過ごしていて、まだあの団地に住んでいるということを知ってなんだかとても嬉しくなった。家族もみんな元気であるということを聞いて、また遊びに行くという約束をしたので、早く遊びに行きたいと思う。そして、私が住んでいた場所と、その向かいの家を見に行きたいなぁと思う。
もう１つは、ゴンが今でも元気に生きているかということだ。当時生まれた子犬でも、もう１３歳になるし、当時ゴンはもう成犬だったから、もしかしたらもう天国にいるのかもしれない。私は手の指を縫う怪我をしてしまったけれど、今でもゴンが大好きだ。
今、災害の風化が問題になっている。思い出したくない人でも、自分の辛かった気持ちを他人事に思われたり、忘れられたりするのは嫌なはずだ。だから、辛い思いをした人たちに申し訳ないから災害のことは振り返らない、というのはきっと間違いである。それでは辛い思いをした人たちの思いがすべて無駄になる。あの時の気持ち、問題点、教訓を活かさなくてはならない。
明石の祖母と祖父の家は木造で築４０年ぐらいになるので、今大きな地震が来ると思うと本当にぞっとする。だから、大好きな祖母や祖父や犬のためにも今のうちから耐震をしていても遅くはないと思うので、勧めていきたいと思う。
もちろん、私自身の家だってそうだ。建物自体を耐震補強するのは多大な費用もかかることだし、大変なことだけれど、家具の固定や非常持ち出し袋の用意をするのは簡単なことなので、そんなことからでもしていきたいと思う。
もうあんな災害を繰り返さないように、「防災」をどんどん市民に広げていきたいと思う。被災者を減らしていきたい。平和で幸せな世界に変えていきたい。

近くて遠いもの。

神戸市中央区旭通
井原　みの里

　震災が起きる六日前は、私の誕生日だった。
震災が起きていなければ、兄の誕生日は六日後に来る筈だった。
何故私だけ歳を取れたのかと訊いても、それは一つの事実しか示さない。
硝子の欠けた時計にはもう誰も、砂を戻す事などしないのだから。
意味の無い事を繰り返しても、それは一つの自戒にしかならない。
無色の水はただ流れるだけで、遡る事など出来ないのだから。

　当時、私は父と母と兄との四人暮らしで、中央区のとある一軒家に住んでいた。
広くもなく狭くもなく。家族みんなで暮らすには、充分な家。
私は未だ幼稚園に通っていなかったが、兄が行っていた幼稚園にはよく遊びに行った。
一緒に、兎に餌をやったりしていた事を覚えている。
帰る時間になっても未だ遊んでいる、と言う二人を、母は何時も苦労して家路に就かせていたそうだ。

　十六日は、至って普通に過ごしていた。
特別楽しい事があった訳でもなければ、特別悲しい事があった訳でもない。
翌日に来るモノなんて欠片も予想できない、日常。
　夜。何時もは母が真ん中に、その右隣に兄、左隣には私という配置で布団を敷いていた。
だが、その日は何がそうさせたのだろう、最初は私と兄が隣り合って寝ようとしていた。
けれど、いつまで経っても寝る気配がないので、何時も通り母が兄弟の間を割って寝る事にしたそうだ。
若し、私と兄がそのままの場所で次の日を迎えていたら、また違う事態が起こっていたかも知れない。

　十七日明け方。寝ている最中に、何かが揺れた。
私自身が？―否、それは無い。私はただ布団の上で寝ているだけ。
それじゃあ、何処が？一体何が、私を揺り動かしているというのだろうか？

　最初はがたがたと小刻みに揺れていた地面が、唐突に下から、私を突き上げた。
どん、という衝撃が胸に響き、轟音が耳に届き始める。今迄に体験した事が無い、振動と騒音。
何が起きたのかは、全く理解できなかった。そもそも当時の私は「地震」という言葉の意味なんて、知らなかっただろう。

　けれど確かに、私にはあった。“これはこわいものだ”と感じる、恐怖心が。

　―あぁ、誰が怒ってこんな事をしているんだろう！

　豆電球の光が消える前に、私は上から何かが落ちてくるのを見た。
後々、私はそれを植木鉢だと言ったが、母によると部屋の中にそれは無かったそうだ。もっと、別の物だったのかも知れない。
その何かが当たると危ない程度の考えで、私は咄嗟に毛布を被った。
ぶつかったかどうかは揺れが酷くて、結局分からず仕舞いになったが。

　長く何かに引っ掻き回されていた気がする。
実際に揺れていた時間は短かったかも知れないが、自分の中の誰かが、そんな事は無いと告げていた。
何時まで続くのかが分からないものは、より一層の恐怖を呼んだ。

　揺れが納まったので、私は体全体を起こそうとした。
だが、それは叶わなかった。天井が近い。いつも首を精一杯反らして見上げるしかないそれが、とても。
頭がぶつかりそう。そう思って、私は途中でその動作を止めた。
地震が起きた後に撮った家の写真を見てみると、一階は殆どが二階に潰されていた。

普段の家と比べると瓦礫などは別にしても、その差は歴然だった。
何が起こったのか分らない私。その左隣で、母が声を上げる。
「大丈夫！？変に動いたらあかんで！」
らしくない、切羽詰まった声。それに何かを感じ取ったのか、私は返事をして、じっとしていた。
　次に母は、兄の名前を呼んだ。大丈夫かと、訊く。
何度も何度も呼んだ。けれどその悉くに、兄は返事をしなかった。
兄の右側にあった箪笥は、揺れの所為か家が押し潰された時にそうなったのかは不明だが、確実に倒れていた。
しかしその時の私には、何故兄が声を出さないのかが、さっぱり分らなかった。

　暫くすれば助けが来るだろうと、声は出していたものの、私たちはその場で待っていた。
だが不意に母は、ガスの臭いを感じ取った。
それは、ガス漏れが起きているという事実を示すには、充分過ぎる物だった。
このままでは、さっき助かったのに、違う原因で殺される。
母は兄からの返事を諦め、私の背中を押した。兎に角ここから出るよ、という声と共に。
私は素直に、母の言う通りちまちまと散らかった事すら判り辛い空間を進んだ。
途中、寝そうになった私を「寝たらあかん！進みなさい！」と母が叱咤した。
毛布を引っ張りつつ進んでいると、光が見えた。薄暗かったが、それは確かに光。
後に聞いた話によると、ずっと父が名前を呼んでくれていて、母は声のする方向に進みなさいと言ったそうだ。それと同時に懐中電灯で照らしていたらしく、その中で私の印象に残っていたのは光だったらしい。
その光が一番近くなった時、誰かが私を狭い空間から引っ張り出してくれた。
寒い風が吹き抜けたが、その時は気にする余裕も無かった。ただ外に出られた事に、ほっとした。
一気に視界が開け、それと同時に見たものは、信じられない光景だった。

　自分のところだけじゃないよ、他の家も崩れてる！
立ってると思ったら、別の家に寄りかかって自分を支えてるの。

　―空を見上げた私の目には、何時もの空には無い、薄暗い煙が映っていた。

　助け出されてから少しの間、私は誰かに抱っこをして貰っていたが、また違う誰かに「自分で歩けるなら歩きなさい」と言われたので、嫌だ、と言う事も無く自分の足を地につけた。
この後の事は、あまり覚えてない。
　助けられたという事実と、助からなかったという事実が、この時に強く印象づいているからだと思う。
私達より先に脱出していたらしい父が、後者の事実を告げた。
兄は助からなかった。後に医者が言うには、即死だったらしいとの事。
しかし、その時の私はあまり、悲しいとか、何故、とは考えていなかったように思う。
そもそも、まだ誰の“死”も経験していなかった私には、今一つピンとこなかったのだ。

　その後は、ほんの少しだけ避難所で過ごしていた。
親戚が心配して来てくれて、地震が起きた後という状況でも、私は嬉しく思っていた。
普段は滅多に会えない人が、私たちの為にきてくれたのが、少しだけ不安を掃ってくれた。
誰だったかは思い出せないのだが、女の人と一緒に毛布にくるまっていた事を覚えている。
短い時間だったけれど、誰かが隣に居てくれる事に安心していた。

　何時までもそこに居る訳にはいかないので、私たち家族は一旦、母方の祖母の家に行った。
北区は、比較的穏やかだったように思う。風は少し肌に刺さるようなものだったが、それも仕方ない。
割と近いのに、あんまり壊れてないのはなんでなんだろう。
その時の私はそんな風に、漠然と思った。少し前までは当たり前だった風景に、違う場所ではあったが、安心した面もあった。
　そこで過ごしている間の事も、正直言ってあまり覚えてはいない。
今までに起こった出来事の印象が強烈過ぎたのか、あまり特筆すべき出来事が無かったからなのか。
それとも、地震という事実から少しでも離れた空間に馴染む事に必死だったからなのか。

何れにせよ、地震が起こる前のような生活が、仮初ではあったけれど送る事が出来た。

　そんな暮らしの中でも一番記憶に残っているのは、お葬式だ。
伯母さんが必死で手配してくれたらしく、あまり日が経たない内に出来た。
棺桶が大人用のサイズの物しか残っていなかったが、あるだけ良かった方だと思う。
けれどもやはり、それは子供にとってはかなり大きく、沢山花を敷き詰めて何とか隙間を埋めた。
家から持ってきていた兄が好きだった玩具も、一緒に入れた。この時の私は、何故こんな事をするのかなんて、分らなかった。
ただ、何となくではあるが、兄の存在がやたらと遠く感じた。近くに居て、未だ触れられるにも拘らず。
　火葬している間は、とても長かった気がする。同じ時間を過ごすのでも、遊んでいる時と勉強している時とは感じ方が違うなどと言うが、それとはまた違う長さだった。
確かに時間はしっかりと過ぎているけれど、その流れに逆らいたかったのかも知れない。
けれど、どう諍っても突き付けられる事実に、変わりは無い。
　時間が来たらしく、係の人が私たちを呼びに来た。みんなが、扉の近くに立つ。
がらり、と重い音を立てて、それが開かれた。少し黒ずんだ台が床の上を滑る。
それは私の身長より高い台だったので、きちんとすべてを見た訳ではなかった。
けれど、そこに居るのにもう居ない兄は、とても小さく見えた気がする。

　三月の中旬。兄の卒園式に、私は出た。少し大きい額に入った兄の写真を持って。
幼稚園にも結構な被害が出ていたが、卒園式は予定通りに行われた。
兄の名前が呼ばれた時、私はしっかりと返事をした。兄の分までとは考えていなかった気がするが、ちゃんと大きな声で、という意識はあったように思う。
他のお兄ちゃん、お姉ちゃんに混ざって列に並び、式の進行に任せるまま、そこに居た。

　一年じゅうを　思いだしてごらん　あんなことこんなこと　あったでしょう
桃のお花も　きれいに咲いて　もうすぐみんなは　一年生

　これはその場で歌われた「おもいでのアルバム」の歌詞の一部。
私自身が卒園式を迎えた時にも歌ったが、その時も泣いたし、今でもふと、どこからか流れてくると涙が出そうになる。
理由は分からない。条件反射かも知れないし、心の底で何かを思っているのかも知れない。
だけどこの歌自体は、嫌いだとは思っていない。
私にとっては、兄との大事な思い出の一つだ。

　その後は、同区に建てられた仮設住宅に引っ越した。
詳しい場所までは覚えていないが、道路を挟んだ目の前に幼稚園があった事は覚えている。
次に引っ越す時までは、そこに通っていた。短い間ではあったけれど友達も結構居て、それなりに楽しかったと思う。
今でも家には、お別れの時にもらったメッセージ集がある。
ちらりと目に触れた時に読んでみるが、流石に半年の中の情況を細かく思い出す事は出来ない。

　敷地内には、蒲公英が咲き乱れる場所があった。ちょうど部屋の隣にあったので、そこが庭のようだと思った事もある。
黄色く小さな花がその時は大好きで、眺めたり、少しだけ摘んで家のコップに飾ったりした。
蒲公英が白い綿と共に種を飛ばす時期には、それを吹いて遊んだ。
　夏には家先でスイカ割りをしたり、大きめの衣装ケースに水を入れて水浴びしたり。
今から思えば決して良い環境とは言えない家だったけれど、その時はそこが居場所だった。
毎日帰れる場所がある。そんな当たり前の事が、嬉しかった。

　その年の十月後半に共同住宅に入れる事になり、今度は垂水区に転居した。
これまでは一軒家に住んでいたので、初めてのマンション暮らしに少しだけ、どきどきしていた。
仮設では部屋が少なかったうえに横の並びしかなかったので、多くの人が同じ建物に暮らしているという空間は、実質初めてだった。

人見知りだった私は近所の人に慣れるまでが大変だったけれど、それも時間が経つ内に何とかなった。

　その後は、殆ど地震とは無縁で過ごしていた。
小学校や中学校で一月十七日に避難訓練があり、そこで校長先生が震災に関する事を話す度にぎゅっと掌に爪を立てて我慢していた。
兄の写真に向かって話しかける事に躊躇いは無かったけれど、震災について話す事はしなかった。
　自然と、私は地震というか震災を避けて過ごすようになっていた。
毎年三ノ宮の東遊園地で行われている追悼のつどいにも行った事があったけれど、何か落ち着かずにうろうろしていた気がする。
今から考えると、祈ったところで何にもならないという、少し冷めた気持ちもあった。

　そんな私が環境防災科に入ったのは、何の縁だったんだろう。三年生になった今でも、ふと思う。
受験校の候補を決める際にも、普通科どころか舞子高校の名前すら入っていなかった気がする。
最初のきっかけは、母が環境防災科という所があるよ、と言ってきた事だった。
それから説明会に行ってみて、先生の話を聞いてみて、自分でも調べてみて。
辛い事もあるかも知れないと言われ、自分でもそう思ったけれど、私は自分の意思で受験を決めた。
　勿論、環境防災科があるからという理由だけで決めた訳ではないけれど。
でも、震災をもっと別の面から見てみたいという気持ちもあった。
ずっとずっと避けられる訳ではない。今までの自分と違う目線から見れば、避ける以外の方法があるかも知れないと、思った。

　私は未だに、地震とは全く関係ない揺れにも過敏に反応する時がある。
そして本当の地震が起こると、呼吸が乱れて立っているのすら難しい時がある。
今までは私の周りに震災をしっかり覚えている人なんていなかったし、自分自身がそれに関わる事を自然と嫌がっていた。
　けれどこの学科に入って様々な人の話を聞く事で、私だけがこうじゃないと、初めて思う事が出来た。
もちろん反応は人それぞれ。でも、震災に色んな形で立ち向かっている人が居る。
そんな人達の姿を見て、私は初めて逃げる以外の選択肢を知った。
勝たなくても良い。負けなくても良い。真っ直ぐ行って良い。遠回りして行っても良い。
不安定な道でもしっかりと歩けば、いつか出口に着くのだと。

　今でも震災の事を思い出すと自分の中の気持ちが揺らぐ。
上手く言葉を整理出来ず、また口に出す事も難しく。
　けれど、自分なりに誰かへと話して、次の人たちへと繋げて行きたいと思う。
それは今生きている私たちだから、出来る事。
他の人とは比べない。私のスピードで、タイミングで、この記憶と想いを誰かの為に話したい。

　忘れてしまう事は、思い出すより辛いと考えている。
誰かに覚えられているからこそ、その物や人が存在している気がするからだ。
例えそれが自分の曖昧な記憶でも、日常や非日常があったという事実には変わりない。
私が覚えている事を誰かに覚えていてほしいから、出来る限り伝えたいと思う。

子供から見た震災

神戸市垂水区千代が丘
井本　晶子

【あのとき】
夢の中でゴーッと暗く響き渡る音が聞こえた気がして、私は目を覚ました。その直後激しく揺れたはずだが、揺れた感覚がどうしても思い出せない。そこだけ全く記憶がなくなってしまっている。暗かった、という薄い印象しかない。

父は崖際に建つ我が家が地震によって下へくずれ落ちてしまうのではないか、と思うくらいの揺れだったと語る。そんな揺れがおさまって妹を挟んで寝ていた母に「これ、なに？」と聞いた。母は「地震やわ」と困惑した様子でそう言った。母はまさか神戸で地震が、それもこんなに大きな地震が起こるとは考えたこともなかったという。私は地震という言葉もそれがどんなものかも知らなかったから、怖さよりも「何かすごいことが起こった」という好奇心のほうが勝っていた。階段のほうから「大丈夫か」という父の声が聞こえて、１階へ降りて家族全員揃ったところで家の外に出た。まだ外は暗かったけど、すでに近所の人が家の前に集まっていた。いつも優しいおばちゃんが見たことない表情をして真剣に、でもとても不安そうに何か話していた。その様子を見た私は「みんなパジャマやん」とありえない服装を父に言ったがたしなめられた。話している間にも何度も余震が続き、その度に緊迫した空気が流れた。そのとき誰かがぎゅっと抱きしめていてくれた気がする。

近所の人が登山用の携帯ラジオを持っていたから、みんなで聞いたけれど、いまひとつはっきりと状況がわからない放送だった。周りを見渡してみると、あちこちの家の屋根瓦が地面に落ちて割れていた。家の隣にある７０段を超す階段があちこちずれていた。地面が割れているところもあった。近づくと危ないと言われ、おとなしくしていた。けれど大人たちは常に何か話していて、誰も相手してくれなかったから正直つまらなかった。しばらくぼーっと座っていたが、１月の朝方の冷たい空気のせいか、私はトイレに行きたくなってしまった。おばちゃんたちにトイレに行くのを知られたくなくて、こっそり母に言ったのを覚えている。母は家の中がまだ安全という確信はなかったから、トイレに行かせるのを少し嫌がったが、他の部屋には行かないと約束して行かせてもらった。そのときはまだ水はちゃんと流れていた気がする。けど、それが最後の水だったのかもしれない。

少し落ち着いたところで、一度家の中に戻ってみた。私が遊び散らかした部屋よりも、ぐちゃぐちゃだった。お風呂場のタイルにはヒビが入り、部分的に剥がれているところもあった。台に置いていたテレビが少し前に移動していた。机に置きっぱなしだったコップの水がひっくり返ってこぼれていた。台所の壁にもヒビがはいっていた。さらに食器棚から落ちたお皿やコップが床の上で粉々になっていた。床一面が割れたいろんな色のお皿で埋め尽くされていたのが印象に残っている。私は「誰がこんなんしたんやろ。怒られるで」と心の中で思った。

朝８時半すぎに電気が回復した。つけっぱなしにしておいた照明が点いたので回復したのに気づいた。それで、まずはテレビをつけた。画面に映った神戸の様子に父と母は大きな衝撃を受けた。あの見慣れた街が黒い煙をあげながら燃えていた。いつも父が仕事で利用している阪神高速道路が大きく倒れていた。自分の家から見える範囲で倒壊した家もなく、言葉だけのラジオでしか情報が得られなかったため、画面で実際の様子を見ても現実だとなかなか受け入れることができなかった。
そのあとはお米を炊いた。前日の夜に洗って炊飯器のタイマー予約をしていたお米をもう一度セットし直した。またいつ地震が起こって電気がこなくなるかもしれないと考えたからだ。ちゃんとそのあとご飯は炊けた。

少し落ち着いた昼頃、父が勤めている会社の様子を見に行くと言った。しかし家族がバラバラになるのが心配だったため家族全員で行くことにした。歩いている途中、鉢伏山の向こうから黒い煙が上がっているのが見えた。後日父が外で近所の人と話している最中、黒い粉が空から降ってきた。その量は半端ではなく、車のボンネットに積るほどだったという。何かわからないそれは掃除の仕事をひとつ増やし、大変だったらしい。しかし、それは長田区のほうの火事で燃えた家などの残り灰が風に乗って降って来たということがあとからわかり、何とも言えなくなってしまった。

地震が起こった週の日曜日、母が結婚する前勤めていた会社で仲のよかった人の家に招かれた。そこでお風呂にいれてもらった。６日ぶりに入ったお風呂で、今までの不安や疲れが消えていく感じだったという。その人の家は西区春日台だったために、揺れはあったものの、ライフラインあまり普段と変わらない生活ができた。父はそこでいただいたビールの味は人生で最高に美味しかったという。

近所にあるお風呂屋さんにも行った。そこで寒い中長時間お風呂に入るために並んだ記憶がある。しばらくしてからは被災者のために宿泊施設のお風呂を開放してくれていたところに毎週通っていた。

近所に給水車が来て水をもらいに行ったりもした。やかんやお鍋に水を入れてもらった。しばらくしたら星陵高校が敷地内に溜めていた地下水を開放してくれたから、それももらいに行った。男手は父一人だったから、何度も何度も給水車と家を行き来してくれたそうだ。私もついて行くこともあったそうだが、覚えていない。

水道管の配列の関係により早く水道が回復した近所の家で洗濯をしてもらったこともあった。私の家は２月初旬にやっと水道が回復した。久しぶりに蛇口をひねると、ゴボゴボという音とともに赤褐色の水が出た。

【仮設住宅の盆踊り】
震災からしばらくすると、私の家の近くに仮設住宅が短い期間でたくさん建った。何列にも並ぶ青い屋根が夏の暑い日差しを浴びてキラキラしていたのが印象に残っている。それらは外国人の人が朝から晩まで頑張って建ててくれたそうだ。私は仮設住宅がどんな意味を持つかは知らなかったけど、地震で家を失くした人が住んでいるのだと母に教えてもらった。私はこんなにも家を失くした人がいるのかととても驚いた。仮設住宅に住み始めた人はどちらかというと高齢者のほうが多かった。毎日仮設住宅には大勢の人が行き来していた。でもきっと、一度も外に出なかった人もいるはずだ。そのうち、ここがそんなに楽しいところではないと私は悟った。

そんな仮設住宅だったけれど、夏にはにぎやかに盆踊り大会が開かれた。私も浴衣を着て参加した。仮設住宅の人でも近所の人でも誰でも参加できたから、けっこう参加者はたくさんいたと思う。そこで知らないおばちゃんに盆踊りの振り付けを教えてもらった。なんでこんな知らないおばちゃんに怒られなあかんの、と嫌に思うほどのスパルタ鬼コーチだったけれど、踊れたときはとても喜んでくれた。右手と左手の区別がついたのも、あのおばちゃんのおかげだと思う。

でもその仮設住宅も取り壊しの日がやってきた。きれいに震災前の元のさら地に戻ってしまった。取り壊しに入る機械を見たとき思い出したのは、あの盆踊りのおばちゃん。あの人は近所の人だったのか、それとも被災されて仮設住宅に住んでおられたのか。どちらにしても見ず知らずの私を可愛がってくれた人とはもう会えないと思うと寂しかった。今も元気にされているのだろうか。

【しあわせはこぼう】
震災から数年が経ち、私は小学生になった。大きく被災したわけではないので、あのときの記憶はほとんど忘れかけていた。震災のことを気にすることもなかった。４年生になったとき学校で「しあわせはこぼう」という冊子をもらった。低学年のときにももらったが、モノクロ写真や数字がたくさん書いてあるグラフばかりで、幼かった私はそれに興味を抱くこともなく深く読んだことはなかった。１月１７日が近づいてきたある日、それを道徳の授業で読むことになった。被災した当時小学生の人の作文が載っていた。震災によって家が無くなってしまったり、大切な人と別れた人がいるということを初めて知った。ページを捲ると私は一枚の写真に目を奪われた。「おにぎり配っています。声をかけてね」と書いた紙を背中に貼り、配り歩いている女性の後姿。女性が歩く道の両脇には地震で崩れたと思われる瓦礫の山があった。なぜこの人は見ず知らずの人におにぎりを配ってまわっているのか。なぜお金をとらないのか。なぜそんなに優しく関わるのか。この人自身、被害はなかったのだろうか。一体何者なのか。その時はボランティアや当時の様子を詳しく知らなかったから、疑問ばかりうかんだ。

本に書いてあった「しあわせはこべるように」という歌も歌った。先生から震災からみんなが元気になれるように作られた歌だと教わった。この歌を作った先生や歌っている小学生が出演されていた録画

のテレビも見た。歌う回数を重ねる度に、私はその歌が好きになっていった。自分の住む街の名前が出てくるから。それを歌ったら元気を出してくれる人がいるから。でも誰かの前で歌うことはなかったし、「しあわせはこぼう」自体、震災の日が近づいてくるときだけ使ったから、そんなに震災について勉強したという感覚はなかった。

小学校高学年のときに、校舎内で小さな地震を体験した。休み時間で廊下にいた私は、空き教室の扉がどんどんと激しく叩かれる音に気付いた。誰かいるのかと思い、窓から覗いてみたが誰もいなかった。あれ？と思った次の瞬間、横に大きく揺れた。いきなりのことで驚き、声も出ないまま座り込んでいた。ぐらぐらと長い時間揺れて、その間ずっと教室からは悲鳴が聞こえた。廊下に並ぶロッカーはガタガタ音を立てて動いた。揺れが収まり、先生が廊下に慌てて飛び出してきた。「地震やなあ。大丈夫やった？」私はそのとき初めて地震だと知り、恐怖を知った。私がいた場所は３階だったため、本当の揺れより少し大きく揺れた。けれど外で遊んでいた友達は小さな地震に気付いていなかったから、この恐怖を知らない子たちが羨ましかった。

私が通っていた小学校では年に何回か火事や地震が起こったという想定で避難訓練を行っていた。いつも参加はするものの、意味はあるのだろうか？実際こんなにうまくはいかないはずだ、と考えていた。消防士さんや先生方に運動場に逃げたら大丈夫と教えられたけど、その前に怪我したら？押しつぶされたら？逃げ道がなかったら？運動場の地面が割れたら？近くの崖がくずれてきたら？と小学生にしたら、かなりひねくれていたかもしれないが、防災訓練の度に本当はそう思っていた。そして実際に地震が来たとき、私はもちろん、教えてくれた先生までもが動けなかった。訓練なんて少しも活かされなかった。もしあのとき大きい地震だったら？と、私は考えれば考えるほど心配になっていった。

【1.17 のつどい】

高校１年生のときに初めて東遊園地である 1.17 のつどいに参加させてもらった。本当はもっと早く行きたかったけれど、部活を終えて、夜 10 時半ぐらいに東遊園地に着いた。東遊園地に着くまで、本当はとてもドキドキしていた。私の知り合いに震災によって亡くなった方はいなかったし、大きな被害を受けたわけでもなかったから、なんだか場違いのような気がしたからだ。それでも本部があるテントに行ったら、「よく来たね。寒かったやろ。コーヒー飲む？」と温かく迎えてくださった。環境防災科の先輩も来られていたから、少し安心した。暖かいテントの中で一晩中、いろんな年代の方と震災のときの話や防災について語り合った。震災のときに避難所に行かれた方は、私が授業や本から学んだ様子よりもすさまじく、肉体的にも精神的にもとても苦労した、とおっしゃった。ある方とお話したとき、私が震災当時４歳だったことに驚かれていた。しかし、私のような若者が震災を語り継いでくれるのを期待しているとも言われた。

４時前ぐらいから、ボランティア活動として竹筒の中に水を入れ、ろうそくを浮かべていった。一本一本にじょうろで水を注ぐとき、竹筒に何かメッセージが書いてあるのに気づいた。それぞれの思いが書かれていて、私はより慎重かつ丁寧に水を注いだ。その日は夜中から雨が降り出してきていて、冬の夜中の寒さと雨のせいで、足の感覚がなくなるくらいだった。それでも大人のみなさんは黙々と行動されていたから、私も負けないように動くことにした。

時間が近づくと「1.17 希望の灯り」を持った方が入場され、分灯をしてもらった。雨で消えそうになる灯りをなんとか消さないように、来場された方が持つろうそくに灯りを分けていった。その度に「ありがとう」と言われて、こんな私でも役に立つなか、と思う反面、なんだか心苦しくなった。全部の竹筒に灯りがつき、時報を告げる音とともに「黙祷」の声が聞こえ、一瞬で静かになった。私は涙をこらえるので精一杯だった。そのときの空気は言葉に言い表せないくらいだったけれど、震災がもたらした被害の大きさを改めて知ることができたと思う。

２年生のときにも参加させてもらった。一年ぶりに再会した方がいて、いろいろ話すことができた。大学生の方とも話すことができた。大学院で防災について学んでいる、とおっしゃられていた。その方と若者ができる防災について長く話した。一体私には何ができるのだろう。深く考えさせられる会話だった。

去年は雨がすごかったけれど、今年は風が強かった。竹筒に水を注ぐのは問題なかったが、せっかく点いた灯りが何度も強風により消えてしまい、分灯を持つ私はあちこちから呼ばれた。それでも私の灯

りも消えてしまうから、時報までに全部に竹筒に灯りを点けることは難しかった。

去年と今年の２年、参加させてもらったが、毎年大きなものをもらってくる。それは被災者の方の気持ちだったり、支援者の思いだったり、私達にできる課題についてだったり。いろいろ思うことはあるけれど、あのテントの下で話し合うことは、これからの活動につながるヒントになるし、参加させてもらうことで、とても貴重な体験ができていると思う。ぜひ来年もこれからも参加したい。

【震災を振り返って。これから】

震災を経験する前の年の秋、今も住む一軒家に引っ越ししてきた。そのときに、もう着なくなった衣類を衣装ケースやダンボールに詰め込み、私が寝る部屋にあるタンスの上に置いた。ちょうど天井との隙間を埋めるように。それが震災のときに突っ張り棒として役目を果たした。実際に揺れで重たいタンスは前に数センチ移動していたという。そのタンスが倒れてきていたら、きっと「危なかった」の一言だけでは済まされない結果になっていただろう。最近そのことに気づき、母に言うと特にあの場所へケースを置いた意味などなかったと言われ、そんな話はオーバーだとも言われた。本当にそうだろうか。

他にも普段から母はお風呂の残り湯を洗濯に使うために毎日お風呂のお湯を残していた。生活の知恵だったけど、震災のときはそれがとても役立った。普通の家庭よりはまだ水のある生活を送れていたのではないだろうか。普段の行動が緊急時に役立つことは多いと思わされる行動である。

震災当時私は４歳だった。震災に関する記憶も所々残ってはいたが、やはり思い出せないところや忘れていたこともたくさんあって、両親や知り合いに震災体験を聞いて何とか繋いできた「語り継ぐ」だと思う。それでも一応は被災体験者だ。近所の人にわけてもらった貴重な飲料水で作ったミルクを飲んでいた当時１歳の妹も、そうして震災を経験したけれど、本人の震災に関する記憶は一切ない。もちろんそれは当り前で、ほぼ震災を知らない世代といえる。ほかにも近所で元気に走り回る小学生や母親に抱かれ眠る赤ちゃんも震災のことは知らない。地震のせいであっというまに崩れてしまった街を知らない。そう思うと、とても不思議な感覚になる。社会では少子化といわれるが、確実に震災を知らない世代が増えてきている。

その中で私はどう生きていけばよいのだろう。行き着く答えは、語り継ぐこと。1.17 のつどいで出会った方に教えていただいたことだ。記憶がなくても、忘れてしまったことがあっても、子供の目線から見た私自身の震災を伝えていくべきだ。何を見て何を感じたのか。上手く伝わらないかもしれないし、無理矢理悲惨な経験を押し付けるだけになるかもしれない。でもそうではなく、震災が私たちに残していってくれたものを少しでも知ってほしい。もう二度と阪神・淡路大震災のときのような大きな被害を出さないためにも、環境防災科で学んだことを周りに発信し、多くの人に知ってもらうことが、今私にできることではないだろうか。

家族

神戸市北区北五葉
江澤　奈美

私は震災当時の事を正直覚えていない。
唯一覚えているのが、阪神・淡路大震災からしばらく経ってから母に
「こんな大きな地震が来るのは千年に一度だけなんだよ」
と教えてもらい、とてつもない恐怖心から救われたことぐらいだ。だが今でも私は、震度２などの小さな揺れやドーンという花火の大きな爆発音に声が出せなくなるくらいの怖さを感じてしまう。記憶がある者も無い者も、この時を生きていたものには、きっと阪神・淡路大震災を完璧に忘れることは出来ないのだろう。

阪神・淡路大震災

母に阪神・淡路大震災の恐さについて聞くと、笑い話のように聞こえるが、いつも「ゴジラが家を掴んでユッサユッサ揺らして襲ってきたと思った」と、父は「戦争が始まったと思った」と私に話してくれる。
１３年前、私は１６日から風邪をひいている中で１７日の朝を迎えたそうだ。その朝日は母にとってすごく安心の出来る光だったそうだ。だがこの光はきっと母だけでなくこの地震を体験した人にとってもそうだったに違いないだろう。

どどどーっんと目が覚めるほどの地鳴りが響きわたった後、ものすごい揺れが襲ってきた。
昔から寝るのが大好きだった私も「何っ？」といいながらピョンと起きたそうだが、母はただひたすら体は固まったまったまま、大きく揺れる電気の傘を見つめることしか出来なかったそうだ。

大きなゴジラが神戸を襲った後、当時、私達家族が暮らしていた北区は幸い被害が軽く、みんな無事だった。しばらく経ってから、家にたまたま車用の電池で見ることの出来る小さなテレビがあっあので、それで震源地現地が祖父母の住んでいる淡路島だと分かり、神戸でもこんなにすごい揺れだったのに海に囲まれた淡路島はいったいどんな状態になっているのかと心配になり電話したところ、まだ混雑する前だったようですぐにつながり、祖父母が無事だったと安否確認が取れた。

警察官である私の父も祖父母と連絡が取れた後に警察署に電話をかけたところ、警察署も本部との無線や通信が途絶えており、大混乱状態となっていたので、父はすぐに家を飛び出していってしまった。仕事柄仕方ないことなのだが、こんなときに父は幼いわたしと母の２人を置いてきぼりにして行ってしまったので、母はとても不安だったと言っていた。母の気持ちを考えると、自分が不安だったのにも関わらず私をずっと地震から守ってくれていた母に本当に感謝しなければならないと思った。

９時頃になると電気が復旧して家のテレビも点いた。そしてそのテレビで一番に阪神高速が倒れているのが映しだされたのを見て、驚きと共にショックを受けた。家から南下に見た長田の方の空は真赤でヘリコプターが何機も飛び回り、ものすごいことが起こったのだとわかった。

ライフライン

ガス・水道が止まり、つながっていた電話もしばらくすると混んで繋がらなくなってしまったそうだ。

１年生の時に関西電力の方が外部講師として私たちに阪神・淡路大震災の防災対策についての講義を聞かせて頂いた。この電話が繋がらなくなることを“輻輳・ふくそう”といい、電話は同時に１０００回線、つまり１０００人しか話せないのに、当時は平常時の約５０倍にまで通話が激増したそうだ。このことからたくさんの人が安否を確認するのに必死だったことが電話から物語っているようで、すごく私のなかで印象に残った講義となった。災害時に電話が優先されるのは防災機関や病院などのごく一部で、一般の人が電話を使用するには災害時用の公衆電話しかなく、何時間もかけて並んでいる映像をよく見たことがある。だが今は“１７１”に電話をかけると災害用伝言ダイアルという、伝言を遠く離れ

た親戚などに安否を伝えることの出来る情報機能がある。また、携帯電話にも災害伝言板という同様のサービスがあるのだが、知らない人も多いだろう。実際、私の両親も知らなかった。ライフラインが弱まるけれど、それを一番使いたい時だからこそ、こういう機能があると私たちは伝えていかなければならないと思った。

地震後の生活

　とりあえず前日から熱のある私を母が病院に連れて行こうと、自転車で近所の小児科に連れて行ってくれたのだが、外は以前の道とは思えないほどにガス臭く、水道管が破裂したのか、地面はボコボコになっていたそうだ。この間もずっと大きな余震は続き、自転車に乗っていてもボンッと上につきあがるように地面が揺れていたのがわかったと母は言っていた。

　病院では先生も看護婦さんもすぐに大きな病院に援助出来るような態勢でいて、私を私服で診察をしてくれたそうだ。

備えの大切さ

　この日は給料日だったのだが電気が止まっているのでＡＴＭはもちろん使えず、お正月に祖父母からもらった私のお年玉でしばらくの生活をしのいだそうだ。
　その日の夕方にそのお金で何か食料を買いにと近くのスーパーに走ったそうだが、店内はぐちゃぐちゃと混雑しており、もうすでにパンは売り切れ。とりあえずインスタントラーメンと小麦粉を買い、また、ホームセンターで水を汲むためのタンクも買ったそうだ。
　家の中は食器棚から食器が飛び出していたのと、靴箱が移動していたぐらいだった。壁に小さな亀裂が走っていたそうだが別に住むこと自体には問題はなかった。私の当時住んでいた家の寝室には大きなタンスが頭元に３つあったのだが、タンスも冷蔵庫も倒れてこなかったそうだ。揺れの向きがよかったのだろうか、もしものことを考えるとぞっとするものである。家具は普段物入れとして使っているのだが、地震の時には人の命を襲う凶器となるのだ。普段から現金を家に置いておく必要性や、家具の固定。地震対策として挙げられる基本事項の必要性が改めて感じられる。今私の家には非常持ち出し袋を私の部屋に置いている。これがあれば阪神・淡路大震災の当時急いで食べ物や水を汲むためのタンクを買いに行くことはなかっただろう。こうやって我が家一つ例にとっても防災意識というのは充分とはいえなかった。

１８日以降

　１７日の夕方、朝日とは対照的に日が暮れていくのが“またあの恐ろしい地震が来るのじゃないか”と、とても不安だったそうだ。

　２３時頃に徳島県から父の祖父母が迎えにきてくれた。本当は１７日に神戸へ向かって来てくれたそうだが明石海峡大橋がまだできてない頃だったので、いつものルートである淡路から出港するフェリーも案の定運航しておらず、わざわざ瀬戸大橋の方から回って神戸まで来てくれたのだ。そしてわたしは母と一緒に一旦神戸を離れた。
　そして２週間ほど徳島で生活した後、母と私は神戸に帰ってくることが出来た。
　地震後すぐに、当時私の通っていた幼稚園は始まって、神戸に残っていた友達はすでに幼稚園に通っていたそうなのだが、徳島に帰っていた私は幼稚園に帰ってくるのも１番遅かったらしく、震災後に初めて幼稚園に行ったとき、先生が私の姿を見てすごく喜んでくれたそうだ。こんな話を母から聞いて、もう１３年も経っているのにすごく心が温かい気持ちでいっぱいになった。
　地震によって１回バラバラになっても、こんな風に自分の帰りを待ってくれている、自分の無事を祈ってくれているということは本当に嬉しいことであり、とても幸せなことだと今になっても感じられる。

父の話

　父は１ヶ月ほどの期間、東灘で救助活動をしていたそうだ。生き埋めになっていた私の今の年齢ほどの女の子を助けていた時の話なのだが、父が女の子の手を握って助け出そうと体勢を変えるために１回

手を離そうとしたそうなのだが、女の子は絶対に手を離そうとしなかったそうだ。こういう話は当時たくさんあったと思うのだが、この女の子が父の手を離せなくなるほどの怖い思いをしたんだなと思いとても印象に残った。

同じくらいの年なのに、もし私がその女の子に変わったらと考えるとどういう風になるのかも想像さえつかないものである。今大きな地震が私たちを襲ってもおかしくないのだというのに、これが自分はきっと大丈夫だろうと何の根拠も無く思いこむ“安全性バイアス”というものだろうか？生き埋めになる、生きるか死ぬかというのは本当に怖いものであると改めて感じたものだった。

現在

私の弟は１９９６年生まれで阪神・淡路大震災後に産まれた。だからもちろん阪神・淡路大震災のことを知らない。こうやって６千人以上の方が亡くなってしまった地震を知らないなんて、なんとなく信じがたいことだ。
でも弟は学校推薦の「ドッカンぐらぐら」の本を買って読んだり、小学校で習った防災のことなどを私に一生懸命話してくれる。そして学年的に阪神・淡路大震災の年に産まれた子として、ひまわりのイベントに友達と参加したりと、あの地震を知らないけれど、とても積極的であることが私はこの弟たちの学年のすごいところだと思う。

私も弟と同じように、この環境防災科に入っていなければ、きっと阪神・淡路大震災を知らないで終わっていただろう。

私は環境について主に学びたいと思い、この環境防災科に入学した。だから正直に言うと、元々あまり防災について興味がなかった。
でもここではたくさんの外部講師の方から防災対策や被害、復旧・復興のお話、また、たくさんの人が阪神・淡路大震災で辛い思いをしたのだと教えて頂いたり、地震のメカニズムについて勉強するために六甲山にフィールドワークに行ったりと、間近で防災を学ぶことが出来た。そしてなによりも防災の大切さを思い知らされた３年間となった。
この環境防災科２期生の小野綾子先輩が「阪神・淡路大震災から 10 年目よりも 11 年目の一歩目が大切」とテレビ番組のインタビューで答えられていたのがとても印象的で覚えている。
今までまったくといって知らなかった防災。大学でも将来もずっと環境に携わることをしていこうと思っているのだが私は、小野先輩がおっしゃったように、この高校生活で教えて頂いたことをいろんな人に伝えていき、皆で防災の一歩目に取り組んでいきたいと思う。そして私たちが中心となり、もう二度と阪神・淡路大震災のような災害で悲しむようなことの無い社会を作っていきたい。

家族

私が今回この「語り継ぐ」を書くにあたって母と父からたくさんの当時の話を教えてもらったのだが、家族の絆は本当にすごいものだと改めて感じた。地震が起きた瞬間に私に覆いかぶさって守ってくれた父。余震が続いているのにも関わらず、近所の人の自転車を借りて病院まで走ってくれた母。わざわざ遠い道のりを一日かけて神戸まで来てくれた祖父母。私は本当に幸せだなと思う。
阪神・淡路大震災は神戸の人を一気に苦しめた。でもそんな中で新たに大切なものに築く地震だったのではないかと母の話を聞いていて思った。

今は私たちも北区の家から今の垂水の家に引っ越して、壁の亀裂や、阪神・淡路大震災を思い出させるような傷跡は残っていない。だからといって、どんなに時も住んでいる場所も変わってもきっとこの地震を忘れることは無いだろう

家族が今こうして楽しく毎日を過ごせるのもなんらかの奇跡だろう。私はこんなにも大切に思える家族をこれからも大切にしていこうと思うし、感謝していかなければならないと思う。そしていつどんな時も支えあえる存在を継続していきたい。

阪神・淡路大震災を体験して

兵庫県西宮市前開町
木田　勝久

はじめに

今回「語り継ぐ」を書くにあたって自分だけの記憶では少なすぎて書けないので祖父母の話と両親の話を聞き体験談と伝聞とで書いていくことにする。

１．被災前日

１月１６日、僕は家族と従兄のみんなで西宮にある母方の祖父母の家に遊びに行っていた。家とっても祖父は警察官だったので勤務中に臨時で暮らすための官舎だった。祖父母の家に着いたのは昼過ぎで時間があったので皆で遊びに行くことになった。

そこでまずは官舎の近くにあるスケート場に行くことになった。スケートをするのはこの日が初めてで、僕は父に手をひかれながらぎこちない足取りで必死に滑っていた。何回も転んで何箇所か怪我をしてしまい母がその怪我の手当をしてくれたのを今でも覚えている。

次に向かったのは、官舎から少し離れた場所にある温泉だった。これもまた初めての体験で、たくさんの人、たくさんのシャワー、そして大きなお風呂があり、小さな僕にとっては見るものすべてがとても多く、大きく見えた。初めて入った大きなお風呂はとても気持ちよくずっと泳いでいた。しかし数分もすると知らない人にぶつかってしまい怒鳴られたのがとても怖かった。お風呂からあがり更衣室の売店に色々な種類の牛乳が売っていた。僕は何故か無性に飲みたくなり祖父に頼みフルーツオーレを買ってもらった。しかし、ビンの蓋をうまく開けられずすべてこぼしてしまった。すると父にひどく怒られ泣きそうになっていると、祖父が「ええねん、ええねん」と言いもう一本買いなおしてくれた。そしてお風呂上がりに初めてフルーツオーレを飲んだ。初めて飲んだフルーツオーレはとても美味しく祖父に感謝した。お風呂場から出ると晩御飯をここで済ませることになった。皆が食券を買いに行っている間に少し探検しようと思い歩き回っているといつの間にか自分が何所にいるか分からなくなった。周りには知らない大人がたくさんいていたけど、あたりを見渡しても両親たちはいなかった。そして、僕が不安になって泣いていると酔っ払ったおじさんが泣いている僕に「泣くな！」といって一緒に本部まで連れて行ってくれた。そこでアナウンスをしてもらうと両親が迎えに来てくれた。心配そうな表情の両親の顔を見てダメなことをしてしまったと思った。

温泉から帰ってきたらもう夜の１０時を回っていた。そして両親は仕事、従姉は小学校があるので先に帰ることになり幼稚園児で別に休んでも大丈夫な僕と兄だけ泊まることになった。そして僕たち兄弟と祖父母の４人でそろそろ寝ようということで４畳半の何もない部屋で寝ることになった。今思えばそのことがとても幸運だったのだなと思う。

２．１月１７日午後５時４６分

正直な所、僕は地震の時起きていたのかわからない。もし起きていたとしても記憶が曖昧だ。だから地震は怖いとは思うけれどもそれは地震後の体験などからくるものであって地震そのもの怖さは実際にはわからない。僕の記憶は祖父が僕の上に覆いかぶさっているところからスタートしている。まだその時に地震が起こっていたかは定かでは無いがいつもとは確実に違うその状況に怖いと感じた事は、はっきりと覚えている。

しばらくすると揺れが収まり少し落ち着いてから隣の部屋を見ると台所の食器類はほとんど落ちて割れていたり床には無数のガラスが散乱していたりと昨日最後に見たその部屋と同じ部屋だとはとても思えなかった。他の部屋も見てみると大きかったテレビが３メートルほど飛ばされていて、まるで寝ている間に何人もの人たちに部屋を荒らされた感じだった。幸いにも誰一人怪我をしなかったがもしあ

の４畳半の部屋で寝ていなかったら僕たちは間違いなく何らかの怪我をしていたに違いない。

３．被災後

揺れがおさまってすぐに祖父は隣の家へと歩いて行った。僕は不安で一杯だったので祖父の後ろをついて行った。しかしその瞬間祖父に「ついてくるな！！」とすごい顔をして怒られた。僕は隣の部屋の現状よりも祖父に怒られたことが怖くてしばらく寝ていた部屋でじっとしていた。

それからどのくらい経っただろうか。僕はまたうとうとし始めていた。しかし遠くから聞こえてくる祖父の声によって現実に引き戻された。恐る恐る隣の部屋を覗いてみると祖父がいつものやさしい顔でもぉ来てもいいぞと言ってくれた。そしてよく部屋を見てみるとぐちゃぐちゃになっていた食器が奇麗に隅に寄せられていた。

六時にもなると警察官の祖父は仕事があるので出かけてしまった。今となっては理解ができるけれども当時は何故いないのかも理解できずにいた。この時僕は、おじいちゃんは僕よりも警察の仕事の方が大事だったんだと思いとてもショックだったのを覚えている。

家に残った僕たち兄弟と祖母はライフラインの確認をした。当然全て機能しないとあきらめていたのだが幸いにもこの官舎周辺だけ水道管が古く別の場所にありほんのすこしだけれども水だけは出てくれた。そして僕たちは水が出るうちにできるだけ水を貯めなくてはと思い、水がためられるものをそこら中からかき集めてためられるだけの水を貯めておいた。

そしてその後、兄と祖母と一緒に外に出てみることになった。すると地面にヒビが入っているのが見えた。そこで初めて子供ながらにこの震災がどれだけ恐ろしく強大なものなのかを少しは理解できた。それから買い物に行くために駐車場に行くと地面がドロドロとしていてキラキラと光る砂が出てきていた。液状化現象が起きていたのだ。しかし当時はそんな知識は全く無く「綺麗やなぁ」という程度にしか思っていなかった。そして僕たちは車に乗り込み買い物に行くことにした。しかし後から気付いたことだけれどもその時、液状化でドロドロになった砂が車の排気口に入っていたのだ。幸いにも車に乗っても何も起きなかったが、祖母は今でもあの時車に乗ったことを後悔しているそうだ。市場につくとまず真っ先に水を探した。しかし全く売っていなくしかたなくジュースを大量に買うことにした。僕はこの時からジュースが大好きだったのでとてもうれしくなったのを覚えている。
家に帰ってきてこれでようやく落ち着けると思っていたがまだまだあの地震の弊害が続いていた。その一つが余震である。何度も何度も余震が来る度とビクビクとしていてとても不安な気持ちになった。そしてその度に壁のヒビが大きくなって最後には家が潰れてしまうんじゃないのかと不安になって、余震が来る度に祖母を連れて壁のひび割れを見に行っていたそうだ。夜になるともう一つの弊害が襲ってきた。ライフラインがストップして電気が使えないのでストーブが使えずとても寒かった。僕は、寒いのがとても苦手で、毛布にくるまって泣きながらガタガタ震えていたそうだ。そんな僕を見て祖母は自分の毛布をかけてくれて僕が寝るまでずっと体をさすってくれていた。それでも僕は寒い寒いと泣きじゃくり祖母をとても困らせたそうだ。そのあとたまたま家にあったホカロンが見つかりとても役立った。

４．翌日

朝起きると横には兄がまだ寝ていたけど、祖母の姿が見えなかった。前日地震のせいかまだ恐怖心がとれなくて必死に祖母を探してみると官舎から出かけるところだった。僕は祖母について行き近くの公園に行くと、給水車が来ていて多くの人が並んでいる列に並ぶことになった。列は少しずつしか前に進まなくて僕は駄々をこねてしまっていると、祖母が「もうちょっとやから我慢してね」と言った。今思うと勝手に付いてきたのに優しく言ってくれる祖母の言葉は僕の心を少し和らいでいたと思う。祖母に手を引かれながらしばらくすると、やっと僕らの番が回ってきた。水をポリタンクに入れて祖母と一緒に運んでいると、だんだん疲れてきた僕はポリタンクを持っていた手を放して一人で先に歩いて行ってしまった。僕は先に官舎につくとそこで祖母を暇そうにまっていた。兄が起きてきたので遊びながら祖母を待っていると、祖母が両手に重そうなポリタンクを持ってゆっくり歩いてくる姿を見て、兄が走って祖母の元へ行き、持てそうにないのに必死に持とうとしているのが、なぜか僕にはとてもかっこよく

見えた。そうしてやっと官舎に帰ってくると時間は 12 時を過ぎていた。もらってきた水を飲もうとしてコップに水を入れようとしたらドアの方から母の声が聞こえたので僕と兄は走ってドアの方へ向かった。

母は昨日の晩から祖父から連絡をもらい僕らを迎えに行くためにこっちへ向かったらしいが、阪神高速道路が潰れていたのと、道が混んでいたのが重なって１２時間もかけて迎えに来てくれたらしい。

僕らの顔を見た母は安心したのか座り込んでしまった。それからすぐに自分の家に戻ることになって１２時間という長い時間をかけて家に帰った。家に帰るともう夜も遅くて疲れていたけど、水道が止まっていたので水を運ぶことになり、眠い目を必死に開けながらマンションの下から上まで運んで、この日はゆっくり寝ることにした。

５．何日か経って

震災から数日過ぎたある日の朝、まだ８時３０分だというのに親に起こされた。眠い目をこすりながら「何？」と聞くと「幼稚園行くよ」と言われた。僕はその言葉を聞いてとても驚いた。と同時にとても嬉しかった。震災があり最近はとてもバタバタしていたのでやっと友達に会えるのかと思うと自然と笑顔が出てきた。しかし不安な気持ちもあった。子供ながらにこの震災がどれだけ多くの死者を出しているのを知っていたので友達が全員無事なのかとても怖かった。しかし学校に着くといつもの顔ぶれが見えた。僕はとても安心した。幼稚園の生徒皆が無事だった。その瞬間一気に笑顔がこみ上げてきた。そしていつも一緒にいる仲良しグループで今回の震災について色々と話し合っていた。大抵の友達は「すごく怖かった」とか「色々な体験ができて楽しかった」等、笑いながら喋っていたが一人の友達だけは全然笑っていなかった。僕が不思議に思い「どうしたん？」と聞くと「親戚のおっちゃんが家の下敷きになって死んでん」と言ってとても悲しそうな顔をした。僕は急に何の前触れもなく身近な人が死んでしまった友達の気持ちを考えると、とても悲しくなった。と同時に激しい怒りや不公平さも感じた。何故、何の罪もない人が死ななければならないのか、何故、震災によってこんなにも悲しい思いをする人がいるのだろうか、と憤りを感じずにはいられなかった。その話を聞いてから当分の間僕はその友達の前で心から笑えることは無かった。それから何ヶ月か経ったある日、いつもどおり幼稚園に行くとおじさんを亡くした友達が大笑いしているのが見えた時僕はとても安心したのを今でもとても印象強く覚えている。

６．舞子高校環境防災科に入って

僕が環境防災科の存在を初めて知ったのは中学３年のころだった。僕が消防士になりたいとその時の担任の先生に話すと環境防災科の資料やホームページなどを見せてくれた。そして僕はだんだん環境防災科に魅かれていった。その理由は座学だけでなく消防学校など実際体を動かして体験しながら学びたかったからだ。

無事舞子高校に進学し授業を受けていく中で色々な職業の外部講師が来てくれて震災当時の状況などを詳しく話してくれた。色々な職業の人たちの話を聞いて行くと小さい頃に体験した震災の記憶が甦ってきた。そして、入学してから約１年が経過した頃、「１、１７メモリアル行事」というボランティアに参加した。この行事は阪神・淡路大震災を風化させないために毎年１月１７日に行われている行事で地震発生時の時間５時４６分に皆で黙祷をする。僕はこの行事に参加するにあたって特に何も考えずただスムーズ行事が行えるように手伝えたらなと思っていた。しかし、実際やってみると１月ということもありとても寒く更には雨まで降り出しとてもしんどかった。しかし５時４６分になり黙祷をしていると寒さなんか吹き飛ぶくらいびっくりした。僕たちが参加したのは震災から１２年も経ったあとの震災行事なのに１か所、また１か所と鳴き声が聞こえてきた。僕はその時幼稚園の時のおじさんを亡くした友達のことを思い出していた。彼もまたとても悲しそうな顔をしていた。しかし１２年も経った今でもその時の友達の顔と同じ顔をした人たちがいる。震災は一体どれだけ長く、多くの悲しみを与えているのだろうか、その時この環境防災科がとても大切なのだと理解した。

僕はここで学んだことを決して無駄にはしたくない。将来どんなことでもいいからこの環境防災科で

身につけた知識をいかしていきたいと思う。しかしそのためにはもっと勉強して防災のことを深く学ぶ必要があると思う。だから僕は大学に進学しても何らかの形で防災とかかわっていきたいと思っている。

７．語り継ぐ

今回、この「語り継ぐ」を書いてみて改めて自分の震災体験を振り返ることができた。自分の中でも風化しつつある記憶がより濃いものになり、そして震災を体験してない地域の人、震災を体験したことのない世代に少しではあるが語り継ぐことができた。これを見て、出来るだけ多くの人が何かを感じてくれれば幸いだ。

いつかは私がしあわせを…

神戸市垂水区五色山
久保　絢菜

○語り継ぐ

ついに私も「語り継ぐ」を書くときが来た。やはり阪神・淡路大震災を思い出すのは難しい…。あるイベントで、「震災の時は４歳やったら、ほとんど覚えてないよねぇ」と言われたことがある。確かにほとんど記憶がない。私は、生まれも育ちも神戸である。神戸に住んでいるのに、「阪神・淡路大震災は記憶がないです。」で終わらせたくなかった。環境防災科に入学した理由の１つでもある。私が体験した阪神・淡路大震災を語り継ぐ。今までも、発表で自分の震災体験を話したことがあったが、この「語り継ぐ」でもっとたくさんの人に読んでいただけたらと思う。本当に記憶は薄いが、初めは、私の記憶を書いていこうと思う。

○阪神・淡路大震災の私の経験

阪神・淡路大震災が発生したとき、私は４歳だった。かなりの揺れだったが、ほとんど気付かなかった。でも揺れた瞬間、弟といつも観ていた「ウルトラマン」に出てくる怪獣が襲ってきたのかと思っていた。父が「地震や！」と言い、飛び起きていたのを覚えている。一瞬だけ目を開くと、布団をかぶせられていた。隣にいた弟は、完全に寝ていた。今でも母は私と弟に言う。「あんたらは地震のとき、寝てた。」と。確かにそうだ。そのとき私は大丈夫だと安心したのか、寝てしまった。
地震があってから、幼稚園は行かれへんのかな…？と思っていた。幼稚園は、家から 5 分のところにある私立の幼稚園だった。当然幼稚園は休園。当時の私は、幼稚園に行くことがとても楽しみだった。よく友達と幼稚園の先生ごっこをしていた。先生のバインダーを取り合いになり、先生に呆れられながら遊んでいた。そのときは、その幼稚園の担任の先生に憧れて、ずっと幼稚園の先生になりたいと言っていた。当時は、幼稚園に行けないことを不思議に思っていたのだろう。ずっと家に居たから。
そういえば、幼稚園も何度も工事をしていた。地震で壊れてしまったところや、ヒビが入ってしまった所を直していた。

当時住んでいた家から５分ほどのところに、祖母（今はもう亡くなっているが）の家がある。気づけば祖母が家に来ていた。家族全員で１階のリビングで寝ていた。いつもは２階の寝室に家族４人で寝ていたが、狭かったからだろう。今思うと、余震が震度７以上だったら、１階部分が潰れて今生きていなかったかもしれない。私は地震があったあの日から、夜何度も目が覚めるようになった。テレビが夜中ずっとついていて、それを見てまた寝ていた。今でも寝るときは真っ暗ではなく、オレンジの小さい明かりをつけて寝ている。真っ暗で寝るのが怖いわけではないが、私の中で明かりがついているとなんとなく安心するのだ。地震当日もオレンジの小さい明かりがついていた。

唯一記憶に残っていることがある。それは、給水車が来たときに水をもらいに行ったことだ。２リットルのペットボトルを持ち、母を弟ともらいに行った。弟は当時２歳で、歩くたびに水が少しこぼれていた。私はこぼれる水をもったいないと思っていたが、２歳の弟にとってとても重たかったのだろう。家の前はかなり急な坂道だった。しんどいはずなのに、私はなぜか苦ではなかった。４歳の私は普段、まだ母の手伝いをさせてもらえなかったから、手伝っているということが嬉しかった。

そういえば、この前弟の 16 歳の誕生日だった。弟の誕生日は 4 月。1995 年の弟の誕生日の写真を家で見たことがある。写真は、普通に誕生日会をしているところだった。もう 4 月には、ほとんど普通の生活にもどっていたのだろう。

○被災した家と記憶

当時住んでいた家は、今住んでいる家と違う。当時の家は、今住んでいる家から歩いて 10 分ぐらいのところにある。
地震があった日から少しして、母がお風呂や家の外の壁の壊れたところやひびが入ったところを写真

に収めていた。私は、なぜ写真を撮っているのかがわからなかった。「なんで写真撮っとん？」と母に聞いていた。普通の生活に戻ってから、ある日家のまわりが丸い長い木で囲まれていた。補修工事だった。ハウスダストのアレルギーがある私は、砂埃を見て、当分は家の前で遊ばれへんなぁと思った。いつも家の前で、ぽっくりをして遊んでいた。工事が終わって、家に「もう壊れんとってね」と願った。本当なら、「もう地震は来んとってほしいね」と願うべきだったのかもしれない。

小 5 のとき、今住んでいる家に引っ越しをすることになった。私も弟も大きくなり、前の家だと狭く、部屋も少なかったからだ。今の家は、前の家より広いし部屋も多い。玄関が、真っ白でお城みたい！と嬉しくなった。中学生になったら 1 人部屋になれることも嬉しかった。

でも、前の家を離れることは、少しさみしかった。今の家からも明石海峡大橋は見えるが、前の家は歩いて 3 分で海がある、明石海峡大橋が目の前に見える、自慢の家だった。引っ越すとき、工事が終わったときのように、「壊れんとってね」と家とお別れをした。

今も当時住んでいた家はある。空き家らしい。いつか無くなってしまうのだろうか。阪神・淡路大震災を知った家が無くなってしまうことは、もう記憶にしか残らないということなのかもしれない。

○阪神・淡路大震災を知る

阪神・淡路大震災を、阪神・淡路大震災とはっきり知ったのは、小学 1 年生のときの 1 月 17 日だ。私の担任の先生が図書の時間に図書室で言った。「みんな、今日が何の日か知っていますか？」クラスメイトの男子が言った。「今日はぼくの誕生日！」私は、「だから何なん？」と思っていた。「そうやね。今日は○○くんの誕生日やね。でも違います。1995 年の今日、みんなが 4 歳のときかな…阪神・淡路大震災という大きな地震がありました。知ってるかな？その大きな地震では、たくさんの人が死んでしまいました。」と 1 冊の本を片手に言った。先生が持っていた本は、「しあわせはこぼう」という本だった。私はその本を読んで、ある歌を見つけた。それは、当時小学校の先生だった、白井真さんが作曲された「しあわせ運べるように」だった。私はその歌を聴いて、とてもメロディーが好きになった。歌の意味を知らずに、1 月になると口ずさんでいた。歌の意味をちゃんと理解できたのは、小学 6 年生だった。

○ルミナリエ

1995 年の 12 月から、ルミナリエが始まった。家族で行ったり祖母と行ったり、名古屋の友達の家族が来て一緒に見に行ったりした。ルミナリエの本当の意味も環境防災科を受験するために、中学 3 年生のときにインターネットで見て知った。それまでは、クリスマス前にいつも開催されていたから、神戸のイベントとしか思っていなかった。

中学の間はなかなかルミナリエを見に行くことができなかったから、高校に入ったら必ず行こうと思っていた。高校 2 年の 12 月。友達と一緒に見に行った。「きれい…」の一言だった。あの光が、どれだけの人を幸せにするのだろう。どれだけの人を勇気づけるだろう。ルミナリエを見て、いろんなことが頭をめぐった。

しかし、ルミナリエには、かなりの費用がかかる。毎年、赤字らしい。去年は、いろんな場所に募金箱があったり、募金箱を持って呼びかけている人も居た。私も、ルミナリエが無くなるなんて考えられないから、ちゃんと募金をしてきた。高校生だから、そんなにたくさんはできないが、500 円募金した。少ししか募金できなかったけど、これからもルミナリエが続いてほしいと願う。

○中学生のときに…

中学 3 年生の春、総合学習の時間。舞子高校環境防災科の先生が中学に学科説明会に来られた。環境防災科の先生が来られると知って、私はとても楽しみにしていた。そのときにはすでに環境防災科を受験することを考えていたから、そのとき話を聞いて決断した。

中学校でも、何度も避難訓練があり、何度か消防の方が来てくださり、お話を聞いたことがあった。いつも、消防の方は褒めてくださった。でも、それは中学生だったからだと思う。避難訓練を遊び半分でやっている人もいた。全く興味のない人もいた。本当に中途半端な避難訓練。私は、それにいつも腹を立てた。そして、本当に災害が起きたら、訓練ができていない人は死んでしまうと考えていた。

今思えば、中学生のころから、少しずつ防災に興味を持っていたのかもしれない。

○環境防災科で学ぶ

環境防災科に入って、今までたくさんのことを学んできた。その中で悔しかったことがある。それは環境防災科の外部講師の授業や、イベントで言われた言葉。「震災当時４歳だったらほとんど覚えていないかも…。」

確かに、覚えていないことのほうが多いし、「語り継ぐ」を書くのも必死だ。私は、覚えていないという言葉で、阪神・淡路大震災を片づけてしまうのは嫌だったから、授業のときは、覚えてなくても学んで伝えたい、と常に思っていた。環境防災科は、たまにテレビ局やラジオ局、新聞社などが取材に来る。そこでインタビューされたり、密着取材をされたこともあったが、私はそのたびに、阪神・淡路大震災を覚えていないけど、学んだことは伝えようとした。いつも、取材は緊張してしまって、なかなかうまく答えられないこともあったが、少しでも誰かに伝わるように…といつも願っている。

１年生のとき、災害と人間の授業で、外部講師の授業がたくさんあった。自分が知らなかった阪神・淡路大震災、行政の方々の苦労、命の大切さ…いろんなことを学んだ。阪神・淡路大震災の真実を知って、ショックを受けたこともあった。2 年生では、Active 防災でネパールのことなどの外国の災害を学んだ。いつも英語に四苦八苦していた。電子辞書を片手に授業を受け、長文を読む授業のときは少しでも追いつくために毎日家でも英語英語英語。私は、中学のときから英語が苦手科目だった。でも、できないじゃなくてやってないからできない、と先生から教わった。それから少しずつ英語を勉強するようになったし、ネパール訪問に参加するきっかけになった。

○大好きな KOBE というまち、神戸市民の私

私は、神戸が大好きである。ファッションの発祥地でもあり、外国の方がたくさん来られたり、お洒落なまちだから。それに、神戸や三宮に行くと、たくさん人が居る。たくさんお店があって、たくさん人が居て、たくさん車が行き来していて…。神戸は生きているんだなぁと思う。祖父母ぐらいの年齢の人は、神戸は変わってしまったと残念そうに言う人も居る。私は、神戸が変わったのは良い意味で変わったと思う。元気になった、明るくなったような気がする。

でもその反面、変わった神戸を見ると、阪神・淡路大震災があったようには思えない。神戸を知らない人は、今の神戸を見て阪神・淡路大震災があったとは、誰も思わないだろう。忘れられているかもしれない。それに、今神戸に住んでいる 3 分の 1 の人は、阪神・淡路大震災を知らない。13 歳以下のこどもたちも、阪神・淡路大震災を知らない。こんなに心に残っているのに、どうしてだろう。時が経つということは、怖いことだ。

だから、私には伝えるという使命がある。使命というと大げさかもしれないが…。でもそれは、環境防災科に居るからという理由ではない。私は、神戸市民だから。阪神・淡路大震災を知っているから。阪神・淡路大震災を伝えるだけでなく、環境防災科で学んだことも。最近は、塾の先生に話をしたり、イベントや行事などで話をしたりした。私が少しの知識でも、誰かに話すことで、たくさんの人に伝えることができるなら、これからもいろいろな場所で、たくさんの人に話していきたいと思う。

そして、これからも神戸に住み続けたい。仕事も神戸でしたい。年をとっても神戸に居たい。死ぬまで神戸に居たい。本当に神戸が大好きだから。

○将来

環境防災科に入学するときは、医療関係の仕事に就きたいと思っていた。しかし、環境防災科でいろんな経験をすることでとても視野が広がった。自分が見えていなかったことまで見えてきて、視野がひろがりすぎて、正直、自分が本当にしたいことは何なのか悩んだ時期もあった。そのときは、環境防災科の先輩や、学校の先生にたくさん相談した。今も、やりたいことはたくさんあるが、その中でも 1 番の将来の夢がある。

今の私の将来の夢は、ファッションアドバイザーになること。この夢を決めたのは、高 2 の秋。高 1 のときからいろいろ進路は悩んでいたが、そこまで熱くなれる夢はなかった。ただ小さい子が持つ夢のような、なりたい！だけ。なるためにどうするかを真剣に考えるところまでいかなかった。そこまで熱くなれた夢はなかった。

大好きな神戸の象徴であるもの、そして環境防災科で学んだことを活かしたい、でも自分の好きなこともしたい、と思うようになったのも、高 2 の秋。自分の本当に好きなことを見つけるのにもすごく時

間がかかった。でもやっと見つけられた。私が好きなことはファッションだと。
　ファッションと環境…ファッションと防災…。考えると意外に接点がたくさんあることに気付いた。3 年になってから、Active 防災Ⅱの授業で、「夢と防災」という授業があり、ファッションと防災について考えた。はじめは、ファッションと防災はあまり関係ないかもしれないと思っていたが、考えたり調べたりしているうちにいろいろなところですごく関係していることを知った。
　私は不器用だから、たくさんのことを一気にはできないが、将来は、本業でファッションをやり、副業で防災をしていきたいと考えている。例えば、会社の防災関係の仕事をしてみたり、今みたいにいろんな防災のイベントに参加したり、ボランティアに参加したい。ネパール訪問やトルコの子どもたちとの交流など、今まで国際交流にも積極的に参加した。英語ができるわけじゃない。英語が完璧に話せるわけじゃない。でも、ネパール訪問で、言葉が片言でも伝えられることがあると学んだ。だからいつかは国際的なボランティアにも参加したいと思う。大人になっても、おばあちゃんになっても、いつまでも防災やボランティアに関わっていたいと思う。

〇語り継ぐ　いつかは私がしあわせを…

　環境防災科に入学してから今まで、あっという間に過ぎた。あっという間に過ぎた日々の中で、私は環境防災科で、普通の高校生よりたくさんの経験をさせてもらうことができ、たくさんのことを学んできた。中学までは、みんなと同じだったけど。
　高校で、環境防災科に出会い、私の人生はとても変わったような気がする。環境や防災を勉強するうちに好きになったし、もっともっと知りたいと興味を抱いた。
　小さいころから、もともと人と違うことをするのが好きだった。そして、人と接すること、人に何かをしてあげることが好きだった。良く言えば、好奇心旺盛。なんでもやりたい、したいと思うし、やってみたことがなくてもやりたいと言っていた。それと同時に、いつかは人の役に立ちたいと思っていた。人に何かをしてあげたい、自分の力で人を幸せにしてあげたい。この思いは、環境防災科に入ってからもすごく強くなった。

　人を幸せにすることは、とても難しいこと。それにまだそんな力は私には無い。でも必ず、人を幸せにできる人間になりたい。
　私が好きな歌。白井真さんが作曲された「しあわせ運べるように」。文中にも書いたが、小学 1 年生のときに知った歌である。
　この曲を聴くたびに胸が痛くなり、涙がこぼれる。でも、この歌があるから神戸も私も支えられている。

　環境防災科で学んだこと、「しあわせ運べるように」が私に教えてくれたこと。

“届けたいわたしたちの歌　しあわせ運べるように”

　私もいつかは、しあわせを運べるような人になりたい。

「こころ」と震災

神戸市西区春日台
黒田　琢真

1.　記憶

自分の住む西区は、震災の被害は比較的少なかったようだ。実際、母と父は地震の震動で起きたが、当時幼かった僕は、眠りが深かったのか寝ていたらしい。だから、震災についても覚えてない部分の方が多かった。しかし、この「語り継ぐ」を書くにあたって、母から話を聞いてみて、少しずつ思い出してきた部分がある。母の話と自分の記憶を織り交ぜながらこの「語り継ぐ」を書いてみようと思う。

2.　地震の発生

父と僕は２階の寝室で寝ていた。母はいつものように早くに起きて寝室の横の自分の部屋にいた。着替えて朝の準備をするからである。朝食の用意や弁当の用意は、母の仕事になっていた。

全てはいつものように「普通」の光景だった。しかし、ここで「普通」の光景とは違う出来事が起こり、「普通」の光景は明らかに変貌していった。急に大きな揺れが人々を襲った。阪神・淡路大震災と呼ばれる地震が発生したのだ。僕は寝ていたとは書いたが、もう少し歳をとっていたら飛び起きただろう。寝ていたのは幼くて眠りが深かっただけだ。いくら長田ほどの被害はなくても、あれだけ大きな地震なのだから揺れはそうとう感じたはずだ。実際、電気やガス、水道というライフラインは一時的に止まってしまうほどの大きな地震だった。

父は飛び起きて、家族が無事かどうか急いで確認したらしい。電気はつかなかった。懐中電灯がなかったので、皆手探りで一階に下りた。懐中電灯を探すが暗くてなかなか見つからない。必要なことは勿論わかっていたが、心の奥底では「まさか懐中電灯を使うほどの状況はないだろう」とでも考えていたのだろうか。ちなみに現在はこの時の経験を踏まえて、懐中電灯は常に寝床の近くに置いてある。やっと見つけたと思ったが今度は電池がない。「準備不足だった」と今考えると思う。時々電池をチェックするべきだったのだろう。電気がつかないから暖房はつけることはできなかった。電気がつかないのなら、テレビも勿論つくわけがない。「何が起きた」「どうなってるの」という気持ちが湧き起こり、公の情報を知る手段がなく、不安がっていた。電気に頼った生活は、一度崩れると意外と脆く感じた。電気が戻るまでは不安だらけだった。どれだけ電気が大事だったのか、頭ではわかっていたものの、本質的にそれを実感するのは初めてのことだった。

外は不気味なほど静かだった。あんな大きな地震があったのにパニックを起こした人々が騒いでいるという様子は意外にもない。母は、「大きすぎることが起きるとすぐ現実とは思えないのかもしれない」と後に話していた。もしかしたらまだ夢の中にいるかも知れない。そんな気分だったのだろうか。自分が見ている光景を頭の中で処理しきれていなかったのかもしれない。

こんな状況になると、食べ物の部分が不安になってくる。とりあえず母は近くの食料品店に買い出しにいった。すぐ行動したのがよかったのか、まだ商品には余裕があった。一通り食糧を買った母だったが、少し不安になってもう一度引き返してもう少し買おうとしたが、そのときには食糧はなかった。みんな考えることは同じだろう。

父は仕事場に泊まり込んで仕事することになった。家にはしばらく僕と母だけ。僕等の不安に拍車がかかった。こんな時期に一家の大黒柱に家を離れて欲しいわけがない。しかし仕方がないことだった。父だって忙しい。自分たちがしっかりすることが求められた。

3.　水

電気やガスは復旧が早かった。一日くらいで元に戻ったと思う。しかし、水は一週間くらいかかった。それも、何故か駅の近くはすぐに水が出たのに、春日台方面はなかなか復旧しなかった。母は少しいら

だちを感じていたようだった。こちらの方面は軽視されがちだったのだろうか。しかし「今考えればやっぱり色々事情があったのかな」と現在の母は話す。様々な角度、立場から物事を考えられたのは、ある程度の時間が過ぎてからだった。

勿論水をもらいに駅の近くの方まで行くことになる。僕も幼いなりに「何かが起きている」ということを感じとったらしく、母と一緒についていった。そこにいくと、たまたまだろうが、洗車をしている人がいた。ホースからあふれ出る水が車を奇麗にしていく。しかし僕たちはその水が欲しくてここまで来ていた。別に洗車するのはいいがこんな風に水をもらいに来る人達の前でしなくてもいいのだろうに。その水で何人の人が笑顔になれるのだろうか。「震災で『人』が見えた気がする」と母は言っていた。

水に関して言うと、これは母が聞いた話なのだが、ある人が水をもらいに行ったところ、「こっちの水が無くなったとき困るから」という理由で断られたらしい。「今」水が無いのはこっちだ。それを「未来」が心配になったから「今」必要な人には与えないと言っているのだ。もらう側はこちらだから断られても文句はいえない。しかしそれはしっかりとした理由があってこそではないのだろうか。こんな理由で断られても納得がいくわけがない。「未来」の自分が心配で「今」の他人がどうでも良くなった・・・というのは勿論言いすぎだろうけど、あの不安の中ではそう受け取ってしまうかも知れない。

しかし、快く水を提供する人もいた。そんな時はやっぱり心が暖まったような気分だった。阪神・淡路大震災は「人間」の本当の姿をさらけだしたのかも知れない。良い面も悪い面も、人々は混乱し、隠し通すことが難しくなっていた。今回の震災に無理矢理引きずり出されたようだ。

4. 情報

震災当時、情報が上手く伝わっていないということを思わされることがあった。阪神の方が大変なことになっているという事をテレビで見たのか、沢山の親戚から電話をもらった。実際は西区の方は被害が少なく、生死に関わる問題ということでも無いのだが、無事だというと泣き出す人もいた。そんなことをしてくれるのは勿論自分達を思ってくれているからなのだが、ただ「神戸」が大変ということを情報が強調するから、余計な不安が起きるのだろうと思った。

この阪神・淡路大震災は、人々をパニックにさせて、情報の読み取りかたも変えてしまったように思える。自分の友達の住んでいる辺りが大きな被害を受けている・・・そんな言葉と画面を見せられたら冷静さを失い、その情報の細かい部分に目がいかなくなるのかも知れない。この場合、「各地ごとの被害状況」という情報に、目がいかなくなり、映像での「壊れたまち」が脳裏に深く焼きつき、「友人もあんな所にいるのだろう」と勝手に自己解釈してしまう・・・という感じだろう。

非常事態には、まずそれがどういうものなのかがしっかり分からないとどうしようもない。だから情報に頼るしかないのだけれど、映像のインパクトに惑わされ、必要のない精神の不安を背負いこむことがないようにしたい。これには情報を発信する側、受け取る側がお互いに気をつけて考えるべきことだろうと思う。

5. 叔母の経験

ここからは、僕らが住んでいた西神より多くの被害を受けた西宮に住んでいる叔母の体験を書こうと思う。叔母に話を聞くと、西神とは違った風景が見えてくる。

叔母のアパートの部屋は、11 階建ての 6 階だった。地震が起きた直後、電気が点かなくなり、真っ暗だった。部屋の中にはいたが、真っ暗なので部屋の中の様子は分からない。とりあえず家を一回出ることにした。家をでようとする途中、何回もなにかにぶつかって、移動するのが難しかった。

家から出るのも苦労したので、家の中は大変な状況になっているのだけは分かった。外をみると、真っ暗だった。今は、夜中でも常夜灯や信号とか点いているものだが、震災で停電してどれも停止していた。マンションに住んでいるのだが、一室一室をつなぐ廊下の明かりも消えていた。夜の外はいつも暗いのは当然だが、この時は本当の「真っ暗闇」だった。常夜灯などの明かりは消えていて、そとを照ら

す光は何もない。いつもの夜は明るかったのだなと思った。本当の「真っ暗闇」というのは「光がないだけ」としか想像できないが、いざそんな状況になると、言いようのない不安に襲われる。田舎の方ではそんなこともないのかも知れないが、この地域は「明るい夜」に慣れ切っていた。

電気が点いたあと、改めて中に入ってみると、家の中は予想以上に散らかっていた。今回の阪神・淡路大震災の脅威を知った瞬間だ。
足の踏み場のない状況で、服や食器などが散乱していた。よくこんな所から外に移動できたなと思った。

外の様子をもう一度みると、鉄道の上を歩く人達がいて、心を打たれた。
多分、家族や親戚、知人の為に差し入れや救援物資担いでいるのだろうと思った。みんな黙々と連なって歩いていた。

聞いた話では、外国では地震があるとすぐに「略奪行為」の心配をしなければならないらしい。それを聞いて、日本は平和な国だなと思った。

6. 電話

叔母の家では震災当時、叔母と祖母の二人暮らしだった。震災当時の出来事で、変わった出来事があったらしい。
震災直後、叔母は何かの用事で外にでていた。そして帰ってくると、祖母から水が出てないから水をもらってきて、と頼んできた。水をもらってくると「ああ、やっとお風呂に入れる」といってさっさとお風呂に入ってしまった。
「水が欲しいのなら自分でもらってくればいいじゃない」と思い腹が立った。確かに当時祖母は腰が悪く、階段を上りながら水を家に運ぶのは大変なことかもしれない。しかし、こんな緊急時でも動けないというほどのレベルではなかったし、自分が戻ってくるまで待つなんて時間の無駄すぎると思った。

自分の母の行動を理解できず、そのことで文句を言うと、こんな答えが返ってきた。叔母が出かけている間、ずっと自分達を心配する電話の応対に追われていたそうで、動くことなど出来なかった。せっかく心配して電話してくれたのに、「水貰わなきゃいけないから切るね」とは言いづらく、心配しているからだろうか、ずっと言葉をつなげて、それが止まらない。「自分達を思ってくれている」という思いがその電話を切りづらくしてしまい、結局長話になってしまう。それが数回続いているので、動くことすらままならなかったという。

7. 震災の被害

震災当時、自分がそんなに被害の大きい地域にいなかったせいか、どうしても物理的な被害よりも目に見えにくい被害の方が印象に残ってしまう。世間一般ではやはりテレビなどでよく見るような「建物が倒壊し、火災が発生し、どんどん人は死んでいって・・・」といったものの方が印象に残りやすいと思う。視覚的にはっきり見えるものの方が印象に残りやすいのは当然のことだ。

だがしかし、環境防災科で学んできたことは「災害がきたらこう対処しろ！」とか「家にはこんな対策を」・・・といったことだけでは無かった。「災害で家族を失って子どものストレスが・・・」「人を救えなかった消防士はこんな気持ちに・・・」という人間の「こころ」のことも学んできた。この震災は、「建物は壊れて、人が沢山死にました。しかし今では建物はほぼ元通り、生き残った人は生きているだけで幸せと思い、毎日精一杯生きています」とだけで終わってしまうことではもちろんない。生き残っても大切な家族や友人を失えばもちろん悲しくて、水をもらいにいって微妙な理由で断られたら少しいらだつし、電気がなくて今何が起こっているのかがわからなければ不安で、震災で職を失って途方に暮れ、思い出の家を失って仮設住宅での生活は辛い。

ここで亡くなった人を例に挙げ、「生き残っただけでもいいじゃないか、命が無ければ何も出来ないのだから」というのは残酷だと思う。別に間違っているわけじゃない。命が一番大切だと思うのは普通

なことだ。でも「まだまし」という想いだけでは人は生きていけないと思う。ストレスとか、パニックとか、夢の中にいるような不気味な感覚とか、そんなことも「震災の被害」に含まれていると感じた。被害が「ライフラインが一時期止まった程度」という地域はなおさら、そんなことを感じてしまうと思う。

僕自身としては、「震災の記憶は風化しそうになっている」と言われつつも、やはり防災・減災の技術は上がってきていて、その技術を使えるところは間違いなく地震に対する抵抗力は強くなっているように見える。ただ、建物が壊れないとなると、「命が危ない状況だった、命があって本当に良かった」という気持ちより、「命があるのは当然だ」という考えがどうしても出てくるのではないかと思う。「当然」とまではいかなくても、「この地震で死んだかもしれない」という考えは起こりにくいと思う。そうすると、やっぱり「こころ」へのダメージが被災者の中で印象深く「こころ」に食い込みやすくなるとと思う。「まさか自分が死ぬわけない」などと思えるのは、技術が発達し、専門家達が経験と情報を蓄え、より高みを目指していたからで、それは素晴らしいし、そんな考えができるのは、「安全」が確かにあるからだろうと思う。しかし、だからこそ目に見えにくい「震災の被害」にも気を配っていくべきだと思う。冷静に周りを見渡せるのは、不快なものも見つけやすいことの裏返しかも知れない。

8. 環境防災科

最初、僕は寝ていたと書いたが、そんな理由だからだろうか、それとも幼かったからだろうか、今となってはわからないが、小学校や中学校での避難訓練は、僕は正直そんなに深く考えてやっていなかったように思える。別にふざけていたわけでもないし、けだるそうに動いたわけでもないが、何と言われたら「普通」とか「学校がやるから」、「やらなければ怒られるだろう、こんなことで怒られるなんてめんどうくさい」といった考えだったような気がする。実際ふざけて怒鳴られている同級生もいた。

そんな感じの、「環境防災科」とは無縁そうだった中学三年の自分が、なぜ環境防災科に入ったかというと、「環境防災科」という学科が面白そうで、とりあえず学科紹介にいったことがはじまりだと思う。環境問題に興味があった自分は「環境が悪かったら災害も起こるよな」と考えて、ある日母に「環境防災科を進路に考えている」というと、母は「これ見てみたら」と言って、阪神・淡路大震災の新聞記事を集めた本を貸してくれた。そこに載っていた写真や見出しは衝撃的で、印象に深く残って、環境防災科を受験しようと思わせるのは十分だった。一度自分から離れかけた「阪神・淡路大震災」はまたこうして自分のところに戻ってきた。

9. 最後に

この「語り継ぐ」を書いてみて、震災当時の断片的な記憶が少し鮮明になった気がする。震災についてのかすかな記憶をたどりながら書いているうちに、自分が無意識に考えていたことが急に文章になって出てきたりした。

自分の震災の記憶はわずかなもので、もっと大きな被害を受けた地域の人達（環境防災科の同級生、先輩方）の「語り継ぐ」の方が読む人の印象に深く突き刺さるのかも知れない。しかし、これからの震災で、被害の大きいところにだけスポットライトをあて、目立たないところへの注意を怠るのならば、本当の意味で、「震災の教訓」は生かされることはないだろうと思った。

被害の大きいところを優先するのもわかるが、震災から 10 年以上経つ今でも、震災によって職を失ったりして、苦しんでいる人もいる。表面的なことばかりにとらわれず、注意深くあたりを見渡してほしいという僕の思いが、これを読んでいる人に伝わればいいと思った。

この僕達環境防災科が作った「語り継ぐ」が、少しでも多くのひと（特に震災体験がない次の世代の人達）に読んでもらって、教訓として少しでも長く伝えられていって欲しいと思っている。

体験していない故の無知

加古川市東神吉町
幸川　拓矢

震災の記憶

正直なところ僕の震災の記憶は、断片的で、極端に薄くて、思い出すことすら困難な状態まで風化してしまっている。だが、親から聞いたり、テレビの特集で見たりすることでつないできた記憶と高校生活で初めて知った事実の二つが震災の記憶として残っている。

地震が起きるまでの生活

僕は地震の時も今も、震災の時に大きな被害を受けた神戸から少し離れた加古川市に住んでいる。その頃の自分は、近所のお寺にある大きな木に登って遊ぶか、かくれんぼや探険、家の前で父とサッカーやキャッチボールをして毎日過ごしていた。震災が発生する前の日もおそらく何気ない毎日を過ごしていたと思う。家族構成は両親と僕と弟の４人家族で、寝るときはみんな２階の和室に集まって寝ていた。

地震発生時

地震発生の前の日。僕達家族はいつものように２階の和室で寝ていた。その日は休みだったので、朝から夕方まで遊びまわり、疲れ切っていた僕はおそらく８時過ぎにはもう眠っていたと思う。もともと目覚めが良いほうでない僕は、毎日誰かに起こされない限り起きようとはしなかった。

そして５時４６分に地震は起きた。もちろん寝起きの悪い僕は目が覚めるわけもなく熟睡していた。そんな中、両親とまだ２歳の弟は目が覚めたらしく、父が僕と弟に覆いかぶさるように布団をかぶせていてくれたそうだ。この話を聞いた時は、父がいつもよりたくましく、かっこよく見えた気がする。

地震から１時間近く経とうかという頃に僕は起きてきた。下に降りると、みんなが集まってテレビを見ていた。僕は「何をしているの？」と尋ねると、「神戸で地震があった」と答えが返ってきた記憶がある。当時まだ保育園児だった僕は、地震なんて知っているわけもなくきょとんとしていた気がする。
それでも、薄い記憶の中でも間違いなく、大規模な火災の様子と横倒しになった高速道路など普段の生活では目にしないようなテレビの中の光景は色濃く残っている。

もし神戸ではなく加古川や姫路で地震が起こっていたら・・・などと考えると恐ろしくて現実から目をそむけたくなるだろう。

加古川では震度は３か４だった。それでも、加古川は神戸のようにライフラインに影響があったわけでも、死者が出たわけでもなかったし、余震が何度も起こって生活に危険や支障をきたすことはなかった。
そして１月１７日もいつもと変わらない生活を送っていたような気がする。

小学校時代の記憶

震災から２年が過ぎると、ただでさえ薄かった記憶が時間の経過とともに、さらに薄くなっていた気がする。僕が通っていたのは東神吉小学校で、毎年１月１７日になると、震災当時のビデオを見たり、避難訓練をして、運動場に全校生徒が集まって黙祷を行ったりしていた。

小学校に通いだしてすぐの頃に、担任の先生に、校舎のあちこちに出来ていた亀裂について聞いてみたことがある気がする。先生は、「校舎が古いこともあるけど、やっぱり地震が大きな原因やったなぁ」と言っていたと思う。この話を聞きながら、本当に大きな地震だったのだなぁとつくづく感じていたと思う。リアルタイムで見ていた震災の映像より小学校に入ってから見た映像の方が痛々しくて心が痛んだ。

小学２年生の時に震災の様子をアニメ化した映画を全校生徒で見たことがあったけど、同級生のアパートの１階か２・３階が潰れて同級生が亡くなる映画だった。その時僕は、もし今僕も地震によって同級生を亡くしたら・・・と考えていた気がする。

中学校時代の記憶

中学校に入ると、震災の映像のいたるところに興味を持つようになり、なぜこのようになってしまったのか、地震の発生方法は何なのかなど様々なことを調べるようになった。

また、中学校では、三宮の東遊園地にある希望の灯の分灯式に生徒会長と副会長、書記の三役が参加して、その灯を体育館で校長から学年主任の教師へ、学年主任から各クラスの担任へ、担任から生徒へといった風に分灯して行き、全校生徒で黙祷をしてから、『しあわせ運べるように』を歌ったりする集会を、毎年１月１７日に行っていた。

また、中学２年生の時に見た、阪神・淡路大震災の時の消防士に密着したテレビ番組で、消防士の人達が、「水が出なくて消火できない」と言っていたのを見て、その日の夜母に、加古川は震災の時に、水が出なかったのか聞いてみた。母は、別にいつも通りに出ていたと言っていた。

中学校で僕の進路に大きな影響を与えてくれた先生がいた。
理科の担任教師が、震災の時、明石の方に住んでおられて、近くの避難所になっている小・中学校におにぎりを持って行ったりしてボランティアをやっていたと言っていたので、僕にも何かできることがあるかもしれないと思い、そのできることを探し回った。
もともと、人の役に立つ活動をしたいと思っていた僕には、自分の意思を大きく前進させる内容だった。

当時の自分にできることを探しているうちに、３年生になり、進路についての希望調査の用紙を配られた。その進路の一覧表の最後の方に、「舞子高校―環境防災科」と書かれたコードがあった。僕はその環境防災科でいったいどのようなことをしているのか気になって、さっそくインターネットで舞子高校のホームページを見つけて、くまなく見て回った。すると、大きな災害があるごとに行う募金活動や、実際に被災地へと足を運んで行うボランティアなど僕の普段の生活では絶対に体験できなさそうなことから、地域の防災訓練に参加して地域との交流をはかる活動を行っていた。僕はこの高校に入って現地でボランティアをして、自分のできることを探したいと思った。
授業も普通の高校と違って、実際に震災の時に現場で活躍された方々から、直接話を聞いたり、災害への取り組み方がすごかったりと、ものすごくひかれるものがあり、体験入学に参加させてもらった。そこで行った内容は、普通の高校の授業ではとても行えそうにない内容ばかりだった。
また消防士になりたいという夢を持っていた僕は行事の一つの消防学校体験入校にも参加したかったので進路をこの舞子高校に決定した。

舞子高校に入って

舞子高校に入ってからの毎日の授業は、震災の時に恐怖も、不安も感じないまま過ごしてきた僕にとっては、次元の違う世界だった。例えば、倒壊した家屋の下敷きになった人を救おうとする近隣の住人の姿や、液状化によって海側にせり出した埋立地など、今まで目にしたこともない写真や映像がとても多くて、当時の被災地の惨状が今僕の目の前で広がっている錯覚さえ感じた。

今までの授業などで聞いた話で一番衝撃を受けたものは、消防の方の話で火災現場に出向いて、鎮火し終わったあとに目に入ってきたものが現場に転がる無数の消火器だったという話だ。
使い方さえわかっていたのなら、住民の力で消火できた火災現場も多かったのではないのだろうかと僕は感じた。この話を聞いた時に、いざという時に、的確な処置を施すことは必要なことなのだと感じた。
やっぱり備えるだけじゃなく、備える意味、必要性を知らせて、意識させていくことが肝心となると思う。

僕が今まで記憶していたもの、見てきた映像とは比べ物にならない出来事ばかりが一年を通してあって、すべてが僕にとって新鮮で、僕ももっといろいろ知りたいと思っていたのもあって、どんどん吸収して、中学校の頃に行きたかった、被災地へのボランティアにも参加できた。
はじめての被災地ボランティアは、新潟県の長岡市だった。ここでは、2004 年に新潟県中越地震で被害を受けた被災者の震災体験を聞いたり、聞き取り調査をしたり、茶話会、クリスマス会を開いたりした。
正直なところ、僕は、ボランティアと聞くと力仕事や大変な作業を行っているイメージしかわかなかったのでとても驚きました。でも、僕の持っていたイメージ通りの作業も必要かもしれないけど、今回現地に出向いて行った内容は本当にその人のためになることがわかって、このようなことなら普段の生活の中で誰かに行うこともできるなと考えるようになって、学校で学んだことを私生活で活かして、周りに伝えるのが今の僕にできる高校生活を無駄にしないための第一歩だと考える。

今の自分にできること

阪神・淡路大震災発生から 13 年目を迎える年の東遊園地で行われている追悼式に僕は参加した。
地面に差し込まれた無数の竹筒が『１・１７』の文字の輪郭をなしていた様子が圧巻だった。
初めて追悼式に参加したため、東遊園地内を散策して回ることにした。
震災で亡くなった方々の名前を一つ一つ眺めていく。時間の流れも感じないくらいの不思議な感覚だった。このように、震災の時に起こっていた現実と対峙することのできる場所の重要性がよくわかった気がする。

午前 5 時を回った頃くらいから、周りの雰囲気が慌ただしくなりだした。竹筒の一本一本に手作業で水をいれ、ろうそくを浮かべていく。
5 時 40 分から希望の灯の分灯が始まった。僕達は、分灯してもらった灯を一般参加の方たちに分灯したり、消えてしまっているろうそくに火を点け直したりしていた。
5 時 46 分に夜明けをうたうような鳥のさえずりの中で「黙祷」とマイク越しの声が響いた。
東遊園地で黙祷をしている時間が、今まで自分が行ってきた黙祷の時間の中で圧倒的に長く、亡くなった方々の思いや、叫びが頭に直接流れ込んでくるような感覚に襲われた。

そして黙祷が終わった時に、環境防災科に入って学んだことや、知ってきた事実を自分の中だけで完結させるのではなく、さまざまな人たちと共有できるように情報発信することが、これからの時代は必要になっていくのではないかと思った。

震災から学んだこと

いままでたくさんの人と接してきたり、授業で学んできた中で、震災後の大変な状態を過ごしてきた人たちを見たり、その方々の話を聞いていくうちに、さまざまな思いや、出来事を自分自身の成長の糧にすることができた。

震災は被災者の何気ない日常を一瞬で奪っていった。たくさんの尊い命を奪っていった。日常の大切さを教えてくれた。人のぬくもりを改めて感じさせてくれた。今を生きていることの素晴らしさを教えてくれた。
震災は辛いことだけじゃなくて、これからの人生で様々な人と触れ合う上で重要なこともしっかり示してくれたと僕は考える。
このように、何事もマイナスのことばかりを見るのではなく、どこか自分のためになることを見つけようと物事に真剣に取り組むことの素晴らしさを教えてくれたのではないだろうか。

このように震災で得た事柄すべてが、今の僕にとっては大事なものになっているので、このような事柄を、ほかの方々にも共感してもらって共有していきたいと思った。

これからの自分にできる事

これからの自分はどのような人生を歩み、どのような大人になるかも全く分からない状態だけど、高校三年間で学んだ内容についての知識や経験は絶対に変わらないし、変えられないものだと思う。
それらを活かして生活していかないと、高校時代にお世話になった方々に申し訳ないと思う。だから、普段から自分にできること、する必要があるものなどを、見落とさないように気を配って生きていこうと思う。

これからも震災の記憶は僕の中でも、周りの人たちの中でも薄れていくのが事実で、その速度は意識の高さによって速くなったり、遅くなったりすると思うから、常に意識をしたり、1月17日の追悼式典に参加するなどして記憶の薄れるスピードを遅らせていかないといけない。

これからの時代は震災を知る世代の人たちが減っていき、震災を知らない世代の人が増えていくだろう。
そんな震災を知らない世代の人たちに、震災が起こったことによって、どんな困難、苦労、悲しみ、喜び、幸せがあったのかと伝えることが重要となり、それを伝えていくための施設も必要となってくるだろう。

今被災した町並みを見渡しても、震災の傷痕は見当たらないし、何か不自由している場所もないように映る。そんな中で震災当時の現実を伝えていくのは困難であると思う。

最後に

今回『語り継ぐ』の作成にあたって、自分の震災に対する記憶の変化、伝えることの難しさを実感した。
自分の伝えたいことを大勢の方に見てもらうきっかけとなるものは滅多に無いと思うので、この『語り継ぐ』を機に、さまざまな形で震災を知らない世代の人や、震災当時に県外や国外などにいた方々にも、震災を通して知った『命の重み』を伝えていきたいと思う。これが今の自分にできる精一杯の活動であり、未来に自分の考えを残すための唯一の活動であると思う。

伝えていくためには、まず自分の命を守らないことには始まらないので、もっともっと自分自身が勉強して、いかなる状況下におかれても、対応できるようにしていくことが、今の自分に課せられた課題であると思う。

これからも阪神・淡路大震災級もしくはそれ以上の震災が発生するのは逃げることのできない現実だろう。
だからこそ、僕たちのような震災を知る世代の人間が、震災に対する、備えや、対応についての情報発信を行っていたとして、その震災が発生した時に、被害の軽減ができたとしたならば、自分が行った情報発信は役立つものであると実感できる。

すると、必然的に自分の周りの人たちも、備えの大切さ、対応の重要性に気付き、情報発信の輪が広がっていくだろう。
この『語り継ぐ』を読んでもらって、少しでも興味・関心を持ってくれる人が出てきてくれたら幸いだと思う。
これからも、さまざまな出来事があるだろうが、震災の記憶はもう忘れることのできない記憶に変わっていっている。

震災を忘れたい人もいるだろう、現実から目をそむけたくなる人もいるだろう。だが、現実を見て、そこから今後の課題学び、対策を講じ、その対策を実践して災害に備え、また災害から学ぶといったサイクルが出来上がっていないことには被害の軽減は成し遂げられないだろう。
またそのように被害を軽減させて災害を繰り返さないことが、亡くなった方々に示す、自分たちの成果であり、哀悼の意であると思う。
だからこそ、自分の『無知』を『知識と経験』に変えるために様々な現実を見て、学んで、少しでも社会に貢献したいと思う。

そしてこの『語り継ぐ』を読んでいる方々も震災の記憶や、そこで見た現実を大切にして、自分の中にある阪神・淡路大震災を風化させないでほしい。

僕はあの日を忘れない・・・。

あの日、そして未来へ向かって…

加古郡稲美町
小林　哲平

平成 7 年 1 月 17 日。僕は当時 4 歳だった。阪神・淡路大震災のことは何ひとつ覚えていない。あれだけの被害を出した震災のことをどれだけ思い出そうとしても思い出せない。なぜ思い出せないのだろう。きっとそれまでと同じ何も心配することのない生活を過ごせたからなのだろう。それは、家族や周りの人に支えてもらったからなのだろう。6434 人の尊い命を奪った震災。今でも苦しい思いをしている人がいる。思い出したくなくても思い出してしまう人もいる。その震災は、僕から大切なものを何も奪わなかった。そのことを感謝し忘れずに生きたいと思う。そして「語り継ぐ」こと。それが僕たちの使命だ。

僕は前にも書いたとおり、震災の記憶がまったくないので人から伝え聞いた話をつなぎ合わせて書いていきたい。震災の実体験はないけれど、これまで環境防災科で学んだことを生かして僕なりに精一杯語り継ぎたいと思う。

僕と震災

僕の住んでいる稲美町では地震の揺れはもちろんすごかったが神戸ほどではなく、これといった被害もなかった。食器が飛び出すということもなかったし、震災のあとが残っているものと言えば駐車場にあるちょっとしたひびくらいだった。ライフラインも全て大丈夫だったからテレビもついていたし、水や食べ物にも困らなかった。同じ兵庫県なのに高速道路が倒れたところと、何もなかったところ。歴然とした差があった。

震災が起きた時、僕はまったく気がつかずにそのまま寝ていたそうだ。今でも夜中、寝ているときに地震があっても気がつかないし気がついたことがない。いつも次の日に誰かから聞いて、そのことを知る。これは僕が阪神・淡路大震災を経験していないも同然で地震の本当の「こわさ」を知らないからかもしれない。地震はいつ、どこで起きるかわからないことは誰もが知っているし僕もたくさん勉強してきた。でもなんとなく僕の心の奥の奥に「自分は大丈夫」みたいなものがあるような気がするのだ。わかっているようでわかっていない。そう思う自分が嫌だ。本当の地震がわかるのは、震災でこわい思いをした人だけであるはずだ。だから震災を経験していたほうが、環境防災科で勉強している今の自分のためになっていたのかなとも思ってしまう。小学生のときなんかはたまに来る小さな地震に言い方は悪いがワクワクするような感情をもっていた。ばかだったなと思う。

でも、もしかするとこんな感情を持たなかったかもしれない。被災者になっていた可能性もあったのだ。実は 3 歳までは明舞団地に住んでいた。ちょうど震災が起こる前、平成 6 年 7 月に稲美町に引っ越してきたのだ。だいたい震災の半年前。明舞団地は震源地に近いので、もしそこにいたら被害にあっていた可能性もある。もしかすると神戸の近くに引っ越していたかもしれない。運がよかったのか…これまで環境防災科で多くの方から震災体験を話してもらったが、ちょっとした震災前のある出来事が人の命を守ったとか、奪ったという話がよくあった。震災に遭うか遭わないかは紙一重だ。

僕の住んでいる地域ではそれほどの被害はなかったとはいえ、それでも震度 4 だ。今までにそんなに大きな地震はなかったはずだ。地震が起きた時は 2 階の寝室で父、母、妹、僕の家族 4 人で寝ていた。午前 5 時 46 分。父と母は飛び起きた。だけど僕と妹は何事もなかったように暢気に寝ていた。両親はすごく驚いたらしい。僕たちの寝ていた部屋にはタンスが置いてあったけど、倒れてはこなかった。誰も怪我をしなかった。全員が無事でよかった。父は僕たちの安全を確認するとすぐに電話をかけた。神戸市西区、明舞に住む祖父、祖母に。無事だった。もう少し電話をかけるのが遅ければつながらなかったかもしれない。その電話をかけてからは、回線が混雑して電話ができなくなっていた。咄嗟の行動をとれたことがよかったのだ。父の活躍はこれだけではなかった。隣の家には僕と同級生の女の子、その両親と兄が住んでいたがその父は出張していた。これを知っていたので懐中電灯を持ち様子を見に行ったのだ。「大丈夫ですか？」すぐに声が返ってきた。懐中電灯がなくて困っていたそうだ。「あのときは助かりました。」今になってもそう言ってくれるらしい。そして、さらに両方の祖父と祖母の家まで車で様子を見に行き物が散乱していたので片付けをしたそうだ。

父の行動はすごいと思う。急に大きな地震が来たら、パニック状態になる人や何もできなくなる人も少なくないはずだ。冷静に行動できた。それに隣の家のことを知っていた。環境防災科で勉強した近所づきあいの大切さである。自分たちは大丈夫だったから周りのことを考えることができた。僕もこういう思いやりを大事にしたいと思う。

震災の次の日から父は仕事に出かけた。そして僕たちはこれまでと変わらない平凡な生活を送ることができた。

明石市松ヶ丘に住む祖父、祖母の震災体験

突き上げてくるような経験したことのない揺れ。それがしだいに横揺れに変わっていく。何がおきているのかわからなかった。悪夢をみているかのようだ。1 分くらいの揺れだったそうだが、それは永遠の長い時間のように思えた。予兆とかそういうものはまったく感じなかった。前日も、いつものように 2 人とも仕事に行きいつもと変わらず眠りについた。それは想像もできない突然の出来事だった。

震災発生。電子レンジや食器棚が降ってくる。冷蔵庫やタンスが暴れている。台所は食器の壊れた破片で足の踏み場も無い状態になった。タンスが近くで寝ていた祖母の腕に覆いかぶさった。身動きがとれず、暗くて長い時間を感じた。恐怖でいっぱいだった。

長い揺れのあとやっと祖父の「大丈夫か？」という声が聞こえた。すぐにタンスをのけてもらった。助かった。祖父は震災が起こったとき布団のなかにいたが「これから起きようかな」というところで目を覚ましていた。寝ている頭側にある電子レンジが落ちてきたが、起きていたのでかわすことができた。だからすぐに祖母を助けることができた。もしもこのとき祖父が起きていなかったらどうなっていたのだろう。やっぱり震災は紙一重だなと思う。助かったことが何よりだ。それからすぐに電話がかかってきた。それは僕の父からの電話だった。お互いの無事を確認できて安心した。テレビで何千人もの死者がでているのをみて、自分たちの家族は全員が無事だったことに感謝したしそれが何よりの救いだった。家はぐちゃぐちゃになっていても命までは落とさなかったから、これからちゃんと生きていけると思ったそうだ。

家の中はとにかくガスくさかった。そのにおいがなくならないので「これは危ないかもしれない」と思い、とりあえず家を出た。遠くに見える家が倒れている。それもほとんどの家が。すさまじい光景だった。そして近くにある公園に一時避難した。そこでもガスのにおいがすごかった。震災が起こった 1 月 17 日は太陽がほとんど出ずにずっと薄暗く気味の悪い天気だった。人々の心の中を表したかのようなその薄暗さと、ガスのにおいは忘れられないという。真冬の朝の公園。吐く息は白く、身にしみるようなつらさだった。

それから、松ヶ丘小学校に避難しようかとも思ったが、なぜか開いていなかったのでぐちゃぐちゃになった家で暮らすことにした。近所の人もそういう人が多かったらしい。物が散乱している家のなかを少しずつ片付けた。ライフラインがだめだったのでごはんは石油ストーブを炊き、おかずは卓上コンロで調理した。お皿とコップにはサランラップを巻き、洗わないですむようにした。すぐに灯油がなくなったので買いにいかなくてはならなかったし水をもらいに行くのも一苦労だった。やることがたくさんあって肉体的にも精神的にもつらかった。そんな生活を 2 日くらい続けているうちに祖母の喘息がひどくなってきたので祖父と祖母の 2 人とも、ほとんど被害のなかった僕の家に避難することにした。父が迎えに行き稲美町にやってきた。それほど遠くはないはずなのに被害の差はすごかった。水もちゃんと出るしガスも大丈夫。家も倒れていない。天と地の差だった。僕は震災のとき祖父と祖母とがやってきたことを覚えていないが、祖父と祖母が大好きだった。よく家に泊まりにいって祭りにつれていってもらいそれが楽しかった。でも祖父は仕事が気になるので 3 日で祖母は 1 週間で明舞に帰った。そのとき僕はどんな顔をしていたのだろう。何もわかっていなかった僕は悲しかっただろうなと思う。

家に帰ってからは少しずつだけど、ライフラインが復旧し元の生活に戻りつつあったがそれでもたくさんの苦労があった。祖父は JR が開通するまでの間、自転車で兵庫まで通勤した。兵庫まではすごい距離だったはずだ。行くだけで時間がかかるのに、さらに仕事をして帰ってくる生活。これを聞いた時

すごく驚いた。大変どころではないなと思った。やっと普通のこれまで通りの生活に戻れたと思ったのはガスが復旧してからだったらしい。震災から約１か月後。やっと家の風呂に入れるようになったときだった。

震災で何よりも困ったのは水だ。水が止まっていたので飲み水もないし、風呂にも入れない。トイレだって困る。命の水だ。給水所は朝霧小学校にあったが遠いし、坂の上り下りの激しい道のりだ。それに加えて両手に水を抱えないといけないから肉体的につらかった。トイレは風呂にためた水を使った。銭湯は人で溢れているのでわざわざ行く気にはなれなかった。だから僕の家にきて風呂に入ったりした。水が出たのは震災から 20 日くらいたってからでそれまでこの生活が続いた。毎日、何気なく使う水のありがたさを深く感じた。

そして僕が話を聞いて驚いたし、憤りに思ったのが松が丘には救援物資が一切届いていなかったということだ。ボランティアも全く来なかったらしい。阪神・淡路大震災のとき、国は棄民の状態だったということを勉強したのを思い出した。まさにそのとおりだったのだ。救援物資にしてもボランティアにしても、被害の一番大きい援助の必要とされるところに集中するのは当然だと思う。だけどそのほかの地域を完全に見逃して何もしないのはいけない。松が丘は自分たち、地域の力だけで復旧した。これはすごく大変だったと思うし祖父、祖母も食糧に困ったそうだ。これではいけなかったと思う。ボランティアに頼りすぎている国。これから僕もボランティアをするときは全体のことを考えた支援をしたいとと思う。

神戸市西区に住む祖母の震災体験

祖母は祖父と神戸市西区の家に２人でいつもと変わらない生活を送っていた。まさかこんなことが起こるなんて想像もできなかった。今でも、地震が来るたびに思い出す。あの震災の恐怖を…

毎日、5 時前に祖父を起こす。それが日課だった。祖父は長田区にある小学校の用務員をしていた。校門を開ける係りで誰よりも早く学校に着かなければならないので、いつも 5 時半には家を出ていた。1 月 17 日。祖母はこの日も祖父を起こし 5 時 20 分くらいに見送った。普段と変わらない光景だった。

午前 5 時 46 分。何とも言いようのない地響きのあと、経験したことのない横揺れが襲ってきた。時計や食器が降ってきた。タンスまでもが倒れた。壁も屋根も壊れてしまった。足の踏み場がなかった。信じられない光景だった。とにかく家の被害はすごかった。全壊だった。揺れている間、何が起こっているのかわからなかった。でも祖父を起こすために起きていたおかげで何とか怪我をせずにすんだ。本当によかった。安心も束の間。嫌な予感がよぎった。「あの人、電車に乗っている時間帯じゃ…電車が止まって帰れないかもしれない。いやもしかすると…」祖父は学校までいつも家からＪＲ明石駅まで自転車で行き、そこから新長田まで電車を使っていた。悪いことが頭から離れない。電車に乗っていないことを願った。早く帰ってきてほしかった。とにかく不安だった。そんな矢先に僕の父から電話が入った。少しほっとした。とにかく心配してくれたことにうれしかった。僕たちは無事だった。でもやっぱり気になる。「電車に乗っとるかもしれんのやけど大丈夫かいなぁ…」ただ待つことしかできなかった。1 人で震えていた。

「ガラガラッ」これまでしていた不安は一気に吹き飛んだ。祖父は戻ってきた。まだ電車には乗っていなかったのだ。願いが通じた。帰ってきたのが 6 時半くらい。これまでの時間がとても長く感じたそうだ。家はぐちゃぐちゃになったけど生きていてよかった。

震災が起きてからのいろいろな不自由があった。祖父は仕事を１週間ほど休んだ。ＪＲが使えなかったからだ。須磨まで電車が通ってから仕事に行くようになった。自転車で明石駅まで行き、須磨で降りそこから新長田の小学校まで歩いた。相当な距離だった。家に帰ってくるのはいつも遅くなった。この話を聞いたとき祖母は「おとうちゃんはようがんばっとった」と懐かしそうに話していた。

祖父と祖母は避難所には行かず自分の家で暮らした。近所の人は避難所に行っている人が多かった。周りには傾いてしまっている家もあった。祖母の家は全壊だったがそれに比べたらましで住むスペースもあったし、避難所に行くのは嫌だったからだ。家では瀬戸物の破片の掃除、物の整理など片づけをち

ょっとずつした。屋根が壊れていて、もし雨が降ったら雨漏れする状態だったのでまずビニールシートをかぶせることにした。僕の父も手伝ったそうだ。タンスが倒れていたのも自分たちではどうにもできないのでそれも起こしてもらった。すごくありがたく感じた。壁にしても床にしてもたくさん亀裂が入っていた。そのままにはしておけなかった。それを修理してもらうのにかかる費用がすごかったらしい。祖母の家を見てみると、今も多くの地震の傷跡が残っていた。それを見て震災の被害の大きさがわかり、そしてどれだけ人が苦しんだのだろうと感じた。もう震災から 13 年たつけどその日のことがなんとなくわかった気がした。

この震災で祖母は人の温かさを感じたそうだ。隣のおばちゃんが水を持ってきてくれたことに特に感激した。震災の影響でもちろん水は出なかったので、近くにある玉津第二小学校に水をもらいにいかなくてはならなかった。そこでは常に行列ができていたらしい。それに並んで待つのは苦痛だった。ある日「今日も水をもらいにいかないと」と思っているときに親切にも水を分けてくれたのだ。自分の家もしんどいはずなのに…あのうれしさは今でも忘れられないらしい。これが震災で得たものだ。ボランティアの人がパンを家まで持ってきてくれるのも感謝した。僕はこういういざというときの、ちょっとしたやさしさが相手の人に何十倍もの幸福を与えるのだなと思った。こういう気持ちを忘れないようにしたい。

これから…

夢と防災。3 年生になってこんな授業があった。自分の将来の夢と防災とのつながりを見つけこれからどう生きていくか、どんなことをしたいかを考える。それをレポートにして出し、クラスのみんなの前で発表するというものだった。正直、僕は困った。「こんな仕事につきたい！」という職業的な夢を持ったことがなかったからだ。たくさんの仕事を調べてみたけど、興味を持てず目を引くものはなかった。環境防災科の仲間はしっかりとした夢や、目標を持っていた。消防士、警察官、保育士、学校の先生…地域密着の消防士を目指す、先生になって防災や震災のことを教える時間をつくりたいなどみんなの夢は輝いていた。夢に向かってがんばっているのはすごいと思う。そしてなんとなく夢のない自分は取り残されている気がした。でもみんなの発表を聞いて気がついたのは、どんな仕事に就いても防災と関わっていけるということだった。なかには美容師、サッカーのコーチなどもあったけどやっぱりつながりがあった。美容師はお客さんに、サッカーのコーチでも子供たちに防災や震災のことを伝えることができる。自分の行動次第なのだ。

僕はこれから環境防災科の延長線上にある勉強ができる大学に行って、もっと防災のことを考えていきたいと思う。そのなかで自分のやりたい仕事が見つかれば一番いい。でもそうならなくてもそれはそれでいいと考えている。仕事に対するこだわりはない。でもどんな仕事に就いたとしても環境防災科で勉強したことを生かしていきたい。忘れないようにしたい。防災のことを頭において、みんなとはちょっと違った視点を持ち、仕事とのつながりを探していきたい。そしてそれを行動に移したいと思う。

最近、巨大な地震や台風が多い。中国四川大地震は考えられないような数の死者を出してしまった。災害、特に地震はいつ、どこで、誰に降りかかるかわからない。誰もが被災者になりうるのだ。これから生きていくうちに一度は大きな災害の経験をするだろう。そんなときまずは家族とか大切な人を守りたい。これは何よりも大切なことだと思う。家の中の家具の固定や話し合いをしっかりとして備えをしておきたい。これは当たり前のことだ。難しいのは災害が起きたときに咄嗟の正しい判断ができるかどうかだと思う。そのために、普段から「もしこうなったらこうする」というパターンをいくつも考えておきたい。そうすることでいざというときに、冷静になれるはずだ。次に地域を守りたいと思う。防災の知識を生かしてネットワークをつくり、もしものときの地域の防災リーダーになりたい。そして周りの人への思いやりを大切にし、元気を与えたい。こんなことができる人に僕はなりたい。

「語り継ぐ」

「語り継ぐ」もこれで 5 回目を迎えた。この先もずっと続いていくことだろう。そして「語り継ぐ」ことの重要性は増していくだろうと思う。これからは震災を経験していないこどもが多くなる。また、人はあの日のことも時がたつにつれて忘れられていくからだ。もちろん、震災で深く傷ついた人たちを除いてである。あの震災を無駄にしないように、教訓をこれからに生かすために伝えるのだ。僕のよう

に震災のことを覚えていなくてもいい。語り継いでもらったものを語り継ぐ。それでもいい。たくさんの人に震災のことを伝えたり聞いたりして欲しい。それが平和で明るい未来につながると思う。そしてそう信じて僕は震災を語り継いでいきたい。

震災の記憶

神戸市垂水区乙木
栄　瑞希

環境防災科に入学して、防災に関わる機会は数えきれない程増えた。外部講師を招いて講義をして頂くことも、こちらから外部に出かけることも２年半の間でたくさんあった。その中で、震災当時のことを聞かれることがある。子どもの目から見た震災を知りたいのだろうが、私の中で震災の記憶は殆ど消えかかってしまっている。所々断片的になら覚えているのだが、筋道立てて話そうとすると、震災の記憶は頭の中でシャボン玉の様に割れて消えてしまうのだ。思い出したくないという恐怖心は無いから、ただ単に覚えていないだけなのかもしれない。

でも環境防災科で勉強していくうちに、震災を語り継ぐことの大切さを強く思い知った。覚えていないという言葉で逃げたくないと思ったのだ。だから私の記憶の中で、あやふやになっている部分は両親に話を聞いて補い、私自身の言葉で震災を伝えていける様にまとめたのがこの作文だ。やっぱり所々あやふやな部分もあるし、稚拙な文章なのだが、少しだけ私の思い出話を聞いて欲しい。

震災当日、眠っていると何故か突然目が覚めた。天井に吊るされた電気の、オレンジ色の光がやけに眩しくて、じっと眺めていたのを覚えている。時計の読み方はまだわかっていなかったが、随分と朝早い時間に目を覚ましたということはわかった。前日は一つ年上の姉と遅くまで人形で遊んでいて、早く寝なさいと母に怒られるようにして布団に入った。だから、どうしてこんな時間に目を覚ましたんだろうと一生懸命考えた。目覚めたばかりだというのに、頭は随分と冷静だった。

そんなとき、突然グラグラと地面が揺れた。さっきまで見つめていたオレンジ色の光も揺れて、不規則に揺れる光はなかなか恐怖だった。

当時私は２段ベッドの２段目に寝ていたのだが、その日は風邪気味で両親の寝ている布団に寝かされていた。咄嗟に隣にいる母親を見たのだが、母はまだ眠っており私は一人取り残されたような不安な気持ちになった。どうしたらいいのかわからず、かといって母を起こしてもどう説明すればいいのかわからなくて、泣きそうな気持になった。

本格的に泣き出しそうになったとき、母が目を覚ました。助かったと思いながら、私は咄嗟に目を閉じて寝ているフリをした。どうしてそんなことをしたんだろう、と今でも思う。きっと４歳の私は、17歳の私には理解出来ない、私なりの考えや思いを持っていたんだろう。

そんなわけだから、母はベッドに向かって姉の名前を呼びながら私を起こそうと肩を揺さぶった。私はすぐに起き出して母にしがみ付いた。ベッドから姉が降りてくると、その相手を姉に代えた。１つしか年の変わらない姉は私にとって友達のような存在で、不思議な話かもしれないが母より姉が傍にいる方が落ち着くのだ。

家族全員が寝ていた和室に私と姉の２人を置いて、両親は部屋を出て行ってしまった。急に訪れる静寂。いつもなら私が何か喋って、姉がそれに優しく受け答えしてくれるのだが、何を喋ればいいのか全く頭に浮かんでこなかった。１度タイミングを外すと話しかけるきっかけを失ってしまって、しばらく無言のままだった。

しばらくすると、子供部屋から母がスリッパを２つ持って帰ってきた。ピンク色と赤いスリッパはいつも通りの姿でそこにあって、地震の面影なんか１つもなかった。

スリッパを履くとすぐに、私と姉はピアノが置いてある部屋に連れて行かれた。さっきまでの部屋には壁一面を占める大きな洋服箪笥があって、危ないと判断したからだろう。ピアノの部屋にはピアノとワープロ、小さい本棚しかなかったからそのときの家の中で、１番安全だったんだと思う。ピアノの上に並べて置いてあるキティちゃんとミミィちゃんの人形を私達に手渡すと、母はまた部屋を出て行った。部屋を替えたことでいくらか落ち着けた私と姉は、その人形を使って人形劇を始めた。観客は１人もい

ない、寂しい人形劇だった。

外の様子を見に行こうとする両親の後を追って、人形をしっかりと抱きしめたまま廊下に出た。玄関の靴箱の上に置いてあった、ディズニーのジグソーパズルがばらばらになって落ちているのを見て、胸の辺りがちくちく痛んだ。その光景から逃げるように目を逸らすと、次は粉々になったガラスの破片が目に入ってきた。そのときになって、ようやく私は母がスリッパを持ってきた理由を理解した。

靴を履いて家を飛び出し、マンションの廊下に出るとエントランスに通じる廊下の途中で、防火扉が降りていた。重苦しい灰色の防火扉は静かに鎮座していて、強い圧迫感を感じさせた。いつも遊んでいるマンションの広場や管理人室が見えなくなっていて、それらがやけに遠い存在に感じた。

エントランスとは反対の横道からマンションの外に出ると、当たり前だが外は真っ暗だった。私はそれが怖かった。ここまで非日常なことが起こったのだから、外の世界はこの時間には有り得ない明るさだとか、巨大な怪物が街を闊歩しているとか、絵本に出てくるような街に変わっているとか、そういうことを考えていた。でも実際はいつもと変わらない世界だった。それに安心もしたが、どれだけ時間が経ってもこの暗闇が晴れないような、そんな気がしたのだ。

真っ暗で、何がどうなっているのかわからない景色を見続けるのはちょっと辛かった。寒いし、飽きてしまったのだ。マンションの駐車場近くにある公園を見に行こうと思って、繋がれた母の手を外そうとしたが母にダメだと、はっきりと怒鳴られた。だから私は、少し不貞腐れた気分で母の隣に立っていた。私の手を握る母の力は、やけに強かった。

父親がマンションの中を見てくる、と言って隣の家のお父さんと消えてしまうと、母は私と姉を連れて家の中に入った。家はぐちゃぐちゃで、どこに何があるのかわからない状況だった。起きたときには点いていた、あのオレンジ色の灯りもいつのまにか消えてしまっていた。お気に入りの絵本もおもちゃも、永遠に手に入らないどこか遠いところに行ってしまったような気がして、急に寂しくなった。姉と手分けして子ども部屋を片付けていると、父親が帰ってきた。父は、その内水が出なくなると言うと、またマンションの人達の救助に行ってしまった。

母はお風呂の浴槽を洗うと蛇口を捻って、その浴槽に水を貯めた。マンションの屋上に貯水槽があったので、そこの中の水がなくなるまではマンション内に水は行き渡った。私と姉は邪魔をしてはいけない、と悟って窓の外の様子を黙って見ていた。電気の点かない真っ暗な部屋だったので、外が明るくなっていく様子がやけにはっきり見えた。優しい太陽の光が見えたとき、絵本の中だったらもうそろそろ元通りの平和な街に戻るのにな、と頭の奥でぼんやり考えた。

しばらくすると父が言った通り、本当に水が出てこなくなった。蛇口を捻っても捻っても水は出てこなくて、蛇口が取れてしまうんじゃないかと、そんなことを不安に思った。

近所に住んでいる祖母の家に電話をかけると、祖母はすぐに出てくれた。家具が倒れたりはしたが、家や自分は安全だと興奮した様子で話してくれた。いつもの落ち着いて、のんびりした祖母しか知らなかった私はその祖母の様子に怖くなった。祖母の焦ったような声は、そのとき初めて耳にした。

母が家の中を片付けている間、私は自分にも何か出来ることはないかと必死に探していた。慌ただしく動き回る母を見て、何か手伝いたいという思いはあったのだが、まだ幼かった私に出来ることはほとんどなくて、焦りだけが体の中を駆け回っていた。自分に出来ること、ということで姉と 2 人で子供部屋の片付けを始めたのだが、風邪をひいていた私はすぐに母に布団の中に連れて行かれた。

ピアノの部屋に 1 人寝かされていた私は、ひたすら地震の恐怖と風邪のウイルスと闘っていた。ふと寝返りをうつと視界に入ってくる大きなピアノ。黒光りする巨体なそれは、今にも天盤を大きく開けて襲いかかってきそうに見えて、私はとうとう泣き出してしまった。母は今ただでさえ忙しいのだから、邪魔をしてはいけないと自分に言い聞かすと、布団の中に潜り込み必死で嗚咽を殺していた。いきなり起こった地震と、普段より熱く感じる自分の体温が恨めしくてしようがなかった。

そんなとき、1 冊の絵本を手に姉が部屋を訪れてきた。私に気を遣ったのか、姉は泣いていることには一切触れず「絵本読んだろか？」と優しく問いかけてきた。地震で倒れてしまい、ぐちゃぐちゃになった本棚から探してきてくれたのだろうか、それは我が家にたくさんある絵本の中で、私が 1 番好きな絵本だった。いちご畑に住む小さなおばあさんが、1 人で何日もかけて畑中のいちごを赤く塗っていく、そんなお話だ。

姉は布団の横に腰を下ろすと、何度かつまりながらもゆっくりと絵本を読んでくれた。1 回読み終わっても、私が眠りに就くまで何度も。そんな姉の助けもあって大人しく寝ていた私は、その日の夜にはもう熱はほとんど下がっていた。

震災当日は結局、父はほとんど家にいなかった。マンション中を見て回ってきた父は、当時勤めていた垂水区役所に出勤し、そのまま帰ってこなかったのだ。母と姉と私は、余震がいつ来るかもわからない状態だったので、3 人で固まって 1 つの布団に入った。枕もとの、いつもは目覚まし時計が置かれている場所に、3 人分の靴を置いた。もしまた夜中に余震が来ても、ガラスを踏まずに安全に逃げ出せるようにだ。その日は、まだ僅かに残っていた風邪ウイルスのお陰で布団に入ってすぐ眠りに就いた。

止まってしまったライフラインのうち、私の住んでいた地区では比較的早くに電気が回復した。真っ暗な部屋の中で、姉と散乱したおもちゃを拾い集めているといきなり眩しい光が部屋を照らした。地震が発生した日、電気が点くか試しにスイッチを入れてそのままになっていたのだ。真っ暗だった部屋が一気に明るくなった。視界が明るくなると、不思議と心まで明るくなるもので、家の中には次第に笑い声が増えた。

電気が復旧すると、情報を得ようと必然的にテレビを点けている時間が長くなった。小さい画面の中に映される光景は、酷く息苦しかった。両親がテレビを点けると、私は逃げる様に子供部屋に急いだ。そんな私が逃げずに見ていたニュースは、避難所に訪れたボランティアの映像だった。余震が続く神戸の街に、人のために来て人のために行動している彼らが、ヒーローのようにキラキラと輝いて見えた。ボランティアという言葉が理解出来ず、私は彼らのことをひたすらスーパーマンと呼んでいた。

電気が復旧しても水道はまだ止まったままだったので、マンションの住人はマンションのすぐ目の前にある墓地の井戸水を汲みに行っていた。母も汲みに行っていたが、私は水汲みが大嫌いだった。確かに生活していくには水が必要だが、母は私と姉の 2 人を家に残して 1 人で行ってしまっていたからだ。母はたくさんの人間が列を作るので、まだ幼い私や姉は潰されてしまうと考えたのだが、私達にとっては家に取り残される方が、人込みに潰されることよりひどく苦しいことだった。

「行かないで」と服の裾を掴んで縋ってくる私達に母は呆れ顔で、小さなアイスクリームを手渡してくれた。アイスクリームを貰うと私達は笑顔で母を送り出した。現金な子どもである。子供部屋のベランダに出ると、その墓地が一望できた。ベランダに並んで座り、アイスクリームを食べながら私達 2 人は母の姿を見守った。

震災から数日が経つと、水道も無事復旧した。なかなか復旧しなかったのはガスだった。すぐ隣のマンションではもうガスは復旧したらしい、とかそんな話を大人達がしているのを何度か耳にした。私達家族は、神戸から少し離れた地域に住んでいる、母の友人の家までよくお風呂を借りに行った。山道を長い時間かけて車で進むので、乗り物酔いの激しい私には辛かったが、車に乗るのが好きな姉は楽しそうにはしゃいでいた。

しばらくしてガスも無事に復旧すると、震災の存在は段々と小さくなっていった。完璧に忘れたわけではないが、ふとした瞬間に地震があったことを思い出す、そんな存在になってしまったのだ。綺麗に舗装された道路、建て直された住宅。震災の痕跡を思わせるものは、全部綺麗に作り直されて街に溢れ返っている。街の人達はみんな、それが当たり前の様に素通りしていく。街の所々に作られた震災のモニュメントでさえ、すっかり神戸の街に溶け込んでしまった。そんなこともあって、私は時々あれは夢だったんじゃないかと思う。長い長い、悪夢を見ていたんだと。

小学校、中学校と進むにつれ、私の中で震災の記憶は本当に小さくなってしまった。1 月 17 日当日

になって、初めて阪神・淡路大震災のことを思い出す、そんな年もあった。それを少し申し訳なく感じながらも、毎日いろんな情報が溢れているこの社会を、１日１日生きていくことでいっぱいいっぱいだった。

中学校に入ったある日のホームルームで、舞子高校環境防災科の存在を知った。日本で唯一の学科であり、命の大切さ、助け合いのすばらしさなど、震災の教訓に学ぶ「新たな防災教育」を高校の専門学科で展開しようという学科である。という、ホームページかパンフレットを丸暗記したかの様な教師の説明にさえ、私の心は騒いだ。理由などはっきりわからないが、舞子高校の環境防災科に入りたいと、強く思った。

環境防災科の存在を知ったのがきっかけで、頭の奥に追い込まれていた震災当時の記憶が蘇ってきた。頭上で揺れるオレンジ色の灯り、割れたガラスに真っ暗な空。テレビで見たボランティア達の姿は、色褪せず記憶の中でキラキラと輝いていた。ボランティアに憧れを持っていた私は、私も彼らの様にボランティアをしたいと、環境防災科に入って防災について学びたいと思い始め、環境防災科への入学を決めた。

環境防災科に入って、あっという間に時が過ぎた。気付けば私は３年生になっていた。２年半の間で出来る限りボランティアに参加した。募金や子供会のキャンプに、高齢者の温泉ツアー。自分がやりたい方向性も見えてきて、中学校のときにはあんなに不確かだった、将来の夢もしっかりと決まった。この学科に入って、本当にたくさんのことを学んだ。防災や地震のメカニズム、ボランティアや支援の在り方。

それらはすごく大切なことだし、今度は私が伝えていかなければならないことだろう。だが、高校で培った人間性や考え方の方が、もっと大切ではないかと思う。高校に入るまでの私は、今よりもっと小さな世界しか見えてなかったし、嫌だ、嫌いだと思ったものは頑なに遠ざけていた。ところが、今では世界に目を向けることだって出来るし、１つのものをたくさんの見方で捉えようと努力している。考え方が丸くなったのだ。

それは高校に入って出会ったたくさんの人達が影響している。ひまわりおじさんや、阪神淡路高齢者支援ネットワークセンター。環境防災科に入らなければ出会わなかった、存在も知らなかった人達と関わりが持てるようになったのだ。

震災は神戸に多くの被害をもたらした。人の心に決して消えない、深い心の傷を残していった。でも、同時にたくさんの教訓を残していった。ボランティアも防災も、前例がなければなかなか人の間に浸透しない。それは悲しいことでもあるが、人間であるが故仕方ないものだと思う。だが、今確実に人々の間にボランティアや防災といったものは根付いてきている。

私もこの「語り継ぐ」を書くにあたって、両親に震災当時のことを改めて聞かせて貰った。両親に震災のことを聞くのは、初めてだった。それこそが、「語り継ぐ」の本当の意味なんじゃないかと思う。この作文を読んだ後、作文を読んだ誰かが誰かと震災について話し合ってくれたら、私はすごく嬉しく思うだろう。

絆

神戸市須磨区
澤井　翔太

１３年の年月の代償はかなり重いものだと今改めて感じている。あの時の記憶というものが、途切れたフィルムのテープのようになっている。叫び声、助けを呼ぶ声、サイレン音、そして、あの時感じた人々の暖かさ、絆・・・記憶が薄いながらに自分の震災体験をつづっていきたい。

前日

当時はまだ弟も生まれてなく一人っ子で、父と母の３人家族であった。父は JR に勤めていて日勤や非番の繰り返しでこの日も会社に泊まりこみ勤務。母は結婚してからは専業主婦。まだ団地暮らしだったのと、母の社交的な性格もあって、自分が住んでいる地域のほとんどが顔なじみだった。この環境がのちのち絶大的な効果をもたらすとは誰も知らない。この日は日曜日にもかかわらず自分は、熱を急に出していた。母とは次の日の朝には、病院に行く約束をしていた。そしてこの日は母に促されて早々と寝る準備をしていた。当時の寝ていた部屋は、寝室というのには少し狭い部屋で、家族３人で自分を挟むようにして川の字で寝ていた。すぐ横には洋服タンスやおもちゃ、部屋を出ると台所になっていたので食器棚があった。地震が起こる、ともし分かっていたのなら、すぐ寝る部屋を変えていただろう。この状態から分かるように、まだ当時は防災についての意識が低かったと心底思う。そして、次の日の朝が予想もしない事態になることも知らずに、うとうと夢の中に入っていった。

地震到来

この日の朝は何故か早朝に目が覚めた。いつもなら叩き起こされてやっと布団から出てくるのに、この日だけはすんなり起きられた。ごそごそ動くと母に怒られると思い、布団の中でじっとしていた。この行動が、揺れが来たときに怪我なくしのげたのだろう。いろんなことを考えているうちに、朝早くから工事が始まったような音が聞こえてきた。「ゴゴゴゴゴ！！」凄まじい音だった。この音で隣にいた母も起きた。そして考える時間もなく突然、突き上げるような揺れが襲ってきた。兵庫県南部地震（のちの阪神・淡路大震災）が発生したのである。縦に突き上げられたかと思うと、次は激しく横に揺さぶられた。地球自体が激しい痙攣を起こしているかのような揺れに体を任せることしかできなくて、ただ恐怖と不安を感じていた。するとすぐに、母が自分の上に布団と一緒に覆いかぶさってきた。「じっとしとき！」母が言った。何分ぐらい揺れていたのだろうか。自分たちはただ揺れが治まるのを布団の中で祈ることしか出来なかった。そんな祈りも通じないまま、横に置いてある洋服タンスが、足元に置いてあるテレビが、食器棚がタイミングを計ったように次々と倒れてきた。タンスが自分たちの頭めがけて倒れてきた。この瞬間には、恐怖を通り越して、「死」を感じていた。母もそう感じていたに違いない。もう死ぬ！そう思ったときに、タンスは頭と１０センチぐらいの隙間を残して止まった。タンスとタンスがうまい具合に重なり合って、自分と母は命を繋ぐことが出来た。この奇跡を起こしたのは、昨晩自分が偶然にもタンスをこの日だけ頭の方に少し移動させていたからだ。この行動がなければ、しっかりとした空間は出来なかった。子供ながらに、何か嫌なことを無意識に感じていたのだろうか。それは自分でも分からない。数分後、ようやく揺れが治まり自分は母に抱っこされてコタツの下に潜り込んだ。母はそこに来るまでに食器が散乱している床を、裸足で自分を抱えながら移動したらしい。よくケガをしなかったと思う。それだけ避難するのに必死だった。こたつに入ってからも揺れは不規則に起こった。その度に母は、自分に寄り添い安心させてくれた。揺れもずっと強いものばかりで、こたつが移動しないようにこたつの足を掴んでおくのに必死だった。頭上では、こたつの上に食器やいろんなものが落ちて来ていた。「ドンっ。ガシャン。」こんな文字では言い表すのには難しい、激しい音だった。こんなことが自分の中では、何十分も何時間も続いていたかのように感じていた。

緊急避難

本震が治まってから、こたつの中から出てきてすぐに避難の準備を始めた。通帳、現金などとりあえず大事なものをかき集めていた。その中でも余震はたびたび起こった。その度に母と共にこたつに避難した。そして用意できて玄関に向かう途中で、子供ながらにおもちゃなどカゴ２個分のものを自分で持

って、母に持って行くと言った。母は困りながらもこれ以上不安を感じさせないために、また自分の宝物を守ろうとする必死な表情を見て、笑顔で許してくれた。とにかく、おもちゃなど気を紛らわすものが欲しかった。そして玄関を出て１階に行くと、父と同じ職場の人と出くわした。話をすると怪我もなく安心だったが、自分の父が職場にいるといったら、仕事があるから職場まで行くと言って向かってくれた。ちなみに職場は大阪にある。家を出ると向かいの団地が崩落していた。あれは衝撃的だった。潰れた部分からは、生き埋めになった人たちが「助けて！助けて！苦しい・・」と呻いていて、正直気味が悪かった。例えるなら、ゾンビの声みたいである。さらに、さっきからガスの臭いも漂っていた。電柱も折れていて、電線がちぎれていて火花も出ているところもあった。こんな光景はもう生涯ほとんど見ることはないと、また、もう二度と見たくはないと願う。母はこの状況を体験して「自分たちのことで精いっぱいやし、助けるとしてもどうしていいか分からなかった。火が出ていたし、ガスが漏れている音や匂いがあって、すぐに避難しないと危なかった。とにかく必死だった。」と言っている。そんな状況の中で、とりあえず近くの公園が安全そうだったので自分たちは向かった。公園に着くと、地域の人たちが集まっていて、自分の知っている人たちも一応安全そうだったのでほっとした。話を聞くと、タンスが倒れたり、家が崩壊しかけて危機一髪だった、と声をそろえた。自分は母たちが話をしている間も無口で、ただ悲惨な光景を見つめていた。未だ連絡もなく、音信不通な父の安否を心配しながら・・。

安否確認

緊急避難してからどれくらいの時間が経っただろう。もうそろそろ朝日が見えてもいい頃なのに、全くその気配がない。そのかわり永遠と燃え続ける猛火の明かりがあった。こんな状況で、父と同じ職場の人が、すぐに職場に着くことはないと母はうすうす感じていた。そして不安が頂点に達したとき、母は行動に移った。自分たちの近くには JR 鷹取駅がある。そこの鉄道電話を使えば父と連絡が取れるかもしれない。そう思った母は、すぐに駅に向かった。鉄道電話があることを知っていたのは、以前に父が言っていたのを覚えていたのである。行く道の光景はもっとすごいもので、目を背けたくなるような悲惨なものであった。電柱は無残にも折れて家に突き刺さっていたし、家が崩壊して助けを求める人ばかりでまるで地獄絵図であった。そんな地獄道を通り抜けてようやく駅に着いた。駅も被害を受けていたが、奇跡的にも大丈夫そうで、なおかつ駅員もいた。母は駅員に父が JR に勤務していて大阪の宮原総合運転所にいること、まだ連絡もなくて音信不通だ、と伝えると駅員は、母が鉄道電話を頼む前に貸してくれた。母はそんな心優しくて親切な駅員にとても感謝している。もちろん現在も。もし駅員が優しい人ではなかったら、鉄道電話は貸してもらえずにもっと母の不安は増加していただろう。そして駅員に感謝しながら、鉄道電話を使って職場に電話をしてみると、奇跡的に繋がって父と対話することができた。父はこの日は１日中仕事で起きていて、そのおかげで緊急避難をすぐにでき、怪我もなく安全であった。しかし、電車の復旧や機械の点検などいろんな仕事もあるし、京都経由を使わないと帰れない状態であった。だから帰るのは早くても２・３日はかかると言っていた。だから、また連絡すると約束を交わした。その話を聞いて母は不安も感じながらも安心した。母一人ではないことに本当に安心した。もし最悪なことだったら・・と今でも考えたくないと言っている。自分一人では息子をどうして生かしていくか不安で仕方なかったらしい。そして、この情報を公園に帰るなり、自分と親密な関係の地域の人に伝えた。この段階で、自分の家族、友達関係の地域の人の中には亡くなった人も奇跡的にいなくて、みんなで生きている喜びを感じていた。一向に治まらない余震や火に恐怖しながら・・。

一時帰宅

自分たちが置かれている状況が、一時的だが安定したときに、同じ団地に住んでいる人たちと食糧や衣類などの必要なものを取りに帰ろうという話が出てきた。しかし、行く途中で建物の崩壊などの二次被害に巻き添えを受けたら、という恐怖感や不安感はもちろんあった。だが、自分たちの子供から出てくる白い息や表情を見るとそんな気持ちもどっかに行った。そして被災を受けた団地に帰宅し始めた。家までのほんのわずかな距離でも、日ごろ見慣れている道が全く変化していることに改めて痛感した。他愛もない日常を送っていた過去を思い返しながら歩いていた。そして団地に着き、すぐに自分たちの階に行った。玄関を開けると、食器やタンスが倒れていて歩く場所が無いほどだった。母が身支度をしている間に、自分はベランダに出て外の様子を高いところから見てみた。今思うと見ない方がよかった、と思っている。外を見るとまず団地の下にある駐車場が目に飛び込んできた。いつもはきれいな縦列駐車をしているのに、今はまるで車が蛇のように蛇行していた。うねっていた。そして、隣の団地に目を向けると、その団地の１階部分の部屋の畳が、揺れがあったその時間だけ意識があって、慌ただしく避

難したかのように、畳が四方八方に散らかっていた。もうこの時点で自分たちの状況が夢ではなく、現実そのものなんだ、と不思議と受け入れた。母も自分が外を見て唖然としているのを見て、一緒にベランダに出た。母も一瞬びっくりしていたが、「大丈夫やから。」とこんなさりげない言葉を言っていた。母が朝食に用意していたパンや、残っていたお菓子、ジュースなどの飲み物、毛布、貴重品などを持って公園に戻った。地域の人たちも同じようなものを持って来ていた。ふと気付くと、自分たちの頭上を飛行しているヘリコプターや遠くで聞こえるサイレン音などがいつの間にか響いていた。その音がまた、自分や家族などのみんなにもっと、無意識に不安と恐怖を感じさせていた・・。

避難生活の始まり

ようやく朝食を食べることができた。自分はこんな状況でもパンをペロッと食べてしまった。「腹が減っては戦は出来ぬ」という言葉通り、大人たちもいつ食糧が配給されるかわからないので、その配分を考えながら食べていた。食べながら親たちは、自分たちの被災状況や仕事に出ている夫の話を喋ったり聞いたりしながら、自分たちで不安を取り除いていた。自分はどうしたかというと、同じ団地に住んでいて幼稚園も同じのありさちゃんという幼馴染と遊んでいた。地震の話や親の話、時には昨日見たアニメの話など、ごく普通の話をしていた。これをすることで、子供ながらに不安を紛らわしていた。とにかく何かをしていないと不安で仕方なく、どうしていいのか分からなかった。しかし、自分に被災の影響が出てこないわけはなかった。トイレもないのに、ずっとトイレと言って母を困らしていた。この症状は震災が起きてから、約１ヶ月続いた。短いようで長い期間だが、今となって感じるのはこの程度の影響でよかったことだ。ケガもしてなかったが、ただ地震前からの発熱はまだ治まってはいなかった。そして、公園と団地を行き来しているうちに、ある人物が訪れた。祖父と祖母である。祖父たちは当時明石に住んでいたのに、自分たちが住んでいる須磨まで心配して来てくれたのである。電話も通じなかったので、自分はもちろん母も、祖父たちの安否は心配していた状態だったので、心の底から安心した。祖父の「大丈夫やったか？翔太、元気そうやの！」、という言葉には本当に嬉しかった。母も何時間ぶりかの、満面の笑顔をしていたので、それも本当に嬉しかった。久々に心からほっとする時間が出来たことが唯一の救いだった。しばらく祖父たちといろんな話をしていた。地震が起きた瞬間のことや、ここに来るまでの悲惨な光景など。そして祖父は、まだ祖父の家のほうが被害も少ないからこっちに来いと言いだした。こんな嬉しい言葉をかけてもらったが、まだ父が帰って来ないのもあるし、同じ団地の仲間もいるからまだここに残ると母が言った。もうすぐしたら父が帰ってくるかもしれない、という思いがあったに違いない。祖父は最初不安そうな顔をしていたし、心配で仕方なくて内心反対だったと思うが、母の強い思いに負けて笑顔で「分かった」と納得してくれた。そして祖父たちは、家の片付けもあるからと言ってしばらくしてから明石の家に帰っていった。自分たちの元気そうな姿を見られたので満足したのだろう。今となっても本当にあのときの言動には感謝している。本当にありがとう。

地域の絆、そして一時の別れ

祖父が帰宅してからまもなくして、時間は夕方になろうとしていた。もうすぐ被災最初の恐怖の夜が来ようとしている。誰の顔を見てもその不安が、表情を通じてひしひしと伝わってくる。自分たちはどこで夜を過ごすのかがとても気になっていた。家は安心して寝られる状態でもない。かといって公園で寝るのにも人が多すぎて十分な寝るスペースがなく、また寒さに耐えられるか分からない状態であった。そんな中で一番被害が少なく、みんなが安心して寝られる場所にやっとたどり着いた。その場所は同じ団地の、父と同じ職場の人の部屋である。そこに同じ団地の人全員、つまり簡単に数えても１５人ぐらい集まっていたと思う。そこではみんな輪になって「これからみんなで協力して頑張っていこう、みんないるから大丈夫だ」などの励ましや決意の言葉を、互いに言い合って不安にならないように、また勇気付けるようにしていた。このときの絆は、今回の震災だけでは到底築き上げることが出来ないぐらいのとても大きく、頼りがいのあるものだった。そして晩御飯の準備をしなければいけなかったが、水も食料も昼に家から持ってきたものだけで、まだ水道もガスも復旧していない。電気も復旧活動をしている真っ最中で、まだ時間がかかりそうだった。そんな状況でもこの絆があったので、みんなが協力して明かりの代わりとなるものを見つけてくる人、水を確保する人など役割分担して効率的に行っていた。誰一人も文句を言わずに、逆に自分から進んで協力しようとしていた。そのおかげで、そんなに時間もかからずに用意することが出来た。この日の夕飯はみんなの食料を合わせたもので自分たちにとっては豪華なものであった。みんなと輪になりながら食べる晩御飯は、とても楽しかった。絶えず笑いがあった。ひと時の幸せを感じられた。そして、こんな楽しい時間もあっという間に終わって寝る準備を始め

た。それぞれの布団を持ってきて、みんなでかたまるようにして布団を敷いた。布団の敷き方も、できるだけみんなかたまるように、そして子供を挟むような形にして安心できそうな形にしていた。そんなことをしていると、ある人物が訪れてきた。母の兄である。兄は祖父の家のもう少し北側に行ったところに住んでいて、被害も神戸に比べると少なく、電気も復旧していた。それに母や自分のことも気にしていたのでわざわざ迎えに来てくれたのである。しかし母は祖父の誘いも断っていたので、もちろん断るつもりだった。そして母が言おうとした時、周りのみんながそのことも聞いていたし、自分の熱のこともあったので「うちらのことは大丈夫やし、せっかく迎えに来てくれてんから行ってきっ！また落ち着いたら戻ってきたらいいやん。逆に断ったら、うちら怒るで(笑)。さあ、行ってらっしゃい！！」、と厳しいようで中身はとても暖かく、優しい言葉を自分たちに言ってくれた。しかもみんな口をそろえて・・。母は感激して泣いていた。申し訳ない気持ちと、感謝の気持ちが溢れ出して。そして母は最後のお願いとして、父が帰ってきたらこのことを伝えてほしいと、それと息子の熱が下がったらまた戻ってくるから元気にいることを、と言っていた。いつの間にか、みんなも震えた声になっていた。こんな絆が他にあるだろうか。震災のおかげでという言葉はおかしいかもしれないが、こんなことがなければみんなの絆の強さを感じることが出来なかったし、より一層自分たちの絆を深められたと思う。これが最初に言っていた、母の社交的な性格なおかげで日々深めてきた地域との絆の絶大的な効果である。もし、こんな大きくて強い絆がなければ自分たちはここまで心にゆとりもなかったし、こんな辛い体験でも笑みや相手の立場を考えて行動することが出来なかっただろう。自分たちはこの絆に助けられたのである。

その後

母の兄の家に行ってからは公園の時と比べると、そんなに苦労はしなかった。電気も早いうちに回復していたし、家の被害も団地よりも少なかった。唯一苦労したのは、水の確保と在庫が言うほど多くない食糧であった。水を確保するためには、遠いところまでポリタンクやペットボトルを持って行かなければならなくて、時には車を使わなければならないほどだった。さらに、自分の発熱のこともあったし、犬が２匹と亀などのペットの世話のこともあって大変だった。ペットフードが無くなってしまったらどこで手に入れたらいいのかわからない状態でもあったので、とても困った。でも、こんなに辛い時にでも兄の娘、つまり自分の姉貴２人が、忙しい中でも自分の相手をしてくれたし、世話もしてくれたので気を紛らわすことができた。また、ペットと遊ぶことで気持ちのゆとりを作ることもできたし、そうすることで親の邪魔にならないようにもしていたので、母も兄も助かったと言っている。こんな生活を結果的には２、３日したら、家の片付けもあったし、地域のみんなのことも気にかけていたので、団地に行ったり来たりを繰り返すようになっていた。なかなか帰って来られなかった父も、一時帰宅で地震発生から３日後にようやく自宅に帰ってくることができた。久しぶりに見る父は、最初はとても疲れていたが、家族を見るとあっという間にいつもよりも満面の笑みを見せていた。それを見て自分も母も、ほっとして笑顔を見せていた。そして、父がいる時には力仕事が捗ったし、何よりも父の存在が自分たちの心のゆとりをもたらしてくれたことが大きかった。父は２日後には仕事で大阪に帰らなければならなかったが、また帰ってこられることを聞いたので安心して仕事に送ることが出来た。そして、いつ地元に戻っても、地域の人たちは文句を言わずに優しくて、どちらかというと自分たちを気にかけていてくれていた。本当にこの時も、そして今も地域の繋がりというものの大切さに感謝している。避難生活はとても長かったが、みんなで協力して共に助け合うということを、直接肉体や精神的に体験して学べたことが一番の収穫だった、と自分も思うし、もちろん母も父も兄も口をそろえて言っている。

現在

被災体験もこのようなことしか覚えていない。しかも地震当日の記憶の方が、そのあとの被災体験よりも多く記憶に残っている。普通このような最悪で、非日常的な体験などは強く残っているものだが、年齢ということだけが記憶の量に影響しているだけではなくて、被災当日の記憶のインパクトが強すぎたために、記憶に影響したのかもしれない。でも、地震当日のことは、部分部分ではあるが自分なりにはよく覚えている。その穴の空いた記憶の部分は、現在、環境防災科に入学してから少しずつ埋めていっている。ただ埋めるだけではなくて、専門家の豊富な知識や体験、そして自分の警察官という夢というものと絡ませながら記憶を限界まで広げていっている。自分が思っている以上に、防災は奥が深くて勉強するのはもちろん伝えていくのは大変である。でも、いつかは警察という職業について、交通や犯罪面だけではなく、防災に関しても阪神・淡路大震災のことも伝えていける警察官を目指していきたい。

道と記憶

神戸市垂水区旭が丘
柴田　塁斗

私はよく遊んで、よく食べて、好き嫌いの多い、泣き虫な少年だった。毎日兄と近所のお姉ちゃんやお兄ちゃん、兄の友達などと、公園でかくれんぼやサッカー、ゲームをしていた。そのころ私はドジで、遊んでいる途中によく怪我をしてしまい、そのたびに近所のお姉ちゃんが怪我の部分にそこら辺に自生していたアロエを塗ってくれたり、泣いている私を慰めながら、ちっちゃい手で頭を撫でていてくれたりしたことを今でもよく覚えている。

たしか１月１６日も今まで通りに遊んで怪我をして泣いてこれまたいつも通り近所のお姉ちゃんに慰められていた。ただ違うのは、月が赤かったことだ。今思えば、血液を吸ったみたいに妖しく輝いていたのかもしれない。ちっちゃいころの私はそんなことも考えもせず、空にぽつんと置かれている月が大好きだったのでとてもはしゃいでいた。そして、この日も家に帰って、いつも通り１日が終わった。私はこんな毎日が当たり前のように続いていることに何一つ疑問を持たずに寝ていたのだろう。

１月１７日５時４６分
ﾄﾞﾄﾞﾄﾞ……　　ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオオォォォォォ！！！！！！

今まで生きてきた、当たり前の毎日に突然の終りがやってきた。その出来事は本当にあっという間だった。私は熟睡していたので地震が起きてもしばらくは起きられず、目を覚まして１番に目に入ってきたものは、天井に吊らされていた電灯がまるで蛙のように跳ねまわっている状況だった。こんな大きな地震なんてこの時が生まれて初めての体験だった。揺れを体感した時間は、実際はもっと短かったかもしれないが、１分以上は揺れているような感覚があった。しばらくして揺れが収まってからあたりを見回してみると兄と母親は居たのだが、父親がいなかった。あわてて母親たちと寝室を出て父親を探しに行こうとすると、寝室をでてすぐの居間にいたのですぐに見つかった。地震が起きた時は会社から持ち帰ってきた仕事をしていたらしい。怪我らしいものと言えば地震の揺れの際に頭をぶつけて少したんこぶが出来ているだけで済んだ。これを書いている今になって、揺れている最中の父親に関する記憶がほとんどないことに気がついた。他の人からよく聞いた中には、父親はタンスが倒れてくるのを押さえていたなどがあったが、揺れの最中にあったことと言えば母親に起こされたぐらいだ。あとは３人とも特に身を守るような行動はとらずにただこの揺れがいつになったら止まるのかをまっていた。むしろ自分の体験の場合、居間で父親を見つけたということから父親が一番危険な場所にいたのだと気づいた。当時住んでいた家は神戸市の市営住宅で、キッチン・ダイニング・居間・少し広めの寝室用一部屋の計１LDK に住んでいた。寝室にはタンスがあったが、押入れがあり大半はそれで事足りていたので、サイズも小さく倒れてきても殺傷能力がないほどの距離にあった。当時寝室にいた人間はある程度タンスと反対側の壁に寄っていて、怪我らしい怪我などしなくて済んだ。しかし、居間にいた父親は違う。居間にはいろいろなものが置いてあり、金具で固定されていない TV や大きな家具、居間とダイニングは繋がっており、食器棚も居間寄りの場所に置いてあった。そんな中でも父親がたんこぶ一つで済んだのは本当に運が良かったと思う。

家族も全員無事で、ある程度落ち着いてから家の中を見回してみた。食器棚の中身はほとんど地面にぶちまけられており、ガラス片、ナイフやフォークが散らばっていたので、足の踏み場もないような状況だった。それを見た時の一番の印象はライオンだ。なぜそんな風に思ったのかは今でもわからないが、小さいころの自分にとってそれはライオンが暴れまわった跡のようにみえた。おそらくライオンが一番危険なイメージでも頭の中にあったのだろう。そんなかなり危険になる場所があったが、それ以外の場所には特に被害はなく、強いて言えば網戸が外れて下に落ちていたぐらいだった。

家の被害などの確認が終わり、次にやれることはいつでも外に出られるようにする準備だ。震災が起きたのは１月で垂水の冬は意外と寒くて、そんな中をパジャマ１丁で出てしまうと流石に風邪をこじらせてしまう。地震があっても助かった身体だ、そんな不備がないようにパジャマからいつも幼稚園に行く時の服に着替えた。確か、それはあの時のお気に入りで、青地のトレーナーで真ん中に３匹の豚の満面の笑みがプリントされたやつだ。いつもはそれを着るだけで楽しかったのだが、さすがに震災の後ではトレーナーの豚のように笑っていられる状況ではなかった。今みたいに防災について勉強しているはずもなく、これからどうなるかもわからない。まるで、パラレルワールドに放り込まれた気分だ。

着替え終わったあとに、そういや電気がついていないことに気がついた。目にみえる被害ばっかりに気が散っていたのか、未明だったので暗がりに目が慣れてしまっていたのかわからないが、寝るときはついていたので、母親はブレーカーが落ちたのじゃないかと確認をしに行った。ブレーカーの場所が見当たらないのか、時間が結構かかっており、その間は兄と２人でただぼーっとしていた。このままぼーっとしていてもよかったのだが、急にのどが渇いてきた。そういや起きてからまだ何も口にふくんでいない。ダイニングはまだガラス片が散らばっていたので危険だったが、スリッパを履いて行ったら何とかなった。ダイニングに行くと母親がブレーカーの前で悪戦苦闘していた。父親の姿が見当たらないので聞いてみたら、どうやら外の状態を見に行ったそうだ。そして水を飲むために水道の蛇口をひねってみたが水が出ない。その時に母親がこちらに来たが、電気はブレーカーを上げてもつかなかったらしい。私たちが母親に水が出ないことを伝えると、焦ってコンロのほうに行って火がつくかを試しだした。しばらくして溜息をつきながらこちらに戻ってくるのを見たところ、どうやらガスも止まってしまったらしい。これで、電気・水道・ガス、全てのライフラインが止まってしまった。私たちはただ水が飲めなかったのでのどが渇いて駄々をこねていただけだが、母親にとっては絶望的だっただろう。震災が起こる前は、垂水でこんな大きな地震なんか起こるはずがない、と多くの人間が思っていたので今みたいに非常用持ち出し袋どころか、緊急用の水すら確保していない。あるとすれば、スーパーで残っていた商品や冷蔵庫の中の日常で使うための買い置きぐらいだろう。幼稚園の私と小学校低学年ぐらいだった兄は、そんなに我慢強くなかったので、やれ「喉が渇いた」、やれ「風呂に入りたい」などとわがままを言って給水車や、県外から水が届くまでのあいだ、両親にたくさんの迷惑をかけてしまった。

しばらくして、ある程度日が昇ってきて辺りが見えるようになった頃で、近所の人や家の外の状況が気になったので、母親を含めた私たち３人は外に出た。外に出てみると私たちが住んでいる棟の壁に大きなヒビが走っていた。それを見て私はかなり驚いた。私たちが住んでいた団地は５・６階ぐらいまであり、身長の低かった私にとってはかなり高いものに見える。当時見ていたロボットアニメの主人公は、この団地より小さいのに、戦いの中で敵の火炎放射やビーム攻撃をくらっても傷なんかほとんどつかなかった。それなのに、こんな大きな団地が１分にも満たない揺れでヒビが走ったのだ。実際はそんなに大したヒビじゃなかったのだが、情報なんかもほとんど持ってなく、何も知らなかった私にとってはアニメの主人公より傷ついた団地を見たときが、震災の中で１番怖かったのを覚えている。その後、歩きまわって他の団地などを見ても、倒壊しているものはなくヒビが走っているぐらいだった。いつも遊んでいる公園も無事だった。しばらく歩いた。父親は揺れが収まってすぐに外の見回りに出たのだが、どこに行ったか全然わからない。すると、近所のおばちゃんに出会った。その人にはよく晩御飯をごちそうしてもらったり、遊んでもらったりしていた。おばちゃんも大きな地震にビックリして外を見に来たそうだ。家の中は食器が割れたり、タンスが倒れてきたりしたそうだが、おばちゃんも、その夫のおじさんにもケガはなかった。おばちゃんとは母親がしばらく話をしてから別れたが、その別れ際に「あんたら、怪我せんくて良かったな。」と言われたのはなぜだかとても嬉しかった。おばちゃんの安否は確認できたが、まだ他の人がどうなのか全然分らないままだ。この団地には私の友達や、近所のお姉ちゃん、兄の親友など大切な人たちがたくさんいる。早く会ってしまいたい。会って安心してしまいたいと思った。その後、まだ友達には会えなかったがちょうど父親が帰ってきた。こんなにも遅かった理由は近くに住んでいる母親側の祖父母の安否確認をしに行っていたそうだ。父親によると祖父母・ぺこじぃ、ぺこばぁは無事だったが、家自体は瓦がすべて落ちてしまっていたらしい。ぺこじぃ、ぺこばぁの「ぺこ」の部分は祖父母が私の両親からプレゼントされたマルチーズの名前だ。私は祖父母の本名を知らないので、私が生まれてから祖父母が亡くなるまでずっとぺこじぃ、ぺこばぁと呼んでいた。もちろん、マルチーズのペコも無事だった。ここ以外の町の状況を父親に聞いてみた。ここら辺はそれほどの被害は出ていなかったらしい。地盤がしっかりしていたのかここの震度が小さかったのかは知らないが、築３０年近くになる祖父母の家も一部分は壊れても全て建て替えなければいけないほどの被害はなかったそうだ。

家族が全員揃ったので、しばらく歩いたら人だかりができている場所があった。誰かが死んだとかではなく、自然と集まったらしい。その中にいつも遊んでいる友達や近所のおねぇちゃんもいた。ようやく皆と会うことができて嬉しかったのだが、小さい子の中には初めての地震で怖がり泣いている子もいた。まだ何も知らないちっちゃい子どもにとって地震は本当に怖かっただろう。本当に大きな揺れだったのだ。中にはもう皆死んじゃうと思った子もいるかもしれない。こういう自分よりちっちゃい子が泣いている光景を見てしまうと、「この子らよりお兄ちゃんなんだから自分が泣いている暇はない」と思った。その場にいた子どもたちが全員集まると、よく遊んでいる子や兄の友達もいた。泣いている子もいたが全員怪我もなく健康そのものだった。皆に会うことが出来て、ようやく日常に戻ったような感じ

がした。こういう状態の中で心の支えになる友達は本当に大事だと思う。
　子どもたちで集まっているとき、大人たちは家の状況や被害について話し合っていた。大人たちによるとここら辺のライフラインは三つとも止まってしまっているらしい。電気が止まって、テレビがつかない以上、外からの情報源はラジオだけだ。垂水区はそこまでの被害はなかったが、他の区は相当被害がでているらしい。
　近所の集まりを解散してから１度自宅に戻った。その後は特にやることはなかった。いや、なかったというよりこんな初めての状況で、何から手をつけたらいいか全然わからなかった。実際には割れた食器の後片付けや父親の会社のこと、水道が止まったので代わりの水の手配などあったはずだ。数時間後にやっと動き出すことが出来た。父親は会社に連絡をいれ、母親は家の片づけをし、ある程度終わったら、今度は家族全員でぺこじぃ・ぺこばぁの家に行った。父親の言うとおり屋根の瓦が落ちて散乱していた。こちらの家の中はもうあらかた片付いていた。ちょっと前にぺこじぃが食料やミネラルウォーターなどをまとめ買いしていたのでこの日はこっちの家で夕食をとることになった。この日は寒かったのでカセットコンロで鍋をした。ぺこじぃは前日から材料を買っていたので食べる量とかと気にせず食べることが出来た。昼はあまり食べることができなかったので幸せな気分のまま自宅に帰って床に就くことが出来た。ようやく私の震災１日目が終わった。

　震災２日目の朝、震災があったことなど微塵も感じさせないほどいつも通りの朝だった。ライフラインがまだ止まったままだったので歯を磨いたり、顔を洗ったりすることが出来ない以外は。今日は家族で話し合った結果食糧確保を優先して行動することになった。当時住んでいた旭が丘の近くにはスーパーがいくつかあったのでそこを回ってみることになった。スーパーに行ってみると、開店前から多くの人だかりが出来ていた。その人らも私と私の父親と同じで食糧を求めてきたのだろう。いざ店が開くと客が洪水のようになだれ込んでいった。これだけ書くとその場がかなり荒れているように聞こえるがもみ合いになるようなことはなく、整然たる洪水だったらしい。他の場所ではどんなことが起こっていたかは分らないが、こんな非日常の中では略奪とかが起きそうなのに、私たちが行ったスーパーではそれが見受けられなかった。中には私たちのように子供連れで買い物に来ているところもいくつかあったそうだ。そんな中で私たちは菓子パンや飲料水の他、即席で食べられる物を多く買い込んだ。こういう種類のものを多く買い込んだ理由は、ライフラインが止まっているので、電機やガスを使う料理をすることが出来ないからだ。家にはカセットコンロはあったが、ガスがどれだけ持つかもわからない。そんな中で特に手を加えることもせずに食べられるものはたいへん重宝した。
　買い物から帰ってみると給水車が来ていた。これでようやく水の問題を解決することが出来た。いくら非日常とはいえ、いつまでもミネラルウォーターばっかり買っていると財布が空になってしまう。途中まで買い物に行かなかった兄と母親が水汲みに行っていたのだが、両親に用事が出来たので兄弟で水汲みに行くことになった。私は２リットルのペットボトル１つだったが、兄はかなり頑張っていつも灯油を入れているようなポリタンクを運んでいた。水汲みの帰り道にいつも遊んでいる近所のおねぇちゃんに遭遇した。私たちとは出会わなかったが、彼女も水汲みに行っていたらしい。しばらく喋った後におねぇちゃんは「泣かんくてえらいなぁ」と言いながら頭を撫でてくれた。彼女の眼には、私はいつも泣いているように映っているらしい。それでも単純にいつも慰められているおねぇちゃんに褒められたことが嬉しかったことを覚えている。そして久々におねぇちゃんが撫でてくれた手はとても温かかった。おねぇちゃんと別れて家に帰ると両親たちももう帰ってきていた。冬でほとんど汗をかかないこともあってこの二日間風呂に入っていなかった。それでも今は１月の冬真っ只中である。まだまだ気にするほどではなかった。この日は家の中の片づけもある程度済み、夕食は今朝スーパーで買った缶詰やパンを食べた。今日１日スーパーに買い物を行ったり、水を汲みに行ったりして良く身体を動かしていたのでとても美味しく感じた。夕食を食べ終わった後はすぐに寝てしまった。これで震災２日が終わった。

　震災から１週間の時間がたった。震災２日目からはほぼ同じような日の繰り返しだった。朝起きると前日から残ってあった水で軽い身支度をして朝食をとってから、給水車が来ていたら水を汲みに行って浴槽などに貯めておく。父親は会社関係のことで家を空けたり、母親は近所の主婦などと井戸端会議をしたり買い物に行ったりしていた。私や兄などは特に動き回ることがなかったので近所の友達と遊んでいた。こういう時にいつも遊んでいた公園が無事だったのはとても嬉しかった。みんなでジャングルジムに登ったり、『鬼ごっこ』や『どろけい』、『だるまさんが転んだ』などをしたりして一日を過ごしていた。
　そんなある日、父親の提案で父親の同僚の家に風呂を借りに行くことになった。その人の家は震災の被害は受けていなかったらしい。そういやここ最近は風呂にはまともに入っていなかった。私は湯船に

つかるのが好きだったのでとてもはしゃいでいたそうだ。
　私たちはその翌日の夕方に出発しその人の家に向かった。出発してからはかなり長い間車に乗っていた。その人の家がどこだかは忘れてしまったが、出発したころは空があかね色だったのだが、到着したころには真っ暗になっていたのでかなり遠くまで来たらしい。家に着いてから一番初めにしたことはまず風呂につかることだった。久々に湯船につかったのだがやっぱり気持ちよかった。シャワーで済ます感じとはまた違う、ゆったりとした感じが私の身体を包んでいた。風呂からあがると久々の母の手料理がテーブルに並んでいた。その人は独身だったので母親が料理をしたらしい。やはり缶詰やそこら辺のスーパーの惣菜とは味が全然違った。私が生まれて離乳食から普通の食事が出来るようになってからずっと食べ続けてきた味付けである。震災から今まで料理を作ることがなかったので缶詰や出来合いのもので済ませていたので、久々に母親の手料理を食べるととても心が落ち着いた。夕食が終わってから親はその人と会話をしていたのだが、ここは大人の家なので子供が暇つぶしを出来るようなものがなかったので私と兄はつまらなさそうにしていた。するとその人がこちらに来た。なぜ会話を中断してこちらに来たのか私たちにはわからなかったが、手に持っていたものを見て直ぐに理由がわかった。それはその人の手にスーパーファミコンがあったからだ。スーパーファミコンは当時子供たちにとても流行っていた。私たちもクリスマスに買ってもらったのだが、震災があってからは全然出来なかったのでとても嬉しかった。そのゲームを持っているということはどうやらその人はゲーマーだったらしい。それからは帰るまでの間マリオカートをしていた。たしかバルーンを割るような内容のものをその人も交えながらやっていた。時間も遅くなり私たちが帰るともう日付が変わるぐらいの時間になっていた。私はその人の家でよく遊んだので帰りはずっと寝ていたのだが、まだまだ疲れは取れなかったので家に着いてからもすぐに寝てしまった。
　その人の家から帰ってきてからは順調に家の中が元に戻って行った。ライフラインは回復して風呂にも入れるようになり、ぺこじぃたちの家の屋根も修復されたりして、徐々に私の周りから震災の色が消えていった。それからの１０年近くで幼稚園を卒園し、小学校・中学校と年を経て行く中で私はこのまま震災のことを忘れてしまうのではないかと思い、とても怖くなった。事実、中学校の頃には半分近くの震災の記憶を忘れてしまっていた。そんな時に阪神・淡路大震災を教訓として設立された環境防災科を知った。

　そして現在、その環境防災科で私は無事に三年生になることができ、今自分の体験した記録を書きだしている。これを書き出していることで私は振り返ることが出来るし、紙面として環境防災科で出ている『語り継ぐ』に刻み込まれているので、私の体験をみんなに知ってもらうことができる。こういうことをしているのは、ただこの科を受けた時に運が良かったからなのかは分らないが、この科で経験してきたことはとても大切で重く、これから生きていく中でとても関係していると思う。事実、今私はここで学んだ災害の知識を生かせる職業を生業にしたいと考えている。将来私は防災を広めていくような職業に就けているかは全くわからないが、ここで学んだ３年間のことは決して忘れないだろう。そう感じられる理由はまだ卒業していない今、こうして宣言出来るほどここで得たものは重いものだからだ。これから震災が何なのかを知らない人たちや知識としてしか知らない人たちがいっぱい増えていくと思う。そんな中で、ここで学んだことを生かして、私は私の周りを変えていきたい。

私の家族

神戸市長田区北町
鈴木　有人

はじめに

阪神・淡路大震災が起きて１３年。多くの人は震災のことを忘れつつある。また震災の被害を受けた人は、まだ心に傷が残っているかもしれない。私たちの家族は大きい被害を受けてない。でも心の奥底では震災に対する恐怖を覚えているはずだ。

今は父、母、私、妹、弟の５人家族で、当時住んでいたところではなく、新しく建てた１軒家に住んでいる。私たちの家族は「この家に居たら大丈夫」と思っている。この考えは危ないので、私が意識改善しないといけないと思う。

家族の様子を見ていたら、本当に阪神・淡路大震災のことが風化しつつあると思う。あの震災は忘れてはいけない。

震災前日

当時は父、母、私、妹の４人家族で１４階建ての私営住宅の４階に住んでいた。父は普通のサラリーマンで母は専業主婦だった。私は幼稚園の年少で妹はまだ１歳だったと思う。部屋は全部で３部屋あり、その内の２部屋をいつも寝るときに使っていた。使っていなかった部屋は子供部屋で、祖父母からもらった電子ピアノ以外大きいものはとくになにもなかった。

父は私が幼稚園に入ったころから１人で１部屋を使って寝ていた。父の部屋にはテレビがあっただけで他に危ないものはなにもなかったと思う。理由は、遅くまでテレビを見るので私と妹は「早く寝なさい」と母にいつも言われていたので、父が寝ている隣の部屋に３人で寝ていた。隣と言っても私たちと父の寝ている部屋は襖で仕切られていただけで、父と私たちの部屋の間に壁はなかった。私たちが寝ていた部屋には大きなタンスが２つあり、１つはクローゼットで、もう１つは父と母の服や大切なものが入っていた。防災対策はしていなく、地震がくるとすぐに倒れてしまいそうな感じだった。そのほかに母が使う鏡台があった。私たちは横においてあるタンスと前においてあるタンスにはさまれるように寝ていたので、とても危ない状況だった。この日はいつも遅くまで起きている父がすぐに寝たのを覚えている。私たちの家庭では、いつも通りの生活をしていてなんの不自由もなかった。もちろんこのあとあの震災がくることなど誰も予想していなかっただろう。もししていたとしても地震の知識がない父や母、もちろん私や妹はなにもできていなかっただろう。この頃は家に懐中電灯すらなかったと思う。

阪神・淡路大震災

午前５時４６分、私は寝ていた。ゴゴゴゴゴゴ…という地鳴りで父と母が目を覚ました。母の話では熟睡していたが、地鳴りがすごくて目を覚ましたと言っていた。私は阪神・淡路大震災の揺れを覚えていない。地震の揺れを覚えていないのは地震の揺れがおさまってから起きたからだと思う。でもあの時の様子は覚えている。

揺れがおさまると父が飛び起きた。父の部屋は、テレビがテレビ台から落ちただけで被害はなにもなかった。母はタンスが倒れてきたのを見て動けない状態だった。それを見て父はすぐに家を出ることを決めた。父は私を、母は妹を布団と一緒に抱きかかえて階段で逃げようとした。私の家族以外にもたくさんの人が自分たちの家から出て逃げようとしていた。「この住宅ってこんなに人おったんや」とそれを見て思った。小さかったから事の重大さがわかっていなかったのだと思う。その時、たくさんの子供の悲鳴や鳴き声を聞いたのを覚えている。階段をおりる途中、父に力が入ったのか、抱きかかえられているときとても痛かった。私たちが住んでいた部屋は階段が近く、４階だったので、すぐに下におりることができた。私が住んでいた住宅には１階に広場があったので、ほかの人もそこに集まっていた。ある部屋から火災が発生していた。でも私たちが下におりたときはもうすでに消火活動が始まっていた。この住宅の隣が消防署なので、そこから来たのだと思う。この日は車の中で寝ていたのを覚えている。

私の父方の祖母は火災のひどかった太田町の近くに住んでいた。当時祖母の家には祖父、祖母、父の弟と妹がいて、２階建ての家に住んでいた。震災の時は父の弟は仕事で家にはいなかった。祖母の家は幸い火災にはならなかったが、家は半壊した。私の祖母は朝早くから新聞配達をしているので、震災は

外で体験している。
　祖母はいつも通り新聞配達をしていた。ただ、空の色は少し赤く染まっていた。細い路地を出ようとしたとき、ゴゴゴゴゴゴ…という地鳴りとともに下から上へ突き上げるような揺れがきた。その時祖母はすぐ近くの電柱につかまったと言う。その後に横に揺れる大きな地震がきた。電柱につかまっていた祖母は、「まるで地面にたたきつけられるぐらい揺れた」と言うほど大きな揺れだった。あまりにも揺れが大きすぎたのでつかまることが困難になった祖母はなんとか地面にしゃがんだ。地震の揺れのほかにドドドドドド…という音が聞こえた。近くにあった家の木造倉庫が崩れたのだった。その倉庫の屋根が祖母の足の上に落ちた。幸い大きなケガにはならず、屋根も重くはなかったので、屋根をどけると自分の足で家に帰ることができた。当時祖母の家の玄関のドアは引き戸だったので、地震が起こったことで斜めに傾いてドアが開かない状態だった。しかたなくドアを外して家の中に入ると、壁がはがれ、家の屋根は半分落ち、階段が所々抜け、家具が倒れていた。このときストーブをつけていて、その上にヤカンがおいてあったが地震が起きたためにそのストーブが倒れてしまった。倒れたり揺れたりすると自動的に電源が切れるストーブだったので火災にはならなかった。が、ストーブの上にのっていたヤカンが祖父の大事な書類を台無しにした。父の妹は２階で寝ていたので、祖母が安否を確認しようと１階から名前を呼んだ。その時父の妹は、「階段がない！」と２階から叫んだ。明るくなるにつれて階段が見えるようになってきたので、階段があるところだけ通っておりてきた。祖母の周りの家は、古い家が多かった。家は半壊状態だったが、なんとか家の中で生活できる状態だった。だが、北のほうから火災が発生した。はじめはその地域だけだったけど、風向きが変わり、祖母の家がある方向に少しずつ火災が広がってきた。それを見た祖父母はすぐに家を離れることを決意した。その日は車の中で過ごしたと言っていた。
　祖母の話では、当時通っていた山陽電車の線路より上はあまり揺れなかったと言っていた。だから祖母は、「線路より上は極楽で下は地獄や」と言っていた。

震災がすぎて

　私たちの家族は、妹以外住んでいる家の片づけをした。まず、階段で自分たちの階まであがった。部屋に入るととても悲惨な光景が広がっていた。食器棚は倒れていて、床には皿が割れていて裸足で歩ける状態じゃなかった。このときはスリッパがなかったので、土足で家にあがった。自分の家に土足であがる感覚はとても気持ち悪かった。私たちが寝ていた部屋には大きなタンスが２つあった。そのタンスどうしがお互いに倒れてきたおかげで私たちはタンスの下敷きにならずに済んだ。２つとも倒れてきたのでお互いにタンスを支えあっていたのだった。タンスどうしが支えあっていたという証拠にその時の傷がタンスに残っている。片づけをしている最中に何度か余震にあった。その時は余震が来るたびに泣いていた。私は小さかったので、ゴミをゴミ捨て場まで運ぶ仕事をやらされた。ゴミ捨て場は、私たちの家の反対側にある階段を下りたところにある。そのため、いつもは廊下を歩いてその階段まで行っていた。でも私の足は途中で止まった。曲がり道の角の部分がなく、下まで突き抜けていた。その部分は、ちょうどエレベータのある部分の前の道だったので、自転車で通ることが出来なかった。突き抜けていた範囲はそれほど広くはないけど、当時の私にとってとても怖く感じた。いつ修理したかはわからないが、私より上の階に住んでいる友達の家に遊びに行ったときはエレベータを使わず、階段で行っていた。自分の階にできたその隙間はすぐに慣れることができたが、階が高ければ高いほど怖く感じたのを覚えている。
　昼が過ぎると私は父に連れられ散歩に行った。住宅の周りを歩いただけなのに周りの様子は本当にひどかった。道路はひび割れガタガタになっていた。それなのに車が走っていたので、ひび割れたところに車が挟まって事故が起こるのではないかと思った。遠くのほうを眺めると建物が２軒燃えているのが見えた。その時自分が住んでいる住宅以外の建物が燃えているのを初めて見た。
　私たちは車の中で２、３日過ごした。その間はずっと部屋の片づけをしていたが、家のことは私と母に任せ、父は人を助けに行っていた。父が出かけてからあまり時間が経たないうちに父は帰ってきた。父は、「人の力じゃ、がれきをどけるのは無理や」と言っていた。
　震災から何日かすぎてから救援物資がとどくようになった。最初に救援物資が届いた朝、目が覚めると私は車の中で１人だった。私より小さい妹もいない。どこに行ったのか車の中から回りを見回してみた。私の家族どころか人１人いない。私は怖くなった。住宅も何箇所か壊れていたのでどこかで下敷きになっているのではないか、私をおいて逃げたのではないか、と思って私は泣きだしてしまった。小さかったからか、１人でいるのが本当に怖かった。泣き出してからわりとすぐにみんな帰って来た。それを見て私は安心して涙が止まらなかった。私は、「どこ行っとったん？」と聞いた。

「パンもらいに行っとったんや」と母に言われた。救援物資のありがたみを知らなかった私は自分がほったらかしにされたことに腹が立った。妹は連れて行ったのに、妹より大きい私をおいっていったことに「自分より、妹のほうが親にとったら大切なんや」と感じた。それに私は妹に泣き顔を見られるのが大嫌いだった。それに対しても腹が立った。

「なんでもっと早く帰って来んの？」と母に尋ねた。

「人がいっぱいやったから並んどってん」と言われた。私は「並ぶ！？なんでローソンで並ばなあかんねん！ローソンやったらすぐ帰ってこれるやろ」と心のなかで思った。私は近くにあったローソンにパンを買いに行ったのだと思った。被害の大きさや救援物資の存在を知らなかったため、かなりわがままな考えでいた。

「なんで置いて行ったん？」と聞くと、「あんた寝とったからや」と言われた。どうやら妹は起きていたらしい。この日を境に私もパンをもらいに行くのについて行くようになった。

祖父母たちは２日間避難所で生活をした。避難所は人がいっぱいで自分たちが寝る場所を確保するのはなかなか難しかったと言っていた。祖父は大阪に仕事で行くことがあった。震災が起こったが、相手先の人は待ってくれず、祖父は大阪へ行った。祖父はトラックを運転する。駐車場から車を出し、大通りへと続く道の途中で問題が発生した。道が通れない…。祖父母の家の前の家が全壊し、それが道路を通れなくしていた。仕方なく進路を変更し、大阪へ向かった。行く時は車の数も少なく、すぐに大阪に着いた。仕事を済ませて長田に帰って来る時、新たな問題があった。支援のために神戸へ向かう車で帰る道が渋滞になっていた。しかたがないから回り道をして帰ってきたと言っていた。

避難所生活を終え、家に戻った祖父母たちは、仮設住宅の抽選に応募したがなかなか当たらなかった。何日か経つと、西神のほうの仮設住宅が当たったが、あまりにも遠かったため、そこに家具を置くだけで、あまり仮設住宅には行かなかったと言っていた。震災から何日か経つと雨が降ってきた。祖父母の家の屋根は瓦だったので、雨が降ってくると２階がドロドロになったと言っていた。普通は青のビニールシートで屋根を覆うが、祖父が「もういいやん」と言ってビニールシートをするのをやめたらしい。

その後祖父たちは余震の危険性があるため、仕事の道具を入れてあった倉庫を空にし、そこで生活をするようになった。元々住んでいたところは建て直すことになったため、新しい家ができるまで４人で生活をしていたらしい。幸いそこの倉庫には風呂もトイレもあったので普通の生活をすることができた。親や、祖父母の話を聞いてみんなが同じように言っていた一番辛かったことは、風呂に入れないことだったらしい。

ライフラインの復旧作業が始まってから何日かしてから、父がテレビをいじっていたのを覚えている。初めは電源のスイッチを入れてもテレビの電源は入らなかったが、日に日にテレビに映像は映っていないが、電源が入るようになっていった。そのうち画面に映像が映るようになってきた。電源を入れて、画面に映像が映るとすぐに消えてしまったりしたけど、映像が映ったのを見て父と母が喜んでいた。

私の通っていた幼稚園には毎年３月に「おひな祭り発表会」というイベントがあった。それは、幼稚園の子供が、小学校の体育館を借りて劇やお遊戯をする１年間の中で最も大きいイベントがあったが、震災が起きたのでその年の「おひな祭り発表会」はなくなった。

環境防災科に入って

私が環境防災科に入った理由はボランティア活動に興味があったからで、人と人とのつながりの大切さを学び、将来に活かしたいと思ったからである。実際環境防災科で学習をしているうちに、人とのつながりを持つことがどれほど大切かということが実感できるようになった。授業ではよく阪神・淡路大震災のことを外部講師の人たちに話を聞かせてもらうことが多かった。話をしに来てくれた人の中に、実際に娘さんを亡くならされた人がいた。私の家族はみんな無事だったので、家族の誰かが死んだことや、友達が死んだことを想像することはできないし、家族の誰かを亡くした人の気持ちにもなれない。私がこの科に入って人とのつながりの大切を学んでいくうちに、人とつながりがあるからこそその人が亡くなった時に悲しく思ったり、辛く思ったりするのだと思う。その人との関係が深ければ深いほど亡くなった時に感じる感情は大きくなるのだと思う。私がこの科に入って良かったと思うことは、人がいてくれるありがたさと、「ありがとう」という言葉の暖かさを感じることができたことだ。日常で「ありがとう」という言葉はよく使うし、ある程度の感謝の気持ちを込めて言う。このごく普通の言葉がとても暖かい言葉だと思ったのが、実際の被災地でボランティア活動をしているときだった。「ニーズ調査」といって、民家を訪問し、必要なことがあるかどうかを訪ねて聞きまわるボランティアをしている時だった。私が行った地域のどの民家もあまり被害は大きくなく私たちがやることはなにもなかったのに、私たちがそこに行っただけで本当に気持ちのこもった温かい「ありがとう」をもらった。最初にこ

の「ありがとう」をもらったときは、私自身とてもうれしかった。このときに人と接するときは心から接しようと思った。それと同時に、阪神・淡路大震災ではどれだけの人がこの「ありがとう」を聞いて、どれだけの人が「ありがとう」という言葉を言ったのか疑問に思った。このように考えているうちに、将来人から本当の「ありがとう」を言ってもらえる人間になりたいと思った。

最後に

　阪神・淡路大震災が残した被害は大きく、未だに心の傷が残っている人がいる。この地震が残したものはたくさんある。だからこそ私たちはそこから色々と学んでいかないといけないと思う。あの震災のおかげで今の神戸の町は地震に強くなった。それでも災害のことを甘く考えている人がたくさんいる。被害が大きい災害ほどそこからなにかを学ばないといけないと思う。阪神・淡路大震災は風化されつつある。だからこれからは、多くの被害を抑えるために防災を広め、実行していかないといけないと思う。私は防災の伝承者となり、多くの人に防災を広め、少しでも被害を抑えられるように地域の活動などに参加していきたい。そして災害と共存できる社会を考えていきたい。

いのち、ひとつ…

神戸市垂水区学ヶ丘
瀬尾　明子

はじめに…

あの日から 13 年、私は毎日、友達や家族の周りにいる大切な人たちと時間を過ごしている。環境防災科に入学して 3 年間たくさんの事を学び当たり前に過ごしているこの今日、1 日 1 日を大切にしていこうと、前に増して思うようになった。震災から 13 年、私の記憶は、パーツでしかない。それもしょうがない。当時 3 歳だった私の精一杯の記憶である。このパーツをつなげても完成品にはならない。これからは、私の少ないけど覚えている記憶と周りから聞いた、私の震災体験を書いたものである。

―あの 1 日…

1 月 17 日午前 5 時前、母は当時していた新聞配達をするため、いつもと変わらず家を出た。もちろん、そんな朝早くに私たち兄弟は、夢のなかである。母は、その 1 月 17 日はいつもと違う景色に少し違和感を覚えていた。いつも歩く住宅街。でも、変な感じだった。いつも会うはずの野良猫たちに会わなかった。動物の物音がしなかったそうだ。いつもと違ってすごく静かだった。真っ暗の中、真っ赤というかオレンジがかった本当に真ん丸な満月も見たそうだ。

5 時半ごろ、新聞配達を終わらせた母は布団に入り、お弁当を作るまでの短い時間に少し睡眠をとろうとしていた。その時、悪魔が襲いかかった。

ドーーーン!!!!ガタガタガタガタ……

一度大きく揺れて揺れが少しおさまり、母が「地震!!」と思い一息ついた瞬間に、

ゴーーーーーー!! グラグラグラグラ、ガタガタガタガタ、ガシャガシャガシャ…

と音を立てながら、さらに激しい大きな横揺れがあった。

私は当時、小学校 4 年生の姉、6 か月の弟、母と同じ部屋で寝ていた。父は、一人隣の部屋で寝ていて、6 年生の兄は病院に入院していた。

―ここで戦わんとって

家が大きく揺れていた。その様子は、まるで家がおもちゃのようだった。
私は、小さくて地震というものをはっきり知らなかった。寝ぼけていたのか、夢の中のストーリーで揺れていると思ったのか、私はゴジラと原始人のような格好をしている巨人が、戦っているのだと思った。夢の中のストーリーの場所は私のいつも遊ぶ、公園だった。「なんでこんなところで戦うん。ここで戦わんとって」と思っていた。この、ゴジラと巨人が戦っていると思っていたという記憶は、鮮明覚えている記憶の中の 1 つである。
揺れている間、母は大きな声で「お父さんー!!」と隣の部屋で寝ていた父に呼びかけたそうだが、ゴーっと地面が鳴る音、食器棚のガラスの割れる音やモノの落ちる音で聞こえていなかったという。姉は、何が何かも解からず叫んでいた。揺れ始めたころに母は、一緒に寝ていた私たちに布団をかぶせた。このまま、もっとひどくなったら遅いと感じた母は、当時、エレクトーンに頭を向けて寝ていた私たちに、「エレクトーンに頭突っ込んで!!」という声をかけた。私は何かも分からず、言われるままにしていた。というより、9 割は寝ていてぼーっとしていたのだろう。その、あと幼い私は眠気には勝てず、ボーっとしていたと思う。揺れがおさまり、ひとまず家族の安否を確認しあった。母は、隣の部屋で寝ていた父を見に行ったそうだが、父はドーンという大な揺れをしているときは起きていなくて、揺れがしばらくしてから、体を起こした。起き上ったその時に、父の頭上にあったテレビが父の枕もとに落ちてきた。そのまま、父が寝ていたらと考えたくはない。

家の様子では、食器棚の扉は少し開いていて、中身が出ていた。足元のまわりには、破片が飛んでいた。しかし、当時住んでいた家では食卓が座ってとる形で、その食卓を食器棚の前に立てていた。そのおかげもあって、食卓が盾となって本当ならすべて開いて中身も出ていたであろう食器棚の扉が少ししか開かず、飛んできた食器の数もへった。

タンスの上に置いていたものや、壁に掛けていた時計は床に落ちていた。地震があった家の中の様子を一言で言うと、何もかもぐちゃぐちゃだった。

震災発生時、病院にいた兄は、朝の検温で 17 日の朝いつもと変わらずぼんやり起きていた。地震の揺れがあり、とび起きあがって気づいたら、兄はベッドの下に落ちていたそうだ。看護師さんに「じっとしときなさい」といわれたという。

揺れが収まった時に、玄関のドア越しに同じ階に住んでいたおじさんが大きな声で「大丈夫やったかー」と声をかけてくれた。何か不安でいっぱいだった姉の心をやわらげたそうだ。私たち家族は、揺れが収まり余震があったら危ないから、とりあえずパジャマの上に毛布や、上着をはおってそのまま雪の降る外へ出た。そして、家の前にある駐車場に止められている車に避難した。

―避難してから

外に出ると近所のおばちゃんや、おじちゃんが「大丈夫やったか？」と声をかけてくれた。何気ない一言だったかもしれないけれど、本当に安心感がわいた。

まだ朝早かったので外は暗かった。暗い外にたくさんの人がいた。私たち家族は夜が明けるまでの 1 時間くらいを車の中過ごした。車の中から、団地についているアンテナが余震で揺れているのを見た。もうその頃には、ほんのりガスの漏れたにおいがしていた。とりあえず余震がおさまったころに、一度、母と姉と家の様子を見に家に戻った。詳しくは覚えていないが、ガラスが散らかっていて靴のまま家に上がった。いつもなら、確実に怒られるのにその日は、違った。もちろん家の中は、何もかもぐちゃぐちゃになっていて生活を送れるところではなかった。私たちのおやつや冷蔵庫にあった食べられるものをにぎりしめ、車へ戻った。そのころには、水も出なかったし電気もつかなかったし、ガスもダメだった。いつもなら当たり前の生活が一瞬にして逆転した。

近所の人たちは、近くの小学校や中学校や高校に避難をしていたが、私たち家族は避難しないことにした。そのため、母はとりあえず家の中に入れるようにと余震がつづく中、家のかたづけをしていた。母の強さを感じた。そして、避難所には行かないという事が決まったら次に食料はどうするかということになった。すっかり、日が出て来たころに食料のことを心配していた母は近くのスーパーに走った。しかし、開店時間から時間がたっていないのにスーパーには、まったくと言っていいほどなにもなかったそうだ。母が近くのスーパーに行っているそのころに、父親は祖父母や近所のお年寄りや、いとこの安否確認に行った。近所にはたくさんの知り合いがいた。だから、父は近所中を走り回っていた。見回りに行っていると、そこらじゅうの駐車場にはたくさんの人が出ていて、家の前の公園にもたくさん人が出ていたそうだ。地震が起きてから間もなくはとりあえずバタバタしていた。

とりあえず一息ついたころに母が、周りの様子を見に行ったので私もついていった。母といつも見る近所のおばちゃんは「ガスくさいね～」という会話をしていた。そんな中、当時ヘビースモーカーだった父と近所のおじさんが会話をしながら、タバコを吸っていた。ガスが漏れているところで、よくそんな事をしたなと今では思う。

このころ須磨のほうから、煙がもくもくと上がっているのが見えていた。救急車や消防車のサイレンの音が響き渡っていたそうだ。

具体的にどれくらいの規模の地震がどこで起こったかわからない状態だった。そんな中私の姉が前の年にサンタさんからもらったキティーちゃんのラジオがあることを思いだして、ラジオのスイッチを入れた。その時、初めて震度 7 と知った。父や母は、地震というものをよく知っていたけれど、こんなに大きな規模の地震がまさか、神戸であるとは思ってもいなかったという。

私たち家族は、震災の起こった 1 月 17 日には家に戻り余震の続く中、近所に住んでいた祖父母と過ごした。地震が起こってからしばらくは、祖父母も私たちの家族と一緒に生活を送っていた。その晩、余震が続く中いつでも外に出られる格好をして寝ていた。

―２、３日してそれから

本当に２、３日かは余震の続く中片付けをしながらバタバタしていた生活が続いた。当時病院に入院していた兄を迎えに行くため、父と母は車で向かった。いつもなら４０分で行けるはずの道のりが何時間もかかったそうだ。それほど、車がたくさんあったそうだ。その間、私と姉と弟は家で祖父母たちと時間を過ごしていた。

兄を迎えに行ったとき、母はスーパーにも寄った。そしたら、私たちが住んでいる地域にあるスーパーよりも品物があったそうで、とりあえず買いだめをした。家に帰り、ご飯を作るにしてもガスが止まっているから作れない。この時に役に立ったのが、カセットコンロだった。

水も止まっていたので、母と祖母と姉は水の救援が来ていると聞くと、重いポリタンクをもって出かけていた。ご飯を食べるときは、キャンプの時にと置いていた紙ざらにラップをまいて、何回も使えるようにしていたそうだ。今までなら当たり前に使っていたものが突然とざされてしまうと、こんなにも大変なのか、不便なのかと感じた。地震が起こってからの何日かは、お風呂になんかも入れなかった。私たち小さい子どもたちは、服を入れていた衣装ケースのような大きなプラスチックに、１回１回お鍋１杯の水をカセットコンロで温めて、水を入れて簡易お風呂のようなものに入れてもらっていた。家族で近く（といっても車で行くくらい）の銭湯に行く時もあった。また、水の止まっていない地域に住んでいたお友達もいたので、そこにお風呂に入るためだけ入れさせてもらったりもしていた。

近所にいたおじさんは、自分がもらいに行った水なのに、私たちの家族は多いからといって必要だろうと水を分けてくれることもあった。自分も決して大変じゃない生活を送っているのに、本当に助けてもらったなと思う。

助けてもらったり、助け合いをしたり、人の温かさや温もりを感じた。

この阪神・淡路大震災では、人と人との助け合い、協力することの大切さ、人の温もりを本当に実感することができた。

―姉の小学校

姉は、１週間２週間ほどすると団地の下の掲示板に学校からのお知らせがあって、学校に行った。姉の通っていた多聞東小学校は被害がとても大きく校舎を使える状況ではなかった。グラウンドに集められた姉たち小学生は「大丈夫やったん」「よかったー」と友達と抱き合いながら、久しぶりの再会を喜んだそうだ。集められた児童に先生が「誠に残念ですが、校舎は使えません」といった。みんなで、地震で被害を受けて変りはてた校舎を見回ったそうだ。ひびの入った柱、床に突き刺さった音楽室のピアノの足…今まで友達と楽しい時間を過ごした大好きな小学校が、地震のせいで変わり果ててしまっていた。もちろん校舎の中で授業をすることはできなかった。

仮設校舎を作る間、近くの小学校に午前中はそのもともとの小学校が使い、午後からは姉たちの多聞東小学校が使わせてもらっていた。午後からいつもの自分たちの学校ではなく、違う学校に通う日々だった。仮設校舎ができてからは、授業が再開した。しかし、今までいっぱい走り回っていたグラウンドは仮設校舎にほとんど場所を取られてしまい、遊ぶところといったら仮設校舎と仮設校舎のあいだのほんの少しのペースだった。十分に走りまわれない分、仮設校舎の中で走り回って仮設が揺れていたのを覚えているそうだ。運動会は、近くの多聞東中学校にグラウンドを借りて行ったりしていた。姉の卒業式は、仮設校舎で行われた。姉が卒業したその次の年に、新校舎が開校した。

―環境防災科

私が環境防災科に出会ったのは、小学校６年生の時だ。当時の環境防災科生が、私たちの学校に出前授業に来てくれた。

中学３年生になって進路を決めるときに、私はもともと国際交流や国際理解にとても興味があった。ホームページで環境防災科の特色的な取り組みの中で、海外の様々な方たちから、お話を聞いたりネパール訪問をしていたりしているのを見て、この環境防災科にする‼と決めた。絶対この環境防災科で、たくさんの人との関わりをもって、自分の視野を広げたいと思った。

実際に入学して、専門的な授業で難しいこともあったりした。さまざまな方の震災体験や、震災当時の様子を聞いて初めて知ることのほうが多かった。自分はこの神戸に住んでいる一人なのに、あの阪神・淡路大震災のことを知らなかったのだなと思うとなぜか悲しい気持ちになった。環境防災科で学んでいくうちに、いろんな人と関わりが持てたしネットワークも広がったし、自分の中の視野が広がった。環境防災科での経験はたくさんあって書ききれないが、どれも私にとって本当に貴重な宝となるものばかりだ。

高校１年生の時、震災から毎年行われている１．１７の追悼式に参加するようにもなった。中学生までの私なら、テレビで見るだけのものだった。実際に参加してみて、震災で家族を亡くした方たちが涙を流しながら手を合わせている姿が本当に頭に残っている。ひとつひとつの大切ないのちが、あの瞬間に亡くなったと思うと、私に何かできることはないかと思う。あの阪神・淡路大震災を忘れないためにも、これ以上に大切ないのちを亡くさないためにもこれから私にできることをしていきたい。

―これから

私は、この環境防災科で学んだ経験したことを生かして、子供たちに防災教育していけたらいいなと思っている。阪神・淡路大震災では、予想もされなかった揺れが起きて対応ができなかった。そして、尊いいのちが奪われることもあった。「備え」ができていれば尊いいのちも救えることができると思う。将来の子供たちに、阪神・淡路大震災の教訓や経験を伝えていき、いのちの大切さや人と人の係わりの大切さを知ってもらいたい。

日本の子供たちだけではなく、世界でも地震は起こるので、世界的にも防災教育をしていける人間になりたいと思う。

そして、一つでも多く“いのち”を大切にしていきたい。

いのち、むすびつなぐ思い

神戸市須磨区東落合
田仲　愛

地震発生

当時私は４歳。まだ小さくて震災についての記憶はほとんどと言っていい程残っていない。
当時は須磨区に住んでいて、１月１７日もいつものように和室で父、母、兄と眠っていた。

―５時４６分 地震発生―

一度寝たらなかなか起きない私は地震には気付かず眠り続けた。ただ一つ覚えているのは、地震が起こった瞬間父が私と兄に布団をかぶせて上に覆いかぶさり、「出てくるな！」と叫んでいたことだけだ。安眠を妨害されたような気持ちで「何だ！？」と思ったが、私はそのまま眠り、起きた時にはテレビはひっくり返り、食器は割れまくり…といった感じだった。

地震が起きた時、母はいきなりの揺れに何が起きたのか理解できずに、爆発か団地にダンプカーが衝突したのかと思って腰が抜け立てなかったと言う。父はとっさに私たちをかばったものの、何が何だか分からず「ウォー！」と叫んでいたそうだ。別の部屋で寝ていた祖母は揺れがおさまると私たちの安否を確かめようと壁にへばりついて、大声で経を唱えながら和室にやってきて、腰の抜けている母と覆いかぶさったままの父に「はよ出てこんかい！」と怒鳴った。しばらく落ち着いてから外へ出てみると近所の人はパジャマ姿で学校に避難に行ったり、家にいるのは怖いし、とりあえず車のほうが安全だと思って車に避難したりしていたが、私の家族は動くのが面倒だということで家の片付けをしたそうだ。

電気がつかないのでとりあえずローソクで火をつけて灯りにしたのだが、今となれば余震の心配もあったのにローソクをつけるなんて火事になるかもしれない恐ろしい事をしたと母は言っている。ラジオをつけると地震が発生したと言っていて、やっと自分たちの置かれた状況を把握したようだ。幸い私たちの住んでいた所では電気は 10 時ごろにすぐに通ったのでテレビを付けてニュースを見ると、長田の火災を知った。「これは大変だ！」ということで、親戚の安否確認をしたそうだが幸いにもみんな無事だった。

地震発生から 10 日間

前に親戚はみんな無事だったと書いたが、震災から１週間経った頃に祖母の姉の兵庫区金平町にある家が全焼した。大叔母は大家さんとして棟続きの家を貸していたが、避難所から帰ってくると家が燃えて無くなっていたのだ。不審火だったが、家をなくした大叔母と大伯父はしばらく私や、親戚の家に滞在することになった。金平町の家には小さい時によくいったし、地蔵盆の日にはゴミ袋２つ分くらいのおやつやバナナが貰えるし、近くに渋い駄菓子屋さんがあったり、大叔母の家の玄関の引戸をあけると「チャラララチャラララ～♪」と“エリーゼのために”が流れたり、道にグミの実がなっていたりとローカルな雰囲気が子供ながらに大好きだった。そんな金平町も今では奇麗な１戸建てや新しい公園にかこまれたメジャーな町になった。大叔母宅も公園となって姿を変えた。

私の家に滞在していた大伯父が家のベランダでさみしそうな顔で真っ黒に焦げた外国のお金や日本のお金をバケツに入れて一生懸命磨いていたのを覚えている。「何で真っ黒のお金を洗っとんやろ？」と思うと同時に、子供心に火災は写真もお金も無くしてしまう恐ろしいものだと感じた。黒焦げだったが、外国のお金を１枚くれたのが凄く嬉しかった。

ライフラインの話だが、私の住んでいた地下鉄名谷駅付近では、いたって復旧は早く、電気は先ほど述べたように 17 日の 10 時頃には通り、水は２日程で来るようになり、ガスも１週間～10 日ほどで元に戻った。当時６歳だった兄は、祖母とともに家のすぐ前にあった花谷小学校までペットボトルを持って水の配給に並んだ記憶が残っているそうだ。母は水が出るようになると直ぐに米を１升炊き、おにぎりを作り、父にバイクで長田の避難所まで届けてもらったそうだ。

―被災者が被災者を支援する―
私もこのような行動ができる大人になりたい。

仮設住宅

先ほどお話した大叔母夫婦は、しばらく私の家や親せきの家に滞在した後、高砂の仮設住宅へ移ることになった。元の住まいからは遠かったが、働いていた大伯父が仕事に行きやすいように、交通の便の良い所を選んだらしい。

私は覚えていないのだが、大伯父が「仮設で楽しい思い出を作りたい。」と私たち一家を呼んで仮設前に作っていた畑で１日イモ掘りをして、夜泊まって帰ったことがあるそうだ。母にその時の話を聞くと、夏はトタン屋根が日光にさらされ室内はあり得ないほど熱く、布団も敷いているだけでアッツアツに温まって日中は家に居られないほどだったそうだ。クーラーは無料で取り付けてくれたそうだが、１日中クーラーをつけていないといけないほどの暑さで、仮設内のほとんどの人がクーラーのつけっぱなしにより体調を崩していた。電気代もかかるし、１日仮設に居るのは耐えられない大叔母は暑い昼間はスーパーやデパートへ出かけていたそうだ。

私の記憶では、仮設住宅の敷地内には緑色っぽい砂利や石が敷かれていて狭い所にいっぱいの家が並んでいた。入っても１部屋だけですぐにリビングという感じだった。当時小さかった私が「おお！狭い家！」と思ったほどだから、大人にとってみれば相当の狭さだったのかもしれない。大叔母の家に行っても子供の私は話に寄れないので、仮設住宅の砂で砂遊びをしたりして時間を過ごした。そうすると、結構の確率で巻貝を見つけることが出来て、必死になって砂利を蹴りあさって貝を探していたのを覚えている。また、仮設住宅には質のいいサラ砂があったので、土のお団子つくりには最適だった。

大叔母の仮設は高砂にあったが、私の住んでいる家の近くにもたくさんの仮設ができていた。その中の一つで殿津谷公園という公園は、野球やサッカーの出来る広いグランドのある公園だったが数日後には何十件もの仮設で埋め尽くされていて、子供心に、「殿津谷公園が白い家に支配されている」という気持ちだった。母や周りの人に、「仮設は地震で家がなくなったり壊れたりした人が住んどうねんで」とよく聞いていたので、何となく“知り合いのいない仮設”の敷地内に入るのが悪い気がしてレンガに座って遠めから様子を見たりしていた。たまに、すててこに腹巻姿のおじいさんが出てきてタオルを吊るしたり、仮設に一緒に連れて来たのであろう犬が日向ぼっこしていたが、見つかったらいけないような気がして、でも気になって隠れて見たりしていた。

周りの助けがあってこそ

震災があってたくさんの人が被災地に駆けつけ、そして、たくさんの人が募金や救援物資を寄せてくれた。私の家にも当時もらった救援物資がまだある。スウェットや靴やリュックなどである。スウェットは父が毎年冬になると愛用していた。冬になると着心地の最高なそのスウェットの取り合いだった。私も、ピンク色のスヌーピーのリュックをもらって、小学生時代には遠足は絶対にそのリュックで出かけていた。リュックには元の持ち主の名前と住所がしるされていて兵庫県外の方だった。昔母に、「このリュック知っとう人からもらったん？」と聞いたら「地震の時に大変やなあと思って知らない人が愛のために送ってくれてんで。」と教わったが、はるばる他県からやってきた見ず知らずの人のリュックを持っているというのはなんだか不思議な感じがした。昔は単に不思議な感じだったけど、今となってはそのリュックを見ると、とても温かい気持ちになる。

傷あと

震災は、私たちの心や物などにたくさんの傷跡を残した。物を例に挙げると、私の家のテレビは震災でテレビ棚から落ちて画面が一部えぐれ、テレビを見ると震災の恐ろしさを思い出していた。先に話した大叔母夫婦も、震災によって思い出の写真も、本も、衣類も、お金も燃えるものはすべて失った。心の面では、母は未だ小さな地震にも「怖い、怖い」と寝ていてもすぐに起きるし、地震があった次の日などには、震災の時みんなが出かけて、寝ている私たちと留守番している時に余震があって一人で怖かったという話を何度もする。当時の総理大臣が宴会をしていたという話も何度もする。

今、私は自分が震災の記憶がほとんど残っていないことを悔やんでいるが、記憶が鮮明に思い出されるというのも辛いことだなあと思った。

今

私は今、環境防災科で防災や震災について日々学んでいるが、その中で募金活動や炊き出しなどのボランティアで沢山の経験をさせてもらった。災害時の募金では、盲目の方が私たちの声を頼りに白杖を使ってやって来て募金をしてくれたり、通り過ぎて行った人がわざわざ引き返して募金をしてくれたり、たまたま通りかかった中学時代の先生が募金してくれる姿は本当に温かい気持ちになる。
中には、「暑いのに大変だね」と言って栄養ドリンクやジュースを差し入れしてくれたりする方もいた。「ご苦労様」「がんばってね」の言葉がとても励みになった。募金中に、「舞子高校の環境防災科っていうとるけど一体なにができるんや！被災地やった神戸で募金するだけして、実際は学校の金にしとんちゃうの！？」などとキツイことを言われたこともあった。まさか自分がいいと思ってしている事で、こんな風に思われることもあるんだ。支援って難しいんだなあと感じた。

炊き出しボランティアに参加した時には、おばあさんが「震災の時は大変だったけど、今こうやって若い子たちが震災のことを風化させないように活動してくれているのが何よりもうれしい。震災の時は炊き出しのごはんも、食べるものは汁物以外ほとんど冷たくて悲しかった。震災のことを思い出しながらゆっくり食べさせてもらうわね。ありがとう」と涙をためて言ってくれたのがすごく心に響いた。

1.17 の追悼式では、夜からテントに泊まって早朝にお手伝いをさせてもらった。見た目がチャラそうな若い人が、５：４６に手を合わせていたのが印象に残った。正直、追悼式に来るのはほとんど年のいった人だと思っていたが全くそうではなかった。若い人が沢山いた。そういう方たちに出会うと、やっぱり神戸で震災があったということは忘れてはいけないし、震災が残したものは大きかったなあと感じた。

しかし、それとは反対に東遊園地にある、震災犠牲者の名前の刻まれた地下室のある、COSMIC ELEMENTS（慰霊と復興のモニュメント）を見に行ったとき犠牲者の名前の刻まれている地下室に、沢山のごみが捨てられているのを見た。今まで来た時には、そこは神聖な場という感じで花が置かれたりしていつも綺麗だったのに…。たばこの吸い殻、マクドナルドの食べ殻などが散らばっていた。誰がしたのかは分らないけど、何でこういう所でこんなに酷いことをするんだろうと胸が痛くなった。

同じく、東遊園地にある１・１７希望の灯りでは、酔っていた大学生が誤ってガラスを破損したが、後日事の重大さを知り、名乗り出て謝罪したということがあった。その大学生は希望の灯りの置かれている意味を知らなかったそうだ。ゴミを捨てた人もそうなのだろう。ここで希望の灯りの碑文を紹介したいと思う。

【1・17 希望の灯り　碑文】
1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分
阪神・淡路大震災

震災が奪ったもの
命　仕事　団欒　町並み　思い出

…たった 1 秒先が予知できない人間の限界…

震災が残してくれたもの
やさしさ　思いやり　絆　仲間

この灯りは
奪われた
すべてのいのちと

生き残った
わたしたちの思いを
むすびつなぐ

この文を知ったとき、鳥肌が立つような感覚だった。知らなかったから許されるのではなく、知らないなら存在の意味を知ろうとしてほしいと思った。

震災で奪われた「命」「仕事」「団欒」「町並み」「思い出」。命は取り戻すことはできない。仕事も団欒もなくなって、町並みは変わってしまったかも知れない。けれど、震災が残してくれた「やさしさ」「思いやり」「絆」「仲間」は新たな「思い出」として心に残り続けると思う。だから私もそれを大切にしたい。

夢

私には夢がある。それは、動物看護士になることだ。動物看護士になって動物保護施設や動物病院などで勤務したいと思っている。そして、災害時に動物の救護のボランティアに行けるようになりたい。

被災動物の保護をしたいと思ったきっかけはニュースでハリケーン・カトリーナの被災地では多くの動物が取り残されていることを知ったからだ。人々が避難している中でおいていかれた小さな犬がさみしそうに鳴いているのを見て、悲しくなった。そして、そんな動物たちを救いたい！と強く思った。

最近、阪神・淡路大震災で動物保護をした人の本を読んだ。筆者は車椅子生活をしている人で、災害発生時には大阪の自宅にいた。テレビで震災を知り、長田に住む友達の安否確認も電話が通じなくてできないのでとにかく現地に行こう！と車で行ったそうだ。そこで燃える家と沢山の人の絶望的な顔を見た。その中で一匹の小さな犬が自分の家であったと思われる燃えた家の前でさまよっていたそうだ。自分の家に帰ろうと燃える火の中に入って行こうとしている犬の姿を見て、筆者は周りを歩く人に「僕は車椅子で動けません！あの小さな犬を助けたいので、誰か捕まえてください。このままでは燃えて死んでしまう！」と訴えかけたが、誰もが冷たい目で「犬？人間が危ないのに犬にかまってられるか！犬一匹助ける暇があれば人一人助けるわ。」というように取り合ってくれなかったそうだ。

これを読んだとき、筆者は助けられる命があったのに何もできなかった事が辛かっただろうなという気持ちと、この犬のほかにもゲージに入れられて飼われていたり鎖でつながれたペットは逃げたくても逃げられなくて、苦しみながら亡くなったと思うと悲しい気持ちが出てきた。でも、周りの人が「犬なんて助ける暇があれば人を助ける」と言った言葉を絶対に間違ってる思うこともできなかった。

災害で人が苦しんで助けを求めているのに、動物を助けているなんて、白い目で見られることかもしれない。だけど、人は「SOS」を自分で発する事ができるが動物は話すことができない。人は動物虐待や捨てられたペットを見て「可哀そう」と言うくせに被災して怪我や飢えで苦しんでいる動物は見て見ぬフリをして我先にと自分が優先になる。

動物に対してだけではない。筆者が避難所で救援物資を貰おうと並んでいると「もうそろそろ物資がなくなる」という声が聞こえてきたそうだ。するといきなり後ろから人が押し寄せてきて段差があって車椅子では前に進めない所にいた筆者が「誰か段を登るのを手伝って！」と叫んでいるのにみんな自分優先で挙句の果てには「邪魔！どけ！」などと言われ、結局貰えた物資はポテトチップス１袋だったという。人間ってむなしいなと感じた。

自分に余裕がある時は「可哀想」「ゆるせない」と言う。しかし自分に余裕がなくなると「自分優先で他人は関係ない。」となってしまう。私はそうなりたくはないし、人間でも動物でも助けることのできる命がある限り何か行動したいと思う。客観的に聞くときれい事かもしれないが、人間と同じで動物にも心があるということを忘れてほしくない。だから私は被災動物の保護や救護をして、飼い主をなくし行き場のなくなった動物や、ひどい怪我をしている動物を保護する施設を造り、少しでも小さな命を守りたいと考えている。

そして、これからの残りの学校生活を悔いのないように過ごし、震災のこと、沢山の人に助けられてここまで来たことを忘れずに絶対に将来の夢を叶え、動物を守れる人間になる。

共に生きる

神戸市垂水区桃山台
谷口　智子

ゴオーっという音が聞こえ、同時にドンッ、ガッシャーン。それに加え、ベッドが歩き出したような背中からの衝撃。
私が目を覚ました瞬間、いつもとは違う世界が目の前に広がっていた。

忘れたらあかん！

１月１７日５時４６分。阪神・淡路大震災発生。この一瞬の出来事でどれだけの人が傷つき、苦しみ、辛い思いをしたのだろうか。
家族、親、親戚、友人、恋人など大切な人を失った人の心の時間は、今もあの日から止まったままだろう。私はそんな思いをした人がいたことを決して忘れてはいけないと思う。

１９９７年1月１７日

あの日の朝、凄まじい衝撃と共に目を覚ました私の体は布団で押さえつけられていた。
揺れが収まり、布団から出た私はいつもと違う光景に違和感を覚えた。いつもなら太陽のまぶしいくらいの光が差し込み、明るいはずなのにその日の朝はクローゼットの中にいるような、とても不気味で不安を覚える暗闇だった。

智子！自分の名前を呼ばれ、はっきりと目を覚まし、暗闇の中で慣れてきた私の目に飛び込んできたのは、風邪で倒れていたはずの父の姿だった。前の日から寝込んで、隣の部屋で寝ていたはずの父が目の前にいることにびっくりした私は地震の心配よりも父の心配をした。『お父さん！だいじょぅぶなん？もうかぜ治ったん？』『お父さんは大丈夫や。それよりお母さんを助けたらなあかん。』母を探すために布団から出て部屋を見渡すと、おもちゃ箱がひっくり返り、机が倒れ、昨日片づけてきれいだったはずの部屋が元の状態に戻っていた。“もぅ！誰が散らかしたん！せっかくきれいにしたのに…。”母の心配をよそに、そんなことを考えていた私の目に飛び込んできたのは、テレビが落ちてきて動けなくなっている母の姿だった。テレビはベッドよりも少し高い位置にある棚の上に置かれていたのだが、それが母の上に落ちてきていたのだ。タンスがもう倒れてこないように横倒しにし終えた父が母の上に乗っかったテレビをどかし始めた。
幸い、まだ体の小さかった私と、母の腕の中で守られぐっすりと眠っていた幼かった弟にけがはなかった。
父は背中にタンスを支えていたときに出来た軽い打撲と、母も掛け布団とベッドのバネのおかげで衝撃は少なく、同じく少しの打撲程度ですんだ。

被害

やっといつもと同じように、だんだんと周りが明るくなってきて、父が１階の様子を見に行くと言ったのでついて行こうとしたが、『お父さんが良いって言うまでお母さんと一緒にここにおるんやで！』と言われたので、その間母とぐちゃぐちゃになった部屋から大事にしていたぬいぐるみを探し出し、良かったねと言いながら散らかったおもちゃを一緒に片付けた。そのあと、父が靴を履いて２階に上がってきて、母と私にも靴を履くように言った。そして、私は母に抱きかかえられながら、１階の様子を見に行った。キッチンのほうへ行くと、戸棚が全て開いていて、食器類が割れ、母がダイニングに飾っていたティーカップが全て床に落ちて１階の３分の１ぐらいの面積が割れた食器でいっぱいになっていた。
リビングを見に行くと、当時私よりも大きかった水槽が１メートルぐらい動いていて、中の水は３分の１ぐらいまで減り、水浸しになった床に当時飼っていたたくさんの魚達がぴちぴちと跳ねていた。私はこのとき一瞬で何でも破壊してしまう地震の怖さを初めて知った。同時に今朝起きた時に感じた背中の衝撃がよみがえり、一気に不安になった。父と母は少しの沈黙の後、片付けを始めた。

父の背中

そして、半分ぐらい家の片づけが終わったぐらいに父が『後は頼む！』と母に言って、どこかに行く支度をし始めた。父親である前に警察官だった父は、招集命令がかかり現場に行かなければならなかっ

た。『お父さんどっか行くん？』まだ片付けが終わっていないのに、どこかへ行こうとする父を追いかけて怒るつもりだったのにもうそこに父の姿はなかった。母から聞いた話だが、それから２か月は全く家に帰ってこなかったらしい。あの時は、正直、私たちより仕事を取った父に腹が立っていた。母に全てを押し付け、出て行った父を最悪な父親だと思っていた。

しかし、何年後かしてから、母から震災の時の父の話を聞いた。祖父母に連絡がつかず、心配でたまらないのに警察官という使命感に駆りだされ、安否の連絡も待たずに涙ながらに、現場に向かったことや、現場で風邪をこじらせ、高熱を出しながらも救出活動を続けたことなど、他にもたくさんの警察官である父親の話を聞いた。私はこの時から人を助ける仕事である警察官の使命感というものに魅力を感じた。そして、父の背中を追い、将来は人を助ける仕事をしたいと強く思った。

祖父母の体験から

しばらくして、中央区に住んでいる母方の祖父母に連絡がついた。祖母の家も私の家と同じぐらいの被害だったらしく、建物倒壊は免れたが、家具などが倒れ、同じように家の中はぐちゃぐちゃになってしまったらしい。

後から聞いた話だが、１つ危なかったのは、祖母の部屋にピアノが置いてあって、それが祖母の上に倒れてきたらしいのだが、ベッドの柵がつっかえとなり、隙間で助かったということだ。もしベッドが数センチずれていたら下敷きになったことだろう。そう思えば背筋が凍りそうになると祖母は言っている。

それから、何時間かしてから、父方の祖父母にも連絡がついた。父方の祖父の家は兵庫区にあり、被害は全壊。100 坪以上もあった昔からの大きな料亭だったために屋根の重さで２階が１階になってしまった。近所の人に助けてもらった後、近くの小学校に避難し、待機していたらしい。これも後から聞いた話だが、屋根が昔からの三角形の形をした家で、２階のベッドで寝ていた祖父母は揺れと同時に目が覚め、次の瞬間にすとんと落ちたと思えば、ベッドと一緒に直立したような体勢になったらしい。そして、全壊したにも関わらず、その屋根の隙間で助かったらしい。家は、外から見ると無残な姿で、近くに住んでいた叔父が様子を見に、家へ行ったらしいのだが、あまりの光景に気力を失い、助からないだろうと思い、探さずに帰ったらしい。

後から、叔父は祖父に『親を見捨てて帰る奴がどこにおるんや、この薄情者！！』と怒られたらしいが、今ではこの話は家族の中や親戚の中で笑いごととなっている。

この両祖父母の体験からわずかな隙間で生命が左右されるということに命の大切さを知ることができた。そんな、生死の境目を体験した人こそ、自分の命の重さがわかるのだと私は思う。

母の苦労

父が家を出て行ってから、母は一人ですべてをやり遂げた。まだ当時、3 歳だった私と１歳だった弟を抱えながらも母は、車で親戚の家を回ったらしい。祖父母の安否確認ができ、兵庫区の避難所に祖父母を迎えに行くことになった時も、私たちを後部座席に座らせ、とても混雑していた道路を何時間もかかって向かった。その中で母が１番怖かったという体験は、途中、長田ぐらいのところで赤い炎があちこちに立ち上がっている時に渋滞で身動きが取れなくなり、すぐ近くにあったガソリンスタンドから爆発の危険性があるので注意してくださいと言われた時だったそうだ。その時、目の前の恐怖というものを初めて感じたらしい。そして、祖父母を迎えに行ったあと、私の家には、たくさんの親戚が避難してきていた。私の家は周りに比べたら、そこまで被害はなかったので、母が避難所などに避難していた親戚達を呼んだらしい。母はそれからもご飯の支度や掃除などに、毎日追われていた。

そんなときに母方の祖父が経営していた灘区にある、バイク用品店が震災で壊れたと同時に中に置いてあった商品などが盗まれそうになった事件が起きた。祖父が震災直後に胸騒ぎを感じ、店にかけつけてみると、そこには壊れた店の中から商品を盗もうとしている人達がいたらしい。祖父が駆け付けたことによって、商品は盗まれなかったが、祖父は震災の中で困っている人達がたくさんいる中で、盗みをする人達がいることにショックを受け、その晩からずっと壊れた店の前に座り込み極寒の中、見張りをしていたらしい。そんな祖父を心配しながらも、母は私達や親戚の世話をし続けた。

私は一人ですべてをやり遂げ、自分のことよりも他の人たちの為に頑張った母を今でも尊敬している。

小学校で学んだこと

震災から、３年が経ち、私は小学校に入学した。震災から３年経った当時でも、私たちの唯一の遊び場であった桃山台公園には仮設住宅が残っており、そこでたくさんの人たちが暮らしていた。毎年、その公園で開催されていた夏祭りもその仮設住宅のせいで無くなってしまい、私は当時、仮設住宅が大嫌いだったということを憶えている。しかし、私は仮設住宅という建物が嫌いなだけで、そこに住んでいる人達は大好きだった。毎日、学校帰りに仲良くなったお年寄りの方のところへ行き、狭い仮設住宅の中で、お茶やおまんじゅうを一緒に食べ、歌を教えてもらったり、折り紙を折ったりなど、とても楽しかった。小学校の担任の先生に仮設住宅の人たちに元気になってもらおうね！と言われ、必死に歌の練習をしたことも憶えている。当時は、元気になってもらおうと必死に歌を歌うことしか考えていなかったが、話したり、歌ったりすることによって仮設住宅に住んでいた人たちの心のケアにつながっていたのかなと思うと、とても嬉しくなった。

その仮設住宅は私が小学校３年生ぐらいの時に無くなったが、大嫌いだった仮設住宅も無くなるとすこし寂しい感じがした。仮設住宅が無くなる時に、私はたくさんの‘ありがとう’という言葉を聞いた。涙ながらにお礼を言ってくださった姿は今も、鮮明に覚えている。

‘ありがとう’この言葉からたくさんの人が幸せになれるということを小学校の間で学ぶことができたと思う。

環境防災科入学の背景

私は、防災や環境に興味があったからではなく、ただ、人の役に立つことができる学科だということからこの環境防災科を選んだ。地震が起きれば、現地へ行ってボランティアができる。募金活動をして、海外にも支援することができる。私がやりたいと思っていたことを全て叶えてくれそうな、この学科にとても魅力を感じた。そして、いろんな人の支えがあり、私はこの舞子高校環境防災科に入学することができた。

今、環境防災科で

入学し、まず私が嬉しかったのは、たくさんの人の体験を聞けるということだ。

１年生の最初の方は、話を聞くことに慣れず、２時間もぶっ通しで話を聞くことが多く、正直、しんどかったこともあったし、失礼な事に居眠りをしてしまうこともあったけど、今、こうやって振り返ってみると、とても貴重で素晴らしい経験だったと思う。

消防官や警察官、自衛隊、ライフラインをつなぐ人たち、娘を亡くしたお父さんや長期支援をし続ける人たちなど、この３年間でたくさんの人の震災の話を聞くことができた。

普段の授業以外にも、校外学習や夏休みの能登半島ボランティア、近隣の小学校などで行われている防災訓練など、たくさんのボランティアに参加する事ができた。

修学旅行では火山の火口付近まで降りるなど、環境防災科にしか出来ない経験をたくさんやらせていただいて、本当に貴重な、普通科ではできないことをたくさんやらせてくれて、入って良かったと思える最高な学科だと思った。

そして、私がたくさんの人と出会い、たくさんの人と触れあう中で、私が１番感じることができたのは“人と人とのつながり‘絆’の大切さ”だ。

人は支え合わないと生きていけない。

震災の時などの災害時にそれは発揮されるのではないかと私は思う。

‘共生’ともにいきる。

私が環境防災科に入り、いろんな人の話を聞く中で１番大切だと思った言葉だ。

これからの私

私の将来の夢は、人を支える仕事をすることだ。

環境防災科に入り、たくさんの人に出会い、人を助け支え合うことの重要性を知ることができた。環境防災科に入る前までの私は、人を助けるということ＝身体面を助けるということしか頭になく、ボランティアでも、体の不自由な人の介護をしたり、がれきに埋まっている人を救助したりと、内面的な心のケアの部分までを考えたことが無かったけど、環境防災科に入り、心のケアの授業を受け、外面のケアだけではなく、内面的なケアも必要だということに気が付いた。

私は、スポーツの現場で働き、人を支えることのできる職業としてメディカルトレーナーの道に進み

たいと思う。その職業の中で、外面的な身体的なケアだけを行うのではなく、内面的な心のケアまでを行い、スポーツ選手を支えることができたらなと思う。

　環境防災科で教えてもらった、人を傷つけない言葉や行動などを生かして、私のこれからの道を拡げていきたいと思う。と同時に、防災の知識や阪神・淡路大震災の記憶を風化させない活動もしていきたい。

最後に　～ありがとう～

　１月１７日　５時４６分　阪神・淡路大震災発生。
　この地震が無かったら、この環境防災科は無かっただろう。
　この地震があったからこそ、今のクラスメイトに出会えた。
　６４００人もの人の命を一瞬にして奪い、多くの人を悲しませた地震。
　けど、この地震のおかげで多くの人が共に支え合い、生きることの重要性を知ることができた。阪神・淡路大震災の教訓から大切なことをたくさん学べたとも思う。
だから、私は感謝します。阪神・淡路大震災、ありがとう。

私が生きる意味

神戸市垂水区上高丸
谷口　麻衣

私は地震後すぐに岐阜県にいる祖父母の家に避難しているため記憶があまりありません。だから、両親や親戚の人に話を聞き、私の記憶と混ぜてこの話を書いています。

前日

私は震災前日、伊勢・志摩の旅行から帰ってきたばっかりで車のトランクにはたくさんのお土産を入れたままだった。

「お母さん、今日のお月さま赤いよ。」旅行から帰ってきたばかりなのに、疲れも見せず公園で遊んでいた私は空を見て母に言った。母はふと、いやな予感がした。その予感はもうすぐ的中することになる。今でも時々赤っぽくなっている月を見るとあの時の記憶が母の頭をよぎる。

トランクに入れてあったお土産はこれから起こる出来事によって存在を忘れられ、何か月も静かに開けられる日を待っていた。

地震が来た

５時４６分…「ドン！！」トラックか何かが建物に衝突したかのようなものすごい音がして、父と母が飛び起きた。その瞬間「ゴゴゴゴー！！」という音と共に当時住んでいたマンションが揺れた。そんな状況でも、幼かった私と０歳だった妹は起きる気配すらない。父はとりあえず、妹と私の上に覆いかぶさった。母は何が起きたのか分からず、パニックのあまり泣き叫んでいた。何が起きたのか全く分からないので外に出てみると同じようにマンションの人たちも外に出てきていた。私の住んでいたマンションは倒壊しなかったものの、壁に大きなヒビが入っていた。

父は当時、真珠の加工会社に勤めていたので薬品が倒れていないか気になり社長に電話した。その時は一回で繋がったのだが、灘区に住んでいた社長は会社に向かうと言った父に、「絶対に動くな！真珠がダメになっても死にはせん。」とだけ言って電話が切れた。その時、なぜそんなことを言われたのか分からなかったが、ラジオで垂水区と灘区の被害の違いを知り社長の言っている意味が分かった。社長が地震直後マンションのベランダから見た景色は、昨日まであった建物が全くなく、灰色に染まった灘区のまちだった。地下に止めてあった車を出そうにもだせず身動きが出来なかったためさっきの言葉を言ったのだ。その後、社長と電話が繋がることはなかった。

「祖父母」

長田には築 80 年になる家に祖父母が 2 人で住んでいた。祖父母の様子が気になり、父の車で垂水から長田へと向かった。須磨の離宮公園あたりは道がガタガタで、今まで見たことのない景色が広がっていたため、祖父母は死んでいてもおかしくないと思い覚悟を決めていた。いつまで経っても火事の煙で空は明るくなることはなく、不安は一層高まるばかり。板宿を過ぎたあたりではガス管が破裂し、「ゴーー」という音が鳴り響き車の中にいても熱くてたまらなかった。やっとの思いで長田に着いた時に見た光景はどこよりも悲惨だった。ほとんどの家が倒壊し火事がいたるところで発生していた。祖父母の家は昔に建てられていたため梁が太く、隙間が多くできていたため助かっていた。外にいた祖母は放心状態で訳がわからなくなっている。祖父はというと「大事なものがまだ家にある。」と言って全壊した家の中に入っていこうとしていた。そんな中、全壊したはずの家から電話が鳴り響いていた。

祖父は家の中の物が気になり、車に乗ろうとしないので祖母だけ連れて父の会社へ向かった。社長に動くなと言われたがどうしても様子が気になってしょうがなかったのだ。会社にはすでに寮に住んでいた若い社員たちが来ていて、修復作業をしていた。その人たちは地方からきているため身内に被害はなく、父に家族のそばにいてあげるように言ってくれた。その言葉に甘えて父は祖母を連れて西神に住んでいる伯母の家に行った。西神は驚くほど被害が少なく、ガス・水道・電気といったライフラインがすべて使えていた。ここに母と妹、私、祖母はいったん避難し、父は垂水に戻って知り合いから単車を借り、祖父のいる長田へ向かった。その道中は少し前に通った時とは違い、戦争で被害を受けた人たちの避難所のような景色に変わっていた。

「一人のおばちゃん」

鷹取駅の近くを通り過ぎようとしたその時！！単車の前に１人のおばちゃんが立ちはだかった。「兄

ちゃん助けて！！」「あそこにまだ子供がおんねん！！」おばちゃんはマンションの３階を指さしながら叫んだ。その瞬間、指先の向こうにある部屋が爆発し炎が燃えさかる。その瞬間おばちゃんはショックのあまり泣き叫んだ。父は一言「ごめん。」と言っておばちゃんの手を振り払った。助けてあげたかったが祖父のことが気になっていたし、もし助けに行けば自分の命もなかったかもしれない。複雑な気持ちが入りまじり後悔が残った。父はその光景を今でもはっきりと覚えている。その時のことを夢で見てうなされている父の姿を何度か目にしたことがある。起きた時父の目には涙が溢れていた。

「火事」

ようやく長田に着くと警察が交通規制を始めていた。道を一つ挟んだ場所にある建物が火事になっていたのだ。警官に止められたが振り切って進み、右を見るとそこは火の海となっていた。祖父母の家はたった道一つ挟んだだけで火事をまぬがれることができたのだ。まだ物を出そうとしている祖父を無理やり単車に乗せ、伯母のところへ連れて行った。祖父は自分が家から取り出したものを抱えたまま、いつまで経っても離そうとはしなかった。

二、三日目

「岐阜へ避難」

妹がまだ生後７ヶ月だったため、おむつやミルクなどが必要だったが神戸にいてもなかなか手に入れることができず困っていたため、岐阜から救援物資を持って来てくれた祖父母に連れられて私と母と妹は岐阜へ避難することになった。車で岐阜に向かっていたが市内は道路が寸断され通れなかったため、丹波笹山を通って京都を通り岐阜へ向かうことになったが、１月だったということもあり、雪が降っていたため岐阜に着くまでに何十時間もかかった。

神戸にいた時は長田周辺の地域で家が倒壊していたり、家が燃えている風景や新幹線の高架が落ちている姿を目の前で見ていたため、長田周辺がこの地震によって大きな被害を受けたんだと思っていたが、地震発生から２、３日が経ち、テレビ局が現地に入って撮った映像を岐阜で見ていると長田周辺だけでなく東から西まですごい被害があったことを知り驚いた。岐阜ではしばらくの間、ニュースはどこも地震のことでもちきりだった。

父を一人神戸に残して岐阜に避難していたため、約１ヶ月ほどで私たちは神戸に戻ることになった。

「バキュームカー」

岐阜に向かうまでの道中、京都あたりで救援活動に向かう車に多くであったが、こんなところで出会うはずのない岐阜県ナンバーのバキュームカーに出会った。岐阜からの援助は救援物資ではなく、なぜかバキュームカーだったのだ。バキュームカーというのは神戸ではあまり知られていないが、トイレの下にある浄化槽に溜まった汚物を汲み取る車である。当時、神戸はすでに下水処理の技術が進んでいたためトイレの水を流せばそのまま下水処理場にいったが、岐阜は水洗トイレではあったがトイレの下に浄化槽があり、そこに汚物を溜め、年に何回かバキュームカーが汲み取りに来てくれていたのだ。

震災から少し日が経ってから知ったのだが、神戸に多くつくられた仮設トイレでは汚物処理にとても困っていたため、岐阜からのバキュームカーの支援がとてもありがたかったのだ。岐阜県は水害の被害が多い場所のため災害にあってからの対応に慣れている。そのため、救援物資よりも先にバキュームカーを神戸に向かわせたのだ。

「岐阜の祖父母」

私の叔父は岐阜でとうふ屋をしている。叔父の住んでいる地域は水害が多いので私の両親はよく食べ物を持っていったり、片づけなどの手伝いに行っていた。叔父は神戸に大きな地震があったことを知るとすぐに、その日売りに行くために作った豆腐を全部神戸に持って行くように祖父母に渡してくれた。祖父母は野菜やお米などを箱いっぱいに詰めて車で何時間もかけて来てくれた。

長田に住んでいた祖父母の家の裏には当時野球場があった（今は、地震がきたら近隣の人が避難できる大きな公園になっている）。そこにはベンチや更衣室があるので家が焼けてしまった人や家に住めなくなった人たちが多く避難していた。野球場に避難している人たちの炊き出しに使ってもらえたらと思い、祖父母からいただいた野菜や豆腐、お米は全部、野球場に避難している人に配った。しばらくして、その野球場は芝生をすべてはがし仮設住宅を建て、多くの人がそこで暮らすようになった。

「生きている人に何かせなあかんねん」

当時、野球場の近くには文化住宅があり地震で二階が一階を押しつぶしていた。一階部分の部屋には

たまたま人がいなかったため死者はでなかったが、一人の男の人が自分の部屋からありとあらゆる電化製品や使えそうな物を外に並べている人がいた。その男の人は、「誰でも好きなやつ持って行けよ！！」と叫んでいる。隣では「あんたは母親を見殺しにするんか！早く助けにいかんかい！！」親戚の人らしき人が男の人を怒鳴り散らしていた。「母親はもぉ助からん。死んでいる人を助けるために力を使うより、今生きている人、今から生きていく人を助けるために力を使うほうが大切や。」この男の人の母親はすぐ近くに住んでいたが、その建物が潰れ下敷きになっていたのだ。男の人は泣きながら作業を続けていた。近くにはレスキュー隊の人もいたが何もすることができず、ただただ地域の人から怒鳴られていた。

「親戚のおばちゃん」

垂水に住んでいた親戚のおばちゃんは柱の下敷きになっていた。親戚に助けられ、そのまま親戚の家に避難したが二、三日経ってもご飯も食べにこないし部屋から出てこないため、不安に思い様子を見に行くと倒れていた。柱の下敷きになったときに頭を強く打ち、脳内出血を起こしていたのだ。さらに、水分をとらず、ご飯も食べていなかったので衰弱し、生死の境をさまよっていたのだ。病院に連れていくと緊急手術をしてもらえ一命はとりとめたが、発見するのがもっと遅かったら・・・そのおばちゃんの命はなかったかもしれない。

「父の会社」

親戚の無事が確認でき、父は会社の様子を見に行った。会社の近くには新入社員がずっと、真珠に付いた薬品を洗い流していた。そんな中社長はパートを含め全員に震災見舞金として３０万円を渡してくれた。父はそのお金でバイクを買い、残ったお金で食べるものを買った。細い道の先には車が入ることができず、救援物資も届かないままだったので、買った食材を救援物資が行き届かない場所に運びまわった。ある細い道を通り避難所に向かう途中に大勢の人がかたまって話をしていたので、「この辺で炊き出しをやりますか？」と尋ねると、「なんやお前！お前になんかあげんで」と言われた。どうやらその集団はヤクザの集団だったらしく、事情を説明すると態度が急変した。「兄ちゃんありがとう。いつもお世話になっている地域の人たちに何かしたかったんやけど、なにもできなくて困ってたんや。この食材使って炊き出しさせてもらうわ！！」震災の時よく動いてくれたのがヤクザの人たちだと聞いたことがあったが、これを聞いた時は驚いた。こういう人たちは他の人よりも義理人情に熱い人たちなんだと感じた瞬間だった。

会社ではお湯が必要だったが、シャワーは使うことができたがお湯が出てこなかったため、大阪ガスの方が修理に来てくれたときはすごくうれしくて、ありがたかった。また復旧・復興トラックが休みなしで働いてくれている姿を見て感謝してもしきれない気持ちでいっぱいになった。この震災ではたくさんの人にお世話になったし、日常生活や日常で使っているものがどれだけありがたいことなのかを思い知らされることとなった。

一ヶ月後

「仮設住宅」

震災から１ヶ月経っても長田の町に変化はなく、祖父母はいとこの家に避難したままだったが、祖父は食べる時間が早く、逆にいとこのお父さんは帰ってくる時間が遅いため、夕食の時間が合わないことを始めとして様々な不釣り合いが生じたため、沈黙した日々が続いた。そんな中で祖父は仮設住宅に移り住むことを決意した。

「忘れられない光景」

いとこの家から近い場所に仮設住宅ができたため、なんとかそこに住む段取りがついた。私の祖父は几帳面な人で、自分の人生設計を事細かに計画していた。でも震災に遭いその計画はすべて狂ってしまった。そのためか、起きている時は普通に生活していて何も問題はないのだが、夜になり、寝てしまうと大きな声で寝言を言ったり暴れまわるようになった。仮設住宅の壁はすごく薄いため、隣に住んでいる人が電話で話している声や蛇口からでる水の音、足音まで聞こえてしまう。当然祖父の寝言は隣近所に住んでいる人にまる聞こえだった。そのため、隣近所からの苦情が後をたたなかった。それでもちゃんとした証拠がないため祖父はただの嫌がらせだと思い込んでいたそうだ。そんないざこざが続いていたある日の朝、祖父の目が覚めるとサイドボードのガラスが割れているのに気がついた。祖父が祖母に理由を尋ねると、自分が寝ているときに暴れてガラスを割っていたと聞かされ、近所の人が言っていたことは正しかったんだと思いショックを受けた。

そんな出来事があったなんて知らない私の家族は、祖父母が仮設住宅でどんな生活をしているのか様子を見に行った。すると、思いがけない様子を目にしてしまった。祖父はこれ以上近隣の人に迷惑をかけてはいけないと思い、どうやったのか、両手両足を机に縛りつけ暴れないように固定し、寝言を言っても聞こえないように口にはガムテープをはっていた。実の父親が頑固で几帳面なことをよく分かっている父は祖父のそんな姿を目にして泣き崩れた。

「長田の町に帰ろう」

「仮設住宅で暮らせるのは有り難いが、近隣の人とはうまくいかないし、このままでは気が狂ってしまう。」と祖母が重い口を開いた。「もう限界。長田に帰りたい。早く友達に会いたい。長田の潰れてしまった家を片付けてそこにプレハブを建てようと思っている。」そんなことを突然祖父母は話し始めた。確かに、このまま仮設住宅での生活を続けさせたら気がおかしくなるだろう。しかし簡単に建てられるからと言ってプレハブを建ててもそこにずっと住めるわけではないから父は悩んだ。これから祖父母も年をとっていくんだし、またこんな震災があったとき同居していればまだ安心だから、プレハブを建てるくらいならちゃんとした家を建てて一緒に住もうと父が提案した。祖父母は納得して同居することが決まった。今私は長田に住み始めて 12 年になる。

震災前近所に住んでいた人達のほとんどが元の土地に戻ってきたため、祖父母はだんだん笑顔を取り戻していった。

「小学校」

全く知らない土地、一人も知っている人のいないクラス。不安いっぱいだった小学校 1 年生の時の記憶。引っ越すと今の友達と離れなければいけないため両親は心配していたが「友達が増えてうれしい。」と私は言ったそうだ。確かに友達が増えることは嬉しかったし、幼稚園も引っ越しのため途中でやめていたから同い年の子と遊べるのが嬉しくてしかたがなかった。私の通っていた小学校では 1 人の生徒が亡くなっていた。そのためか 1 月 １７日が近付くと『震災の話を先生から聞く』という時間が授業の最初に行われていた。先生の中には震災当時からこの小学校に勤務していた人もいて、小学校が避難所になったときの話などを聞かせてくれた。中には涙ぐみながら授業時間全部を使って話をしてくれる先生もいた。私の小学校は朝の時間か帰る前の時間を使って月ごとに決められた歌を歌う習慣があったのだが、1 月の歌は『幸せ運べるように』だった。低学年の頃は他の月の曲とは違ってどこか寂しい歌だな。と思うだけで、ただ決められた歌だから歌っていた。だけど高学年になり先生から聞く震災の話がだいぶん理解できるようになってからこの歌に対する思いが変わった。そしてこの頃から、震災に関心をもち両親に震災の話を自分から聞くようになった。

「出会い」

舞子高校環境防災科に入学してからは普通の高校生では体験できないことやたくさんの方との出会いが増えた。この環境防災科は阪神・淡路大震災がなければできなかった学科だし、私が長田に引っ越すことさえもなかった。この地震があったからこそ環境防災科が舞子高校にできて今の友達に出会えたのだ。そんなことを考えていると阪神・淡路大震災は 6400 人以上の方の尊い命を奪い、町をめちゃくちゃにしたが、私たちに新しい出会いを導いてくれた。

「この瞬間の出会いを大切にしないといけない。」私が校外学習で長田のまち歩きに行ったときに、あるおじさんに言われた言葉である。「今この瞬間はもう戻ってはこない。過ぎていく時間の中で無駄なことなんて 1 つもあるはずがないんだ。だからこそこの瞬間を大切にして、たくさんの人と出会えたことに感謝していくことが大切なんだよ。」この言葉を聞いてから、人との出会いに感謝することが多くなった。そしてこれから出会う多くの人との出会いを大切にしていきたい。

「今」

『亡くなった方々のぶんも毎日を大切に生きてゆこう』これは『しあわせ運べるように』にある歌詞の一部である。私は今毎日を大切に生きているのだろうか？震災から 13 年が経ち記憶が薄れ、明日が来るのが当たり前だと思って生活している毎日。今日できることがあっても面倒くさがって明日やろうとする私。とてもじゃないけれどさっきの質問に胸を張って毎日を大切に生きています、と言えない。これからどんどん震災を知らない世代が増えてくる。『1995 年 1 月 17 日』これを見てどれだけの人が阪神・淡路大震災を思い出すのだろうか。震災を知らない世代の人達にはただの歴史の一部として見てほしくない。だから、震災を体験している私たちが書いている『語り継ぐ』を一人でも多くの人に見てもらいたい。そして、6400 人以上の方の死を無駄にしないためにも毎日を大切に生きていきたい。

震災からの贈り物

神戸市長田区大谷町
筒井　公美

一瞬にして全てを失った。
震災から１３年が経ち今では風化という言葉を耳にするようになって来た。だが震災で学んだこの想いや経験を更にこれから語り継ぎ、継承し続ける事が大切である。決して風化なんてさせない。

＊阪神・淡路大震災＊

私が覚えていることは、ほんの僅かな事だけだ。
なんでやろう？何であんな大きな地震があって大変だったのに何でそんなに記憶がないの？と小さかった震災当時の自分に少し呆れる。

私は震災当時住んでいたのは火事の被害が一番大きかった長田区だ。火の粉は垂水区まで飛んできたと言うほど、火事の被害が凄まじかったそうだ。
私は今もその長田に住んでいる。

被害

私の家族には幸い人的被害はなかったが、地震の衝撃で家に少しヒビが入った。被害が出たのは家の中だ。家具の固定などをしていなかった為、たくさん物が倒れ壊れた。

私の家は二世帯四世代の８人が一つの家に住んでいる。その頃は、父・母・兄・姉・私の５人みんなで一つの部屋に寝ていた。しかし、震災が起こる前日に兄が熱を出し、兄は父と私は母と姉の三人で違う部屋で寝ていたそうだ。地震が起こり、たくさんの物が倒れ上から落ちてきた。寝ていた所がもし、いつもと変らず５人で寝ていたなら、確実に私の頭の上に神棚が落ちていた事を知った。それを聞いた私は怖く思えた。
生と死が隣り合わせなのだと実感した。

地震が起きた時、母はたまたまトイレに入っていた。瞬時に停電し体が宙に浮いたようになり、頭の上にトイレットペーパーや花瓶が落ちてきた。揺れがおさまってトイレを流そうとすると、もう水が止まっていたそうだ。
台所は物が散乱していた。靴下を履いてので、その中をすり足で私たちが寝ている所へ来てくれたそうだ。
地震直後、父に「三人で布団かぶってここに居れ」と言われ、兄弟三人で一つの布団をかぶって身を守っていた。父と母は叔父や叔母の安否を確認し、外の状況を見に行った。
私は母が傍に居ないのと食器棚が倒れて、たくさんの食器が床に割れ散らばっているのが怖くて泣いていた。ずっと母を呼んでいた。
暗闇の中、手探りで懐中電灯を探し部屋の中を見てビックリしたそうだ。台所は食器や鍋等が散乱し、子供部屋もタンスが倒れ引き出しの中身が全部出たり、人形のケースのガラスが割れ人形も壊れガラスが割れ、本が全部出ていた。兄や姉の机の上の本棚からも教科書等が全部出て、足の踏み場も無いほど散乱していた。
窓を開け外の状況を見ると既に火災が発生していた。
近所の人が「大丈夫ですか？」と言って心配して訪ねて来てくれた。その方は家から少し離れた所に両親が住んでいるから見てくると言い行った。すると、慌てて帰って来て「家が倒れていて、一人じゃどうする事も出来ないから人を集めてほしい」と駆け込んできた。腰を抜かした驚きようだったそうだ。

時間が経つにつれて外が明るくなり町の被害の大きさが目に入ってきた。地震後の長田の空は夕方でもないのに夕方のような空をしていた。夕日のように空を赤く染めていたのは、建物が燃える火のせだったのだ。

８人みんな一つの部屋に身を寄せ合いながら寝ていた。ヘリコプターの音が鳴り止まなかった。怖くてなかなか眠れなかった。
余震が来たときは、怖くてたまらなかった。寝ころんでいたら「ゴー」という音がより聞こえるから怖かった。

一緒に住んでいる父方の祖母は祖父のお弁当を作るために早く起きていた。灯油のストーブをつけて座っていた。「ゴー」という音が聞こえ直ぐに地震だと気付きストーブを消した。その次の瞬間、激しい揺れに襲われた。それと同時に食器棚からたくさんの食器が滝の様に流れ落ちてきた。祖母は食器棚の近くに座っていたため、とても危険だったそうだ。その音を思い出すだけでも怖いと言っていた。
そんな事もあった為ショックで一日ご飯が食べられなかったそうだ。

叔父は司法書士の事務所を経営している。その事務所は長田にある。もし建物が火事になっていたら書類などが危ない為、１７日の朝、父と祖父は車で何度も事務所へ取りに向かった。家からさほど遠くないところだったが、その間でたくさんの人に助けて欲しいと言われたが助ける事が出来なかったそうだ。事務所自体は火事にはなっていなかったが、初めて行った時に東の方が火事になっているのが分かった。大切な書類とパソコンだけを運び出し重たいテレビや金庫はその場に置いて行った。
お昼頃に行った時、事務所の裏まで火が押し寄せているのに気付き、それを見た祖父は諦めた。
明くる日に事務所に行くと、水が無いから消すことも出来なくただ燃え続け、燃え尽き真っ黒で倒壊した事務所があった。倒壊した事務所の中には金庫があった。その金庫を開けると中まで煤だらけだったそうだ。
震災前によく事務所によく遊びに行っていたので、それを知った時とても悲しかった。

１８日の朝早くに父の仕事の関係者が大阪から車で水とおにぎりを持ってきてくれた。その事は母から聞いた話だ。その方は町が大変なことになっていると教えてくれた。
飲み水は近くにある蓮池小学校へ並んでもらいに母と行った事を覚えている。その時くらいしか外に出られなかったから、お水をもらいに行く時は喜んで付いて行った。他にも井戸水が出る家を教えてもらって車で貰いに行ったりもしたそうだ。
トイレに必要な水は飲み水には使えい学校のプールや川のお水をもらい流していた。地震が起きた翌日に雨が振ったそうで、その雨を溜めてトイレの水として利用したそうだ。

食べ物は家にある食糧でやりくりしたり板宿病院にパンを貰いに行っていたそうだ。コンビニやスーパーで買おうとしたら、いつもなら安く買えるものでも値段が高かったと言っていた。

疎開

一週間経って、父と母と兄と姉と私の５人で大阪の岸和田にある母の実家へ三月末まで疎開をした。大阪の家は特に大きな被害はなく普通に生活が出来ていた。

母方の祖父母は、自営業だった事もあってとても早起きだった。地震が起こった時は、もう既に起きていた。叔父は家の掃除をし、祖母は早朝から健康のため少し離れた公園へ友達と歩きに行っていた。祖父の話にとると、仏さんの花瓶が倒れる程度の地震だったと言っていた。こんなに大きな地震は初めてだと感じ、神戸がこんな事になっているとは思いもしなかったそうだ。
祖母は「ゴー」という音が聞こえ驚き、木にしがみ付いていたそうだ。友達は「お父さん、お父さん」と泣いていたそうだ。

岸和田からは震災で疎開して来ている人を招待してもらって陶芸に参加した。その時、毛布や見舞い金をもらったそうだ。

姉と兄は大阪にいる三月末までは大阪にある小学校に通っていた。４月に入ると同時に神戸へ戻った。蓮池小学校の校庭にはプレハブが作られ、そのプレハブの中で授業をしていたそうだ。

私たちが大阪に疎開している間、長田区にある家に居た総祖母・祖父・祖母の３人は２０日間くらいお風呂に入れなかったそうだ。何日かして知り合いの家でお風呂に入らせてもらっていたそうだ。祖母

の話では、水が無いことが一番辛かったという。震災をきっかけに祖母は毎晩すごく大きなペットボトルにお水をいれて、いつ地震が来て水道が止まっても大丈夫なようにしている。

小学校の頃

私が通っていた学校は、頻繁に避難訓練をしていた。
こどもの日が近づくと“こいのぼり”を歌うように、震災に近づくと“幸せ運べるように”を集会のときに歌っていた。高学年になると手話を付けながら歌ったりしていた。
私が小学生の時、みんなで震災の話をする機会があった。地震が起きた時は、どうしたら良いのか、外で遊んでいた時に地震が起きたら何処に避難するのか、避難ルートなど学校を通して家族で決めるようにもなった。
そんな時間をきっかけに、家を失くした子が身近にいると初めて知った。自分の家が大丈夫だったからみんな大丈夫だと思っていた。自分の事でもないし、どれだけ大変なんだとか、辛かったなんて分かってあげられなかった。

＊環境防災科に入学して＊

環境防災科に入って自分が変ったと思う。環境防災科は日々学ぶ事が出来る素敵な場所だ。

私は小学生の頃から環境に興味があり、環境防災科の環境という名前に惹かれて入学した。中学三年生まで舞子高校に環境防災科があるなんて知らなかった。何をきっかけに知ったのかも覚えていない。でも知って時、絶対にこの学科に入学してやる！という気持ちでいっぱいだった。
環境という言葉に惹かれて推薦を決意したので、母は「防災も考えなあかんねんで？」と不安そうに何回も私に言っていた。その時、私は全くと言っていいほど防災に興味が無かった。

環境防災科に入って直ぐに諏訪先生の授業を受けた。その時はとても緊張していたし先生の話を聞くのに必死だったのでよく覚えている。
その授業で一番覚えている言葉がある。それは、発信し継承するという言葉だ。私は、家に帰ってその言葉の意味を何度も何度も辞書で調べた。初めて耳にする難しい言葉がかっこよく思えたのだ。継承するということは、受け継ぐという意味だ。震災で学んだことを継承するのだ。
今もこの発信・継承という言葉が好きであり、同時にとても大切だと感じている。

環境防災科はいろんな方の震災の時の話や被害にあった方の話を聞く貴重な時間がある。生徒に話を聞いて欲しいと言って来る方も居られた。
専門科目の授業だけで無く、阪神・淡路大震災の日である一月十七日に１．１７震災メモリアルを毎年行っている。その行事の中でもさまざまな方の話を聞く機会があった。
私が聞いたのは消防の方の話だった。震災当時、長田にある長田消防署に勤めていた方の話を聞いた。消防の話は何度か聞いた事があったが何度聞いても心が痛んだ。消防の方が、どんなに辛い思いをしたのか、どんなに大変だったのかを知った。
そんな方の話を聞くと、あまり辛い思いのない私でも１月１７日はとても悲しい日となった。

初めて参加したボランティアは募金活動だった。何時間も街頭に立って大きな声を出して呼びかけをした。その頃は少し汗ばむ程度で立っていると少し頭が暑くなった。
最初は、何回も呼び掛けの言葉を間違えたりして恥ずかしかったが先輩や友達に支えられながら頑張ることが出来た。
募金活動をしているのを見て、買い物途中の女性が足を止め募金してくれた。その方は私たちを、とても褒めてくださった。自分にも同じくらいの子供がいると話していた。その方はまた買い物に行ったが、少しすると私たちの為にお水と果物を買って来てくださった。私はその優しさがとても嬉しくて自然と涙が出た。
募金活動をして人の温かさに触れることができたのだ。
一円でも十円でも募金してくれた事が本当に嬉しく思えた。ボランティアは人の優しさと温かさを感じられる素晴らしい事だ。
ボランティアは自分の人生を変えると思った。これからも続けたいとその時、心から思えた。

高校二年の夏休みを利用して国際交流をしにネパールに行った。
ネパールの防災について授業で学んでいた。実際行くと、授業で見た写真と同じものを見たり触れる事ができた。実際の同じ世界なのに違う世界を知った。
辛くて目を背けたく出来事を目の当たりした。日本とは違うことだらけだった。日本は平和だと感じ、涙した。その分学ぶことが沢山あった。毎日が新鮮だった。

ボランティアでいろんな所へ出て発表を学びいろんな経験をした
その他にも、授業の一環として小学生と一緒に安全マップ作りを出前授業を行った。今では、震災を経験していない子供が増えその怖さを知らない。だからこそ子供たちに防災の大切さを伝えていくべきだと感じた。

何よりも阪神・淡路大震災で学んだ教訓を震災からの贈り物だと思い無駄にしたくはない。私たちのように防災を学んでいる人たちが、これからもっともっと発信していくべきだと思っている。

環境防災科に入学できた事を心から誇りに思う。

＊卒業してから＊

これからも大きな災害が世界で起こるだろう。その時に、どんな形でも良いから被災者の方の為に何かしたい。環境防災科で学んだ事を活かしそして、阪神・淡路大震災の教訓を活かして行きたい。

環境防災科を卒業しても、ボランティアに参加しコミュニティーを広げたいと思っている。地域の行事にも進んで参加していきたい。もちろん環境防災科で学んだ事を発信し継承して行けたらと思っている。

震災の記憶

神戸市垂水区本多聞
東矢　祐輝

僕の記憶

当時、まだ幼かった僕にはほとんど記憶がない阪神・淡路大震災。なんとなく覚えているのは、当時住んでいたマンションは少し古かったので、煉瓦の屋根が少し落ちていてマンションの壁にも数か所ひびが入っていた。

自分の家は食器がほとんど割れていて、キッチンには破片が散乱していた。震災の１週間ほど前にディズニーのグラスをたくさんもらったのだが。お気に入りのグラスだけ全て割れていて、号泣したのを覚えている。今考えると、１番好きなものだからこそ取りやすくて見えるところに置いていた、というのが仇となったようだ。

地震が起こった時に、僕はちょうどインフルエンザにかかっていた。そして自分のマンションの階段を下りている時余震が起きた。

「ごごごごごご」

それから僕は3日ほど記憶がなくなっている。お父さんの話を聞くと僕は階段から転げ落ちたらしい。僕の記憶はこのくらいしかないのでお父さんから話を聞いた。

震災前

震災の何日か前、僕は家族でお父さんの友達の家に遊びに行っていた。そして帰りの車の中でトンネルに入ったとき「もし今地震が起きたら、トンネルが崩れてみんな死んでまうなぁ」という話をしていたのである。まさかその何日か後に本当に地震が起きるとはだれも思っていなかっただろう。その後、僕はインフルエンザにかかってしまい、何日も寝たきりだった。

震災直後

1月 17 日 5 時 46 分、大きな「ドーン」という音とともに下から突き上げるような縦揺れが起きた。その時、僕らは一つの部屋に父、母、姉二人、僕の 5 人で寝ていたので、お父さんがすぐに僕ら兄弟を抱え込んだ。しかし、1 番上のお姉ちゃんだけ抱え込むことができずにいた。お姉ちゃんは地震に気付かずに寝たままでいる。そして激しい横揺れが起きた。ようやくお姉ちゃんが起きた。お父さんが
「動かんと、布団を被ってじっとしとけ！」
と言った。お姉ちゃんはおびえながら布団の中にうずくまっている。一体どのくらいの時間がたったのかはわからないが、ようやく地震がおさまった。しかし、父は、
「すぐに揺り返しがくるから絶対に動くなよ！」
と言った。そして、すぐにまた大きな揺れが起こった。何秒か後に地震はおさまったが、まだあたりは真っ暗である。

とりあえず懐中電灯を探してまわりを見てみると、寝室では、タンスはすべてダンボールを天井いっぱいにつめていたので、倒れていなかったけど、1 番上のお姉ちゃんの寝ていたところの頭の上にあったタンスの引き出しが飛びだしていて、奇麗にお姉ちゃんの上を飛び越えて足の下の位置で、だるま落しのだるまのように積み重なっていた。これを見たときお父さんはぞっとしたらしい。

キッチンでは食器の大半が床に落ちており、ほぼ全滅だった。

これは余談だが、父は前日の寝る前にチキンラーメンを食べて、テーブルの上に片付けないで放置していた。それが、震災の後、テーブルの上に汁一滴すらこぼれずにそのままの形で残っていた。

その後、親戚のほとんどが近くに住んでいるので、安否が気になり片っぱしから電話をして、全員の無事を確認することができた。しかし、電話し終わった後くらいから、電話は回線がパンクしてつながらなくなった。

避難後

それからお父さんとお母さんで、家に残るか避難するか相談していて、お母さんがとても怖がっていたので家の近くにあった本多聞小学校に避難することにした。そして家を出た直後に、僕は階段から転げ落ちたのだ。

僕たち家族が学校に着いて体育館に入った時は、まだ２、３組の家族が避難しているだけだった。そして、お母さんが学校の先生に、僕が病気だからという説明をして、マットと毛布をほかの人より少し多めに分けてもらったらしい。そして、お父さんは小束山の美容院で働いていたので、原付で仕事場まで行った。

お父さんの職場の近くは、家の近くより少し被害が大きかったらしく。とりあえずその日は仕事がなかったらしい。

その後、長田に住んでいる父方の祖父のことが気になって、お父さんは原付で長田に行こうとしたが、長田の街は、すでに道路はめちゃめちゃになっていて、原付どころか自転車すら通れないような道になっていたので、すぐに帰ってきた。しかし、父の兄がオフロードバイクを持っていたので、それを借りてガタガタの道を乗り越えながらお父さんは実家に向かった。

実家に着いてみると、実家は何ともなかったのだが、向かいの歯医者さんが全壊していて、がれきなどが家の前の道路に散乱していた。幸い民家ではなかったので、けが人はいなかったようだ。

そして、お父さんが目にしたのは、家の横の空き地で近所のたくさんの人たちと食事会をしている光景だった。たまたま家の近くに中華料理屋さんがあって、食材が腐ってしまう前に、みんなでバーベキューをしていた。食材はとても豪華なものがたくさんあり、その光景はまるで、被災者ではないみたいだったらしい。

そのころ僕たちは学校の体育館にいて、どんどん人が増えてきているのにびっくりしていた。はじめは 15 人くらいだった体育館が、人であふれかえっていた。

お父さんは何日かしたら仕事をしに行った。ガスが復旧してなかったので、ボイラーやプロパンガスで営業していたところはすぐに営業を再開したらしい。

姫路に疎開

避難所生活にストレスを感じ始めたころ、家に帰ろうか？という話も出たが、お母さんはとても怖がりなので、家に帰るのが怖いので無理だと言い出した。そして、家族で話し合った結果、姫路は被害が少ないと聞いたので、お父さんは仕事なのでお父さんだけ神戸に残り、ほかの家族で姫路の親戚の家に避難した。姫路ではライフラインは止まっておらず、普通の生活を送っていたようだ。蛇口から普通に水が出ることがとても感動的だった。１週間ほど姫路で生活をしていて、その後神戸に帰った。お父さんはその１週間、知り合いの家をわたり歩いてとても大変だったそうだ。

父の友人の話

５時４６分

「どーん！」

という音とともにぐらぐらし揺れだした。照明などが外れて、ベッドの近くに落ちてきた。窓ガラスが割れて、床に散乱していた。

どれくらいの時間がたったかわからなかったが、揺れがおさまったと思って気を抜いていたら、またすぐに余震が襲ってきた。余震もすごい勢いでゆれていたので、ものすごい恐怖だったらしい。ベッドの上から動くことができずに、じっとしている。外から救急車の音がたくさん聞こえてきた。すると今度は近所の人たちの話し声が聞こえてきた。きっと家の中は危険だと考えて出てきたのだと思う。自分も何とかして部屋から出ようとしたが、出られないことに気がついた。部屋の本棚が倒れてしまってドアを完全に塞いでしまっていたのだ。ドアは開かないし、床はガラスなどの破片でいっぱいで、どうすることもできなかった。さらに余震が続く中で、布団にくるまってじっとすることしかできなかったらしい。

すこし時間がたった時、下の階からお父さんの声が聞こえてきた。

「大丈夫か！？」

返事をしようとするとお母さんの声も聞こえてきた。

「あんた！犬の心配じゃなくてまずは娘の心配やろ！」
自分のことを心配してくれているのかと思ったら、当時飼っていた犬の心配をしていたらしい。犬は何ともなかったようだ。犬の後に救出されるととても複雑な気分だった。
ようやく、すこし落ち着いてテレビを見ようとしたが、電気が止まってしまっているので映らない状態が続いた。その間に懐中電灯で家の状況を確認すると、窓ガラスは割れて床に散乱して、キッチンでは食器が散乱している。壁にも何箇所かひびが入っていた。
そうこうしているうちにテレビがついた。テレビを見て長田の街の映像が流れた。長田の街がすごいことになっているのを知った。死傷者の数や行方不明者の数を見てとてもびっくりした。まだ家の外に出ていなかったので、家の外に出るのが怖かった。

恐る恐る家の外に出てみると、地面には亀裂が入っていてガス漏れをしていた。周りの家を見てみると、全壊している家はなかったが、半壊している家がいくつか見られた。それを見て、自分の家は亀裂程度ですんだのでほっとした。
家に戻ると、電気はすぐに復旧したので行動しやすかったが、水がない。水がないからトイレも流せない状態なのが１番困った。コンビニに水を買いに行こうと思ったが、どこに行っても売り切れ状態になっていた。隣人から須磨のほうは水道が使えると聞いたので、須磨の知り合いの家に水をもらいに行った。その家には浄水器も付いており、飲み水をペットボトルに入れてたくさん貯めていた。飲み水以外に使う水は、浴槽にためて、洗面器でトイレを流したりした。
水は手に入ったがガスはなかなか復旧しなくてとても困った。ガスがなかったらお風呂に入ることもできないので、お風呂屋さんがすごく繁盛していて、お風呂に入るのに２時間ぐらい並ばないといけない状況だった。ちなみに、家の近くにはお風呂屋さんがなかったので、須磨のほうのお風呂屋さんまで家族で行っていた。お風呂屋さんが大繁盛したが、長時間並ばないとお風呂に入れないので、たくさんの人が水のいらないシャンプーを買って使っていたらしい。でも水のいらないシャンプーはほとんど意味がなかったらしい。
１週間ほどしたら水道が復旧した。水道が復旧するとカセットコンロがバカ売れした。みんな水が手に入るので、自分でご飯をつくるためである。
震災が起きてすぐ後に、火事場泥棒がたくさん出てきた。火事場泥棒とは、災害時の混乱に生じてコンビニなどのお店から商品を根こそぎ持っていくことである。火事場泥棒が全国から神戸に集まってきたという噂まであったらしい。
遠出をするときは、たくさんの人が最短距離だし、目印になるので線路の上を歩いていた。
さらに、自転車やバイクもバカ売れした。みんな、三輪バイクですら、多少高くても買って遠くに移動するときに使ったらしい。

１カ月ほどたつとガスが復旧した。ガスの復旧が遅かったのは、道路の亀裂からガス漏れをしている箇所が多かったからだと思う。そのころ、近くの星稜高校の近くや、垂水郵便局の近くなど、空き地という空き地に仮設住宅がたくさんできてきた。というより、神戸市のすべての区で仮設住宅がたくさんできてきて、尼ケ崎から西ノ宮にかけても仮設住宅だらけになっていた。仮設住宅は、5～6 年あったと思う。
たくさんの家がつぶれたので、多くの家族が新居を購入した。そのため建築業界は大忙しで大繁盛したそうだ。でも、建築業界は何もしなくてもたくさん仕事が入ってくるので、あまり質の良くない家もあったらしい。俗にいう「手抜き工事」である。
家を建て直したところは、震災後から建築基準法が厳しく適用されるようになって、狭くなってしまった家がたくさんでてきた。
家を買うお金がない人や、仮設住宅に入りたくない人は、賃貸のマンションを借りたらしく、一気に賃貸のマンションも人でいっぱいになったらしい。
震災の後、今までほとんどの人が持っていなかった携帯が普及しだした。やはり災害時にすぐ連絡できて便利だと考えたからである。たくさんの人が携帯を買ったから、携帯が急激に安くなった。今では１円携帯などもあるが、当時は１０万円ほどする高価なものだった。携帯が普及したのも震災のおかげといっても、間違いではないと思う。

お父さんがお客さんや友達から聞いた話

この前お父さんは、小学校の同窓会をしていて、その人たちの話を聞くと、父の友達の家は６軒ほど

全壊だったらしい。そのうち 4 軒は引っ越して、2 軒は立て直したらしい。
　お客さんから聞いた話だが、お客さんの友達が震災の前日に長田に引っ越してきて、地震がおきて、家が全壊してしまい。家族全員がなくなってしまうという悲しいできごともあったらしい。

環境防災科に入って

　中学時代、進路をなかなか決められず悩んでいた時に環境防災科の存在を知った。最初にちょっと興味本位でパンフレットをのぞいてみただけだったが、そのパンフレットに載っている消防学校の写真などを見て、とても興味がわいてきた。その時はまだ将来について何も考えていなかったので、環境防災科に入って消防士になろうかな、とも考えたりした。でも、その時、もし消防士にならなくても防災などの知識は知っていて絶対に邪魔にならないし、将来的になにかあった時に絶対に役に立つと思った。
　そして、環境防災科に入って、たくさんの外部講師の方々の話を聞いたり、災害のメカニズムについて勉強したりたくさんの知らない言葉を勉強した。
　たくさん防災について勉強していくうちに、阪神・淡路大震災の時の自分は本当に何も知らなかったのだということがわかった。もし今地震が起きたら、自分が地域の防災のリーダーになれるような知識を身につけることができたと思う。でも本当に地震が起きた時は自分だけが防災のリーダーになるのではなくて、ひとりひとりが地域の防災のリーダーとして動けるように少しでも多くの人に自分の持っている防災の知識を広めていきたいと思う。これは、簡単でもあるけど難しくもある。自分が一人に伝えるだけで、その人がまた誰かに伝えて、という風に伝わっていくので簡単だと思うのだが、どのように伝えるのか、ということも大事になってくるし、もしかしたら、自分が発信した情報が少しずつ変わっていって全く違うものになっているかも知れない。だから、今後は、自分のできる範囲で、どうやったらもっとたくさんの人に正確に防災が伝えることができるのかを考えたいと思った。

　しあわせはこべるように

　最近、この歌をよく耳にする。なぜなら、妹が小学校で習ったので家でもずっと歌っているからだ。久しぶりにこの歌を聴いて、「今の自分は昔の自分とはかわったんだな。」と思った。なぜならこの歌の始まり

　「地震にも負けない強い心をもって亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこう」

　この部分を聴いただけで鳥肌が立った。胸が熱くなり泣きそうになっていた。きっとこの気持ちは環境防災科に入っていなかったら絶対になかっただろう。環境防災科に入って、阪神・淡路大震災の詳細や体験談をたくさん聞くことができたから、この歌を聴いて当時のことをイメージすることができた。何かを伝えるのに歌という手段はとても効果的だと思う。
　僕らでもほとんど覚えていない阪神・淡路大震災だが、ぼくらより下の学年の子供たちは全く覚えていない人がほとんどで経験をしていない人ももっとたくさんだけど、この歌を通してでも少しだけでもたくさんの子供たちにあの震災を伝えて、また人間が同じ失敗をしないようにしていきたい。

幸せ降りそそぐように

神戸市垂水区千代が丘
鳥越　美紀

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分、突然起きた阪神・淡路大震災は神戸の町、私たちの生活までも変化させた。
私は当時四歳であまり記憶がない。これは良いことなのか、悪いことなのかは、まだ疑問だけれど私はこの震災をきっと忘れないだろう。

１．震災前日

明日、まさか震災が起こるなんて思いもせずに、いつもと変わらない日常を送っていた。誰しも、地震が来るなんて構えながら過ごしてはいなかっただろう。突然やって来る。災害とはそういうものだと思う。

夕方 6 時過ぎに震度 1 の地震があった。後になって思えばこれが予兆だったのではないかと、母は近所の人達と話し合ったらしい。
私は小さな地震があったことすら知らなかった。

２．地震発生

私の家族は父、母、祖母、兄、私の五人家族。
垂水区に住んでおり、幸い被害が少なかったので全員無事だった。

前にも述べた様に私にはあまり震災の時の記憶がない。少し覚えていることは、二段ベッドに寝ていた兄と私を父が起こしに来たこと。珍しく駄々をこねず、すぐに起きた。あたりは薄暗く父に抱かれながら階段を下りた。それからは、兄と二人でテーブルの下に訳も分からず入りじっとしていた。この時、私に恐怖感は全然なかった。しばらくして、外に出た。近所に住んでいる人たちもみんな、外に出ていて変な気分だった。私は家の横にある長い階段に毛布に包りながら祖母と座っていた。
この夜からしばらくの間、家族全員で一階のリビングに寝ることになった。震災があった次の日、食器棚が倒れていて、それを片づけている母と祖母の姿を覚えている。ここで、何か大変なことが起こったのだと、やっと理解してきた。
ここまでしか私の記憶はない。だから、父に震災当時の話を聞いた。

朝、目が覚めて起きようとしたら急にドーンっという音と共にグラグラグラと今までに経験のない揺れが来て、その場所から動けなかった。揺れの時間は実際、短かっただろうけど非常に長く感じた。
それからすぐ、一階で早くに起きていた妻から「雄太(兄)と美紀を見に行って！」という声がして、子供二人が大丈夫かどうかを確認に行った。しかし、暗かったのでなかなか二人を確認できない。「大丈夫か？」と声をかけると返事があったので二人を一階に抱いて連れて下りた。また揺れが来るかもしれないので、二人にテーブルの下で毛布に包まって、じっとしているようにと指示をした。何回か揺れが来たので家の中は危ないかもしれないと考え、外に出て車の中から様子を見ることにした。
すると、真っ白い雪みたいな物が車の上にだんだん積もっていった。それは後からわかったことだが、長田の火事の灰が垂水まで風に乗って飛んできたのである。
そして、家の中に戻ってみると家具が倒れて、コップや皿が割れ、裸足では歩けないほどだった。家は大丈夫だったが、家の中は大変なことになっていたのだった。
私が一番驚いたのはテレビだ。二階の私たち夫婦の寝室にテレビが落ちていたのだ。これだけだったら、普通と言っては言葉が悪いが大きな地震ならよく見られる光景だろう。しかし、そのテレビが落ちていた場所はいつも美紀が寝ていた場所だったのだ。美紀はいつも夜になったらひとりで寝るのが怖くなって、私たちの寝室に来る。だけど、この日はおとなしく子供部屋の二段ベッドに寝ていた。テレビの下敷きにならなくてすんだのである。このことがとても印象的だった。

この父の話を私は何度も聞いたことがある。もし私がいつもの場所で寝ていたら…、そんなことを考

えるとゾッとする。いつも寝ている場所に居なくて助かった、いつも寝ている場所に居なくて助からなかった、こんな人は震災の時たくさんいる。私もその一人である。これは全部たまたまなのだ。震災が引き起こしたことなので、誰も予測ができない。

３．震災直後

震災が起こり、電気・ガス・水道のライフラインが止まり電話も通じなかった。父は会社に何度も電話をかけたが全然通じなかった。家の電話は使えないので公衆電話に多くの人が並んでかけていた。

電気は思っていたよりすぐについた。震災その日の内につくことができたのだ。しかし、テレビはケーブルテレビだったのでケーブルがやられてしまってなかなか映らなかった。

水道の復旧が一番遅く、飲み水の調達が大変だった。それだけでなく、お風呂の水とトイレの水もなかったので、生活するのに苦労した。近くに税務署の寮があり、何故かそこだけ水が出たので父がもらいに行っていた。

私は震災当日に熱を出した。テレビが映らなかったので母は被害状況を知らなく、大震災と言うほどの地震だと知らなかった。だから、私をすぐに病院へ連れて行ったのである。この日はそんなに混んでなく、すぐに診察してもらえた。

数日後、なかなか熱が下がらなかったので、また病院に行った。しかし、病院はとても混雑していた。なぜなら、垂水区で小児科はそこの病院しか開いていなかったのだ。

病院に違う病院からケガ人が運ばれるという連絡が入った時、小児科の先生は「私が行かなくて良いのか。私が行くほうが早いのに。」と、嘆いていた。

病院で母は看護師さんに掃除の手伝いを頼まれ、少しの時間だったが手伝いをした。震災で人手が足りなくなることはよくある話なのだ。

４．父の仕事

父は道路等の舗装工事を中心とする建設会社の営業をしていた。

震災後は電車がところどころ止まっていたので、会社（三宮）に行くのに、止まっている駅と駅の間は歩いていた。だから、何時間もかけて会社に行くことになった。

会社の近くのビルは、倒壊していたり、半壊していたので、その周りの空気は非常に悪かった。だから、多くの人は防じんマスクをかけて外に出ていた。

父の会社のビルは倒壊していなかったけれど、中はグチャグチャで入れない状態だった。父たちは何日もかけて会社を綺麗に整理することから始めたのだった。そうこうしているうちに、倒壊していたビルも撤去されていき、街の空気も綺麗になった。そして、電車もだんだん復旧していった。

父は道路の復旧のため、神戸市役所と何回も打ち合わせをした。神戸市役所のエレベーターは壊れていて使えなかったので、どんなに上の階でも階段で何回も往復を繰り返した。

神戸市には、やはりお金がなく工事の資金についてとても揉めた。話し合いの結果、何とか低予算で工事を行うことに承諾した。

道路被害状況で最もひどかったのはポートアイランドの中の道路だった。液状化現象といって、道路の上に泥水がわき出て来る現象が起こったのだ。バリバリに割れた道路と泥水だらけの道路を工事の作業員の人達が昼も夜も働いて、少し時間はかかったが震災前の様に戻していった。

５．小学生

私の小学校では毎年１月 17 日が近づくと防災学習をしていた。防災学習の日は必ず開放授業だった。

低学年では私たちの前で先生や親から震災体験を聞く授業や、震災についての冊子があったのでそれを読んで皆で何を感じるのかという道徳の様な授業もした。

高学年では自分が震災で体験したこと、親や親せきが体験したことを作文にして発表する授業があった。

授業の内容は学年によって様々だが、全クラスに共通していたのは防災学習の後にある避難訓練と「しあわせ運べるように」の合唱だった。

避難訓練では、地震が発生したと想定して放送が流れ、先生の指示に従ってクラスで運動場に避難。

まずはクラスごとに並んで点呼がとれたら地区ごとに並び替えた。きっと、揺れが治まりスムーズに自宅へと帰れるようにしていたのだと思う。

「しあわせ運べるように」の合唱では、クラスで親の方を向いて歌った。私の母はいつもこれを聞いては泣いていた。初めは恥ずかしいから泣くのは止めてほしいと思ったが、学年が上がるごとに震災の恐怖や教訓を教わり、母の泣いている姿も理解出来る様になった。

この「しあわせ運べるように」の作詞・作曲した臼井真さんが小学校に来てグラウンドで歌を歌ってくれた。その時は、「凄い人が来た。」と、言う印象だけだった。今、その時の記憶があまり残っていないのでとても残念だ。

「しあわせ運べるように」は第二の校歌と言って良いぐらいよく歌い、とても心に残っている曲だと思う。

このとき私は、防災教育はどの学校もしているものだと思っていた。

６．中学生

私は舞子高校の隣、多聞東中学校出身で、ここも防災教育を授業に取り入れていた。

中学一年生のときは 1 月 16 日に舞子高校に行き、1.17 メモリアル行事に参加した。これは今も続いている。

体育館で高校生が震災のことについて、とても詳しく堂々と喋っていることに凄く驚いたのを覚えている。パネルディスカッションも初めて見て、意見をしっかりと述べている高校生がとても大人に見えた。

中学校の創立 30 周年式典ではフォークシンガーの高石ともやさんを招いてコンサートを開いた。「しあわせ運べるように」などいろいろな曲や震災の話を聞き、30 周年式典を通して、歌を通して地震について学んだ。

中学一年生や 30 周年式典以外でも毎年、防災学習はあった。

小学校のときと同様、地震が起きたと想定して避難訓練をし、運動場で点呼をとると言うものだった。その後は PTA の人たちが作った炊き出しを食べた。

中学三年生の時には、教室でここ舞子高校環境防災科のパンフレットが全員に配られた。それを使って防災への取り組みなど様々な内容で授業をした。そこで私がパンフレットを見て印象的だったのは消防学校の写真だった。高校生が消防士と一緒にロープをつたっている姿に驚いた。だから、環境防災科に入るには体力が必要なのかと思っていた。しかし、実際はそんなに過酷ではなかった。

小学校・中学校で学んだ防災教育もほんの僅かなものでしかなかったけれど、1 月 17 日を忘れない様にすることだけでも大切なことだと思う。この様な防災教育が全国に広まれば…と思う。

７．環境防災科

私が舞子高校に入ろうと思ったきっかけは、家が近く一番身近な学校だったことだ。私の中学校とも交流があったし、舞子高校の雰囲気が良かった。

それから環境防災科があることを知った。地震や災害のことが学べる学校だと聞き、興味をもった。

この時、私は阪神・淡路大震災についてもっと学びたかったのだ。自分自身が体験した震災をもっと詳しく、そしてこの震災の様な被害をどうやって減らせられるのか。

入学した一番の理由は震災を体験したことのない子供たちに災害の恐ろしさを教えたかったからだ。

2006 年春、環境防災科に入学。

一年生では阪神・淡路大震災についていろいろな方面から学んだ。例えば消防から外部講師を招いて震災当時の出来事を聞いた。震災直後、消火活動で指示された所に行く途中で何人もの人に助けを求められたが見捨てなければならかったことに凄く胸が痛かったという。他にも水道、電気、レスキュー犬などたくさんの外部講師を招き授業をした。

他の授業では断層や日本列島の構造など基礎の部分から学び、災害のメカニズムを学習した。

また、小学生と一緒にまち歩きをし、防災マップを作製したり、小学校へ出前授業も行なった。小学生と一緒に防災を学んだり、災害を教えるのはとても楽しかった。

授業の他にもボランティア活動をした。

いろいろなフェスティバルに参加したり、募金活動も実際に行なったが、一番印象に残っているのは

新潟県ボランティア派遣だ。
　新潟県中越地震の被災地である長岡市でボランティア活動をした。主な内容は二つの仮設住宅に行き、グループを二つ作って、クリスマス会の手伝いと震災被害やその後の生活についての聞き取り調査をすることだった。
　一つ目の長岡の仮設住宅では、私のグループはクリスマス会の手伝いをした。主に私たちが進行して地域の人達と一緒にじゃんけんゲームをしたり、考えてきた歌を披露したり、子ども達にはプレゼントを手渡したりした。凄く喜んでくれたのを覚えている。
　クリスマス会が終わって、少し地域の方々と話す時間が出来た。私はこの様な会を開くことについてどう思っているのか。クリスマス会に子どもと来ていた親に尋ねた。親は「この様な会は子どもも喜ぶし、若い人達と遊ぶのは楽しそうで、私たちも子どもの面倒みてもらえるので嬉しい。わざわざ遠くから来てくれて、ありがたい。」と、言った。これを聞いて私は心から来て良かったと思った。
　山古志の仮設住宅では、神戸から新潟へメッセージを模造紙に書いた。「新潟へありがとうを神戸から」というメッセージだ。これは阪神・淡路大震災を経験した神戸に手助けをくれた人々に御礼をしたいという気持ちがこもっている。
　その後に、山古志の住宅の人達とお茶会を開いた。そこで震災後の生活や仮設住宅での話を聞いた。「新潟県中越地震を被災して近所付き合いを大切にするようになった。」「仮設住宅の人との生活も楽しい。」などマイナス面だけでなくプラス面の話も聞けた。私たちも阪神・淡路大震災について今まで授業で習ってきたことや、体験したことを話した。すると、山古志の人達が阪神・淡路大震災の教訓を生かしているのが分かったのだ。とても嬉しい報せだった。
　私は新潟に行って、人の温かさ、繋がりの大切さをあらためて感じた。よく先生や先輩方が「ボランティアはすることよりも得ることのほうが多い。」と、言うが、このボランティア活動でその意味が分かった。被災地の人達からの笑顔が私のパワーだった。
　なにより、阪神・淡路大震災の教訓が生きていることが嬉しく、この教訓は絶対に忘れてはいけないことだと思うし、伝えていかなければならないと思った。
　このボランティア活動はほんとにためになる良い経験だった。もっといろいろなボランティア活動に参加して、自分の視野を広げたいと感じたのもここからだった。

　環境防災科に入って、本当にいろいろな活動、取り組みをした。この学科に入ってなかったら私は多分、一生経験出来なかったことだろう。きっと災害も何も考えずに過ごしていたのではないだろうか。それは今の普通に過ごしている人たちの多くにも当てはまるのではないだろうか。そんな人たちに私は伝えていきたい。ここで学んできたことを。

８．これから

　阪神・淡路大震災のことを書くのに両親に話を聞いた。やはり、13 年もの月日が流れてしまうと忘れてしまっているのが現実だった。それが、なぜだかもったいないと感じた。

　震災は決して良いことではない。しかし、マイナス面ばかり捉えるのはもっと良くないのではないだろうか。地域とのコミュニケーションの大切さや、耐震の大切さなど震災を経験したからこその教訓を自分の蓄えにして、いざという時、もしくは日常的に役立てていけば、震災も少しはプラスなことに変わると私は考える。

　将来、私は自ら積極的に動いて防災を広めたいと考えている。
　防災の広め方といっても様々だと思うが、私は特技・趣味＋防災を広げたいと思っている。「防災」とだけ言ってしまうと、難しいとか、何をして良いか分からないと思うが、そこに「特技・趣味」を繋げてみるとどうだろう。例えば、私は絵が好きなので、デザイン＋防災をしたいと考えている。防災のポスターを作製したり、地域で子どもたちを集めて一緒に災害の絵を描いたり、環境防災科で学んだことを教えたりしたいと思っている。
　この様に、自分の好きなことを防災に繋げていけば、楽しく多くの人に防災が広まるのではないか。と、私は考える。

　人間は忘れていく生き物だと思うが、繰り返し思い出すことによって忘れはしない思いの深いものになる。だから、私は少しでも多くの人に阪神・淡路大震災を語り継いでいきたい。そして阪神・淡路大

震災の教訓が誰かの助けに変われば、とても嬉しい。

阪神・淡路大震災の教訓から世界中の人々に幸せが降りそそぐように…

記憶のカケラをたどって…

明石市鳥羽
中川　夏姫

なぜだろうか？私が今生きているのが不思議でならない。
住んでいたところが明石市で、そんなに揺れが激しかったとは言えない。ましてや、特別怖い思いをしたわけでもない。けれども私はふと、考える。「あの時父が家具の固定をしていなければ、確実に今の私はいないのではないか。」

1. 震災前

事の発端は、私が今のマンション（震災当時も住んでいた）に引っ越してきた時である。引っ越しをしたのは震災が起きる前の年の 7 月だ。私の住んでいるマンションは当時、建ってから数年ぐらいで、建物もしっかりしていた。しかし、やたらと父が、「地震が来たらあかんから。」と言って、家中の家具すべてを金具で留め、タンスや食器棚の下には段ボールを詰め出した。すべての家具を少し斜めにして、壁にもたれるようにしたのである。そうすることで、前に倒れにくくしたのだ。それだけでは足りないということで、天井の柱との間で揺れないようにと、そこにも詰め物をし、完璧に固定した。神戸に地震なんて来るわけない、と思っていた母は、不思議そうにしていたそうだ。それでも、私たち家族が寝ていた部屋には、背の高さを優に超す衣装ダンスが壁一面にあったため、安心して眠ることができた。
阪神・淡路大震災が起こる前夜、東にある窓から満月が見えていた。いつもより大きさも明るさも増していたそれが印象的だった、阪神・淡路大震災と言われると一番に前の日の満月を思い出す、と母が話していた。

2. 地震発生直後

1 月 17 日午前 5 時 46 分。私はまだ夢の中だった。地震が起きてすぐに母が起きた。母は一番に父を起こし、父はまだ眠っている私を蹴り飛ばしたそうだ。体では壁一面にあるタンスを押さえながら。父は私をタンスから遠ざけようと、隣の部屋に転がしたが、それでも私は目を覚まさなかった。そうしていると、妹をリビングに連れて行った母が私を起こしにきた。私は一度眠ってしまうと、なかなか起きない。どんなに大きな音でも目を覚まさないため母は、半分寝ている私を寝ていた和室から引きずり出した。そして、母と妹と私の 3 人でふかふかの羽毛布団を被った。ソファーの上で小さく身を寄せ合って、地震の揺れが収まるのをただ待っていた。その間も父は両手を一杯に広げ、タンスを押さえている。
揺れが収まり、周りの状況も少しずつわかってきた。家の中の家具は全く倒れていない。父が家具の固定をしてくれていたからだろう。寝室の衣装ダンスも、倒れて来なかった。あの大きなタンスが倒れてこなかったことは、今でも不思議に思う。それが倒れてきていれば、家族全員下敷きになっていただろう。家具の固定をしていなかったら…と思うと、ぞっとする。私は、死んでいたかもしれないのだ。そう思うと、今家族みんなが生きていることに感謝しなければならない。そんな風に考えるようになったのは、環境防災科に入ってからのこと。

家具が倒れなかった半面、棚の中のものはほとんど全部と言ってよいほど落下し、ぐしゃぐしゃに壊れていた。大切なお皿も、家族の写真もアルバムも。何もかもがぐちゃぐちゃになっていたのは、私の興味をかきたてるものがあった。しかし、なぜか、見てはいけないのではないかと思う気持ちがあった。今まで使っていたお椀、お皿。それらが形を失い、もう元には戻らないものとして、存在している。それを母が写真に撮っていた。忘れないためだろうか。今もまだアルバムにその写真は貼られている。

朝早く起こされて、寒い部屋の中で小さな布団を 3 人で共有し合っている。マンションの 3 階で一戸建てよりは暖かいと、よく言われるけれども、部屋にぬくもりは全くなく、私は体の芯から冷え切っていた。そして、トイレに行きたくなった。
「誰かが行くなら、みんなトイレに行ってから、最後に流そうね。」と言われていたが、まだ寝ぼけていた私は用を足した後、トイレのレバーを握り、いつも通りに流してしまったのだ。その時、父にも母にも怒られた。だが、当時の私は、何が起きたのか理解できなかった。ただいつも通りにしただけなのに、水を流したくらいでなぜそんなに怒るのだろうと、すごく不思議に思っていたことを覚えている。

この記憶は家族のだれよりもはっきりと覚えていた。私の中で阪神・淡路大震災の震災体験といえば、「トイレ」が出てくるのも、そのためだ。今、考えてみると、トイレの水を流すなんて、本当にバカだな、と思ってしまう。トイレタンクの水は使える。だから、レバーなんてものは地震が発生したらすぐにでも、ガムテープで固定して流さないようにしてしまいたいぐらいだ。当時の私に、もう少し知識があればとも思うのだが、今更言っても仕方がない。

そうこうしていると、家に１本の電話がかかってきた。非常招集だ。警察である父に、ポートアイランドの勤務先まで出て来いと電話が来たのだ。母も警察で、非常招集の大切さはよくわかっていたらしい。父も家のことを心配していたが、しぶしぶ車に乗り、勤務先へ向かった。その後電話は全く使えなくなった。地震が起きてすぐのあの１本の電話だけがつながったのだ。

非常招集に行ってから、父は１ヶ月ほど帰ってこなかった。警察の交通課に勤めていたこともあり、父は被災地のど真ん中で交通整備をしていたそうだ。地震発生から数日後に倒れたビルの近くでも交通整備をしていたらしく、場所が悪ければ死ぬところだったらしい。１か月ぶりに帰ってきた父は、やせ細っていた。途中、車を置いて徒歩で出勤した上に、食べるものが全くなかったと言っている。家に帰ってきて安心したのか、父はただ「寝かせてほしい」と言って、ご飯も食べずに眠ってしまった。

私の住んでいたマンションには貯水タンクが設置されていた。そのため、蛇口をひねるといつものように水が出ていた。しかしそれも長くはなかった。きっと、マンションの住民みんなが水をペットボトルなどに溜め始めたのだろう。すぐにタンクの水は底をついてしまった。タンクの水がなくなってからは、近くの浄水所へ母は水をもらいに行った。飲み水はそこで確保できた。

地震が起こった日の夜、電気もガスも水も使えた私の家に、祖父母の家族を呼び、晩御飯をご馳走した。料理は、唐揚げだった。あまり被害を受けていない私にとって、祖父母の家族が来たことはうれしいもので、その夜を楽しく過ごした。地震に対して、怖いという感情はなかった。体験者の方が言う、ドーンという、突き上げるような衝撃を受けた記憶がなく、度重なる余震に震えたという記憶なんて、カケラもない。そんな私はご飯を食べたあと、いつものように眠りについたのだろう。

３．地震発生から数日後

母と妹と私の３人は何日間か、祖父母の家に泊まった。父がいないこともあったし、私たち自身が幼かったからでもあるだろう。水を汲みに行くにしても、母が私たち姉妹２人を連れていくのは邪魔だ。かといって、家に残しておくのには危険すぎる。そこで私たちを祖父母の家に預け、祖母と一緒に水を汲みに行ったそうだ。私の家の近くには野の池という大きなため池があり、その近くには浄水所があった。そこで飲料水を配っていた。一緒に行った記憶はもちろんない。まして、母が水を汲みに行ったという話も初耳だ。私には長い列を並ぶことも、水のありがたさを感じることにも無縁だと思っていたが、案外そうでもないことに驚いた。

それに祖父母の家には昔から井戸がある。そこですいかを冷やし、庭の草木に水をやり、夏の暑い日には水浴びをしていた。そんな井戸水は飲み水に適していなかった。しかし、飲み水として使えなくても、その水をお風呂に運び、お湯を沸かし、かわるがわる入ることはできた。井戸水を自宅まで運び、母の友達にお風呂を提供してあげることもあった。神戸市内のたくさんの人たちが「水がほしい」と願っていたのに、私は何の不自由もなく生活をしていた。小さかったから仕方がない、で言いくるめてしまうのはなぜか、申し訳なく思ってしまう。被災地のど真ん中では、大人も子供も関係なく被害を受けていたのに…。私ぐらいの年齢の子供は水がほしくても手に入らなかったのに…。

4．小学校・中学校

小学生の時や中学生の時は１年に何度か避難訓練があり、毎度面倒くさい思いとやっておかなければという思いが交錯していた。中学生になり、毎年１月 17 日は、１分間黙とうをした。その時に校長先生から震災の話を聞くこともあった。それとは別に理科の授業中、地震の話になり、その聞いた話の中で、すごく興味深いことがあった。それは、墓石が普通に後ろに仰向けの状態で倒れるのではなく、墓石に刻まれてある名前の面が横を向いたりして、いかにも大きな人が回転させて倒しているようなことがあったという話だ。それが１つだけでなく、その近くの墓石みんながみんなそのように回転した状態で倒れていたという。当時の私からすると、そんなことはありえないと思っていた反面、重い墓石が一瞬にしてひっくり返ってしまうほどの大地震だったことに驚いた。

それともう１つ。その理科の授業中に初期微動継続時間の話が出た。阪神・淡路大震災の時の初期微動継続時間はだいたい３秒ぐらいだったらしい。阪神・淡路大震災が起こったのはまだ寝ている時間帯だったので、最初の小さな地震に気付かない人が多かったかもしれない。だからいきなりの突き上げるような地震で目を覚まし、その瞬間、家具や家の下敷きになってしまったのだろうと、その先生は言っていた。じゃあその間に何ができるのか、ということを実際にしてみた。机の下に隠れる子、外に出ようとする子、ドアからではなく窓を開けて出ようとする子もいた。しかし、机の下に隠れること以外をした子はみんな、外に出る前に３秒たってしまっていた。その時に、最初の小さな地震が来てから、どれだけの速さで大きな地震が来るのかがよくわかったし、その間には机の下にもぐること以外は何もできない、できたとしても途中で地震に遭い、そのまま死んでしまうかもしれないということを、身をもって理解した。よく、ぐらっと来たら火の始末と言われているが、それには無理があることも知った。

私が地震に興味を持つようになったのはそれからである。地学が好きになり、地震の分野は得意になった。そのため、先輩からの紹介で環境防災科があると聞いた時も、１度見に行ってみようかな、とすんなり私の中に入ってきた。

５．環境防災科

月日は流れ、阪神・淡路大震災から 11 年。私はほかの高校と迷った挙げ句、環境防災科に入学することにした。しかし、この学科を選んだ理由は、防災について勉強したいから、というわけでなく、ほかに理由があった。だから今、こんなにも防災について中学生のころよりも興味を持ち、さらに深いところまで勉強している自分がなんだかおかしく見えてしまう。なにせ、人並みだった防災についての興味がいつのまにか、自分の生きる方向とつながり、海外とつながり、昔ながら持っていた夢とまでつながってしまったのだ。

環境防災科に入学してから、私は昔からあるが１度も見たことがなかった神戸新聞社出版の「阪神・淡路大震災全記録」を見るようになった。震災の年の３月にその本が出版され、これは阪神・淡路大震災を覚えておくためにも絶対必要なものだと思い、母が購入したそうだ。購入してからつい最近まで、本棚に飾ってあるだけの存在で、何の本なのか知らないままだった。それが環境防災科に入学したことにより、初めて本が開かれた。それを家族みんなで見たことを覚えている。私は外部講師から聞いた話をして、母は当時の話をしてくれた。その時初めて家族が震災当時、どのように過ごしていたのかを知った。それを聞いても妹は全く記憶がないと言っている。当時１歳だから当然だろう。だからといって、震災を知らなくていいわけがないと思う。震災を知らない人にこそ伝えていくべきだと思うので、最近では事あるごとに、少しずつ私が今までに学んだ知識を妹に話している。妹は嫌がりながらも聞いてくれる。おかげで、この前あった地震の後には、非常持ち出し袋を作るほどになった。何がどのくらい必要なのか、１番必要なものは何か、水はどれくらいあればよいのか、妹はよく聞いてくれる。話しているうちに、なんだかうれしい気持ちになった。この３年間で学んだことをいろいろな人に聞いてほしい、という思いが強いからだろう。私の中で、家族が防災について知らないで、私が家族に防災の話をしないで、なぜ初めて会ったりする人たちに防災のこと、阪神・淡路大震災のことが伝えられるのだろうという気持ちがある。だからこそ、家族には話す機会をなるべく作っている。そして、家族からも教えてもらっている。阪神・淡路大震災のことは母が一番よく知っているし、学校で防災訓練があった、とか妹から聞けるし。そんなこともあり、最近はたくさんの行事に参加し、いろいろなところで発表をしたり、話をしたりしている。私の言葉で話しているため、至らないところはたくさんあるはずだ。それなのに、周りの人は一生懸命聞いてくれて、自分にすごく良い緊張感をくれるし、話したいと思う気持ちを引き出してくれている。そこで私は環境防災科に来てよかったな、と感じるし、これからもっともっと話していけるようになりたい、とも思うようになった。

６．ネパール研修

私は昨年の夏休みのネパール研修に参加した。行く前にネパールという国や文化、家の造り、今どのような防災教育が行われているのか勉強した。ネパールは建物がすごく脆弱で、道路も車やバイクであふれかえっている、日本とは全く違うということは知っていた、いや知っているつもりだった。いざ、ネパールへ入ってみると、自分が想像していたよりもはるかにひどい光景が目に飛び込んできた。バスの中から見たネパールの町は、脆いレンガが積み重なっていて、建物が上層階になるほど飛び出していた。中にはレンガが崩れて穴があいているところもあった。それを私はただ茫然と見ているだけしかで

きなくて、歯がゆい思いをしたことを今でもはっきりと覚えている。だからと言って、私がネパールの町を変えることなんてできやしない。ましてや、人々みんなに防災意識を持ってもらえるなんて、到底無理のように思えて仕方がない。日本ですら、近頃やっと「防災」という言葉が浸透してきたぐらいだ。ネパール中の国民に浸透するにはあとどのくらいかかるのだろう。地震はその間、待ってくれるのだろうか？もちろん待ってくれないだろう。そこから私は少しでも多くの人に防災の大切さを知ってもらいたいという気持ちを持つようになった。防災なんかをする余裕があれば、明日の食べ物を買うよ、という人も少なくはないはずだ。それならば、まずは余裕のある人からでも始めて行くべきだと思う。そのような人から始めて、ネパールの人がネパールの人へ伝えていくようになれば、国自体が少しでも防災に興味を持ち、大切さを知り、それを行動に移してくれるのではないかと淡い期待を抱いている。

７．1.17 追悼式

私は昨年の 1.17 追悼式に参加した。毎年このような追悼式が行われているのは知っていた。東遊園地につくまではみんなワイワイと騒いでいた。しかし、一歩中に入るとそこは違った空気が流れていて、阪神・淡路大震災当時にタイムスリップしたかのように感じることが多々あった。中でも、6400 本の竹を見た時は、あの中に亡くなった方一人一人の魂がこもっているように感じ、寒気がした。生きたくても生きることができなかった人たちの思いが私に訴えかけてくるようで、並んでいる竹を直視することができなかった。その年の 1 月 17 日は雨。雨なのにもかかわらず、たくさんの方たちが来ていた。目を閉じて、手を合わせて、じっと動かずにいる。この方たち一人一人にたくさんの想いが詰まっていて、それはどんなに時が流れても、変わらずに存在するのだろう、と感じた。改めて、阪神・淡路大震災の記憶や風化について考えさせられる瞬間であった。

８．最後に

最後に、この「語り継ぐ」の冒頭部分を思い出してもらいたい。簡単に言うと、私が生きているのは家具の固定をしていたおかげ、ということだ。今は、大丈夫だろうという思いで何もしなければ、後に後悔することになるだろう。家族の命が、恋人の命が、友人の命が、「面倒くさいから」という理由で片付けられるものなのか、考えてほしい。大切な命を守るためならば、少しくらいの手間はかけても良いのではないかと思う。そのようなことを伝えていけるのは、こうやって震災の体験をし、なおかつ防災を勉強している私たちなのではないかと考える。だからこそ、発信することに重きを置き、そして防災で知り合った仲間を大切にしていきたい。

これからの環境防災科の人たちは、どんどん震災の体験が薄れてゆくに違いない。それでも、語り継ぎたい、という想いがあるのならば、きっと阪神・淡路大震災は語り継がれてゆくのだろう。それにこれからは新しい災害が増えてきて、過去の災害を見つめなおす機会が多々あるように思う。そうなったときには、率先して環境防災科が発表を行ったり、ワークショップを行ったりして、人々が防災に興味を持つお手伝いをしてあげればよいと思う。私はそのようなことを、これからの環境防災科に望む。

私にとって阪神・淡路大震災は環境防災科、防災、国際交流をつなぐものだ。あの災害には悲しい記憶しかない人も、つらい思い出しかない人もいるはずだ。それは災害の悪い面だと思う。何もかもが一瞬にして無くなったあの日。その反面、ボランティアの方の暖かさ、地域の方との助け合い。普段何気ないことが大きな力になった日でもあるのではないだろうか。そんな良い面が私には印象的だ。だからこそ、もっといろいろな方とかかわりあって生きてゆきたい、防災を通して、震災を通してつながりあってゆきたいと願う。それは、どんなに記憶のカケラが小さくても同じだと思う。そうやってつながりあえるのは、私たち環境防災科だけではないだろう。新潟中越地震の時も、たくさんの方が募金に協力してくださった。みんな、阪神・淡路大震災の時に助けてもらったお返しになれば…と口々に語っていた。このように県を越えて、震災体験はつながっていくものだと思う。阪神・淡路大震災が与えた辛さ、悲しさ、苦しさ…今でも思い出したくない記憶だってあるに違いない。それでも、こうやって私が「語り継ぐ」を書く状況と出会ったように、たくさんの方が阪神・淡路大震災によってたくさんの方と巡り会ったと思う。同じ悲しみ、辛さを共有しあった方、ボランティアの方に助け出された方、そんな方たちとの出会いを忘れないでほしいと思う。それが私の考える、阪神・淡路大震災の良い面だと思うから…。

事実

神戸市垂水区桃山台
西村　仁志

語り継ぐ

１３年前に起こった阪神・淡路大震災。この記憶はどんどん薄れている。僕もその中の一人であの時はまだ５歳だった。この時の記憶は断片的にしか覚えていない。こんな僕が語り継ぐという文を書いていいのか、と思ってしまう時があった。こんな僕が今回どのように語り継いでいくかが、これからの震災を知らない人に伝えていくことで何か感じ取ってもらえたらいいと思う。

震災が起こった日

その日は、疲れていたのか熟睡していた。家族みんな同じ部屋に寝ていた。するといきなり「ゴゴゴー」という大きな音と共に下から突き上げるような揺れが来た。これには寝ていた自分もびっくりして起きてしまった。父は自分の上に覆いかぶさり、揺れが収まるまでその状態だった。父はいきなり起こった大きな地震の中で、とっさに子供を守らなアカン、と思い勝手に体が動いたらしい。僕はじっとするしかなく目をつぶっていた。揺れが収まると父は、「大丈夫か？ケガはないか？」と言っていた。みんな怪我はなかったが、皿が数枚割れていた。母はおばあちゃんにすぐに連絡をして、安否確認をしていた。どちらのおばあちゃんもケガはなく母は安心していた。その後もう一度電話したときには回線が混雑して、電話がつながらなくなっていた。電話が繋がらなくなってからは、向こうの状況も全くわからなくなり、心配することが多かった。電気をつけようとしたが付かないので、このまま家の中にいるのは危ない、と父は判断して外に避難するように僕たちに言った。この時は僕も少し寝ぼけているところもあって、父に担いでもらいながら外に出た。外に出てからは、車の中でずっと待機している状態だった。どんな地震だったかを知るための情報源となるテレビはつかなかったので、ラジオで状況を把握した。今まで体験した事のないような大きな地震で、みんながどうしたらいいか分からない状態だった。母はさっきの地震の音は今まで聞いたことのないようなものだった、と言っていた。そんな怖い体験を家族がしたので、不安を抱えたまま車の中にいた。そのせいか車の中では誰もしゃべらずに、ひたすらじっとしている状態が続いていた。僕はその静かな車の中でまた眠ってしまった。

朝になって家の周りは目立った被害や家の倒壊などが全然なかった。親のなかでは大きな地震だったという気持ちしかなかったらしく、そんな気持ちのまま昼ぐらいになると、空がどんどん暗くなってきて「なんやろ」と見ていたら灰が降ってきていたのだ。これには驚いて「どっかで何か燃えている」と思ったらしい。だが僕には周りが燃えている感じがなかった。後でわかった話だが、その灰は近所の家や森が燃えてでた灰ではなくて、長田の町が燃えたときに発生した灰だった。初めは近所で起こったと思っていたので、長田の町が燃えた時の灰が降ってきたことにはただ驚くしかなかった。このことを考えるとぞっとする。空から灰が降ってくるという現実ではありえないような光景には本当に恐怖を感じていたらしい。

今回の地震が起こってからは、今まで体験したことのないようなことが次々と起こったことに親はすごく驚いていた。灰が降ったり、高速道路が倒れたり今までに体験したこともないようなところを見て地震の怖いところを分かった感じがした。地震はケガしたりするだけでなく、精神的に恐怖を感じるものでもあると思う。地震が起きた後の余震はあまりなかった方だと思うが、余震が来たときはまた大きく揺れると思った、と言っていた。僕も余震がくると「またあの時みたいな地震がきそうやな」と思った。またあの地震が来ると思うとかなり怖くなったのを覚えている。この気持ちは僕だけでなく家族みんなが思っていた。近所に住んでいた人たちも揺れを感じるたびにあの時の大きい揺れを想像してしまったらしい。今回の地震はみんなの記憶に残ってしまうものだなと思った。今回の地震はこれから起こる地震のたびに思い出す、と言っていた。

テレビで今回の地震を見て

地震が起きてから２、３日ぐらいが経ち、ガスはまだまだ復旧に時間はかかりそうだったが、電気と水道は復旧していた。電気が復旧したので、テレビも見られるようになったので今回の地震について知ろうと思った。あまりテレビで詳しく流していなかったが、少しずつテレビで詳しく阪神・淡路大震災

のことを流すようになっていた。この地震の映像が流されているのを見て、小さいながらも「怖い・どうなっているやろ？」と思った。

家族みんなでずっとテレビを見ていると、地震が起こった日に灰が降ってきたのと同じぐらい怖い光景があった。それはあの高速道路が倒れている所だった。今まで地震で高速道路が倒れている所も見たことがなかったし、そこらへんに建っている家なんかより頑丈そうな高速道路が倒れるはずがないという気持ちがあったので、かなりの衝撃を受けた。その衝撃をもっと大きくしたことは僕が住んでいるところは本当に被害が少なかったので、被害がかなり出ているところとの差がありすぎて本当に起こっていることか？と疑いそうだったことだ。家にはひびや壊れているところもなく近所の家も何もなかった。この地域と今回の地震によって大きな被害が出た地域との差が、僕たちの心に大きく残ってしまった。

高速道路が倒れる以外にもたくさんビックリするような映像があった。印象にあるのがたくさんのビルがある中、赤黒い煙が空高く上がっていたこと、バスが壊れた橋の途中で止まっていた場面だった。あれを見た時は戦争でも起こっているような感じになったのを覚えている。家族でそれを見た時は「バスの人たち大丈夫か」とみんなが言っていた。

ニュースや新聞を見るたびに死者・行方不明者が増えていくことに、この地震の大きさと強さを知り、今僕たちの住んでいる近くでたくさんの人が悲しんでいると思った。この死者や行方不明者が増えていくのを見て止まったらいいとずっと思っていたし、出来るだけたくさんの人が助けられたらいいと家族みんな思っていた。

地震が起こった後の建物の倒壊の映像だけでなく、避難所での映像が流れていた。避難所ではたくさんの人が寝る場所もなく、みんなが詰め込まれているような所が映されていた。お年寄りがしんどそうに寝ていたり、子供は遊ぶところもなく暇そうに座っていたりしていたらしい。それを見た時はこんなに多くの人が家から避難していると思ったらしく、これを見た時も被害の大きさ、家が倒壊や破損などで住むことができなくなっていると思った。他にも避難してきたけれど、避難所に入れなくて外で寝ている人など、たくさんの人が溢れかえっていたそうだ。テレビで映っていることは、今まで起こったことのないような光景がずっと流されていたので、本当に大変なことだと思った。時間が経つにつれて流されていることが詳しく報道されていて、逆にその情報自体が信じられないようになっていった。自分たちが住んでいるところが、被害が少ない分被害が大きいところとのギャップが激しかった、と親は言っていた。

母方のおばあちゃんの家へ

自分の家のガスが出ないので、おばあちゃんの家へ避難しに行った。父は仕事があったので、家に残るしかなかった。父の仕事は全国規模でしているので、いろいろな物資が地震の被害が出た会社に送られてきたらしい。家にはガスがまだ出なかったので、ガスコンロをもらってきたらしい。他にも住んでいくのに必要なものをいくつかもらえたので、物には困らなかったと父は言っていた。お風呂はおばあちゃんの家に入りに行ったり、会社の人とゴルフ場のお風呂を借りに行ったりしていたらしい。だけど毎日入ることも出来なかったらしく入れなかった日もあった。入れなかった日もあったがそれは仕方ないことだった。食事はもらってきたガスコンロを使ってラーメンなど作りやすいものを毎日食べていたらしい。

僕たちはいろいろ大変な状況だった父を残して、おばあちゃんの家に行った。おばあちゃんの家は高砂にあり、被害が少なく水やガスが出たので行くことになった。その時の母のおなかの中には妹がいた。地震が起きた後の汚い場所や風呂に入れない状況はおなかの中にいる妹にいい環境ではないので清潔にするためにもおばあちゃんの家で風呂を貸してもらった。母のおなかの中には妹がいたので、自分も出来るだけしっかりしないといけないと小さいながらに思い始めていた。地震が起こったことによって母は衛生的に悪いと思ったし、おなかの中にいる妹にもあまりいい環境ではないなと思っていた。僕は出来るだけ早く衛生的にもよくなったらいいと思っていた。そう思っていたが僕たちの住んでいるところでは水と電気はかなり早い段階で復旧したけれどガスがなかなか復旧せずに母は家に帰れずにいた。こんな状況が続いたら母やまだおなかの中にいる妹にも大変だなと小さいながら思っていた。

そんなことを思っていたが、みんな忙しかったのであまり相手をしてもらえなかった。でも、いつも遊びに行ったときに遊んでくれるおばあちゃんの家に行くのは楽しみだった。いつもなら虫取りや川に遊びに行き楽しい思い出ばかりだった。この時もそんなことを考えながらおばあちゃんの家に行ったのを覚えている。親は今回の地震のこともあるし、おなかの中にいる妹のこともあったのでその時はいろいろ大変だったと思うし、少しはしっかりしないといけないと思っていたけど、地震がおきてからは、友達と遊んだりもしていなかったので、僕は遊びたいと思う気持ちのほうが大きかった。僕はおばあち

ゃんの家ではずっと遊んでいた記憶しか残っていない。今思うと母にも迷惑をかけていた、と感じるし、おばあちゃんにもたくさん遊んでもらっていたので邪魔だったなと感じている。

僕がおばあちゃんの家に行っている間、幼稚園は休みだったので遊ぶ人が少なかった。幼稚園も復旧するまでに時間がかかっていたみたいで幼稚園に行きだしたのも遅かった。僕は早く幼稚園が始まってみんなと遊びたいと思っていた。走り回ったり、話したりやりたいことがたくさんあるのに地震のせいで出来なかったことが多かったことには怒っていた。地震が終わったあとの幼稚園はとにかく楽しかった。今まで遊べてなかった分を取り返すようにひたすら遊んでいた。

父方のおばあちゃんの家では・・・

母方のおばあちゃんの家と違って父方のおばあちゃんの家はかなり壊れていた。おばあちゃんの家は尼崎にあって僕らが住んでいるところとは比べ物にならないぐらいの被害で壊れていた。

おばあちゃんの家に地震が起こったときはいろいろなことが起こった。地震直後は何が起きたのかのかも分からないまま真っ暗になった。揺れがおさまると食器なども割れて床は危険な状態だった。そんな状態のなか、思ったことが出口の確保だったらしく玄関ドア・裏ドアを開けようとしたが全く開かずに窓を開けたらしい。外に出てみると家の周りの塀はすべて倒れ、屋根はほとんど落ちて、家の中にひびが何箇所かあった。おばあちゃんはちゃんとした判断でケガもなくすんだらしい。この時、僕たちはちょうどおばあちゃんの家に電話をかけていておばあちゃんに何もなかったことを知り家族みんな安心して喜んだ。電話が終わったあとおばあちゃんは家の周りの塀がすべて倒れているところを見て驚きを隠しきれなかったみたいだった。家の中のひびは何箇所かあったけど目立っていたのは風呂場とトイレの中にあったのもだったらしい。その地震での傷は僕も見たことがあった。見たときは生々しく一本の亀裂が長く残っているのを見て、ずっとこの傷は残るのだろうなと思った。

始めは僕たちもいろいろ忙しくておばあちゃんの家にいくことは出来なかった。僕たちが行ってない間に親戚の人はまだ電車がとまっているころ大きなリュックを背負って、歩いて家まで行ったらしい。家に着くと「大丈夫か」という言葉が第一声だったらしく、家がかなり壊れているのを見て驚いた。家の中の掃除を手伝ってもらったらしく、壊れたものを外に出す作業をしてくれたらしい。外に出すことが終わった後、床の掃除をしたが、掃いても掃いてもガラスが出てきて、床にはいつもキラキラしたものがあったらしい。ガラスは畳の間に入り込んでいたので地震が起こってからもずっとスリッパは必要な状態だったらしく、裸足で歩くとケガをしそうだったらしい。

おばあちゃんの家では２階にたくさんのタンスがあり、全部倒れていた。それを近所の人が直しに来てくれたみたいですごく助かったらしい。地震で大変なことが起こったときにちょっとでも助けてもらえたときは本当に助かるし嬉しかったらしい。タンスを直しているとき上を見ると屋根の隙間から青いものが見えていたらしく、それは瓦が落ちて空が見えている状態だった。普通屋根があるところに空があることにおばあちゃんも近所の人も驚いたそうだ。早く対処しないと雨漏りするのでビニールシートをほとんど屋根一面にはっていた。業者には「このままだと家の中の物が雨で使えなくなってしまうので早く瓦を張り替えなアカン」と言われたらしい。この阪神・淡路大震災でたくさんの家が壊れて瓦の張り替えが多かったらしく、瓦が一番高くなっていた時に買うしかなかった。また壁やひびがあった場所は全部直した。壊れかたが激しかったが全壊にはなっていないので意外とお金もかかったらしい。また地域によって全壊・半壊・一部損壊の区別が微妙で、あの時の審査基準はあいまいだったようで家ごとでいろいろ違うので大変だったらしい。今の審査基準は阪神・淡路大震災が起こった後に出来たものなのであの時はあいまいな基準が多く存在したみたいだ。一人一人が納得いくような判断や検査をもっとしていくことでみんな幸せになれると思った。

おばあちゃんの家には井戸があってその地域ではまだ水も出ておらず水の救援が来てなかったときに、近所の人に使ってもらっていたらしく少し汚れている水ではあったみたいだが、みんな喜んで使ってくれた。おばあちゃんの家にはまだその井戸があり、みんながその井戸を使ってあの時水を飲んでいたのだと思った。井戸を今も壊さずに置いているのはそんな出来事があったからそのままにしているのだと思う。

父とおばあちゃんの家へ

自分の家は水や電気が通るようになり、母と僕はおばあちゃんの家から自分たちの家に帰ってきた。自分の家もある程度落ち着いてきて一度父と二人でおばあちゃんの家に行くことになった。その時にはもう電車が動いていたので電車に乗って行った。電車に乗って出かけるのも地震が起こってから始めて

だったので楽しみにしていたと思うけど、電車に乗っているときに長田が見えたところからずっと窓の外を見てぼーっとしていたらしい。長田は家などが燃えてしまって何もない状態だったらしく、父と二人でじっと見ていた。その時どんなことを考えながら電車に乗っていたかどんな思いをして外を見ていたかは全然覚えていないが、自分の中で凄いことが起こったことぐらいはわかっていたと思った。おばあちゃんの家に着いたときは親戚の人や近所の人がいろいろ手伝いに来てくれたみたいでそこまで散乱していなかったが、まだビニールシートのかかった状態で家にあるヒビが目立っていた。おばあちゃんの家に入るためにドアを叩いて「ドアを開けてください」といっていたらしい。その扉はこの地震が起こったことによって開かなくなっており違うところから入った。おばあちゃんは怪我もなく元気そうで父と話をしていた。自分は何もできずにただ来ただけだったが、おばあちゃんはそれだけで喜んでくれた。何もしていないのに喜んでもらえたことは今でも覚えていた。この時おばあちゃんの家に行っていろいろな話をすることによって気が楽になったと言っていた。出来ることが終わった後はまた父と二人で家まで帰って行った。

僕はおばあちゃんの家に行ったときの記憶が少ししか覚えていなくて詳しいことは知らないけど、おばあちゃんはあの時の記憶をしっかり覚えていた。それだけ印象に残る地震であのときのことを全部覚えているのだと思った。あの時のことはおばあちゃんの中でずっと心に残るだろうと思った。

環境防災科

この阪神・淡路大震災の経験を生かしてつくられた環境防災科に入って、僕が覚えている地震のこと以外にもいろんな人が経験してきとことを教えてもらうことで、その時のたくさんな思いやたくさんの人たちが困ったり、大変な経験をしてきたりしたことを教えてもらうことで、あの時のことを少ししか覚えていない僕にも多くのことを思ったしいろんな気持ちを残していった。震災当時に起こったことを話してくれる専門の人たちの言葉を聞いて、それぞれのところでたくさんの人たちが頑張っていたことを知り、僕も次にこんな災害が来たときは何か手伝えるように助けていけるようにという気持ちが強くなった。環境防災科では伝えていくことでいろんな人に分かってもらって次に起こるかもしれない災害を出来るだけ少なくすることが必要になってくると思う。阪神・淡路大震災のような大きな災害が起こったときに前と同じようなことを起こさないことが必要になってくるので、みんながしっかり勉強していかなければいけないと思った。

今僕たちが勉強していくことでおばあちゃんの家で起こったことなどをすぐ対処できるし、今回は被害がなかった自分の家でも被害が出ないようにしていくことが出来ると思った。また自分だけでなく近所の人や周りに住んでいる人をできるだけ助けていけたらいいと思う。

これから

これからは環境防災科で災害のことについて学んでいって、少しでも被害を減らしていく方法や伝える方法を地震について書くことになり、みんなの心の中に小さいながらも残っている傷や記憶はたくさんの人たちの中にあると思った。それだけ大きい地震だったし今まで体験したことのないようなことが多く起こったので、すごく印象に残るものだと思う。いろんな人に話を聞いたときにそれぞれが違った思いを持っていて、いつまでも忘れてはいけないと思った。今震災を体験してない人や僕みたいに記憶がほとんどない人が増えていく中でどのようにあの時のことを伝えていくか？これから起こるかもしれない災害を少なくしていくにはどうするか？を考えていかなければいけないと思う。

「語り継ぐ」という言葉

神戸市須磨区北落合
服部　征司

「語り継ぐ」。僕たちはこの言葉を簡単に口にしていいのだろうか。正直言って阪神・淡路大震災に関する経験なんて体験していない人と変わらないくらい曖昧な自分の記憶。それを上手く他人に伝えることが出来るのか、僕は不安だった。今まで僕に「語り継ぐ」と言葉にした人は、みんな阪神・淡路大震災の時に特別な経験をしていた人たちだった。実際に被災した人、避難所を運営していた学校の先生、支援物資を届けてくれたボランティアの人。やっていたことは様々だがどの人も震災に対して強い思い入れのある人ばかりだった。でも当時幼稚園児だった自分にそんな体験があるはずもない。「危ないから」と言われていたので手伝いをした記憶もないし、特に大きな被害をいけていない僕は、震災に対する思いがそう強いわけではない。

でも、そんな人たちになくて僕にあるものが一つだけある。それは子供の目で見た阪神・淡路大震災。いわゆる直観だけで感じた自分の体験だ。当時幼稚園児だった自分は地震に対する知識なんかなかったし、当然何が起こったかすら分かっていなかった。だから自分の体には純粋な恐怖が残っている。人間とはよくできたもので記憶というものは簡単に忘れてしまっても、体に染みついた体験だけは忘れないらしい。僕はそんな子供の目から見た地震体験を家族の話を交えながら話そうと思う。

須磨にあるぼろい市営住宅。僕の子ども時代のほとんどはここで過ごした。「都会」というにはほど遠いここは、古い団地や市営住宅ばかりのいわゆる「住宅街」と言われるところだった。同時期には近くでバラバラ殺人事件と呼ばれる事件があったし、悪いうわさも多く流れていた。僕の住んでいたマンションも築１０年というには貫禄があったし、自転車置き場には多数の落書きがあった。

そんな僕の幼少時代。幼稚園にも普通に通い普通の生活を送っていた。周囲には「神戸に地震はこない」などという根拠のないうわさが流れ、周りの人間も地震の話をしなかったため、僕は地震の知識どころか「地震」という単語すら知らなかった。そんな中あの大地震が僕らを襲った。

“ミシミシ、ギギギギッギシギシ”耳についた音は揺れ自身の音ではなく建物が悲鳴を上げる“声”だった。両親と妹は隣の部屋で寝ていたため、僕は助けを求めることもできず、何が起こったのかわからないままただ恐怖におびえた。頭上にある衣装ダンスがカタカタと震え、横のリビングから聞こえる無数の食器の割れる音が、建物の音や揺れの音と共鳴し悪魔の協奏を奏でていた。揺れがおさまると僕は逃げるようにふとんからでた。両親のいる隣の部屋のふすまを開くと、二人は安堵の表情を浮かべ溜息をついた。５歳になり一人で寝られるようになったとはいえ、まだまだ子供だった自分。そんな僕をタンスの密集した部屋におきざりにしたことを後悔し、泣きながらもそこから自力で両親に助けを求めてきた姿をみたその表情は、ほっしたような心配したような“笑顔”だった。当時２歳で、ベビーベッドで寝ていた妹はこれだけの騒ぎにもまぶたひとつ開けずに熟睡していたらしい。なんてふてぶてしいやつだ！とも思ったが、この恐怖を知らなかったのは幸せなのかもしれないと思った。

父は家族全員の安否を確認するとすぐに受話器を手に持ち、大阪と西神に住んでいる祖父母に電話をかけた。電話回線が混むから早めに電話をかけなければかけられなくなる、というなんともＢ型思考な判断だが、たぶんそれが最良の判断だったのだろう。数時間後には電話は全く機能しなくなっていた。

そして両方の親の無事が確認できると「次は家の片づけだ」と父はリビングへのふすまを開けた。まだ日が昇る前の早朝だったため、暗くて詳しい様子までは見ることができなかったが、食器棚から落ちた食器の破片があちこちに飛び散り、悲惨な状況であることは確認できた。しかし、電気も止まり真っ暗であるために片付けの作業は困難である、と判断した父はあきらめたように寝てしまった。なんとも危機感のない対応だがこれでよかったのだと父はいう。あのまま起きて作業していれば、暗闇の中で手を切ったり、怪我をしたかもしれないし、好奇心旺盛な僕がガラスの山に足を踏み入れていたかもしれなかったからだ。あそこで「寝る」という判断をとったのも父の優しさだったのだろう。

そして時間がたち時計は９時をさしていた。窓には日が差し今朝の出来事が嘘だったかのように空は晴れていた。そんな中で僕は目を覚ました。気がつくと広がっていた光景。僕はその光景にわが目を疑った。日の光に照らされたリビングの床はキラキラとひかり、まるで雪景色のような幻想的な雰囲気を

ただよわせていた。恐怖というよりも好奇心が先行していたぼくは、その夢のような幻想的空間に誘われるがままに入ろうとした。しかし、「入るなっ！！」と父の一声で僕はその足を止めた。ハッと我に返りもう一度その光景をみると、とがったガラスや陶器の破片が僕を刺し殺さんとばかりに鈍く光っていた。雪景色のように見えたのは破片の乱反射のせいで、まるで魔法使いの作り出した幻のようだった。現実に引き戻された僕はそこで初めて恐怖を感じ、父の後ろに隠れるかのように後ずさりした。そして助けを請うように父の顔をうかがうと、どうしたものだろなぁ…とでも言わんばかりの顔をしていた。

僕の家は洗面所やトイレ、玄関などがすべてリビングからつながっているのでトイレへ行くにも、外へ行くにもリビングを通る必要があった。しかし案の定リビングの床一面、ガラスの海。みんなが素足だったので移動をすることができなかった。家族全員がリビングの前で立ちすくんでいた。すると、妹がトイレに行きたいと言い出した。この非常事態になんて空気の読めない妹だ！と思ったが生理的現象を誰もとがめることができない。そこで父は「スリッパを取りに行こう」と言い出した。確かに名案だと思った。うちのスリッパは来客用の質のいいものだったため底が分厚く少々のガラスでは、けがをしないようになっていたからだ。しかしその頼みの綱であるスリッパは玄関にしかない。どちらにしてもガラスの海を通らないわけにはいかなかった。もっと安全な案はないかと考えていると、とうとう妹がトイレに行きたいとぐずり出した。このままでは時間の問題でこの場所も海になってしまう。考えている余裕はないと父は意を決してガラスの海に飛び込んだ。手をのばして巧みに椅子を手繰り寄せ、それを踏み台にして一歩一歩進んでいく。そしてあっけなくも玄関のスリッパを取って僕らのもとへ帰ってきた。父がスリッパを母の前に並べると母は妹を抱きながら、スリッパを履きトイレへと向かった。僕も続いて行こうとしたが、親父に抱き上げられトイレに向かった。いくらスリッパでも限界があるため大きなガラスは避けて通らなければならない。父と母は足元に気をつけ、パキッパキッと音を立てながらトイレへと歩き出した。

そしてトイレに着き、用をたそうと電気のスイッチを押すが、点くはずの電気がつかない。トイレは日の光の入らない洗面所の奥にあるため、電気がないと全く見えない。そこでトイレの上にかかっている突っ張り式のトイレットペーパーホルダーに、ランタンをおいて用をたすことにした。うちの団地はこういう事態に備え貯水タンクがあったため、トイレの水を流すことができた。普通マンションや団地の貯水タンクは地下にあり電動ポンプのくみ上げによって水を出すので、電気が止まってしまうと水も出なくなる場合が多いらしい（今のマンションなどは、自家発電などによりそういったことはない）が、この団地ではタンクが屋上の上にある重力式であったため、しばらくのあいだ水に困ることはなかった。

・・それから数時間がたった。父と母が床のガラスをある程度きれいに片づけていたため、リビングは元の通りになっていた。しかし空っぽの寂しげな食器棚や机についた無数の傷跡、部屋の片隅にある“割れ物”と書かれた大きな袋が大地震の面影を残していた。電気は復旧したようで、父はいつもと変わらないかのようにテレビを見ていた。僕もいつものように父の横に座ってテレビを見ているとテレビの中にあり得ない光景が広がっていた。最初はまるで何かの映画かと思ったが、どうやらそうではなかった。

横倒しになった高速道路、倒れた阪神電車、倒壊したビル。どれもが、にわかには信じられない映像ばかりだった。子供だったのでリポーターの言っていることもほとんど分からなかったし、漢字のテロップも読めなかったが、阪神・淡路大震災の被害の大きさ理解するにはその映像だけで十分だった。教育テレビや何かのアニメを見ようとチャンネルを回すも、どのチャンネルも地震のニュースだけを伝えていた。うちの被害だけでもすごいと思っていたのに、うちと同じくらいかそれ以上の被害が、この神戸市全体で起こっていることに子供ながらに驚いた。

しばらくテレビを見ていると、父が何か思い立ったかのように外出の準備をしだした。母がびっくりして理由を尋ねると父は、「車の様子を見てくる」と静かに答えた。僕の家の車は家から少し離れた高台に駐車していた。後ろが崖になっているようなところだったので、心配になったとのことだった。そして仕度の出来た父は見送られて、さっそうと出かけて行った・・・はずだった。しかしガンッガンッと言う物音が聞こえ、何事か！と家族みんなが玄関のほうへ振り向くと、そこには外に出られずに玄関のドアを蹴り続けている少し無様な父の姿があった。どうも地震の揺れによってドアの枠が歪んでしまったようだ。このままでは外への避難すら間々ならないと、父は渾身の力でドアを蹴り続けた。ガコッと言う音を鳴らしながらようやくドアが開いた。やっと出られるといわんばかりに、いってきますと言うと父は再び出て行った。ようやく用事ができると各部屋へ戻ろうとした時、今度は母が「あっ」という声とともに玄関に振り向いた。僕もつられて振り向くと、そこには閉まらないドアが残されていた…。

そしてまたいくらかの時間が過ぎ、外はもう日が沈みかけていた。いつもなら子供のはしゃぐ声が聞こえるこの時間帯も、今日は怖いくらいに静まり返っていた。家の前の通りを走る車もめったになく、時折通り過ぎる緊急車両のサイレンだけが夜の闇を切り裂いている。これまでに幾度となく余震があり揺れが来るたびにあたふたしていた僕の家族も、慣れてしまったのか少々の揺れには動じなくなっていた。そして父はいまだに地震の被害を報じ続けているテレビを見ていた。テレビでは長田の町が映し出されていた。長田では今でも火災被害がひどく、夜になってもなお燃え続けているとのことであった。

すると、父が急に窓の方を見て動かなくなった。そして何かを確かめるかのように、ベランダへと出て行った。僕も好奇心から父の後を追ってベランダへ出た。身長が足りないので目の前は壁しか見ることが出来なかったが、上を見ると空が暗くなっていることは分かった。壁に阻まれた景色がうっとうしくなった僕は父に「抱っこ」をねだると、父は静かに僕を抱き上げ南の空を指差した。指差した方向の水平線上はぼんやりと輝いていた。太陽は今しがた沈んだばかりだし、月にしては明るすぎる光。目を凝らして光の正体を確かめようとすると父は「火事だ」とつぶやいた。“火事”というものを実際にこの目で見たことがなかったぼくは、あんな規模の光が火事だなんて、にわかには父の言葉は信じられなかったが、指差す方向が南、ちょうど長田方面であるからしてそれが嘘ではないことが分かった。

僕の住んでいるところは須磨の北側にある高台の部分。なおかつマンションの３階であることからベランダからはよく景色が見渡せる。海までは見えないものの、そのパノラマは須磨南のだいたいの景色をとらえることができた。その景色の水平線上が赤く光っている、ということは南にすごい被害が出ていたということ。子供の僕でもそれくらいは理解できた。

そのあと冷え込んできたのでぼくと父は家の中へと戻った。しかし、ゆらめく赤い線は絶えず輝いて不気味に夜の闇を照らし続けていた。

それから１時間くらいがたったころ、僕たちは風呂からあがって夕食をとっていた。風呂はマンションの貯水槽の水があったため別に困ることはなかった。水やガスが出ない家もあるというのを知っていての風呂だったので少々後ろめたい気持ちではあったものの、「今日が最後だから」と言い聞かせ大事に湯を楽しんだ。夕食も特にいつもと変わるところはなく普通の料理だった。

しかしマンションの貯水タンクだってそう長くもつはずもない。僕の家で贅沢に水を使ってしまったぶん、どこかの家族が不便するだろう。環境防災科として活動している今になって考えてみると、こういった自己中心的な災害対応がいけないことは重々承知している。そのため当時の家族のやったことを考えると恥ずかしくなった。しかし、当時の僕には反論するほどの知識を持っていなかったのも事実。

自分の無知のせいで他人を不幸にしてしまうことがある、ということを当時を振り返る今になってから反省させられた思い出だった。

そして１日がたった。この日僕たちは買い物ついでに車で町を見てまわることにした。家にある食料があと何日持つか分からないし、何よりこの地震の被害と現状をこの目で見ておきたかったからだ。

そこでまずは買い物をするために近所のスーパーに立ち寄った。そして僕たちは驚くべき光景を目にした。棚という棚の全ての商品が売り切れていたのだ。パンも肉も冷凍食品も生活雑貨コーナーの商品でさえ、何もなかった。まるで泥棒にでも入られたような光景だったが別に荒らされたような後もなかった。多分僕たち家族のような考えを持った人や、災害用の備蓄のない人たちが買い占めたのだろう。遅すぎた買い物と災害の備蓄をしてなかったことを少し後悔し、結局何も買えないまま店を出た。車で近くのスーパーを全て行きつくしたが、どこも同じような感じだった。そこで近所はあきらめてちょっと遠出して買い物することにした。

車で走っていると色んな光景が目に入ってくる。きれいにオレンジのかわらで統一されていた住宅地は、雨漏りのせいなのかところどころブルーシートで覆われているし、いつも遊んでいた公園ではブランコがはずされていた。いつもと違う町の姿に驚かされてばかりいたが、須磨離宮公園のあたりの道を走っていたとき、もっとすごいものを見た。道路沿いの家の何軒もがぺしゃんこになり道路をふさいでいたのだ。テレビの中だけだと思っていた光景が目の前に現れて、僕は身震いした。百聞は一見にしかずとはよく言うけれど、ここまで現実を実感できる光景もないだろう。地震が自分の近くにあると初めて実感できた瞬間だった。でもこのままではこの道が通れずその先に行くことが出来ない、と判断した父は「余震の心配もあるから」と言い、今日はいったん家に帰ることにした。

それから数日がたった。幼稚園はいぜん休園のままだったが父は会社に行き、母も普段通り家事をして普通の生活に戻っていた。父は会社に行くたびに、道が混んでいるだとか、10 トンもある重機が動い

ていて大変だとか、色んな愚痴をたたいてはいたが、どうやら会社にも大きな被害はなさそうだ。そして昼になるころだった。インターホンがなり、玄関のドアを開くとそこには大きなゴミ袋をもった従兄弟の一家がたっていた。何事かと母が訪ねると叔母は「洗濯機貸してくれへん」と言った。西神に住む従兄弟は自宅で地震にあったが、どうやら水道が止まっているらしく、この数日間風呂にも入っていないし、ご飯もたいていないらしい。5 人分の洗濯物もあふれかえり、とうとう我慢も限界が来たらしい。そこでうちの水道が使えることを聞いた叔母は、うちへ駆けつけてきたらしい。どうやら大きなゴミ袋の正体は、大量にたまった洗濯物だったようだ。事情を聞いた母はすぐに風呂を沸かし、みんなを風呂に入れている間に洗濯機を回した。数日間暇をもてあましていた僕は遊び相手の来訪をおおいに喜んだが、叔父と叔母はそれどころではない様子で、少し疲れていたようだった。西神は揺れによる被害自体はこの辺より少なかったものの、ライフラインが止まりっぱなしだったらしい。そのため多くの苦労をしたという。

全員が風呂に入り終わり洗濯もひと段落すると、従兄弟は帰る仕度をしだした。僕としては遊び相手にもう少し滞在してほしかったが、向こうにも生活があるからと母に言われ我慢した。ありがとうと言いながら手を振る従兄弟たちに母が出来立ての炊き込みご飯を手渡すと 5 人は驚き、温かいご飯に喜んでいた。そして西神への帰路についた。

そしてそれから 1 年がたった。僕の生活や身の回りもほぼ完全に元通りになった。マンションに入ったヒビは壁と少し違う色の塗装剤でかくされ、家の換気扇の横に開いた穴も粗末な合板で補修された。家の前の公園には仮設住宅ができ、新しい友達も増えた。マスコミはここ 1 週間ほど、また昔のように震災のニュースばかりを報道していた。「震災から 1 年たって…」のような街の復興の様子を映した番組もあれば、「○○は震災を予期していた！」なんていう、うそ臭い番組まである。しかしそんなマスコミとは裏腹に、僕たちの会話の中にはほとんど地震という単語も出てこなくなったし、その話題に 1 年前ほどの関心はなくなっていた。

そんなときだった。「震災からちょうど 1 年後の 1 月 17 日 5 時 46 分、同じ規模の地震が来る」という妙なうわさが立ちだしたのは。今考えてみるとばかばかしいデマだが、震災の恐怖を知っていた僕は嘘だと分かっていながらもその嘘におびえていた。

そして 1 月 17 日の朝、僕は恐怖のためか早めに目が覚めた。時計をみると針は 6 時を指していた。やっぱり噂は嘘だったのだとホッとため息をついた。でもなんだかだまされた気分がしてすごくやるせない気分だった。自分に知識があればこんなことにはならなかったのにと、また自分の無知さに腹が立った。もしかしたら僕が災害に興味をもちだしたのはこのころからかもしれない。だけど当時の僕はそんなことを知る由もなかった。そして僕は覚めてしまった体を起こすと、作りかけのブロックをまた一つ積み上げた。

・・・あれから 13 年。もう“大人”と呼ばれる年になった僕は、あの教訓をもとに地震や災害の勉強をしている。今の僕はあの時と違って無知ではないし、今度地震が来ても適切な対処が取れると思う。でも、あの無知であることの悔しさはいまだに消えていない。こんな悔しさを他の人には味わってほしくない。僕に震災の当時の記憶を思い出させてくれた両親。僕に地震やそれに対する知識をくれた先生や講師の方々。今度は僕の番だ。

まだまだ「語り継ぐ」という言葉を口にするには未熟かもしれない。でもいつか胸を張ってその言葉を口にしたい。みんなに地震や災害の恐ろしさを伝えるのと同時に、みんなが悔しい思いをしないような知識を広めていきたい。僕の災害体験によって救われる人がいるなら、僕は 100 回でも 100 万回でも話そうと思う。そしていつかみんなが地震の恐怖や無知の悔しさに打ち勝つ日がくることを、ぼくは願いたい。

記憶

神戸市長田区高東町
濱　裕磨

１．　始めに

１９９５年１月１７日午前５時４６分に阪神・淡路大震災が発生した。今では、震災が発生してから１３年という月日が経った。正直、まだ幼かった事もあり当時の記憶は断片的にしか覚えていない。また、私達だけでなくたくさんの人が、当時の記憶が風化しつつあるかもしれない。今回、私が書くのは家族や知人から聞いた話になる。

２．揺れた瞬間

地震が起きた当日、私は２階で寝ていた。地震の揺れと共に電球が自分の布団に落ちてきた。幸い、１月１７日という冬の時期だったため毛布がクッション代わりになりケガもせず布団の中に潜り込み不安と恐怖の中で、私は揺れが収まるのを待っていた。

３．　揺れが収まって

揺れが収まると、父がすぐに私の部屋にめがけて駆け上がって来た。「大丈夫か！！」と確認しながら私を抱えて１階のみんなが居る場所に降ろしてくれた。私の家族は５人家族だが誰一人として大怪我はしていなかった。
しかし、父は私を助けるために２階に上がってくる際、壁にかけていた写真立てのガラスが割れていてその破片で足を切っていた。また、母の寝ていた１階の寝室のテーブルにはオルゴールが置いていた。もし、それが母の寝ている場所に落ちていたら・・・と考えると『ゾッ』としてとても怖くなってくる。
今、思い返すと両親が私達のために身体を張って身の安全を確保してくれていた事に心から感謝している。

４．　１日目

家の中を見渡すと、リビングの食器棚が倒れ中に入っていたお皿やガラスが割れ破片が散乱していたらしい。母は、足を切らないようにリビングに置いていたスリッパを履いて台所に向かった。水道の蛇口をひねってみたが１滴も水が出なかった。
私が寝ていた２階の寝室には、３つのタンスがあり数センチずれただけで済んだが、もう少し揺れが大きくタンスが倒れていたとするとそこに寝ていた私は即死だっただろう。
地震発生直後にはライフラインとしては幸いにも水道は震災後１時間くらい、そして、ガスはすぐに止まってしまった。普及には想像を超える日数を要することになる。
外が明るくなるにつれ、父と母は家の片づけを始めた。グチャグチャになっていたのはリビングだけでなく、庭に置いていた植木鉢なども割れていたし、家の壁にも大きなヒビが入っていた。幸い、窓ガラスなどは割れていなかった。リビングのガラスの破片も庭の植木鉢の破片も箒で掃き片付けを行った。私と双子の妹は「危ない」という理由から１階の寝室にいるように言われた。私は、この状況で寝る事も出来ず父と母が片付けをしている姿をじっと見ていた。しかし、まだ小さく状況の把握が出来ない妹達はいつもの日常と変わらない様子ですやすやと眠っていた。

５．２日目

我が家は高台に建っていたこともあり、地域的に地盤がしっかりとしていたこともあり、近所の家屋損壊被害は少なかったが、祖父母の方は全壊した家屋が多いと、両親は母の実家、長田区役所周辺まで見に行ったが、余りの被害の大きさに声も出なかったという。

６．数日～数ヵ月

４歳になる私、そして、１歳の妹達のために両親は何とかお風呂に入れてやりたい、洗濯もしたいと母方の親戚の家（学園都市）まで週１度通ってくれた。
長田区とは違い学園都市は被害もなくライフラインも完全で驚いたことにダイエーには商品がいつも通り豊富にあり、営業していたと聞く。

７．現在

全壊してしまった祖父母の家、そして、周辺の家々は全て新しく建て替えられ、母の知る実家周辺は様変わりしてしまった。美しい家々、整備された公園・道路を見ると震災の爪あとの大きさを一層物語っていると思った。道路は震災の教訓を生かし、幅を広くし、車線を増やし、緊急自動車の走行しやすい町づくりが進められた。

８．父の話

かつて経験したことのない震度、そして死者・負傷者・家屋損壊など悲惨なつめあとを残した。今なお国内外でおきる地震の大きさの度合の比較にされるようになった。
「阪神・淡路大震災の何倍の地震がこのたび」
それが、いかに大規模であったかを残すものとなってしまった。
私の住む長田区は、揺れというより、最終的には、火災と家屋損壊の大きさがクローズアップされた。管原地区は商店街が立ち並ぶ場所。私にも知る人が何人かいたが、家屋の下敷きで助け出せず火の手の前になすすべもなく生きている人を残さざるをえなかった事実のむごさ、家屋の下敷きになったことは何人もの犠牲者をうんだ。
「私はいいから、早く逃げて」
ある人はこの言葉が一生頭から離れることはないだろうと言った。
「お父さん助けて。熱い！助けて！」
自分の愛しい子供を目の前で最後まで助けられなかった父親の無念さは、はかり知ることはできない。今まで私が経験した地震をはるかに上回る規模があの日襲ってきた。
消防士が言った一言が今でも残る。
「火災を消す水がない」
どんなに辛かっただろうかと。自らの命さえもかえりみず、人命救助にあたる消防士のしぼり出すような心の声が。私の勤務地でもある長田港の海水で消火にあたったことも聞いた。どんな状況であっても、決してあきらめず、今、自分にできることを全力でする姿勢に感動した。
全国から集まって下さったボランティアの方々、警察、消防と、被災した私達をあらゆる面からサポートして下さったことに生涯感謝したい。

９．母の話

その日の前日、未曽有のあの出来が起こるとは誰が予想しえたというのだろうか。いつものように鳥たちはさえずり、我が家のペット達も平穏だった。ただ今思えば、あの日の夕方、外でこんな声がしていたのを聞いた。
「空が赤いねぇ。夕焼けとは少し違うみたい。そう言えば、変な雲を見たって言ってたけど、地震なんてことはないでしょうね」
確かな裏付けがあるとは言えないが、自然界では、それがやって来ることを私達に知らせようとしていたのかも知れない。
そしてもうひとつ。一歳と二ヵ月になる娘達がとにかくむずがる。育児日記にも書き残されていた。幼い子供達の本能が親である私達に数時間後に起きるとてつもなく恐ろしい現実を預言していたのかもしれない。その日の夜、余りに寝付かず、双子の妹達を二人でかわるがわるあやしていた。とにかく、布団に寝かすと、火が付いた様に泣き叫び、それは朝方近くまで続いた。普段なら、母、双子の妹の三人、そして、父、裕磨の二人が一部屋で寝ているのだが、その日の夜は、とにかく双子の妹達の様子が尋常でなく、裕磨を寝かしつけると、朝まで抱いたまま、私達は座ったままでの状態だった。
その日はやって来た。一九九五年一月一七日午前五時四六分。
壁にもたれて座り、各々腕に子供を抱いたままで下からつき上げられる様な揺れ。
「ドーーン」

数十秒にも感じられる。寝込みを襲われたとはこんなことを言うのだろうか。右に左に上に下に揺れる。今までに経験したことのない揺れに、ただただ腕の中の子供にかぶさり、落下物から守ろうとした。その最初の揺れがおさまるや否や、私に、もう一人の娘をたくし、二階にいる裕磨の元へと走りだした。

一月の五時過ぎは、まだ薄暗い。廊下、階段には、かなりのガラスが飛び散っていたことだろう。けれど、何の躊躇もせず素足で二階へとかけ上がった。

「裕磨。動くなよ！！　今行くからな」

何度も何度も声をかけながら、色々なものが倒れ、割れとびちりしている中をかけ上がった。数分後、抱きかかえられた裕磨と足の裏をガラスで切った二人は一階へと戻ってきた。

不思議と三人の子供は泣いていなかった。恐怖がそうさせているのか、余りの驚きのためか、今まで自分達が経験したことのないまさに未曽有の出来事だからなのか、今なおわからないが、普段なら、電気もつかないあの状況にあわてふためき、大声で泣いていても不思議ではないのだが、その目は違っていた。

しらじらと空が明るくなり、部屋の状況が見えて来た。と同時に、昨夜からの寝付きの悪さ、むずがりは、この為だと思った。

双子の妹達の布団の枕の部分に、クリスマスに貰ったシクラメンの鉢が落ちていた。決して、寝る子供達の頭の上には、その様なものは置かないのであるが、どこからどう飛びころががってきたのか不思議であったのと同時に、朝までむずがってくれたことに奇跡を感じずにはいられなかった。

幸い、数時間後、電気だけは普及した。

テレビをすぐにつけたけれど、何が映し出され、ニュースを探しチャンネルを押し続けたかどうかの記憶はない。余震が続き、子供から離れなかったこと、そして、容赦なく襲いかかる余震の恐ろしさに外に出て状況判断することすら忘れていた。

今、冷静に考えれば、とんでもなくバカげたことであると思えるが、あの阪神・淡路大震災は、そんなにバカげたことが永遠に続くこととなるのである。

はじめの揺れがあってから、どのくらい経った頃だろうか。外はどうなっているのだろう。やっと、正常な判断が出来る余裕が出来た。ドアを開けた時、私は以外な言葉を口から出した。

「あの揺れにしては、外の様子は余りかわってないな」

高台に建つ我が家から、下の様子はかなりよく見えた。しかし、しばらくして、車で十分程に住む実家の父親の一言で私はボウ然となった。

「二階が一階になって、ほとんどの家が潰れた。信号も何もかも。近所の人も、ようけ死んでる。ところどころ火が出てるけど、消防も来られん。道が、道がないんや。」

要領の得られない父の言葉に、だんだんと下の方で起きている、まさに地獄絵図の光景がわかりだした。

「とにかく、車は動かへんから、歩いて来たんや。長田の商店街は、交差点の信号も故障して、車は動きたい放題、警察も何もでけん状態や」

父に子供達をたくし、二人で歩いて下の状況、実家を見に行く事にした。下に行くにしたがい、様子は変わっていった。私の育った実家あたりは、まるで怪獣が全てをふみつぶしたかの様に破壊されていた。そう、まさに“破壊”という言葉そのものだった。

すると、どこかで声がしている。

「誰か、誰か、毛布を貸してください。うちの人が息してないんです。」

今なら尋常な言葉ではない。すぐ一一九をダイヤルして、家からも毛布を取り出すだろう。けれど、近所の人々の答えはこうだった。

「家がつぶれて入れんのよ。家がなくなってしもた。入れんのよ・・・。」

「お父さん、息して。お父さん、目開けて」

その女性叫び続けていた。

夢を見ている。私は、そう思わざるを得なかった。いや、そう思いたかった。体中の力がぬけ、何をして良いのかわからなかった。本音を言えば、一分一秒でも早く立ち去りたかった。この現実を現実として受け入れられない自分がいた。情けなく、辛く、憤りを感じた。

序々に時間と共に冷静さが戻ってきた。

ニュースでは、近年で起きた地震の中で、比較できない程の大きさや被害を報道していた。死者や負傷者、家屋損壊の数が実数として報告され始めた。けれどこの数は、まだほんの一部で、やがて驚くべき現実をつきつけられることとなる。

子供を亡くした方、親を亡くされた方、友人や恩師、どの方もかけがえのない方々をなくされた。家

を失い、家財を失い、大切な幼い頃の思い出も無くした。ある人は、生きるという意味をも失った。明日が来ないと思う人もいた。

けれど、その一方で、「誰かの役に立ちたい」「お手伝いしたい」などの理由で、全国各地から“ボランティア”という人達が続々と被災地に入って来てくれた。

「泊まる場所の確保など全く考えていません。ただ、少しでも早くと思ったから。」

電車を乗り継ぎ、交通手段が断たれた場では徒歩で、日を追うごとに続々と被災地入りしてくれたのを覚えている。被災した私達にとって、心まで被災することを防いでくれた。

“がんばって下さいね”“負けないで下さい”

取るものも取りあえず、被災地入りしたボランティアの人々との出会いは、暗いトンネルに入った私達の出口への一筋の光にさえ思えた。

１０．前触れ

祖母から聞いた話だが、自分の家で飼っていた猫が走り回ったり近所の犬がいつも以上に吠えていた。環境防災科に入学して地震の前触れや、その時の動物の異常行動を学んだところ、実際にこれがまえぶれだったんだとわかった。

１１．環境防災科に入学して

私が、『環境防災科に入学したい』と思った理由は将来【消防士】になりたいと思ったからだ。消防士になりたいと思ったきっかけは、公務員の中でも人々の命を守る消防官。地域に密接した安全と安心を私の手で守りたいと思ったからだ。

また、環境防災科は座って学ぶ座学だけでなく、体を使って学ぶ体験学習などがあると知り入学したいという気持ちが強くなった。

１年生では、大阪ガス・関西電力・神戸市水道局などの外部講師の方が来てくださり、当時のライフラインの状況や復旧に至るまでのお話を詳しくしてくれた。

その、外部講師の中でも、１番心に残ったのが神戸市消防の方のお話だ。

震災当時、神戸市全体の被害があまりにおおきかったため、消防という組織が十分の機能することが出来なかった。人員不足、機材不足、情報不足、水不足などが原因だった。消防の番組などで、水の出ないホースを片手に激しく燃えさかる建物に１人で消火活動を行っている画像を見た事がある。悲惨な現実があったことなど、考えもしなかった。自分の家族を置いて、災害現場に行き、救助を待っている人の命を救えなかった消防士、人を救助することなどを目的として仕事をしているのに、救えたかもしれない命を救えなかったという現実は本当に辛かったと思う。

当時の消防士の人達のことを考えると、本当に辛かったのは被災した家族の人達ではないのではないかと思う。

本当に辛いのは、たくさんの尊い命を１人でも多く助けたいと思いながら現場に向かい、救えたかもしれない命を目の前で助けられなかった消防士の人達ではないかと思う。救助を待っている人達は、とても辛いと思う。

だから、私は環境防災科で学んだ事を活かし迅速に救助するだけでなく、心のケアなども含まれた救助などが出来るようになりたい。

１２．感想

災害は必ず発生するものである。私達は、その災害にどう立ち向かっていくのかがこれからの課題である。災害は、【時・場所・人】を選ばない。だからこそ、全ての国民が常に災害に対応出来るような意識を持ってほしい。

意識を持つ上うえで防災についても考えてもらいたい。どのようにすれば災害の被害を軽減出来るのかなどを考え、自分の中で収めておくだけではなく周りの人への情報発信も大切にしてもらいたい。そうする事により周りの人の防災に対する知識も高まる。また、発信だけでなく相手の事を聞くのも防災教育の一貫である。その意見の中から、自分が知らない情報を得る事が出来たり今までの自分の意見に加えて、よりよい意見に変化するかもしれない。

過去の災害の記憶や、災害によって心に傷を負ってしまい記憶を無くしてしまいたいと考える人も中には居るだろう。しかし、そうすると新たな災害で多くの被害者を出してしまうであろう。また、尊い

命がたくさん奪われてしまうであろう。辛いことの先には必ず楽しい事が待っていると思う。それを信じ、たくさんの人に教訓を伝え少しでもたくさんの尊い命が救えたらいいと思う。

未来のために

宍粟市千種町
雛倉　伸也

僕は当時、阪神・淡路大震災を経験したが、全然記憶がないので、家族や友達の話を書きます。

＜故郷＞

中学卒業まで過ごした僕の街は兵庫県内だが、神戸みたいに震災後のつぶれた街に新しい家が立ち並んだ形跡などなにもない。しかし、震度４という少し大きめの地震に襲われた。当時、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、お姉ちゃん、自分の６人家族だった。
揺れた瞬間僕は何も覚えていない。記憶があるのは小学校の頃に１月１７日に行っていた黙とうくらいだ。そして、先生が話をしてくれる。ときには当時のビデオをみた。
当時こっちに疎開してきた子もおりその子は雷が起こるだけでパニックになっていたのを覚えている。その時はなんやこいつと思っていたが、今となってはあの恐怖を体験したらやっぱり大きな音とかには異常に反応してしまっていたのだと思う。

＜朝＞

いつもの様に２階では僕、お母さん、お父さん、お姉ちゃんの四人で一緒に寝ていた。１階ではおじいちゃん、おばあちゃんがリビングのとなりで寝ていた。
僕より５歳年上の姉はこの地震で目が覚めた。少し大きな揺れだったため父は祖父、祖母を心配して１階の寝室にかけおりた。「大丈夫かいな？？」という声にすぐに反応があったため安心したそうだ。その日はなぜか姉は小学校を休み、母も仕事が休みだったためテレビを見ていた。そこには、今まで見たことのないような火事、破壊された建物が映し出されていた。まだ被害の情報がそんなにもでていなかったが、いつもは僕たちが学校を休むと学校が始まってから終わる時間までテレビもゲームもやらせてくれない母が、その日はお姉ちゃんに何も言わずニュースを見させた。僕は普段通り、幼稚園へいくための集合場所で消防団のポンプ庫にいったが小学生の人たちが朝早くに地震があったなあと言う話をしていたと思う。幼稚園に着いて、いつものように３０分ほど仲のいい友達と砂で遊んだりした。先生も来て幼稚園が始まったが先生は何も話さなかったと思う。僕たちはいつものように歌を歌ったり、はしゃいでお昼前に家へ帰った。

＜夜＞

みんなが揃う夕飯の時にテレビでもやっていたしお父さんやお母さんが話しているのを聞いた。なによりテレビでみた光景が印象的でなぜか覚えている。それまで神戸という街に行ったこともなければ、たぶん存在も知らなかったかもしれないし、幼いということもあったが、家族で遊びに行く時は姫路にいくことが多かったのだからだと思う。少し大きくなってから神戸であったのを知ったくらいだ。でも、その夜が地震の話題でもちきりだったためかなんとなく記憶にある。僕は幼稚園の頃レーサーになりたいくらい車が好きだった。そのためか、高速道路の倒壊でバスが落ちかけている映像がとても気になり、お母さんたちに「あのバスはどうなったん？」と何回も聞いていたそうだ。

＜友人の話＞

震災当日の朝、聞いたことのないような地響きで目が覚めた。とても長い揺れに僕は今までにない恐怖を感じた。気づいたときには家の中はぐちゃぐちゃだった。父の大丈夫か？と言う大声に自分も弟も「大丈夫！！」と答えた。勉強机に置いていた大切な当時の戦隊ものの人形が床に散らばっていたのを覚えている。大事にしていたのもあり、なぜか壊れてしまったわけでもないのに自然と涙が流れてしまった。弟は恐怖で大泣きしていた。家の中で飼っていた猫も見当たらなくなった。避難所で飼うと迷惑になると、家族みんなで帰ってくるのをあきらめた。特に母は一番かわいがっていたし、すごくなついていたので、母の寂しそうな顔をみて僕もすごく悲しくなった。それ以来うちの家では動物を飼うこと

はなくなった。
　運がよくすぐに避難所にも入れた、その日はおにぎりも１個だけだがもらえた。隣にいたおばあちゃんがよく話かけてくれて自分も弟も退屈せずにすんだし、珍しく仲良く過ごした。冬だったこともあるし、自分も幼かったのでお風呂に入れなかったのはそんなにも気にしなかった。父は何日か後には仕事に行くようになった。たぶん電車が使えなかったので、徒歩で仕事場まで通勤していた。帰りは、遅く、しかもくたくたになっていたのを覚えている。僕は、何不自由なく当時を過ごせたことをとても感謝している。もしかしたら、文句を言っていたかもしれないし、ダダをこねていたかもしれないが、記憶のなかで最悪やと思った避難生活はないと思う。いろんな優しさがあふれていて恥ずかしがり屋でよく顔見知りするほうだったが、このときはいろんな人と話をしたと思う。
　野球がそのころから好きだった僕は神戸を本拠地とするオリックス・ブルーウェーブ（現オリックス・バッファローズ）が肩に「がんばろうKOBE」という文字をつけ優勝したのには本当に勇気付けられた。家族みんなが野球好きなのもあり本当に力になったと思うし、暗い雰囲気の時もそれをはねのけてくれた。その年に日本一にはなれなかったが翌年には念願の日本一になり、復旧途中の神戸を支えたと思う。

＜父の話＞

　父は建築の仕事をしていたのもあって、神戸にボランティアに行った。
　その日は、まだ暗く、よくある地震より少し大きな揺れが長く続いた。起きてテレビをつけてもさっそくは状況を把握できなかったらしい。隣町にある職場についても揺れが大きかったなと言うぐらいで、なかなか神戸の情報も出てこなかった。ホテルが倒壊し救助を求めているとの情報くらいで父も仕事があったので食い入るようにテレビを見ることはできなかった。
　姫路に住んでいた同僚の人の家では屋根の瓦が落ちるくらいの被害があっただけだったようだ。同じ兵庫県なのにこんなにも違うのかと今にして思う。車でなら１時間程度の距離だ。しかし、被害は天と地の差だと思った。

＜ボランティア＞

　建築の設計を行う仕事をしていた所属の団体が神戸に事務局があった。震災から何週間か経っていたがボランティアに向かうことになった。まだ明けきらない暗い時間に家を出て他のボランティアの方と待ち合わせし神戸に向けて出発した。私の住む西播磨地域より神戸までは中国道は不通区間がある為途中まで利用し、途中国道を経由し新神戸トンネルを抜け神戸市内に入った。各交通機関も寸断されどのルートが通行及び利用可能かまだはっきりしない状況だったと思う。それまでは普通の時とあまり変わらない状況であったが、トンネル内は他府県各地からの警察、消防などの大型車輌で大渋滞し、サイレンが鳴り響き、市内の状況を予想させ異様であった。またかなりの時間を要した。市内に入り街の状況に、もうその時はニュースなどでは知っていたがブラウン管を通してみた世界とは違い、現実に見る状況は違う世界に来たと思うような驚くものであった。壊れるはずもないと思っていたものが無残な状態に横たわり、道路ではいたるところが隆起し液状化により砂が噴出していた。建物を設計する立場からするとショックがとてつもなく大きかったそうだ。事務局に着き付近の建物の多くが危険判定の赤い紙が貼られ建物内部への立ち入りが制限されていた。人員がそろうまで付近の状況を知ろうと徒歩により通りに出て見た倒壊建物の多くが、年数を経た建物が多く平面的にも問題のある建物が多かった。そのような建物が存在していることの危険性と技術者としての社会的責任をあらためて思った。
　震災の被害を受けた住宅の相談所が設けられた。兵庫県各地より建築士などがあつまりボランティア活動をおこなった。事務所では、まず内部の片付けを行った。書類棚やロッカーが倒れガラスが散乱して足の踏み場もない状態であった。当日は、住所、氏名、被害状況などの受付のみを行い後日に相談を実施するという方針であった。ひっきりなしに電話がかかり生活のよりどころの住む家に被害を受けられ不安な様子が手に取るように感じられ、「本日は受付のみです」と前置きし受付のみを行うのが申し訳なく思った。あまりの数の多さに受付しかできないことに力不足を痛感した。いずれにしても神戸が復旧し住宅を無くした人、被害を受けた人が元のように住めるという状況になるまでは時間と資金の面でもかなりの負担が生じるだろうし、はたしてできるのだろうかと痛切に思った。外も暗くなり活動も終了し事務所を後にしたが付近にいつもあった照明などがなく夜の暗さと寒さ・長さを強く感じながら家路についた。神戸を離れるほど照明など明るさが増え、生活の基盤がある我が家に着いて普通の暮らしのありがたさや暖かさがしみじみ感じられたという。関東地域からの派遣ボランティアに、建物の危

険度判定など多くの協力をしてもらった。すごく助かったので今でもそれは感謝している。
　阪神・淡路大震災はボランティア元年とよく言われるほど各都道府県からたくさんの方が訪れた。もちろん被災者の方にはありがたいことだが、身の回りのことをすべてやってあげると、被災者の方はストレスもたまる。自立の手助けがメインなのに趣旨が変わってしまう。何年か前ある被災地でこんなことがあった。散髪のボランティアが来ていて、無料で髪を切ってあげるというものだった。しかし、地元の床屋は仕事がなくなりその人にとってはただの迷惑になってしまった。ボランティアをすることはとても素晴らしいことだし勇気のいることかもしれないが、一歩踏みちがえると大変なことになってしまうというとだ。僕自身も新潟の中越地震で被災した山古志村にみんなと行ったが、被災から日数も経っていたこともあり、クリスマス会やお年寄りの話しを聞くことで精一杯だった。僕たちは、「ありがとう」という言葉がとてもうれしかった。

＜環境防災科＞

　僕は中学の時に消防士になりたいと思いこの環境防災科に入った。災害の時に活躍する消防士がかっこよかったからである。家は神戸とはとてつもなく離れていて、隣町は岡山県にもなるところだ。たまたま親戚が神戸に住んでいたので環境防災科を受けることにした。普通の学校を出ても消防士にはなれるのになぜ神戸までとよく聞かれるし、わざわざなんで来たん？と聞かれる。僕はこの質問をしてくる奴に腹が立つ。学科の名前を見たらわかるだろう。こんなにも専門的に防災の勉強ができたら、すごい消防士になれると信じてきたからだ。普通科をでた人間と比べろよと言いたい。ただなりたいんじゃない。人を救いたいのだ。
　この学科では当時の震災のことや自衛隊、消防士、警察官、ライフライン関係の仕事の方、建築士、あらゆる分野のかたの震災体験を講義で聞き当時のことをよく知ることができた。特に、消防の方がホースはあるのに水がなく燃えている家をただ見ているしかなかった話や、自衛隊の方がその時スコップしか持っていなくて閉じ込められた方の声が聞こえていたのに時間がかかり結局は声がしなくなってしまった話など、心に突き刺さるような話をたくさん聞いた。消防の消火隊にとっては屈辱的なことだ。自衛隊のかたも、あの時機具を持っていたらと悔し涙を流されていた。
　その他にも、地震のメカニズムや心理学、ボランティアの在り方などを教えてもらう。その中で皆がじぶんの考えなどをぶつけていく。そして、消防学校への体験入校。そこで僕は人の命を扱う仕事の厳しさを知った。そして、僕が消防士になりたいと一番思った、夏休みに行った垂水消防の体験入隊。消防士希望のもの数人しか行けなかったが、同じ夢をもった友人たちと実際に行っている業務（予防査察）や日々の訓練に参加するのはとても楽しくて夢にも近づいた気がした。
　そんな全国に一つしかないこの特殊な学科で学べたことを誇りに思っているし、阪神・淡路大震災を語り継いでいかないといけないと思う。環境防災科みんなが地域のリーダーとなり防災を引っ張っていけばこれから起こるといわれている、東南海地震や災害の減災へとつながっていくであろう。今も、中国の四川省で大地震がおこり多大な被害がでている。少しでも力になりたい。

＜終わりに＞

　僕たちは、阪神・淡路大震災を忘れてはいけないと思うし僕たち環境防災科がしっかりと語り継いでいかなければならないと思う。震災で命を落とされた方のためやこれからの未来のために。もう震災から１０年が過ぎた。人の記憶は薄れていくばかりである。もちろんずっと記憶しているほうが難しい。でも忘れないでほしい。なぜなら、次につながるからである。
　震災が起こってから、防災機関（自衛隊・消防など）やライフライン機関（水道局・電力・ガス）の危機管理体制が見直された。それだけではなく家の耐震基準もである。何が言いたいのかというと、阪神・淡路大震災が大失敗としよう、でもそれを教訓にみんなが準備をするようになった。建物の耐震、避難グッズの用意、心の準備。それだけで被害は減る。だから、大震災を忘れないでほしい、準備を怠らないでほしい。そのために僕たちがいるのだ。自分たちより年下の子たちは震災の記憶がほとんどないだろう。だから教えてあげないと準備しないだろう。
　当時の話を聞けば聞くほど防災に対して関心がわく。あの時こうしていたらどうだったのかとか被害はどうだったのかとか思う。いまでは震度７にも耐えられる家があったり、耐震、免震が強化されている。阪神・淡路大震災のことでぼくがみんなに知ってほしいのは、亡くなった方は火災や建物の倒壊で命を落としたのであり、食糧がなくて亡くなった方はいないのだ。そして、家の下敷きになった人を助

けたのは、自衛隊でも消防士でもなく近所の方々だ。僕は高校に入ってから神戸にやってきたが、近所づきあいのなさにビックリした。あいさつを交わせる関係などまだいいほうだ。「本当に震災の時に助け合いなどあったのだろうか」と思うほどである。でも実際あったのだ。ピンチの時だけの近所づきあいなんかいらない。いつ見捨てられるかわからない。僕は神戸という街に来てそんな気がする。もし田舎でこんな大きな地震があったらどうなっていただろうか。もちろん木造の古い建物が多いし山間部にある家が多く地震に強いとは言えない。しかし、助け合い、支えあいは強大なものだと思う。僕が中学卒業まで暮らした街は人口４０００人にも満たない。歩いていても少し遠くに出ても顔みしりや知り合いばかりだ。自治体ごとの集まりも多く近所づきあいはすごくいい関係だ。社会背景が防災力を左右しているのだ。

神戸では、多くの防災訓練が行われているし、僕たち環境防災科もそれによく参加させてもらう。しかし思うのが、高齢者の方ばかりで若者が一人もいない。消防の方もこれには困っていた。この文章を見てくださった方、できれば息子さんや友人に呼びかけて欲しい。訓練を受ければ死なないわけではないけれど、死なない確率は相当上がると思う。自分の地域、家は大丈夫だろうという考えが、大被害を生むのだから。

4歳の私・17歳の私

神戸市灘区新在家南町
藤原　由希

震災について私に語れることは、少ない。まだ小さかったから、というのは言い訳かもしれない。私は当時、あの被災地にいたのだし、様々な光景を見てきた。毎年１月 17 日になると、家では当時のことが話題になる。もちろん授業で、外部講師の方の授業を聞いてもふと思い出すことがある。それでも記憶はいつでも断片的だ。何故そうなったのか、それからどうなったのかをはっきり覚えていない。しかも、自分が体験したものか、聞いて想像したことを記憶しているだけなのかも定かではない。

だからこそ、今のうちに残しておかなければ、と思う。まだ私の記憶があるうちに。当時の私の様子を、周りの人たちが覚えてくれているうちに。

当時、私たち家族は、西宮市のマンションに住んでいた。春や夏には、甲子園球場からあのサイレンの音が聞こえてくるようなところだった。私は、近くの幼稚園に通っているとても人見知りの激しい子どもだった。

震災前の数日間は連休だったので、私たちは灘区の祖母の家に泊まっていた。母方の親戚も同じように泊まっていたそうだ。私たち家族は、親戚で集まることが好きなのだ。今でもお盆やお正月以外にも、誕生日などに集まったりしている。連休最終日の 16 日、親戚は学校や仕事があったので、自宅へと帰っていった。当然私たちも帰るのだろうと思っていたけれど、夜遅かったことなどもあり、もう１日泊まることになった。父は祖母の家から仕事に行けるので、誰も都合の悪い人はいなかった。その時、幼稚園をずる休みしていいのかなぁ、とすごく心配になったのを覚えている。それほど幼稚園が楽しかった、という記憶はあまりないので、今でもどうしてこう思ったのかは不思議である。毎朝、幼稚園まで引きずられるようにして行き、母と離れる時になると泣き叫んでいるような子供だったらしい。ずる休みしたことが先生にばれたらどうしようと考えるような、小心者だったということかもしれない。当然その時は、地震で幼稚園に行けなくなる、なんて考えていなかった。たぶん当時は、休むことへの罪悪感でいっぱいだったのだ。幼稚園に行きたいのか行きたくないのか、そのあたりが自分でも矛盾していると思う。今の私が、親の公認で休んでいいと言われたら、何をしようかと計画を練っているはずなのに。そういうわけで、祖母は１階で、私たちは２階でいつものように寝ることになった。

朝。いや、明け方。揺れではなく母の声で目が覚めた。思い返してみても、地震の揺れに関してはほとんど記憶がない。本震も余震も起こらなかったのに、被害だけ出た、という感覚が今でもある。母が、私と妹の名前を呼んでいること以外、何が起こっているのか全く分からなかった。先に起き出した妹が、近くで走りまわっているのが音でわかった。母の目には、踊っているように見えたらしい。どっちにしても楽しんでいたようだった。母は相変わらず私の名前を呼ぶ。しかし私は寝ぼけていて、夢の中で返事をしていた。「うるさいなぁ。わかってるって。」と言っているつもりだったのだ。実はこの時、たんすが倒れかかっており、私はその真下にいたので、下敷きになっているのではないかと心配していた、と母は言っていた。「返事しなさい。」と怒鳴られて初めて「起きとおって。」と声に出した。母はその間中、たんすを支えていたという。

真っ暗の部屋。動くものすら認識できなかった。繋いでいた母の手と離れてしまった時、このまま１人だけ置き去りにされてしまうのではないか、と不安になったほどである。近くにいるはずなのに、なかなかその手が見つからなかった。そして、再び手を繋いだ時、涙が出そうなぐらい嬉しくて、ぎゅっと両手でしがみついていた。しばらくすると、下の階で寝ていた祖母が上がってきて、わずかに開いたふすまから隣室へ移動した。大人が横向きになってやっと通れるくらいで、本当にわずかだったと思う。

さっきまでの暗闇のせいか、カーテンのひかれていないその部屋は眩しいくらいに明るく感じられた。夜が明けきっていない時間のはずなのに。一面光の世界、というぐらい眩しくて窓の向こうが見えなかった。目が慣れてきたころに、その窓から見えたのは、私たちの家にむかって崩れてきていた隣の家だった。ぺしゃんこ、という言葉をそのまま表したみたいで、自分の家だったらと想像して怖くなった。

私がそんなことを考えている間、母と祖母は必死に出口を探していた。部屋の扉に掛けていたはずの懐中電灯がなくなっており、真っ暗な家の中で手探り状態だったという。玄関でとりあえず靴は見つけたが、玄関扉があかず、窓の向こうの路地は倒れてきた家で埋まっていた。助かったけど出られない、そんな思いが頭の中を駆け巡っていた。そんなとき、２階の窓に向って叫ぶ声。家が崩れていた隣の家

のおじさんだった。おじさんは「出られそうなとこ探すから待っとけ。」といってまたどこかに消えてしまった。でもすぐにお風呂の窓が開いていると教えてくれた。そして、そこから出られると。妹は母に、私は祖母におんぶされ、ものが散乱した階段をおりた。次の段が見えないくらい、家の中は暗かったそうだ。お風呂場に着くと、私たちは隅っこに立たされて待機していた。母と祖母は、浴槽の上にこたつの上の板を敷き、足場をつくった。外には近所の人が数人いて、私から順番に外に出た。さながらバケツリレー。細い路地だったので、私の体は大人から大人へ、大通りまでリレーされた。次に妹。母と祖母は、近所のひとの手を借りて自力で出てきたらしい。もうその頃には、あたりはすでに明るく、騒がしいような、でも静かなような感じだったそうだ。ちなみに、家が潰れていた隣の家族も全員無事で、すぐに近隣の救助に向かっていたらしい。どうやってあのぺしゃんこの家から出たかは謎のままである。祖母は、２階に上がってくる途中で、階段にあったおもちゃなどが落ちてきて、全身あざだらけ。父は仕事のため４時頃に家を出ていたので、すでに家にはおらず、連絡もつかない状態だった。

それから１週間ほど、私たち家族と祖母は、近くの福祉センターで避難所生活を送った。床に毛布を敷いただけ、トイレはもちろん流れない、という健康的とは言えない生活。プライバシーもなくそれぞれの家族が隣り合わせで生活していた。しかし、幸いなことに、その地域は酒蔵があり、井戸水が出ていたので水に困ることはなかったそうだ。井戸から順番に水を汲んできて、トイレなどに利用していた。

地震発生からしばらくすると、父も無事に帰ってきた。父は、あの時間六甲山に向かう最中で、地震が起こったので慌てて引き返してきたそうだ。その途中で目にしたのは、六甲道や東灘の倒れた家や変わってしまった町の様子。道はでこぼこだったり、ふさがっていたりして、帰ってくるのにいつもの何倍もの時間がかかったそうだ。本人はあまり多く語らないが、母が聞いた話によると、帰り道での光景はあまりに悲惨なものだったらしい。何度も助けを求める人たちに出会ったが、自分の家族が心配だし早く帰りたいと思っていたので、それらを振り切らなければならなかった、と。避難所に辿りついたとき、すごくほっとした気持ちになったと。

避難所には、十分とは言えなかったものの、次々と救援物資が届いた。記憶にあるのは、主におにぎり。中でも鮭フレークの入ったおにぎりが来ると嬉しかった。コンビニのおにぎりもたくさんあったように思う。昔のコンビニのおにぎりは、包装が剥きにくく綺麗に食べられなかった、という印象が強い。炊き出しがあったかどうかは、母も忘れてしまったそうだ。小さい頃はわりと小食だったので、食べることに関してあまり記憶がないのかもしれない。食べ物を巡っての、目立った騒動なども覚えていない。自分自身がまだ幼すぎて、騒動が起こっていても気付かなかった、というほうが適切かもしれない。

避難所生活から数日経つと、近所のお医者さんや看護婦さんが、避難所を訪ねてきてくれ、簡単ではあるものの診察をしてくれた。この地域は昔からお年寄りの多い地域だ、というのを知っていたからだ。避難所にきてすぐに私・妹・母は相次いで風邪をひき、熱を出していたので一緒に診てもらうことになった。一番激しい咳をしていた私は、肺炎の可能性があると診断された。詳しい検査が必要とのことだったので、すぐに病院に行くことにした。近所のお兄さんに車を運転してもらい走っていたのだが、母は何度も怖くなったそうだ。その人の運転にではなく、周りの景色が変わりすぎていたからだ。道が通れなくて何度も迂回し、Ｕターンしてなんとか進んでいた。ぼこぼこの道、寸断されている道、車で通れる道は限られていた。母が一番怖いと言っていたのは、六甲道駅だ。六甲道駅は線路が折れていて、病院に行くにはその下を通らなければならなかった。通っているときに落ちてきたら、と考えると進むことがためらわれた。しかし、その道以外に病院に行く道はなく、覚悟を決めて通ったそうだ。そこを過ぎて山側に出ると、家もほとんど倒れておらず、まちの景色もそのままで、地震も何もなかったかのようだったとも言っている。

私は幸い肺炎ではなかったが、薬をもらって熱と咳を治すことになった。たぶんそのころには、母も妹も症状はほとんどなかったと思う。その薬というのは、座薬だった。その時から私は座薬が嫌いだ。もちろん今も。避難所の冷たい床、しかも真冬。周りにいるのは顔見知りとはいえ他人。私はまだ４歳。幼稚園に行くのも嫌がるほどの人見知り。そんな囲いもない避難所で、私は毎日座薬を入れるためにおしりを出さなければならなかった。寒いし、恥ずかしいしで早く治れと毎日願うばかりだった。実際は、私が思っているよりも早く治っていた、と母は言う。

そしてもうひとつ、避難所生活で嫌いなものがあった。トイレだ。水があるとはいえ自動ではないし、くさいし汚い。なにより家と違うのは、安心感みたいなもの。自分の家のトイレにあるほっとできる時間が、避難所のトイレには流れていなかった。個室の中は１人だけのはずなのに誰かがいるようで、昼間でも、夜中に起きて１人でトイレに行くぐらい遠慮したいことだった。たとえ１人じゃなくてもトイレには行きたくなかった。極力トイレに行くことを避けたくて、どれだけトイレに行きたくなっても、

限界まで我慢をしたり、という無駄な抵抗もしていた。それでなくても衛生的ではない避難所生活なのに、余計に不健康に近づいているみたいだった。それを見兼ねてか、母は妹用のおむつを私にもつけさせた。正直言うと、できればそれもつけたくはなかったのだが、トイレに行くことよりはまし、といった感じで仕方なくつけていた。もしあの時、おむつがなかったら、確実にもっとひどい病気にかかっていたと思う。風邪と熱で肺炎まで疑われたのに、これ以上ひどいと周りの迷惑につながる可能性もあった。

今まで避難所のトイレがくさいとか汚い、と散々書いてきたが、実はそのトイレをずっと掃除してくれていたのは、私の父と祖母だったそうだ。避難所にいる間、近所の人もやりたがらない仕事を黙々と続けていたのだと聞いた。汚くてくさいところで働くなんて、と正直考えていただろう。まったくそんなことなど知らずに、文句を言ってごめんなさい、とここで父と祖母に謝っておくことにする。しかし、そのことを知っていたからと言って、当時の私がトイレに行ったか、と聞かれたら、たぶん行かなかったと思う。トイレを汚したくない、などと別の言い訳をして避けていただろう。いくら当時の避難所のトイレが綺麗でも、家のトイレにある安心感を出すことはできなかった、と思うからである。もし今、安心感の出せるトイレの消臭剤が開発されれば、意外と売れるかもしれない。トイレ嫌いの子供に悩む親から注文が殺到しそうだ。企業のみなさんお願いします、と期待しておくことにしよう。

地震から1週間経って、垂水に住む親戚が迎えにきてくれたので、私たち家族と祖母は垂水へ避難することになった。最初に行ったのは、お腹に赤ちゃんのいる親戚の家だった。東灘の親せきも来ていたので、布団なども共同で使っていた。そのあとは知り合いの家にも泊めてもらった。元の家に戻るまでの間はずっとこんな感じの毎日を過ごしていたそうだ。1つの部屋でぎゅうぎゅう詰めになって寝たり（6畳間に10人くらい・1つのベッドに2、3人という感じ）、 みんなが寝ている時に、飼っていた猫が上から飛んできたり、と苦労することもあった。しかし周りはいつも仲の良い親戚ばかりだったので、それなりに安心して生活することができた。あまり嫌な思いをしたという覚えはない。たぶん震災前に思っていた幼稚園のことなど、まったく思い出していなかったはずだ。

親戚や知り合いの家は、避難所とは比べ物にならないくらい、ホッとできるものだった。トイレも綺麗で、自動で流れるから我慢なんかしなくてよくて、少ないながらも毎日あったかいごはんを食べることができる。そんな、震災前ならとてつもなく当たり前な生活が、どれだけ穏やかな気持ちをつくるのか、を小さいながらも実感していた。

春休みが終わる頃、西宮の家に帰ることになった。祖母は現在の舞子高校の近くにある仮設住宅で生活を始め、震災復興住宅に引っ越す日を待っている日々。

西宮の自宅は、建物的な被害はほとんどなかったのだが、中が散々だったそうだ。あらゆる家具は倒れ、床は足の踏み場もない状態。冷蔵庫は1番下の扉が出てきたので倒れなかったものの、中にあった氷が溶けて水浸しになり、使い物にならなかったそうだ。大切にしていた食器類もほとんど割れていて、母は相当ショックを受けていたということだった。

寝室にしていた和室では、テレビがいつも寝ていた頭の位置に落ちてきていた。もしあの日家に帰っていたら命はなかったかもしれなかったのだ。部屋に転がる幼稚園のバッグも、大切なぬいぐるみも私の持ち物でなくなった気がした。あまり奥までは見せてくれなかったが、子供の目にも大変なことが起こった、とはっきりわかった瞬間だ。

あわただしく片付けをする両親や親せきの間で、危ないからと役目を与えられなかった私は、ようやくはっきりと地震が奪っていったものを心の中に感じ、立ち尽くした。言葉で言えないものが全部隠されたみたいだった。もしかしたら私は、気持ちを言い表す言葉のほうを無くしていたのかもしれない。

目に映るすべてが無彩色、動くものはビデオのスローモーションを延々続けていて、音は私の耳に届く前に落ちて消えてしまった。当時のことを今の自分にある精一杯の言葉で表すとこんな感じだ。その場所に置いて行かれるような気持ちに寂しいと怖いを混ぜたような感覚に陥ってしまった。そして、近くにいる誰かにひっついていたのだ。

日増しにまちや家が落ち着きを取り戻し始めたある日、灘の祖母の家が取り壊されることになった。母にとってそこは共に生活した実家である。集めていたマンガ、小さい頃の作文、思い出の洋服、背くらべした柱、そんな歴史を凝縮した家が取り壊される。できれば家のものすべてを取り出したかっただろう。しかし、散乱した家から外に出せるものは限られていた。私が覚えているのは、家が取り壊されたあとだけだ。そこだけポカリと茶色い地面が見えていた。更地になった土地に何か残っていないかと、2つ上のいとことその場所に足を踏み入れた。真ん中あたりに、本当に忘れられたように、おもちゃの

ピースが１つだけ落ちていた。たくさんの思い出は、たった１つのピースになってしまった。

その後、祖母は灘区の震災復興住宅に引っ越し、私たちも夏ごろには垂水区に引っ越しすることができた。その頃からは幼稚園も好きになり、毎日元気に通っていた。長いながい避難生活から、やっと抜け出し「普通の生活」に戻れたのだ。そして、特別なこともなく今に至っている。震災のことは、1月17日前後に少し考えるくらいで、あまり意識せずに過ごしてきた。

環境防災科であっても、特別なことはない。逆にいえば、すべて特別ということかもしれない。普通科よりは、災害などについては学んでいるが生活は変わらない。本当に普通と呼べる毎日は、幸せだと思う。

それでも、恵まれていると感じるのは、多くの人と交流ができる点だ。警察・消防・役所の方・国連の職員の方・他県の高校生・地域の小中学生・ボランティアの方など、ここでしか出会えないような貴重な出会いがたくさんあった。そしてそのような行事には、積極的に参加するようにもなった。その中で、感じたのは、『共感』の意味のようなもの。同じ災害でも、違う災害でも、何かを失う悲しみや将来への不安、人の温かさは分かり合えることがある。それは特別な体験だけに限らない。不便だと感じたこと、家族を心配する気持ち、語り継ぐほどのものではないと感じることも、世間話の中から見つけていった。

自分が伝えていくのはもちろん大切だが、自分以外の人の思いもきちんと受け止められる姿勢を忘れずにいたい。私にしか感じられないものも確かにある、と教えてくれたのも、数々の出会いであり経験であった。震災の教訓を語り継ぐことは、次の世代に『共感』させていくことだと思う。何故そうなったのか、次はどのようにすればいいのか、自分になにができるのか。そういった思いを、語り継ぐことから感じてもらい、共に考えていくことが、私たちが震災を知らない子供にできることではないだろうか。ただ事実を伝えるなら、本にも機械にもできる。しかし、１人の人間としての気持ちや生きかたを伝えていけるのは、生身の人間だけなのだ。今後もその気持ちを忘れずに、多くの人と『共感』していきたいと思う。

震災について私に語れることは、少ない。あの地震を経験した何万何百万分の１人にすぎない。しかし、今の私は多くの人の経験も吸収し、災害についても考えるようになった。震災を忘れないでほしいと願うのは当然のことだが、聞いてくれた方が自分の毎日を考えるきっかけになってほしいとも思う。

大人のように賢くもないし経験もないので、こんなことを言うのはおこがましいが、小さい子供のほうが大人の何倍も多感だと思う。仲の良い子が引っ越ししたり、おもちゃをなくしたり、大きな音がしただけで泣いてしまうこともある。そんな時期にきちんと震災の痛みを伝えておくのも重要かもしれない。ショックを受けることで、家族を失わないために、おいしいごはんを食べるために、その子達なりにできることを考えていくはずだ。もちろんマイナス面だけでなく、みんなと協力することや自分の身を守る方法も伝えていく。これらは4歳で震災を体験した私の、教訓でもある。

これから、もっと多くの人と交流し、吸収し、伝えていく内容を増やしていきたい。そして増やすだけでなく、もっと内容の濃いものにしていきたい。悲しいことを悲しいままで終わらせない強さも、身につけていきたいと思う。もっともっと視野を広げ、日本だけでなく世界へも伝えていければ、と考えている。

忘れてはいけない、あの日

神戸市垂水区舞子台
細岡　亜衣

当時私は４歳。自分の体験は、かすかな記憶しか残っていない。この「語り継ぐ」を作成するにあたって、初めて聞いた話もたくさんあった。両親から聞いた話と環境防災科で学んだことをもとに、私が伝えていきたいことを残そうと思う。

当時私は、祖父母・父・母・5歳上の兄（当時小学校3年生）・双子の兄の7人家族で一軒家に住んでいた。
前日もいつもと変わらない1日を過ごし、いつものように2階の部屋で母と双子の兄との3人で寝ていた。

＊震災直後＊

私は何が起こっているのか分からない現実の中、布団に潜ることだけで精一杯だった。布団がいつもより重く感じ、いつものように動くことができない恐怖に襲われていた。いつもなら簡単に出られるはずの布団からなかなか出られなかったということを、かすかに覚えている。私はあの大きな揺れでも起きず、お母さんの叫び声で起きた。祖父が様子をみに2階へあがってきてくれたときにも、まだ布団に潜ったままだった。いつ布団から出たのかは覚えていないが、布団の上に落ちてきた荷物を順番にどけてもらっていったのを覚えている。下に降りるための階段にはたくさんのものが散乱し、足の踏み場もないほどになっていて、天井がはがれおちていた。台所の食器棚にはいっていた食器は、数多く割れていた。父は、私たちが寝ていた隣の部屋で寝ていたが、体の横にあったテレビは、体を飛び越え反対側にあったという。1階の普段あまり使っていない部屋にあったテレビは、2mぐらい飛んでいたと聞いた。祖父母が寝ていた部屋にある仏壇は、傾いていたそうだ。

不便な生活が始まり、その日には、2 件ほど隣に住む仲の良かった家族と一緒に、外で焚き火をした。その家の人は、当時妊婦さんだった。小さいながらにも、大丈夫なのかなと思いながら大きなお腹をみていたのが記憶に残っている。

母方の祖母が、連絡がとれないことに心配し、神崎郡から母の兄とともに神戸まできてくれた。普段は 2 時間ぐらいの道のりが 5、6 時間かかったそうだ。そして、その次の日には、神崎郡に住んでいるお父さんの従姉が様子を見に来てくれて、母方の祖父母の家まで連れて行ってもらった。神戸は余震が続いていて生活も不便だったので、1 週間ほど祖父母宅で生活を送った。祖父母宅で過ごせたからこそ不便な生活を送らずにすんだということに、今になって気付かされた。
その頃、父は神戸に残って、大変な毎日を過ごしていた。徒歩 10 分ほどのところにあるスーパーには、店をとりまくかのように人が並んでいたらしい。だから、父はそこのスーパーを諦め、次の日にバイクで東加古川まで買い出しに行ったそうだ。そこで、ダンボール２つ分の買い物をしてきたと聞いた。そのときに、ポリタンク 18 リットルを２つ買って、持って行った分の 10 リットルと 5 リットルという計 51 リットルの水を、加古川にも仕事の事務所があったのでそこで汲んだそうだ。それをすべてバイクに乗せ、乗らない分は体にポリタンクをしばりつけて帰ってきたらしく、何度も重みでこけそうになったと言っていた。その話をこの年になって初めて聞いて、本当にびっくりした。どれだけしんどくて大変だったか･･･。家族のためにしてくれたことなのだと思う。今さらかもしれないけれど、本当に感謝したいと思った。

父の仕事といえば、会社と連絡が取れたのは2、3日経ってからで、1週間ほど自宅待機をするように言われたらしい。会社に行ったのは神戸まで電車が動き始めてからだそうだ。会社は三宮にあったので、神戸・三宮間を歩く日が何日か続き、1ヶ月で5キロ痩せたと言っていた。電車が動き始める前にバイクで行った日もあったが、危なくて止めたと言っていた。自転車で三宮まで行った日もあったらしい。当時父が働いていた部屋はすべて燃え、ロッカーの中からビジネスバックの金具部分と傘の骨だけが出てきたらしい。消防の調査によると火災原因は不明だそうだが、たぶん薬品が原因だと父は言っていた。

その時使っていた机がぼろく、あの大きな揺れでも引き出しが開かなかったそうだ。開かなかったからこそ、机の中のものが無事だったという笑い話も聞いた。新しい机を使っていた人は、引き出しがすべて開いたために中身もすべて燃えてしまったらしい。燃えたために改修工事というものがあり、元の場所に戻れるのに1年かかったということ。その間、建物の中の会議室や駐車場につくったプレハブを転々としていたと言っていた。

水を持ってきてくれた知人がいたとも聞いたし、私の家よりもはやく水が出始めた家の人にお風呂を貸してもらったりしたとも聞いた。たくさんの助けがあったからこそ、乗り越えられた壁だったのだろうと思う。

＊今　そして、これから･･･＊

祖母は、前日に旅行から帰ってきたばかりだったらしい。もし日にちがずれていたら、帰ってこられなかったという話をしたそうだ。私が今になって改めて感じたのは、私が生きていられるのも奇跡なのかもしれないということ。もしも、頭の上に置いてあったタンスが倒れていたら･･･そう思うと、ぞっとする。頭の上にはタンスがあり、その上には衣装ケースや座布団箱といった大きなものがたくさん積まれていた。あのタンスがとめられていなかったら、今私はいないのではないかと思う。地震前は簡単な固定だったけれど、地震が起きてからしっかりと固定し直したそうだ。耐震の大切さを改めて実感した。そして、当時住んでいた家には祖父母が今も住んでいる。地震の影響で閉まらなくなった部屋のふすまがあった。何年間か、仕切りのようなものを取り付け、不便な生活を送っていたのだ。そこは何年か前に直されたが、今もまだ開閉しにくい。ある部屋は、テーブルの上に鉛筆を置くと転がる。部屋自体がかすかに傾いたままになっているのがわかる。震災の傷跡が、確かに残っている。

あの頃の私は、地震というもの自体、知っていたのかわからない。ただただ揺れているという恐怖に襲われていたようにも思う。最近、地震がきたら自分には何かできるのだろうかって考えたりもする。小さな地震がくるだけで、ふと頭に浮かぶ阪神・淡路大震災。災害の恐ろしさを勉強してきたことで敏感になり、どこかビクビクする自分がいるようにも思う。私は、大切な人にこそ、この恐怖を伝えていきたいし知っていてほしいとも思っている。震災で大切な人を失うということが、私には考えられない。自分は大丈夫という間違った意識を捨て、自分の身は自分で守るという気持ちを持ってほしい。そのために、同じ地震は二度と来なくても、二度とこのような悲しみを味わわないように、備えというものをきちんとしていかなければいけないと思っている。初めは簡単なことからでもいいと思う。小さなことが、命が助かることに繋がることだってあるのだ。少しずつでいいから、自分にとっての大切なものというものを思い浮かべながら、そのような環境づくりをしていけたらいいと思う。災害をなくすことはできないかもしれないけれど、防災や減災は、人々の少しの意識でできることだと思っている。そして、そこからまた広げていってほしい。

この震災からつくられた《しあわせ運べるように》という歌は、今では幅広く歌われている。私は、あの歌を聴くたびに、毎日をしっかりと生きていかなければいけないという一つの使命のような重みを感じる。初めて知ったときは歌詞の意味なんて何も分かっていなかったけれど、今は“亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこう”って、歌詞がすごく響いてくる。

ルミナリエに対しても、一つの想いがある。震災の年から始まった《神戸ルミナリエ》は、阪神・淡路大震災の犠牲者の鎮魂の意を込めると共に、都市の復興・再生への夢と希望が託されているということ。今神戸に住んでいる人で、ルミナリエを知らない人はほとんどいないように思う。行ったことはなくても、クリスマスの時期になればどこかで一度はその言葉を聞くのではないかと思う。だけど、ルミナリエの本当の意味を知っている人はどれぐらいいるのかと疑問に思っている。私もこのルミナリエには毎年のように行っていたが、本当の意味を知ったのは高校に入ってからだった。何も知らずに見るルミナリエと、この意味を知った上でみるルミナリエ･･･全くと言っていいほど違うものに見え、本当の意味を知ってから見たあの輝きは、今までの何倍以上も綺麗にみえた。続けていくことが難しいといわれているけれど、阪神・淡路大震災を忘れないためにも続くことを願っている。会場へ足を運ぶ人たちの小さな気持ちがきっと大きなものになると思うから、本当の意味というものを、ルミナリエ会場へ足を運ぶ人に知っておいてほしいと願っている。

環境防災科にはいって、数多くのボランティアやイベントに参加させてもらうことができた。環境防災科にはいるまで、ボランティアなんて自分にはあまり関係のないことだと思っていた。だけど、「初めて知ったわ」とか「ありがとう」とか、そこに来てくれた人たちの言葉というものが、私にとってすごく大きくて嬉しいものであって、また頑張ろうって自然に思えるようになった。これから先も、自分にできるボランティアには進んで参加していこうと思っている。

そして、私には夢もできた。環境防災科を通し、たくさんの人との出逢い・たくさんの経験があったからこそ、人と人との繋がりを大切にしていくことと、何か自分にしかできないことを見つけようという気持ちができた。そして、そのことが今の夢へとつながった。人と人との繋がりの大切さは、一番大切にしたいことであり失いたくない目的となっている。自分にとっても大切な人がたくさんいるからこそ、その大切な人たちのために頑張ろうと思える。自分の夢を、自分にとって自慢できる仕事にできるように、私は突っ走っていこうと思う。防災との繋がりなんてないように思われているかもしれない夢だけど、私は阪神・淡路大震災について学んできたなかで、人と人との繋がりの大切さというものを強く感じている。そのような繋がりからは、本当にたくさんのものを得ることができると思っている。だからこそ、その仕事を通してたくさんの人との繋がりを大切にし、自分からたくさんの人に、感動や夢を伝えたり与えたりできるような人になりたいと思っている。そのなかで、環境防災科で勉強してきたからこそできる、安心安全な環境をつくり、楽しんでもらえる空間を提供することも、仕事の１つだと考えている。

＊1.17＊

今もまだ震災の傷が消えていない人はたくさんいる。1.17 という数字を聞いて、どれだけの人が震災を思い出すのだろうか。被害が少なかった人たちにとっては記憶が薄れていっているのは確かだと思うし、私たちが震災を覚えている最後の世代というのも確かである。“体験した阪神・淡路大震災”ではなく“教えてもらった阪神・淡路大震災”と言ったほうが正しいような気もする。環境防災科にはいるまで、阪神・淡路大震災のこともほとんど知らなかった。だからこそ私は、ひとりひとりの語り継ぐという気持ちを大切にし、広げていきたい。私にとってこの《語り継ぐ》は、自分の記憶というよりも伝えていきたいという気持ちのほうが大きい。これから神戸のまちはさらに進化していくと思う。だけど、いくら神戸のまちが綺麗になったとしても、私たちは震災を忘れてはいけない。私は、環境防災科に入学して、1 月 17 日というものが、本当に大切な 1 日となった。

東遊園地で行われている 1.17 のつどい（追悼式）にも初めて行った。今までは、テレビで少し見る程度で、学校で黙祷をするぐらいだった。環境防災科にはいって、自分ができることなんて本当に小さくてささいなことだけど、あの場でなにかしたかった。どしゃ降りの中、1. 17 の形が作られた竹筒の中の水を入れ、1 つ 1 つのロウソクに、想いを込めながら火をつけてまわった。その場でしか感じることのできない想いがこみ上げ、記者のインタビューがあれほど辛いものだということを感じたのも初めてだった。降りやまない雨に、何か大きな意味があるように感じられた。たくさんの人の涙のようだという話も聞いたりした。次の年も、本当に寒かったというのが印象に残っている。この年は、マスコミの態度に悔しくて泣きそうだったのをはっきりと覚えている。マスコミがあの場からなにか感じていたのかは、わからない。だけど、あの場にきている人たちは様々な想いを抱いてきているのに、その人たちを邪魔するような形でカメラを回し映像が作り出されていて、子供や泣いている人をみつけてはインタビューをしている。「なにか違う。」「納得できない。」私は、どうしようもない溢れる気持ちでいっぱいだった。

黙祷の瞬間、あの場に居た人々は何をどう感じたのだろう。阪神・淡路大震災への、たくさんの想いを抱いて･･･

＊大切なモノ＊

私は、この震災を許したくはない。だけど、恨むことができないというのが正直な気持ちである。震災は大きな被害をもたらしたけれど、私にとっての今があるのは、あの阪神・淡路大震災があったから

こそでもあるのだ。環境防災科に出逢えたのも、環境防災科の仲間に出逢えたのも、大好きな親友に出逢えたのも･･･この震災があったから。環境防災科は、この震災があったからこそできた学科であり、だからこそ集まった仲間がここにいる。震災に対してひとりひとり想いがあって、ひとりひとり夢もある。私にとっての大切な仲間。そし

て、小学校からの付き合いである親友は、震災当時被害が大きかったまちに住んでいたが、震災の影響で垂水に来たと言っていた。今では私にとってかけがえのない存在である。震災が起こらなかったら出逢うことはなかったのだと思う。そのような思いがあるのと、たくさんのことに気付かせてくれたからこそ、震災に感謝しなければいけないのかもしれないと思っている。生き残った人たちが毎日をしっかり生きていく。そして、絶対に震災を忘れないようにしていく。それが私たちにできる精一杯のことではないだろうかと思う･･･

1 月 17 日。この 1 日だけでもいい。私は、ひとりでも多くの人に、阪神・淡路大震災というものを思い出してほしい。そして、6400 以上もの命が生きたかった明日を、私は大切に生きていく。たくさんの尊い命を無駄にしないように･･･

語り継ぐ

加古川市野口町
前原　葵

『語り継ぐ５』

「朝ごはんは？」そういってパパは仕事に出かけた。

その日はいつもと違っていた。粉々に割れた食器、飛び出した本や小物がそれぞれに隙間を埋める。まるで昨日と同じに行動するパパはとても不自然だっただろう。それでも幼い私は微塵の違和感も感じとれずに、断片の欠けたまま今日まで成長してしまった。今振り返ると、あまりの無防備さに言葉がなくなる。思えばその当時から、物事を深く考え込むのが苦手だったのかもしれない。
なぜなら直後、幼い私ですら感じた違和感のなか再び夢を見たのだから。

寝室のドアをくぐったすぐ左手に続く、不自然なほど明るく照らされた階段。それが私の１月１７日最初の記憶。まだ眠い目をこすりながら向けた視線は、いつもの景色をとらえなかった。
短い距離で終わる階段を下ると玄関に突き当たり、それ自体はさほど高いとは言えないものだった気がする。それでも幼い私には１つの遊具のようで、勢い良く駆け上って蹲いては泣いた。キッチンの床下収納を改築するため大きく口を開けていた床に見事はまってケガをした時も、テストで良い点を取った時も、何かといえば時間を過ごした私の定位置だった。階段を降りる左手には大きな窓があって、レースのカーテンが作った影は窓辺に置いたいくつもの植木鉢に降り注いでいる。小さく分けられた色とりどりの花がきれいに咲くと、いくらでも見つめていられた。なのに、同じオレンジに照らされている今は全く別の世界のようだった。
赤茶色の植木鉢が砕けたカケラで踏みつける、力の抜けおちた花のせいなのか。降り積もった土に押しつぶされた階段のふもとで、「降りてはダメ」だと私を制する母のせいなのか。それとも蛍光灯の無機質なオレンジに問題があったのかもしれない。大きな飴玉をまるごと喉に詰まらせたような、そんな感覚に襲われた。それでも声を絞り出してたずねた私に「大丈夫」だと母は言うから、幼い私は安心できた。足りない頭で、また喧嘩でもしたのだろうと思いこめた。パパは何かとスゴイ人だったので、壁に開いた穴が額縁でふさがれていた。パパは妹の隣で眠っていたのに。何も分からない３才の子供は、言葉が全てだと思っていたのだ。宙を舞う埃のように浮かんだ疑問もその真意を問われることはなく、幼い私は再び意識を手放した。

低血圧なのか寝起きのとてつもなく悪い私が、短時間でも目を覚ましたことに母はとても驚いていた。当時は２世帯住宅で隣の家には母方の祖父母が住んでいたが、我が家ではパパも妹も朝まで眠り続けていたのだ。幸い、寝室には布団しか敷いていなかったので、誰１人ケガをすることはなかった。祖父母もかすり傷１つなく、これといって特別なことはなかったように思う。
後になって聞くと、５時４６分当時リビングにいた母は突然の揺れでピアノにしがみついたらしい。両手で黒塗りの脚をつかみただがむしゃらにしがみ付く。聞くだけならあまりに滑稽でくらくら振れる振り子を連想した幼い私も、ガタガタと鳴る、自らを支えきれない現実に気づくとすべての色を奪われてしまった。私自身は揺れが治まってから目を覚ましたので、それほどまでに凄まじい振動を想像すらできなかったのだ。あまりに軽率で、短絡的な脳だったと今更ながらに考える。それでも当時の私には「そうだったのか。」「こわかったのかな。」としか残されず、それ以上の不安や恐怖が訪れることはなかった。

家の外壁にはゆで卵を転がしたような亀裂が走っていた。おそらくは激しい揺れに耐えきれず、残された傷なのだろう。初めのうちは気にもとめていなかったのに。コンクリートを踏みしめながら見上げる先は、補強のためにヒビを埋めた白のラインで私の記憶に張り付いた。いくら太陽がその身を焦がしてもそこだけは雨に打たれているようで、アオい気持ちに埋め尽くされる。年月を経るごとに薄れていくそれも、忘れることはないのだろう。なにをするにも、私の思い出と１番近い距離にあったのだ。
しかし小学４・５年生の頃、家は改装されることになった。壁もきれいに塗りなおされ、当時を外観だけで思い出すことはない。今までと雰囲気や装いを一変することで、そのものが持つ記憶に膜をはってしまったようだ。ただ単純に、変化していくそれに気を奪われたのは、今までとは違う環境に鮮やか

な色をみたからだろう。家を変え土地を変え、当時を残す形あるものは失われていく。私自身も引っ越しが決まったため、もう何年もその場を訪れてはいない。遠い距離の記憶になってしまった今、神戸にいる私にはそれすら見ることができないのだ。けれど、だからといって恋しくなることはない。ただ懐かしいと感じるだけ。電車やバスを乗り継ぐわけでもなく、こんな風に時々思い返しては私の思い出たちと会話をするのだ。それだけで、完全に消えてしまうことはなくなるだろう。

たとえ確かな証拠がなくなって、記憶が途切れてしまったとしても。思いを繋ぎ繰り返すことができる。高校３年生の私は、幼い私が幸せだと思っていた日々がこれからの未来、『安心できる場所』で続けばいいと感じている。大切だと思うモノをなくさないためにも、『語り継ぐ』ことの大切さを広めていきたい。記憶が細胞や固有の物質によってコピーされ、形づけられたものでしかなかったとしても、１７歳になった私が同状況で夢に落ちるとは思えないから。

『環境防災科』

中学３年生の少し肌寒くなったころ、私たちにも「進路」という大きな選択を迫られる季節がやってきた。部活動や遊ぶ事に急がしかった昨日は、あっという間に過ぎ去ってしまったようだ。学校と家とをただ往復する生活のなかで気がつくと、１人、また１人と向かう先を見つけていって。それまであらゆる方向へアンテナを張り巡らせていても掴みきれなかった具体策を、今更騒いだ所で見つけられるはずもないと考えていた私は、それでも同学年の仲間たちよりはゆったりと構えていた気がする。
今になっては恐ろしく思うときもあるが、「安全策」というものを活用する気にもなれずただ漠然と、他の大多数と同じように進学するのだろうと考えていた。第二志望どころか志望校の候補すら見つからない私にとって、必要のないことだとも言えた。当時の私には特にやりたい事も興味のある事もなかったので、何のために高校を選ぶのかと不思議に思ったこともある。どこにいっても学ぶことは大して変わらないだろうし、ただ中学の延長で３年間を学校に拘束されるのだと卑屈になっていた。そんななか、「舞子高校は素敵だ」という話を捕まえた。いったい何がステキなのか、その基準は何なのかなど最も重要だと思われる箇所の抜け落ちた、なんとも薄っぺらい情報だったように思う。それでも「素敵だ」という表現に言いようのない興味を引かれた。

興味を引かれたからといって何かしらの行動をとることもなく、ゆるゆると流れる時間と並行して、私もまたゆるゆると流れていた。気になっているだけで、行動に移そうと思えるほどに惚れ込んではいなかたのだ。そんな時、舞子高校には「環境防災科」なるものがあることを知った。普通科や商業・工業の学科なら学校見学や説明会で耳にする機会も多く、漢字の並びでなんとなく伝わるものもあるのだけれど。この学科にいたってはイメージすら掴めなかった。
それから積極的に情報を集めるようになり、この学科への興味も雪だるま式に大きく膨らんでいった。環境についての記事を読んだり地震について勉強したり、確実に増えていく知識のなかで興味は希望に変わっていて、環境防災科を本気で目指すようになっていた。

今こうして文字を打っているのは「環境防災科」の生徒だからで、受かっていなかったらどうなっていたんだろうかと、ふと思うときがある。やっと決まった志望校も当時の私には学力が足りないと言われ、悪い事言わんから滑り止めの私立か第二志望の学校を決めろと言われ続けていた私は、最後まで当時の担任を心配させていた。合否の結果を告げたとき、おまえが１番心配やったと言われたほどだ。それでも、私の性格上「安全策」を講じていなかったからこそ必死で頑張れたのだとも思う。とてつもない危機感のなか疾走できたからこその結果、今こうしてあの頃はがむしゃらだったと振り返られるのだ。
この学科へ進んで得たものは大きい。受験時の騒がしさやギリギリ感なんて比べ物にならないくらい、とても充実した毎日だ。ココでなければ学べなかったこと、環境防災科だから身に付いたこと。それは私の人生のなかで大きな割合を占めていくだろう。それはこれからも変わらないと思えるくらい、この３年間はステキだった。今なら「素敵な学校」だというのを肌で感じる事ができる。

これは私にとって、とても良い選択だった。内面的にも至らない、まだまだ未熟。やるべき課題や越えなければいけない事実は沢山あって、それは常に迫ってくるけど。普通の高校生をしていたよりも広い視野でそれらを捉え、多方面から見つめることが出来ると思う。そう考えることで自分を維持できるし、逃げないで立ち向かうことができるだろう。
今の自分にできること。背伸びするのも良いけれど、それだけに気をとられないようにしていきたい。

この３年間をムダにしないためにも。

『学んだ事』

どんよりと、灰をかぶったような空は重苦しくて。たまらず引きこもりたい衝動に駆られる。外に出るといつもより水分を多く含んだ大気に押しつぶされてしまいそうだ。すれ違う人たちも心なしか元気がないように見える。２００８年５月、私を含む何人かは三宮の駅前で箱を抱えて叫んでいた。

１年生から３年生までの１０数人は３等分されて、思い思いに呼びかけた。青紫色のベストとキャップ帽をかぶって、はみ出す裾からは制服が覗いている。私たちは信号前に立っていた。歩道をわたった向こう側にも同集団がいて、ちょうど道路を横断している人たちには両方向から声が聞こえる。募金活動を始めてか１時間と少したった頃だろうか。右手に花火セットをさげた男の子がふらふらと近づいて、そっと思いを届けてくれた。私よりも２つほど年下だったろうか。男女２人ずつくらいの仲間内では、「そんなんする必要なくない？」と女の子たちがこぼしていた。そんななか行動に移すことは、どれほどの勇気が必要だったのだろうか。踵を返す背中で揺れる、赤と黒のタータンチェックのシャツが妙に印象的だった。もちろん、そうすることが当たり前ではない。顔も見えない相手に寄付をするなんて、その行為が特別なのだ。毎日バイトや仕事で夜遅くまで稼いだであろう物を、コロンと白い箱へ入れてくれる。なかには自分のお小遣いからなのであろう、細い小さな手で「おうえんしてます」と伝えてくれる、小学生くらいの子もいた。始まった時にはただの箱だった白い塊が、たくさんの人の想いで少しずつ重さを増していく。

午後１時、２時間の活動を終えて集合したころには開始前とは別人に思えるほどにかすれた声で。立ち続けていたことから棒のような脚はポキポキと、関節から外れそうだった。けれど、そんなことを感じさせないみんなの笑顔が、膨らんでいく充実感を表していた。

「してあげる」のではなく、私たちだってこんなにステキな気持ちを分けてもらっている。吹き抜ける湿った空気すら、心地よく感じた。

『将来』

３年生になっての環境防災科特別授業の時間、”Active”での最初の課題は「夢と防災」というものだった。自分の将来の夢と３年間でえたことを、どうつなぎ合わせるか。私の現時点で目標は「好きなこと」で「大切だと思うこと」を伝えられる人間になること。本職を持ちながら今までのような活動を続け、もっと上へ向かっていこうというものだ。

環境防災科を卒業してしまったら、今までのように学校側から提供される活動に参加することはなくなる。受け身ではなく自ら探し出す必要があるのだ。そのためには自らのネットワーク（人脈）を広げていくことが大切で、それによってさまざまな考え方や伝え方を感じることもできるのではないか。それまであまり興味のなかった人たちを雪だるまみたいに巻き込んでいくことが、もっと広い範囲での共感や理解をえるために必要で。そしてそうやって巻き込んで、どんどん膨れることが本当の意味で「ネットワークを広げる」ということではないだろうか。卒業したら終わるのではなくて、もっと多くの人たちにこれからも発信し続けたいと思っている。

たくさんの人に伝えたい。そう思うからこそ自分の表現に責任を強く持つ必要があると感じる。それに、環境防災科がそうであるようにその世界にはその世界に興味のあるひとが存在しているわけで、防災や環境に関する集団にとびこめば同じように、それに興味を持つ人たちに出会うことができる。けれど、それでは同じ世界でしか広がらないように感じてならない。確かに、自分の知識を深め他人と情報を共有することはとてもたいせつ。でもそこで自分の知識や体験を発表し、意見や賛同を募ったとしても内輪の会議でまわりまわっているようで、なんだか違う気がするのだ。

実際、ある程度の知識や情報を持っている人は自ら対処し回避・解決することが可能だろう。だからこそ、私たちが１番に伝えるべきなのは興味のない人、興味があっても得る場所がない人なのではないだろうか。そういう人たちを巻き込んでいくことが「広く伝える」ことなのであり、その結果が災害時の被害を抑止・軽減することにつながるのだ。

私にとって防災や環境は無視できないことで、それはこの学科に在籍しているからだけではないと思う。たとえば、自分に子供ができたとして、その子が大切だと思うなら布団で窒息しないように配慮する。それは家の下敷きにならないように耐震化をすることや、そこまでできなかったとしても押しつぶされるのを防ぐために家具を固定することと同じだと思うのだ。そう考えたら、滅多に起こらない現象なのだからすることはないと考えていた人も、少しは興味を持つようになるだろう。たとえその時は大して気に留めていなかったとしても、ふと思い出すことがあればそれも自分の知識になっていて。どうしたらよいのか分からないという状況には陥らないはずだ。

そんなふうに、まずは興味を持ってもらうこと。行き着く先は理想の自分に少しでも近づいていてほしいと思う。だからこそ、そう考える今の自分を大切にしていきたい。

『まとめ』

この授業を通して改めて考えたこと、新しく感じたことを絶対無駄にはしたくない。この機会がなければ自分のなかで、防災や環境について整理することもなかっただろうと思う。これからも今まで以上にたくさんの人に出会って、自分のなかで経験や発信を繰り返していきたい。

今まで興味のなかった人のなかにも、このような行動で少しでも記憶としてのこされたなら。「語り継ぐ」ことの大切さを伝えることにもなったのではないだろうか。年が流れるのは早いもので、リアルな記憶を持つ人は少なくなっている。怖かった、悲しかった記憶は忘れたいことであり、実際そういう記憶は薄れていくものだと思う。けれどきれいにそういったものがなくなってしまったなら、また同じ苦しさを繰り返すことになってしまうだろう。

自分の大切な人の安全を確保するためにも、多くの人に共感してもらいたいと思う。少しでも自分の知識として持っておくことができたなら、それだけで十分。

これからも上へ向かうことを忘れたくないと思う。

少し変わった生活

神戸市垂水区海岸通
桝井　諒

僕の住んでいる地域は震災の時にあまり被害もなく、困ったこともなかったせいか、この環境防災科に入るまでは、あの時どうだったとか何をしたというのは、あまり考えずに生活していた。環境防災科を目指すことになり、自分の記憶や周りの人に聞いて自分なりに震災を考えてみた。確かに被害は少なく、覚えていることも少ないけど、幼い僕の周りでは何かが動いていたのだ。

当時僕は４歳で幼稚園に通って、毎日近所の友達や幼稚園でのびのびと遊んでいた。でも、あの地震をきっかけに僕の周りは少し変わってしまったかもしれない。

気が付いたら家族と寝室で寝ていたはずの僕は、弟と一緒に押入れの中に入っていた。どうしてこんなところで寝ているのかと不思議に思って、暗い中手探りで押し入れの戸を開けてみたら、そこにはいつもと変わらないリビングの風景が見えたが両親の姿は見つからない。両親を捜すために押入れから出た僕は、何か物音がしているのに気づき、音のする方へ向かうと、食器棚からいくつかの食器が落ちているのを見て驚いた。しかも、母が片づけている割れた食器の中に、僕のお気入りのお茶碗が欠片になっているのを見て、そんなに長い間使っていたわけじゃなかったのに、なんだか悲しい気持ちになったが、そんな気持とは逆に、「新しい物を買ってもらえる」と嬉しさもあった。声に出さずに頭の中でそんなことを考えていると、傘立てを使ってドアが閉まらないようにしている父の姿が見えた。いつもとは違うこんな風景を見ても、まだ何が起こっているのか全然分らなかった。それからしばらくすると、近所に住んでいる伯父が消防団の服装で家に来て、父と真剣に何かを話していた。その時初めて何かあったのかなと思い、母に聞いてみたけれど、聞いたこともない言葉で、僕にはさっぱり理解できなかった。伯父は話が終わると、僕や弟に話しかけずに家を出て行った。そのすぐ後に、普通の服に着替えた父も出かけていった。

父は神戸新聞社に勤めていたので、こんな時だからこそ、自分のやるべき仕事をするために会社に行ったというのを、環境防災科に入るために震災の勉強をしている時に聞いて、多くの人のために動いた父はすごいと思った。その時の様子を聞いてみると、９時に家を出た父は、原付で本社のある神戸へ向かう途中、須磨の近くにさしかかると、家が倒壊しているのを見て驚いたそうだ。到着すると、本社が潰れていて記事を書くことが出来ないということになり、印刷工場のある京都に向かいそこで新聞を作ったそうだ。こういった行動から震災のせいで休刊にならなかったと言っていた。

父が出て行って３人になった家では、いつもならこんな時間だと、僕は幼稚園に行く準備をしないといけない時間だったのに、何の準備もしないままパジャマでいた。こんな状態だといつもなら怒る母なのに、今日は何も言ってこなかったので、不思議に思いながらも、心の中でガッツポーズしていたが、母が「服に着替えなさい」と言ったので、嫌だと思いながらも着替えると、手を引かれ、エレベーターがあるにもかかわらず、階段で下の階まで下りた。マンションから外に出ると普段から車の通りが激しい２号線に、雨の日や休みの日ぐらいたくさんの車が通っている。そんな道路を渡り祖父の家への道を歩いると、パジャマ姿の知り合いのおばさんが母に話しかけていた。普段は静かなおばさんの、見たことがないくらい焦っている姿が、今でも印象に残っている。母がおばさんを落ち着かせると、また祖父の家へ向かった。

海の近くにある玄関のドアだけが変に綺麗な祖父の家に着くと、母が祖父と祖母を呼んだ。すると、急な階段の上の方から降りてくる音が聞こえたので、玄関で靴をぬいで降りてくる階段の前に行ってみると、階段に散らばった土壁の上を祖母がゆっくりと降りてきた。そして、２人は話した後、リビングで僕の家と同じように割れているお茶碗やガラスのコップを片づけだした。すると、玄関の戸が開く音がしたので行ってみると、漁に行っていた祖父が帰ってきた。その祖父に向かって全然怒らない祖母がとても怒っていたのを覚えている。それは、地震が起きたにもかかわらず何時間もたった今頃帰ってきたからであった。今みたいにすぐに連絡のとれる手段もないのに、すぐに帰ってこないから沈んでしまったのだと祖母は思っていたそうだ。しかし、祖父の話を聞くと、沖に出ていたから、地震の揺れを感じなかったので普通に漁をしていたそうだ。そんな２人の言いあいも時間が経つと終わり、祖母は片付けを再開した。その間、暇になってしまった僕らは、弟は祖父の膝の上に座り、僕はその横に座って片付けの様子を見ていると、祖父がテレビを見ながら、大好きなお酒を飲んでいた。見ているテレビがニ

ュースで面白くなかったのと、お酒の匂いが嫌で２階に上がった。でも、何にも遊ぶ物もなく、つまらなくなった僕は布団の上でゴロゴロしていると、気が付いたら寝てしまっていた。
僕が起きると、お正月やお盆でないのに、たくさんの親戚が集まって話をしていた。人見知りが激しく、人が多いところにいるのが嫌になった僕は、祖父の家の近所に住んでいる同い年の友達に会いに行くことにした。その子の家の前に着くと、タイミング良く家から出てきたが、近くに止めてあった車に家族と乗ろうとしていた。どこに行くのかと思い話を聞いたら、その子は今から祖父の家に行くから遊べないと言うと車に乗り、手を振りながら去っていった。１人になってしまった僕は近くの公園に行くことにした。公園にいつもと違い、たくさんの車があった。普段は子供のたくさんいる公園。でも今は誰もいない公園。何かあったはずなのに、なにが起こったかなんて分らなくて、不思議でたまらなかった。祖父の家に帰ると、まだたくさんの人が話をしていた。僕はお腹が減っていたので、机の上に置いてあったおにぎりを食べると、祖母の手作りの、僕の苦手な酸っぱい梅干しが具だった。でも、他の食べられそうなものを取るのが面倒になって我慢しながら食べた。その後もう２つおにぎりを手に取り、また誰もいない２階に上がり、１人きりでおにぎりをほおばった。そうしていると１人でいることを心配してくれたのか、祖父が２階に上がってきてくれた。そして、暇そうにしていた僕のために古い机の中からトランプを出してきて一緒に遊んでくれた。誰も相手をしてくれなかった。

気が付くと外は明るくなり、祖父の家にいたはずなのに自分の布団の上で寝ていた。たぶん親戚の誰かが僕をおんぶして送ってくれたのだと思った。リビングに行き、母の横に座ってテレビについていたニュースを見ていた。面白くないと思いながら見ていると、壊れた建物や落ちかけのバスの映像ばかり映っていたので、ただ危ないと思いながら見ていただけだった。そうしていると昨日帰ってこなかった父が帰ってきた。帰ってきた父は僕たち家族に顔を見せると、消防団の服に着替えてまたすぐに出かけて行いった。このときの話を聞いてみたら、当時の消防団の団長が集まりをかけていたので行き、近所の家の状態や人の安否確認などをして、困っている人の家に行き手伝いをしていたそうだ。父があたった活動は、タンスの倒れた家に行き起こすのを手伝ったり、何か異常はないかと歩いて聞きにいったりしたが、自分がいなくてもここは大丈夫だと思い、多くの人のためになる会社での仕事をしようと思ったそうだ。しばらくすると出て行っていた父が帰ってきて、一緒に御飯を食べたら、父はまた普通の服に着替えて出かけて行った。

親戚の人たちが集まるようになってから何日か経ちみんなで温泉に行くことになり、みんなで車に乗り温泉に向かった。温泉に着くと早く入りたいという気持ちから、父の手を引っ張りながら思いっきり走った。広い温泉にテンションの上がった僕は、引っ張られている手を払って走り回っていると、つるつるの床で思いっきり滑ってこけてしまった。痛さで泣きそうになりながらも、こりずに走りながら温泉に飛び込んだ。広いお風呂に来たことは、僕の周りが変わりだしてから一番嬉しかったことだった。風呂から上がると、祖母が好きな物を買ってくれると言ってくれたので売店に行った。たくさん面白そうな物がある中、僕が選んだのはピコピコハンマーだった。その買ってもらったピコピコハンマーで一緒に来ていた親戚の人を叩きまわって遊んでいると、みんなが僕の相手をしてくれた。調子にのって弟の頭を叩いたときに後ろにいた母にピコピコハンマーを取り上げられ、それで思いっきり叩かれてしまった。痛かったけどみんながやっと僕の相手をしてくれたのが嬉しかったのを今でも覚えている。
この温泉から帰ってきたら、家でもみんなが僕の相手をしてくれるようになっていったので、今までとは違い１階のみんなのいるところでご飯を食べるようになった。

その温泉に行った後の日からは、祖父の家から親戚の人たちが少なくなっていった。残っていた人も朝や昼間は家にいなくて、夕方のご飯の時間になったら帰ってきていた。みんなそれぞれの日常生活や仕事の新しい一歩を踏み出していった。そんな切り替えの早い大人たちとは違い、子どもの僕は、何にもするわけでもなく、ただその時間・その場所で生きていただけだった。人間は何か目的を持って日々を生活していないと、こんなにもつらく面白くないのかというのを子どもながらに感じた。
でも、そんな日を過ごしていた僕に祖父が釣りに誘ってくれた。いつもは何にも見ていないような祖父がこんな自分を一番見てくれていたのだと驚き、僕にはそれとても嬉しかった。祖父に手を引かれながら船のある漁港に向かった。垂水漁港に１つしかない「一番星」と前に大きく書かれた船の前に着くと、船を繋いでいるロープを祖父がたぐり寄せたので、僕は手馴れたように船に飛び乗った。まだ新しく換えたばかりなのに生簀の木の蓋には魚の血が染みついていた。船内を見ていると、祖父がエンジンをかけて舵をとり、すごい音をだしながら船は出港した。すごいスピードで波の上を跳ねながら走る船。冷たい風が体に当たっていたが、なぜか僕は暖かかった。そうこうしていると、いつもの釣りポイント

の垂水の灯台に着くと、祖父は船を止めて釣り糸を垂らし、その横で僕も手伝ってもらいながら釣り糸を垂らした。寒い真冬の海の揺れる小さな船の上で男二人が何も話すわけでもなくただ釣れるのを待っていた。今までなかなか時間が過ぎない陸に比べて、船の上ではどのくらい時間がたったかがわからない分久し振りに時間を上手く活用できた気がした。気が付くと辺りは青からオレンジに変わっていた。この綺麗な景色は僕の中の深い青を取り除いてくれた明るい祖父のように、今でも僕の思い出の中に色濃く残っている。そうしていると、祖父が立ち上がる音がした。何にも釣れずに黄昏ていた僕とは違い、生簀には多くの魚が入っていたので、さすが漁師だけはあると思った。帰ることになって祖父はまたエンジンをかけ、僕を運転席に座らして舵を握らせた。基本的には後ろにいる操作で動いているけど、子どもの僕にはまるで自分が運転していてこの大きな海を走っているかのように思っていた。

運転しながら港に入る手前で祖父が僕に「諒。お前は男やねんからしっかりしなあかん。この船みたいにどんな大きな波がきても止まらず進む男にならなあかんぞ。」と言われた。当時の僕に理解することもできないのに、エンジン音に負けないぐらいの声の大きさで叫んでいた。この言葉は今でもよくわからなかったりする。戦争の中を生きていたので学校にも行けずに若くして漁師になった祖父に、何か深く考えて出た言葉ではなかったと思う。ただ、自分の中の気持ちを僕にぶつけたかったのだと思う。それから後祖父が亡くなった去年までこれ以外に残してくれたものは少ないので、祖父が僕に残してくれた一番の宝物としてこれからもこの言葉は忘れないでおこうと思う。

港について祖父に運転を代わり、またいつもと同じ世界に戻ってきた。帰りは行きと違ってみんなにお土産を持って帰ってきた。ドアを開けると祖母がまた祖父を怒鳴った。僕を伝言もなしに長い時間勝手に連れ出したからだ。でも、祖父はそんなことも気にしないでいつもの自分の定位置についてお酒を出してきて飲み始めた。その時の祖父の表情は何かやり遂げたような満足気な顔をしていた。その日の晩御飯はもちろん魚だった。みんなが美味いと言うと祖父は僕が釣ったということにしてくれて、僕がみんなに喜ばれた。自分が釣ってないのに悪いと思いながら、その反面何もしてないのにラッキーとも思った。温泉の日以来の楽しくぐっすりと寝れた日になった。

その日からは、その祖父との出来事をきっかけに、僕は前向きな自分に戻った。

震災から何日か経って、また幼稚園に行ける日がやってきた。僕は、友達や先生に会えるのが楽しみで、朝早くから起きて、ご飯を食べたり、服を着替えたりしていた。幼稚園のバスが来る時間が近づいて、母に手を引かれながら久しぶりの幼稚園に向かった。バス停に着くとバスが来て、友達と僕らの特等席であった運転席の横に座った。バスのおじさんや友達と話していると、幼稚園に到着した。嬉しくて教室に走った僕は先生が来るのを待った。先生が来て挨拶をして椅子に座って周りを見てみたら、2つ椅子が空いていた。先生は、その子たちは引っ越したので、もう幼稚園には来ませんと僕らに説明した。僕は仲の良かった友達が急にいなくなってしまい、とても悲しくなった。でも今思うと、あの時僕らにそんなことを説明しないといけない先生が一番辛い表情をしていたように思った。楽しみにしていた幼稚園に行ったのに、前とは違っていて、楽しいはずの幼稚園が楽しくなかった。僕の1番身近にあった居場所に穴が空いた感じがした。

でも、そんな辛かった日から何日か経って、その生活が普通になってしまい、また楽しい幼稚園の生活に戻った。

世の中の阪神・淡路大震災という大きな変化の中では、僕の周りで起こった出来事は小さな変化だったかもしれないけど、このときの僕にとっては何よりも大きな変化だったと思った。

こんな出来事を不思議に思いながらも、あの時僕に起きた出来事の原因というのが地震というのを知ったのは小学校に入ってからだった。

今思うと、僕の震災体験は周りの人の新しい一面を見ることのできるいい機会だった。一番の驚きは普段のんびりしている祖父がしっかりと見てくれていたのをわかったことと、いつもは動いていない父が人のために自分のできることをしていたことだ。他にも薄っすらではあるが、色々な人の動きがあった気がする。

環境防災科に入って1年生の時から、警察、消防、自衛隊やライフライン関係の人など、多くの人から震災の時のことを聞いて、僕の知らなかったようなすごいことが起こっていたのを知って驚き、これから災害が起こっても被害を少なくするための対応にはこんなことをしているのかと思った。そんな外部講師の皆さんは、自分たちのしたことやしていることのいい面ばかりを教えてくれるだけでなく、震

災の時にできなかった部分を教訓として伝えてくれた。これも「語り継ぐ」の一つだというのを知ることができた。このような環境防災科での経験で一番印象に残っているのは、石川県での災害ボランティアの活動。僕にとって初めての大きなボランティア活動だったので、話ではこんなことをするというのを知っていたけど、被災してすぐの人にどうやって話かければいいかというのがいまいち分らなくて緊張していた。でも、実際に活動していく中で、思っていたみたいに難しく考えるのでは無く、心から接することによって打ち解けられるものなのだというのを感じた。瓦礫を運んだ家のおじさんの「ありがとう」を僕は今でも覚えている。人の温かさ、そして人との繋がりを教えてくれたこのボランティアはこの高校生活で僕に何か大きなモノを与えてくれた。この経験を生かして、本当はこんな災害がなくなるのが一番いいのだけど、そんなことはありえないので、今後このような災害が起こったりしたら活動していきたいと思っている。

そんな多くの話を聞いたり、普段の授業を受けたり、体験していく中で、自分はこれから学んできたことをどう生かして、この世界で生きていこうかと考えた。どんな災害にも多くの経済的な被害や人が死んでしまうこということが起こる。多くの経済的な被害が起こるくらいなら、その前にそのお金を使い、経済的な被害を抑える取り組みが人の命を救うのだと思い、どうにかしたいと思った。さらに環境をよくしようという取り組みが地球規模で広まっている今、人間活動が環境を壊し、経済にどのような影響があるのかという事に、もっと多くの人に理解してもらうためにわかりやすく説明したいのと、貧困層をなくすための経済開発で環境問題を解消することが出来る持続可能な開発について勉強していきたくて、大学に進んで経済学の面から環境や防災に関する取り組みをしていき、多くの人が僕にしてくれたことのように多くのことを語り継ぐことをしていきたい。

震災が起こったばかりの頃は、多くの人がこの経験を忘れてはいけないと思っていたはずだ。しかし、震災から１３年が経った今、そしてこれから時間が経つにつれて、被害の少なかったところに住んでいた僕のような人や、全く被害がなく忘れてしまっている人、まだ生まれてもいなくてこの震災を知らない人たちの中で、震災の経験が忘れさられていっていると言われている。でも、あの時あの場所で震災を経験した多くの人の中にはまだ震災は生きていると僕は思う。多くの人の未来を奪ったあの震災をはっきりと思い出せない人はいるかもしれないけど、忘れることはできないと思う。辛い記憶の１ページであり、はっきりと思い出したくない人も中にはいるかもしれない。でも、震災の被害を知らない人や、震災自体を知らない世代の人たちに伝えていかなければならない。震災で教訓となったことを次に生かしていかないと、また同じことの繰り返しになってしまう。より発展した形で備えられるようにするのも僕たちの役目だと思っている。

僕も小さかったとはいえあの時を生きた１人の語り部となり、そして、この高校３年間で見たり、聞いたりして学んできたことを生かしながら、より多くの人に知ってもらえるようにがんばっていきたいと思った。

阪神・淡路大震災の記憶

神戸市垂水区
松井　絢也

　あれからもう、１４年・・・。
僕の記憶のすべてを書きたいと思いう。

地震発生前

　僕はいつものように、保育所に行って友達と遊んでいたと思う。そして、母に迎えに来てもらい一緒に家に帰った。僕が覚えているのはこのくらいで、親に聞いてみると西の空が異常なくらい真っ赤だったそうだ。夜では月も赤かったそうだ。これが、地震と関係しているかどうかなんて僕にはわからないが、こういうことがあって地震の前触れだったんじゃないかなと思った。
　テレビでやっていたらしいが動物にも異変が感じられていたらしい。

地震発生

　僕は寝ていて地震にも気づかなかったので記憶があまりない。
　僕の両親から聞いた話だけど、二人とも朝五時に起きて父はタバコを吸っていて、母は味噌汁を作っていたら、突然「ゴオォォォォォォォーーーーー」というものすごい音がして、「ドォーン」という下から突き上げられるような揺れに襲われたそうだ。父はタバコを慌てて消して、母は味噌汁を温めている火を消しに行こうとしたらしいが、また揺れたらしくおさまるのを待って消したそうだ。
　父は玄関のドアを開けておき、母を玄関に待たせて父は二階に行き姉二人と僕を起こし母の待つ玄関に連れて降りてくれた。
　そして父は外の様子を見に行った。すると地面が割れていてガスの匂いがしていた。通勤している人もいたので、タバコをポイ捨てされたら危ないと思ったらしく、家に帰ってきて慌てて張り紙を作って、地面にガムテープで貼り付けたそうだ。
　近所の人たちもみんな寄ってきて、張り紙を張ってみんなに知らせてくれて、ありがとうと言われたそうだ。
　小さな余震は十五、六回続いたそうだ。みんな怖そうな顔をしていたのははっきりと覚えている。
　垂水区でもテレビが映らないところが多かった。しかし、僕の住んでいるところは映った。
　長田の映像が映っていて、黒い煙がモクモクと上がっていた。火事もすごくて一面火の海みたいだった。
　母は親や兄弟、友達たちが心配だったので電話を掛けまわっていたそうだ。しかし、どこに掛けても繋がらなかったそうだ。
　三、四時間、時間が経つと明石には電話が繋がるようになったらしい。親戚みんな無事だったので本当によかった。
　そして夜になり、母は長田にいる友達と連絡が取れなかったらしく父に車に乗せていってもらい長田へむかったが、街灯は一切ついてなく車のライトの灯りだけで走ったそうだ。
　そして長田に着くと、焼き焦げた後がものすごくて匂いが充満して喉が痛くなるほどだったそうだ。テレビでしか見たことがない戦争の焼け野原みたいだったそうだ。
　そんな長田の町を実際直接見た母は、痛々しくて涙が止まらなかったそうだ。
　そして、母の友達は火事により家が全焼してしまったらしく、丸山小学校に避難していたそうだ。無事な友達の姿を見て母は安心して、ちょっとした食べ物と飲み物を渡して帰ってきた。

地震発生後

　ずっと水がでなくてトイレはお風呂の残り湯で流していた。お風呂は入れず、近くの風呂屋さんは営業していたのでずっと順番がくるまで並んで入っていた。
　飲み水は近所のおばあちゃんの井戸水をもらったり、公園の水は出ていたので並んでポリタンクに入れて使っていた。
　まだ垂水の方は、長田とかに比べると被害が浅く電気も僕の家では使うことができた。電話も使えた。

しかし、水だけはなかなか使うことができずにいた。
母は区役所に行き、一部損壊の証明をもらっていた。区役所から支給されたガスコンロをもらって帰ってきた。それで、カップラーメンなどを食べていた。そのときのカップラーメンはものすごくおいしかった。
電気は使えていたので、米は炊けておにぎりにして食べていた。
洗濯は近くのコインランドリーとか母の実家でしていたそうだ。
そして母が勤めていた会社から、食べ物や靴下、下着などをもらって助かった。見舞金ももらったそうだ。
父は当時、タクシーのドライバーをしていたが神戸方面の道が走れないので仕事がしにくく収入も減り困ったそうだ。
そしてタクシーの仕事を辞めて、自分で建築関係の仕事を立ち上げて、神戸の街の復興のために、これからは建築関係の仕事が多くなるので建築の仕事を始めたそうだ。
十年くらいは復興のために仕事があったが、ここ最近は震災前のように建ち直ってきたので、今は当時に比べるとグーンと仕事の量が減ったそうだ。
だから今は植木の仕事について頑張っている。今では自然が一番やと言っている。

ルミナリエ

震災後にルミナリエができて、母と姉と母の友人の人たちと行ったのを今でもはっきりと覚えている。
僕はあのライトアップで神戸の人たちを勇気付けたと思った。
そして、ルミナリエを見て泣いている人もいた。きっと震災を思い出して辛い過去を思い出しているのだろうなと僕は思った。
そして、何よりライトアップされた瞬間僕はとても感動した。あれを見てたくさんの人は元気が出たと思う。
あのライトがつく瞬間の感動は一生忘れないと思う。

環境防災科に入って

僕は正直中学の頃はある私立の男子高の機械科に進学したかった。勉強が苦手だったのもあるし、物を作ったり機械を触ったりするのが好きだったのでそこに行ったら自分の好きなことができるし、資格だっていっぱい取れるから僕にあっていると思ってほとんど自分の中ではその学校に決めていた。
それを親に話してみると、私立は学費やら入学金が高いから頑張って公立進学する方で考えてくれへんか？と言われたので僕はそこから公立に行けるように勉強を頑張った。
そんなある日、担任の先生に推薦入試というのがあると言われた。当時推薦入試の仕組みが分からなかったので、先生に詳しく教えてもらったら、面接と作文しか試験がないと聞いて勉強が苦手だった僕にもってこいだと思って推薦入試のある学校を調べることにした。
それで、環境防災科というものを知った。変わった名前の学科だなと思って興味を少し持ったのが最初だ。具体的にどんなことを学ぶ学科なのか僕も先生もよく分からなかったので、一度環境防災科の説明会に行ってみることにした。
それで、説明会で先輩たちの話を聞いていると、ネパールに行った話や消防学校に体験入校した話などを聞いて本当に変わった学科だなと思い公立高校に行くならこの環境防災科にしようと決めた。
説明会で一番嬉しかったのが他の普通科や学校に比べて、数学と英語の授業が少ないと先輩たちが言っていて、勉強の特に数学と英語が嫌いだった僕はそれを聞いて絶対環境防災科に入ろうと決めた。
そして僕は運よく倍率が過去最高だった中から舞子高校の環境防災科に入学することができた。
クラスのみんなは今までに出会ったことのないような感じの子たちばっかりでそれぞれ目標を持って防災を学びに入ってきている子たちばっかりだった。
だから僕はもしかしたら来るべきところじゃなかったのかなと悩んだ時期があった。
でもせっかく入れたから絶対卒業しようと思って今でも頑張っている。
この学科に入って一番思うことは他では絶対体験できないことがたくさんできるのでいいなって思う。火山に行ったり、外国の方たちと交流できたりとそういった面は楽しい。
でも、防災の専門教科はとても難しい。しかし、災害時のときの対応など自分や周りの人などを守れる知識がつく将来絶対必要なことが学べるとこだと思う。
僕みたいに防災を学びたいとか思わずに入学したい人がいるならお勧めできません！！

本当に防災が学びたくて将来のしたいことにつなげたい人なら最高に楽しくていい学科だとおもいます！！！

感想

今回この語り継ぐという授業をして、あいまいな記憶だった阪神・淡路大震災のことが親に話を聞くと少しずつ思い出してきて、本当にものすごい災害だったんだなと改めて実感することができた。地震の怖さを忘れかけていたので思い出すいい機会となった。

親とも話を聞いて地震の話をしたから、家族も思い出せてよかったと思う。

必要最低限の備えはしておこうとわからされてよかったと思う。残りの学校生活も必要な知識をとりいれて災害時、父以上に動けて家族や周りの人を助けられるようなかっこいい男になりたい。

最近ではもう神戸の人たちから地震に記憶が薄れてきているが、僕は忘れないでいざというときすぐ動けるようにしておきたいと思う。

環境防災科に入ったからには、社会にでたらちょっとでもいいから防災の大切さを伝えていきたいと思う。

阪神・淡路大震災、そしてこれから

兵庫県三田市中町
松尾　美佳

「めちゃくちゃや。もう神戸はおしまいや。」

父はテレビを見ながら、涙ぐんでこういった。
そのテレビの映像には、それまでに見たこともないような情景が映っていた。
建物は無数に倒壊し、いたる所から黒い煙が立ち上っている。
普段なら倒れる事などありえない、巨大な高速道路が横倒しになっている。
たくさんの人々が泣いている、崩れた家の前に立ちすくみ、呆然としている…
それは幼かった私ですら、「なんか大変なことが起こったんや…」と感じた映像。

今でも、あの日事だけは、はっきりと頭の中に残っている。

〔私と阪神・淡路大震災〕

1995 年 1 月 17 日　午前 5 時 46 分　兵庫県南部地震発生。
後に「阪神・淡路大震災」と呼ばれる大災害は、死者 6434 人という、未曾有の被害を生みだした。
私はその当時 4 歳で、神戸市の北に位置する、三田市に住んでいた。「神戸市外やったし、年もちっちゃかったから、震災なんて覚えてへんやろ？」と、よく人から聞かれる事があるが、あの日のことだけは、自分でもびっくりするくらい鮮明に覚えている。それぐらい衝撃の強い 1 日だった。

地震が発生した時、私は寝室で、母と妹 2 人と一緒に寝ていた。熟睡していたのが、ドーン！！という、下から突き上げられるような揺れで目が覚めた。その後すぐに、経験したことのない、大きな揺れに襲われた。私はすぐ布団に隠れた。ただ何が起きているのか、全く理解できず、必死に「お母さん！お母さん！」と叫んだ。ただただ怖かった。母が、上から私と姉妹の上におおいかぶさり、体を守ってくれた。「大丈夫やで！！」と母の声を聞き、必死にしがみついた。揺れがおさまり、2 階で寝ていた父が飛び降りてきた。父の「大丈夫か！？」の一声で一気に怖さがとけた。「もう大丈夫。お母さんらずっとおるから。寝なさい。」と母が言ったので、その言葉に安心し、私はもう一度眠りについた。幸い、近くには大きなタンスや家具もなく、家族全員、ケガもなく無事だった。

朝起きて、寝室からリビングに出ようとした瞬間、部屋の様子を見てびっくりした。机・ランプなどの家具は台から落ち、本来の位置から 1 ｍくらい移動していた。かなり重いテレビも、テレビ台から軽々転げ落ちていた。食器棚からは皿やコップの食器が飛び出し、バリバリに割れた破片がいたる所に散らばっていた。「みか！ガラスが足にささったらあかんから、まだリビング出てきたらあかんで！」と、掃除をしていた母に注意された。

私は、その時 1 番のお気に入りだった、セーラームーンのガラスのコップが、全種類割れているのを見つけて、大泣きしたのを覚えている。母に「誰のせいでもないんやから、我慢しなさい！！」と怒られた。これは後から気付いたことなのだが、家の目の前あったおじいちゃんの家に、大きなヒビが 2、3 本入っていた。おじいちゃんは、個人のバスを持っていたので、「また余震があるかもしれんから、みんなでバスに避難しとくか？」と、何度も言いに来てくれた。

震災当日で、覚えているのはこのことくらいだ。正直、震災当日以降の事は何も知らない。神戸の被災状況は、震災当日テレビで見た映像だけで、その後の被災地の復興の様子はわからない。まだ 4 歳で幼かったし、自分からは知ろうともしなかった。親や、友達に、震災のことを聞くこともなかった。

神戸市外で、市と市の間に山を挟んでいることもあり、三田市では地震被害は少なく、幸い倒壊家屋も死者もでなかった。今思うと、主な被災地との被害の差には、本当にびっくりする。それから私は、中学に入学するまで、「阪神・淡路大震災」に関わり、考えることは全くなかった。毎年学校で、1 月 17 日付近に行われる、防災訓練くらいであった。防災訓練といっても、おしゃべりしながら走って避難

するだけで、阪神・淡路大震災のことには、見向きもしなかった。

中学２年のトライ・やる・ウィークで、私は市消防署で職業体験を希望した。その理由は、ちょうどその時放送していた、消防士のテレビドラマの影響で、消防の仕事に興味も持ったから。そこで私は、様々な消防士の仕事を体験させていただいた。規律・救助・消火・広報・予防・オペレーターなど、全部の仕事から、消防という職業の厳しさ・人の命を守るということの難しさ、大切さを学んだ。

様々な仕事を経験する中で、消防士さんが、阪神・淡路大震災のことを少し話してくれた。震災が起きた時、兵庫県・そして全国の消防・警察・自衛隊が神戸に支援にかけつけたということ。三田市の消防のみなさんも、すぐに神戸に行き、救助活動・支援活動を行ったということ。被災した神戸の様子なども聞かせていただいた。私はその話を聞いた時に、改めて阪神・淡路大震災の存在を知り、その恐ろしさを実感した。そして私は、トライやるウィークを経てから、本格的に消防士という仕事につきたいという気持ちを持ち始めた。また同時に、「阪神・淡路大震災」や「防災」にも、興味が湧いてくるようになった。

そんな時期、家族でご飯を食べている時、私は両親に、ずっと聞きたかったことを聞いてみた。
「お父さんとお母さんて、阪神・淡路大震災の時、被害を受けたというか…何かそん時の神戸の街を見たり、聞いたり…したことある？三田に住んでたし、なんもなかったんやんな？」
私がそう言うと父が、「あほか！そん時お父さん、西宮のデパートで働いとったやないか。そりゃもう大変やったんやから…神戸もやけど、西宮も…」と言った。それを聞いて私はびっくりした。父は、震災体験なんて持っていないと思っていたから…。それから父は自分の震災体験を、私に話してくれた。

〔外から見た、父の阪神・淡路大震災〕

※以下の文章は、父の目線である。

私は震災当日、２階で強い揺れを感じ、すぐに目が覚めた。布団に隠れて身を守り、揺れがおさまると、１階で寝ていた家族が心配になり、階段を２歩で飛び降りながら駆け降りた。今思うと、10段以上あった階段を、たった２歩で降りられたなんて、考えられない。それほど家族が心配だったのだ。あんな揺れ、私はそれまでに経験したことはなかったのだから…

幸い家族は全員無事で、本当に安心した。次にすぐに外に出て、周りの家の状況を見渡した。倒壊している家屋・建物もなく、向かいにあった妻の実家も、多少のヒビは入っていたが、親戚ともに全員無事だった。近所の家の人も、「何が起こったんや！」と言って、外に出てきていた。「神戸の方で地震があったらしいねんけど…まだ詳しいことは、よくわかんらんわ。」と、隣の家の奥さんが私に教えてくれた。家に戻り、妻とともに家のライフライン（電気・ガス・水道・電話など）が機能するかを確認。テレビは朝方に回復したが、すべてのライフラインが完全に回復するまでには夕方までかかった。

テレビがつき、すぐにニュースにチャンネルを変えた。といっても、どのチャンネルも、同じ情景が映っていた。それは、変わり果てた神戸の街並みだった。「神戸で大地震」「死者・行方不明者――人」「人命救助・火事消火難航」。私は、全身が震え上がった。高速道路は横倒しになり、いたる所から火の手が上がり、黒い煙が上空をおおっている。人が泣いている。そして街が泣いていた。
「神戸じゃない。日本じゃない。これは現実じゃない。」と、私は何度も何度も、心の中で言い聞かせた。

当時、私は西宮市にある大規模デパートに勤務していた。西宮は、神戸と並んで、地震の被害の大きかった地域のひとつだ。震災当日は、会社の方から自宅待機を指示され、その翌日、招集が出された。そして、三田に住んでいる会社の同僚と、車で西宮へ向かうことになった。いつも通りだと、高速道路を使って、西宮までは片道１時間ほど。しかし、地震の被害により、高速道路・トンネルはすべて通行止めで、他の交通手段（電車・バス）も機能していなかったため、唯一の手段であった山道で、三田から４～５時間かけて西宮に向かった。

山を越え、長い時間を経て、無事に西宮に入ることができた。車から辺りの街を見渡すと、そこはも

う三田とは別世界だった。甲陽園～夙川～市内中心部に向けての家々は、30～40％が全壊・半壊状態。道路も場所により、ところどころコンクリートの波打ち（歪み）がひどく、車では通行できない所がたくさんあった。例えると、本当に空襲を受けた後の戦場のようだった。人々が、倒れている自分の家を見て、呆然としている姿を何度も見た。「ほんまにこれが西宮なんか？…」何度も思った。そう思うことしかできなかった。同僚が、「三田から、ここまでそんな距離ないねんぞ？」と言った。確かに、なぜ三田から山を１つ越えただけで、こんなにも被害が違うのだろうか。わたし複雑な気持ちになった。変わり果てた西宮を見て、悲しい・辛いという感情より、本当に何も考えられなかった。無意識なのに、涙だけが出てくるなんて、初めてだった。

勤務していたデパートに到着し、他の社員と合流。「三田は大丈夫やったか！」大きく被害を受けた社員も少なく、声をかけあって、みんなで無事を喜びあった。幸いデパートの建物自体は倒壊していなく、大きな破損も見当たらなかった。しかし、消防の方から、「今後の余震で倒壊の恐れがあるため、まだ建物に入らないで」と指示され、しばらくは外からデパートを見渡すのみだった。

数時間後、消防による建物の立ち入り検査が実施された。建物の安全が確認され、１階食品ゾーンのみ、立ち入りが許可された。食品売り場に入ると、案の定すべての棚から商品が崩れ落ち、足の踏み場もない状態だった。しかも、スプリンクラー（消防用設備の一つであり、火災時に大量の散水で消火を図る設備。主に建物の天井などについている）の影響で、商品が水浸し。60～70%は販売できるような物ではなくなっていた。「今食料に困っている人も多い！なんかしよう！」と、社員全員で、とりあえず売り場から、まだ販売できそうな商品を外に持ち出した。駐車場に仮設のテントをはり、そこでとりあえず、生き残った商品を販売することになった。その翌日からは、２階３階の立ち入り許可も出て、同様に商品を持ち出し、衣類・日用品も合わせて販売した。

仮設テントで商品を販売している時、デパートを横切る人は、本当に様々な人たちだった。家を失った人、家族がなくなった人、泣いている人、パニック・動揺している人…。ただ茫然と、布団だけを持って、避難所へ向かっている人の姿が、今でも頭から焼きついて離れない。何もできない自分に腹が立った。

お金を持っていた人は、食糧やら毛布やらを買うことができたが、その反面、無一文で、何も買えない人も多く目立った。商品を買っている人を見て、うらやましそうな顔をしている人を、何人も何人も見た。だけど、無料で商品を提供することはできない…。私はその仮設テントで、お菓子・パンのコーナーで商品を売っていた。食料品のコーナーだったので、特に忙しかったし、お客様の商品の取りあいも激しかった。
「こんな状況で、金とるんかい。頼むからタダにしてくれや！」と、私に言い寄ってきたお客さんもいた。

震災から４日が過ぎても、仮設テントでの商品販売は続いた。
仕事が一段落ついて、売り場で座って休憩していた時、小学校低学年くらいであろうか、２人の男の子が私に近づいてきた。１人はお兄ちゃんらしき子どもで、しっかりと弟の手を握っていた。２人とも、まだパジャマのような服を着ていた。

「どうしたん？」
私は笑顔で尋ねた。するとお兄ちゃんの方が、「別になんもないでー。ぼくんち、もう住めへんくなってん。ボロボロになってん。だから、おかあさんとおとうさんが今片付けしとる。おかあさんに、そのへんで遊んどきってゆわれてん。」と、悲しい顔ひとつ見せず、無表情で私に言った。
見たところ、２人は、何日もお風呂に入っていない様子だった。ドロドロというわけではなかったが、顔がうす汚れていて、なんともいえない雰囲気が伝わってきた。避難所での生活が長いのであろう。自分の娘と同じくらいの子だった為、余計に辛くなった。

「おかしやー　おにいちゃん。おかし食べたい」
弟の方が、売られている駄菓子を見て言った。
「あかんで。お金もってへんねんやから。」と、お兄ちゃんは言った。だけど、何日も食べていないお菓子に、２人ともじーっとお菓子を見つめて、本当に食べたそうな顔をしていた。その時私はとっさ

に、「ええよ！好きなお菓子一個持っていき。あとでおっちゃんがお金払っとくから！」と言った。どんな状況であっても、「タダで商品は渡さないように」というのが、このテント販売のきまりだった。その事はわかっていた。わかっていたけど…

「おっちゃん、ほんまに！？」
ずっと元気がなかった人の顔が、明るくなり、笑顔になった。
「うん。ほんまにええよ。ほら、好きなもん選び。」
「やったー！！おっちゃん、ありがとう！」
そう言って 2 人の兄弟は、好きなお菓子を吟味しながら１つ選んだ。もう一度、「ありがとう！」と言うと、デパートのすぐ横にある空き地へ、お菓子を食べに走って行った。あの 2 人の笑顔は、まるで戦場に咲く、花のように見えた。

地震は、誰のせいでもない。誰かを責めることはできない。
だけど、なぜこんなに小さい子どもが、犠牲にならなければいけないのか。私は、誰かを恨みたくなるくらい、本当に辛い気落ちになった。私たちは、この震災で命を落とされた方の分まで、今を大事にして生きていかなければならない。月並みだが、本当に「地震はいつ起こるかわからない」。「喉もとすぎれば熱さ忘れず」を心がけ、普段から子ども・お年寄り・障害のある方に手を差し伸べ、自分自身の命も守れるように生活していきたい。

〔震災体験の伝承とこれから〕

父は、自分の震災体験を、目に涙を浮かべながら私に話してくれた。今でもたまに、私が学校で勉強した、防災のことを話したりすると、「あの兄弟、元気にしとるかなぁ」と口にする。

私は環境防災科に入学して、様々な方から震災体験を聞かせて頂いた。被災された方、家・店を失った方、消防・警察の方、そして家族をなくされた方…。人それぞれ被害の状況や、立場も違うけれど、震災で、何か大切なものを失い、そして今を１つ１つ大事にして生きている。お話を聞く度に、なにげない普段の生活の大切さ、家族がいる幸せ、そしてこれから震災体験を「語り継ぐ」ということの重要性を感じる。

話は変わるが、最近、世界で大きな災害が２つ起きた。ミャンマーを襲ったサイクロン、そして中国四川大地震である。どちらも、私の想像を絶するような被害であった。四川では、日本では倒れるはずのない学校や病院が、まるで砂のお城のように、粉々に倒壊している。被害は子ども・貧困層に集中し、死者は５万人以上にも及ぶ。ミャンマーではいたるところに子どもの死体が水に浮かび、着る物がない被災者は、死体から服を脱がしてきている。国の情勢により、災害対応もうまく機能せず、救援物資までも被災者に行き届かない。なぜ、国民が必死の思いで生きているのに、国はほうっておくのか…。それぞれの国のあり方・体制に、疑問と怒りは膨らむばかりである。私は、テレビでそれらのニュースを見るたびに、涙が出てくる。本当に見ていられない。何もできない自分にも、嫌気がさす。

私は、ちゃんと人に話せるような、自分自身の震災体験は持っていない。阪神・淡路大震災でも、実際には全く被害を受けていない。けれど、学校の授業で聞かせていただいたお話、父の震災体験、そしてミャンマー、中国四川のような海外での災害を、私たちが、これからの世代、私たちより震災を知らない世代に、語り継いでいかなければならない。そしてそれと同時に、私たちがなんらかの形で、たくさんの人に防災を伝え、次に起こりうる災害に対して、備えていくべきではないだろうか。

私は将来、日本の災害法律を変えられるような人間になりたい。どんな災害が起きても、その人的被害を減らし、国民の命を守り、災害前の街より良い街に復興することができる法律である。環境防災科に入学した最初は女性消防士だったが、防災の勉強をしているうちに、災害法律の重要性を感じ、大きく目標が変わった。しかし、その為には、「災害に強い街にしよう」「減災をしよう」だけでは、何も話は進まない。震災体験の伝承、教訓を語り継いで初めて、「防災」「減災」が生まれてくるのだと私は思う。

震災からもらったもの

加古川市野口町
松嶋　さくら

１、　　１９９５年1月１７日

震災当時私は震源地から少し離れた、加古川市に住んでいた。JR の線路沿いにある大きなマンションの２階に、父と母、兄と姉の家族５人で住んでいた。地震が起こったとき、私は普段と変わりなく子供部屋の２段ベッドの２段目に寝ていた。あの時、地震の揺れでベッドの中で体が揺れるのを感じ、目を覚ました。それから父の「地震やー！」という声が聞こえた。急いでリビングへ行った。部屋を出るときベッドの１段目に寝ていた姉が何事も起こらなかったように寝ていた。リビングで父と母と兄がテレビの真ん前に座っていた。みんなでテレビをみたのは覚えているけれど、その時なにが放送されていたかは覚えていない。父方の祖母は神戸市中央区に住んでいた。父が心配をしてすぐに電話をかけたら電話は繋がり、祖母は電話に出た。生きていることがわかって安心した。でもすぐに電話を切り、その後かけ直すと繋がらなくなった。母はリビングで割れた食器を片づけていた。大皿が１枚、食器棚から落ちて割れた。兄はこたつの上に座り、テレビを見ていた。いつもこたつの上に座ると怒られるのに、母も父も何も言わないことに私は驚いた。注意をして兄弟喧嘩になった。今思えば、父も母も神戸に住む知り合いの人たちことで頭がいっぱいだったのだろう。神戸への電話はつながらなくなったが、長崎にいる母方の祖母から電話があった。私たちを心配してだった。私はその後すぐに寝た。

加古川は震度４だったけどマンションの２階にいてもその強さが伝わってきた。１０階あたりの部屋のドアは揺れで歪んで開かなくなった。同じマンションでも被害が大きく違うことに驚いた。加古川は地震後、仮設住宅がたくさん立った。小学校や中学校には転校生がいっぱい来た。

２、　　神戸

父方の祖母は父の弟である叔父と２人暮らしだった。小さなコンクリート造りのアパートに住んでいた。幸い、祖母も叔父も命に関わるような怪我はしなかった。しかし、叔父は足の上にタンスが倒れてきて、骨折をした。地震後は近くの小学校に避難をした。地震から何年もたったころに祖母の家に遊びに行くと、まだコンクリートの階段が割れていたのを覚えている。
私の母は昔、神戸に住んでいた。だから神戸に友達や知り合いがたくさんいた。父の会社は神戸の灘区にあった。父にも神戸に住んでいる同僚がたくさんいた。あの日、私が寝てしまってからも父と母は神戸に電話をかけ続けたそうだ。

父は地震発生から数日後、加古川の店で食べ物や水をたくさん買いバイクで神戸まで届け始めた。海側の道は通れなかったため山側を通って行ったそうだ。同僚や母の知り合いに届けると、とても喜ばれた。あの時物資を届けた人からは今でも毎年、年賀状が来る。そして必ず「あの時はありがとう。」と書いてある。

母は昔、船乗りだった母の父と母と姉と４人で神戸に住んでいた。小さなアパートだったそうだが、周りにはたくさん親戚が住んでいて毎日楽しかったという話をよく聞く。しかし、そんな思い出の場所も今はもうない。今でもときどき、神戸に行くと母は昔住んでいた場所に案内してくれる。震災でアパートはなくなり今は駐車場になっている。
母の父と母は震災当時、長崎に住んでいた。長崎から神戸に住む昔の友達をとても心配していたそうだ。祖父は昨年亡くなったが、亡くなる前に一度だけ加古川に来た。その時に神戸の昔住んでいたところに行った。昔との変わりように驚くどころか、全く知らない場所に来たような反応だった。しかし、海を見ると「懐かしい。」と言った。神戸で船乗りをしていたころは神戸の海ばかり見ていた。変わらない海と全く変わってしまった街を祖父はどのように感じたのだろう。

３、　　「ゆずちゃん」

ゆずちゃんというのは、私のお気に入りのくまのぬいぐるみの名前だ。震災があった年の夏休み、兄が読書感想文を書くために借りてきた本の題名も「ゆずちゃん」だった。その本に出てくるゆずちゃんという名前の女の子は震災で亡くなった。そのゆずちゃんを同級生の男の子を通してみている絵本である。私が今ゆずちゃんについて覚えていることは、ゆずちゃんの夢が「動物のお医者さん」だったこと。そして歩けなくなった犬や猫の足に包帯が巻かれ、背中に風船をつけて空を飛んでいる絵。その絵はすごくきれいだった。その空の下で笑っているゆずちゃんがすごくかわいい絵だった。私は絵本を読んだあと、母に「ゆずちゃん、かわいそう。」と何度も言っていたそうだ。そしてその後、母に買ってもらったくまのぬいぐるみの名前をゆずちゃんにした。私がなぜゆずちゃんという名前を付けたのかは自分でも覚えていない。だけど、この「ゆずちゃん」という本に小さいながらも、すごく感動させられたのだと思う。ぬいぐるみのゆずちゃんを見るといつも思い出すのはゆずちゃんの将来の夢だ。震災で自分と同じ年頃の子供がたくさん亡くなった。たくさんの夢が奪われた。夢を持てること。それが当たり前のようで、実はすごく幸せなことだと「ゆずちゃん」という本を通してわかった。

「ゆずちゃん」の絵本をつくった人はそれを読む子供に何を伝えたかったのだろう。きっと命の大切さ、友達の存在、地震の怖さ、そしてゆずちゃんがみんなに愛されていたということだろう。「ゆずちゃん」を読む子供たちにも、自分がたくさんの人に愛されていることに気付いてほしいという願いが込められていたと思う。私はゆずちゃんに「命を大切する」ということを教えてもらった。

４、　　１月１７日

私にとって１月１７日は学校で防災訓練があって、朝の会で黙とうをする日だった。特別に意識していたことはない。防災訓練も、ごく普通のものだった。しかし、中学校の防災訓練は違った。訓練自体は普通だが、時間にうるさかった。前回よりも１０秒遅いとか前回よりも早くなったとかいう先生の声をよく聞いた。それからは、前回よりも早い時間を目指すことが私の中でも目標になった。

中学２年生の１月１７日。学校で防災学習が行われた。全校生徒で語り部である加藤いつかさんの話を聞いた。加藤いつかさんは、震災当時小学校６年生だった妹のはるかさんを震災で亡くされた方だ。私たちに震災ではるかさんを亡くされ、辛い思いをしたことを話してくれた。そして、街が復興していく中でのいつかさん自身の苦悩の日々も話してくれた。家庭が崩壊し、自殺未遂をしたこともあったそうだ。そしてなぜ、今は語り部としてたくさんの人に震災体験を話しているのかを聞いた。私は震災のことを全く知らなかったと思った。阪神・淡路大震災があったことやそのときにたくさんの人が苦労をされたことはわかっているつもりだった。しかし、その後の神戸のことや被災者のことは全く知ろうともしていなかった。涙を流しながら話すいつかさんを見て、まだ震災は続いていると思った。たくさんの生徒が涙を流していた。

いつかさんは、はるかさんの生まれ変わりのように咲いたひまわりから種を取り、「はるかのひまわり」として種を配り続けていた。私の学校にもひまわりの花壇ができた。話を聞いたあと小さな紙にひまわりの絵を書いた。みんなが描いたひまわりの絵を集めて大きなひまわりにした。あのときの私たちにできることはいつかさんを応援することだったと思う。この１月１７日は忘れられない日になった。

５、　　環境防災科

私が環境防災科を知ったのは、中学校の先輩に環境防災科に入った先輩がいたからだ。正直、「環境」という言葉に引かれてオープンハイスクールに来た。しかし、オープンハイスクールに来て、環境防災科の先輩を見て驚いた。私と少ししか変わらない年の人が阪神・淡路大震災を熱く語っている。そして、防災を学んでいる。「高校生なのに。」と思った。だけど、先輩を見て「高校生だからこそ。」とも思わされた。防災のことは全く知らないし、阪神・淡路大震災のことも知らない。だけど、そんな自分だからこそできることがあると思った。命につながる防災を学び、先輩方のように人の心を動かせる人になりたい。感動から感じるものを与えられる人になりたいと思った。

受験前は阪神・淡路大震災に関する本をたくさん読んだ。そして初めて被災者、ボランティア、救助にあたった人、遠くから支援をした人、それぞれの思いを知った。消防士さんが、水が出なくて消火さえもできなくて、悔しい思いをしたこと。そのことが一番私に衝撃を与えた。あのときそんな思いをした人がいたことが悲しかった。助ける側も悲しくて、苦しくて、辛かった。その反面、避難所での話に

感動した。中学生や高校生も自分にできるボランティアをしていた。もし、今地震が起きたら自分はボランティアに行くだろうか、そう考えた。きっと行かないと思う。「現地に行くことが怖いから、遠くから募金をしよう。」と思っただろう。

６、　防災を学ぶ

入学して、環境防災科の生徒としての日々が始まった。毎日楽しかった。授業も中学とは違って楽しかった。それは専門科目があるからだと思う。その中でも「災害と人間」は私にとって特別なものだった。毎時間、外部講師が来て阪神・淡路大震災のときのことや専門的な防災を教えてくれる。私が今でもはっきり覚えているのは大阪ガスの方の講義だ。震災で被害を受けたのは、神戸だけではない。ライフラインが多くの地域で停止した。加古川も水道が半日停止していた。大阪ガスの方の講義を受けて、ライフラインがいかに私たちに欠かせないものか実感した。そしてライフラインでいろんな人たち、多くの地域が繋がっていることを知った。ガス会社の人たちと私たち消費者もつながっている。震災のときに、人命救助で徹夜をして必死に動いていた人たちがいた。そして、人々の生活のために徹夜をして必死に動いていた人たちもいた。そのことにすごく感動した。ライフラインは命につながることだ。生きていくために必要で、なくなると不安になる。私も震災のとき助けられた一人だったと思う。地震後もライフラインが当たり前のように使えていたのは、たくさんの人の苦労があったからだった。

外部講師の授業は阪神・淡路大震災のことだけではない。それぞれの企業が今取り組んでいる防災も学んだ。今、大阪ガスでは柔軟性が高く、腐食しにくいPE管を使用している。それを知ってすごく嬉しかった。自分には見えないけど、自分も守られている。ガスを売り買いする店の人とお客さんという関係だけではできないことだと思う。ガスだけではない。電気が止まると命がけで復旧作業を行ってくれる人たちがいる。当り前のように生活をしていた日々が、いろんな面から守られていた。だけどなにも知らずに生活をして、必死に防災に取り組んでいる人に気づいていない人はたくさんいる。私はたくさんの人に気づいてもらいたいと思った。そしたら、防災に対する意識も変わると思う。

阪神・淡路大震災で被害を受けたのは人間だけではない。伊丹に住んでいた私の友達は犬が家の下敷きになって亡くなった。飼い犬は自由が利かないから災害が来ると一番危険だと思う。救助されるのは人間が優先で動物は後だ。ペットと飼い主は人間と動物という関係を超えている。家族の一員で、いて当たり前の存在になる。私はいつも犬に話を聞いてもらう。一日にあった楽しかったこと、愚痴、泣き言。親と同じように頼りにしている存在だ。震災でそのようなペットを守ることにも気付かされた。避難所に連れて行ってももらえないペットはどうしていたのだろう。阪神・淡路大震災の後の地震では、ペットの避難所が設置されている光景をみた。おそらく震災がなかったら気付けなかった部分だろう。人間だけではなく動物を守るための防災も大切だと思う。

１年生の冬、新潟県中越地震の被災地である新潟県長岡市へ行った。そこで行われた茶話会で山古志村に住んでいた方の震災体験を聞いた。地震で牛舎がつぶれたことや山古志村の人が避難した後も牛が生き続けられるように、泣きながら牛の鎖をとったこと。牛が生活を支えていたし、人生そのものだったからすごく落ち込んだと話してくださった。私はその話を聞いて、災害が奪うものが人の命だけではないことを改めて感じた。

高校２年の夏休み、ネパール訪問に参加した。入学する前からずっと行きたいと思っていた。そこで自分が環境防災科としてできることを精一杯して、地震の知識や震災を教えてあげたい。たくさんの人から聞いた震災の話を世界にも伝えたい。そう思ってネパールに向かった。ネパールで行われたスピーチコンテストでその自分の思いがどんなに軽いものだったのか知った。いつも私が言っていることは口先だけで行動にできていないのではないか、そう思った。それはネパールの学生が私より、はるかに熱い思いを持っていたからだ。ネパールは発展途上国であり十分な防災ができていなければたいへんな被害になる。それに比べ日本は先進国でネパールよりも防災が進んでいる。建物も、知らない間に法律ができていて耐震を取り入れたものになっている。でも市民の意識はネパールの人よりも低いと感じた。震災を経験した国なのに。ネパールの人に申し訳ない思いがした。明日に生きることに精一杯な人がいる国、途上国の防災から日本の防災を学んだ。

授業で、防災を学ぶために日本に来たJICAの方やいろいろな外国の方と交流をした。その中でも中国の記者さんと話したときのことははっきり覚えている。震災のときに使われた仮設住宅をその後起こった中国の地震のときに日本が提供し、そしてその仮設住宅を今度は中国がスマトラ島沖地震のときに被災地に提供した、という話だった。記者さんは「日本のおかげ。」そう言っていた。

この間、その中国で大きな地震があった。死者の数は阪神・淡路大震災よりも多い。そして多くの人が生き埋めになった。私は初めてこのニュースをみたとき、驚いた。地震があったということよりも地震でこんなに人が死んでしまう現実がまだあることに驚いた。世界で防災が意識し始められている。だからもう震災のようなことは起きない、起きてほしくない。そう思っていたからかもしれない。自分が無力だと感じたことは何度もある。そして、この地震を知ったときもそれを感じた。

私が環境防災科に入ってからも全国や世界でいろいろな災害が起こった。それまでは、ただ被災者に同情しながらニュースをみているだけだった。だけど環境防災科に入ってから変わった。自分たちにはなにができるのか考え、募金や被災地へ入るボランティアをした。それまでも、ボランティアをしたいと思っていたがきっかけがなかった。自分から動く勇気もなかったし、できることはないと思っていた。きっとそのような人はたくさんいると思う。阪神・淡路大震災で全国からたくさんのボランティアが支援のために神戸に来た。それは被災者にとって、とても心強かったと聞いた。災害が起きるから感じられるものがあると思う。人の優しさや繋がり、人間の本当の姿が出ると思う。それはきれいなことばかりではないかもしれない。でも、それが人の本来の姿ならばその姿も忘れてはいけないと思う。

７、　これから

環境防災科に入って、いろんな人に出会って私の中で阪神・淡路大震災というものが大きく変わった。環境防災科で勉強をするまでは、たいした体験はしていないけど、勉強をして私も震災を語り継ぐ一人になりたいと思っていた。しかし、阪神・淡路大震災は私が感じていたよりももっと身近であったと気づいた。震災があってから今まで、私もずっと震災に関わっていたと思う。私の環境防災科に入ってからの「出会い」は震災があったからのことだ。だから私は震災からたくさんの「出会い」をもらったと思う。

今の神戸は復興し、今では震災があったことさえわからないくらいだ。きっと、これから先も街並みは変わり続けるだろう。だけど、神戸の人や震災に関わった人は震災を忘れていないし、忘れられないと思う。震災で亡くなった方や未来に生きる人のために、今できることがある。私は、私には震災の悲しかったことだけではなく震災からなにをもらったか伝えていきたい。自分の子供、その子供、そして後世に伝えていきたい。

記憶と想い

明石市硯町
丸山　知美

１、はじめに

私達のあの時の記憶はどれくらいあるのだろうか？

当時４歳だった。大概の人は、震災の時の私達の年齢を５歳というがまだ誕生日を迎えていなかった人は３歳にしかなっていない。私は思い出をとどめておくことが苦手で当時の記憶は特に曖昧になっている。あの出来事が数枚の写真のようにただ存在しているだけだ。その写真を家族の体験を通じて繋ぎながらまずは私の震災体験を書いていきたいと思う。

２、１月１７日

いつもと変わらない日々を送った後、同じように母、兄と川の字で寝ていた。けれどその日は確実に何かが違ったのだろう。まだ、誰もが夢の中で幸せな出来事を紡いでいる時間にそれは起こった。
地震にあった記憶は私にはない。それには、母が一回起きたのにすぐに寝かせたからだというお兄ちゃんの意見と、何が起きても寝ていたという母の意見の二つがある。何にしても私は寝ていたのである。自分でも呑気というか図太いというか、あきれる限りだ。
私のマンションの横には山陽電車の線路が走っている。母は地震の衝撃をそこから電車が脱線してきてマンションに突っ込んだのかと思ったらしい。それほど地震の揺れはすごかったのだ。私たち家族は現在の家に引っ越してくるまで青森に住んでいた。青森にいた時にも地震を経験したらしく（何地震かは不明で私と兄、父は風呂に入っていて母は食器棚を押さえていたという体験をした。母の行為はとても危険なので今はしないように言っている)、立て続けに強い地震にあうなんて滅多にないことだったと話してくれた。

話を戻そう。明石に来て約２年がたとうとしている中、地震は我が家の内装をかなり変えてくれた。私の家のリビングには大きな水槽が二つありその中で魚たちはいつも気持ちよさそうに泳いでいた。私はそれをボーっと眺めるのが好きだった。その水槽が地震の揺れで割れてしまい、床一面が水浸しのガラスだらけになってしまった。大きい方の水槽が割れたのと食器棚の皿のほとんどが割れてしまったのとでリビングには裸足では入れない状態になった。その時の写真は今でも残っている。私が起きた時にはそれらはだいたい片付けられていたので、その写真を見ても本当にあったのかさえよくわからないのだが。
地震がおさまったらすぐに父がスリッパを探しにいったらしい。私の家は畳の部屋がほとんどなのでその当時スリッパがあったことに驚いた。もうひとつ驚いたのは父がテレビの下敷きになりかけたことだ。顔の真横にテレビが落ちてきて危うく当たりそうになっていた。１人別の部屋で寝ていたのでその時は恐ろしかっただろうなと思う。
まず１組のスリッパを見つけて母が履き、すぐに母は九州の祖父母の所に電話をかけた。その時は何故か電話はまだつながっており無事を知らせることができた。そして、父方の祖父母にも連絡をしようと思ったが繋がらなかったらしい。その後わかることだがその祖父母は灘区に住んでおり、隣の家が倒れてきて二人が住んでいた家を押しつぶし、息埋めになっていたそうだ。これは後で書くことにしよう。
結局、その２回かけた後は、電話はつながらなくなってしまった。もちろん電気・ガス・水道も止まっている。マンションには貯水タンクがあったのだが地震で倒れてしまい、水が滝のように流れ出てしまったと母は教えてくれた。ほどなく全員分のスリッパを見つけ３人は家の中で物がほとんどなく、一番安全だと思われる現在の私の部屋にこたつなどを移動させ、ガラスなどの破片を片付け始めた。私が寝ていた場所も物がなかったので移動させる必要はないだろうとそのまま寝かされていた。

私が起きたのはそれからしばらく経って午前９時くらいだったと思う。起きたらすぐ横くらいに、なぜか水浸しになった新聞や本が積まれていた。[なんで？]と思いつつ、いつものようにリビングに行こうとしたら「来ちゃダメ！」と母に強く言われてまだ完全に起きてない頭には何が起きているか理解できなかった。

すぐに父が私を抱えてこたつを置いた部屋に連れて行った。連れて行かれる途中、トイレに行きたくなり、「トイレする」と言ったら、「いいけど水でないよ」と言われた。それが何を指すのかわからなかったが、用を足した後いつものように水を流そうとすると水が出ない。この時、水が出ないという言葉の意味を理解した。でも、なんでこんな風になっているのかはまったくわからなかった。部屋に連れて行かれるとこたつが目に入ったが、いつも使っているこたつではない気がした。こたつの上にはもしもの時の大きな蝋燭など必要だと思われる物がゴチャゴチャ置いてあった。それらがもしかしたら違和感を生んでいたのかもしれない。その時暇そのものだった私はとりあえずテレビをつけようと思い、電源を入れたのだが全く動かない。父や母に「壊れてる」と言っても「今はつかないんだよ。」としか言われず、それ以外は忙しそうに３人で片付けばかりやっていた。私だけなんとなく仲間外れにされている気がしてむくれていた。例え、大地震が起こって親がどんなに忙しくても構ってくれないと子供は寂しいものである。

今みたいに電池式の携帯ゲーム機があった訳ではないので、私はすることなくゴロゴロしたりうたた寝を繰り返したりしていた。両親は相変わらずせわしなく動き、忙しそうにしているし、大きい余震も続いていた。この余震に私は恐ろしいという気持ちではなく、いつもとは違う状況による好奇心のようなモノを感じていた。お昼が近づくと何もしていなくてもおなかは減る。でも、おなかが減ったとは言いにくい。だからだろうか、何か気がまぎれる方法はないかと、またテレビをつけてみることにした。ちょうど父と兄が水を汲んで帰ってきたときらしい。私が何をしてもテレビはつかないと思っていたみんなは、特に期待することなく作業を続けた。

…その時のことが私の一番印象深い出来事だ…

テレビがついたのだ。私が「ついた～！！」というと、みんなこちらに顔を向けた。テレビがついた事への誇らしさと、注目を集めたことへのなんとも表現しがたい嬉しさがあった。テレビをつけたことは私の中では美談になっている気がする。でも、嬉しいという気持ちはすぐに消えた。その時の映像もまた印象深い。よく阪神・淡路大震災を振り返る時に出てくる映像をリアルタイムで見たのだ。私がつけたテレビは小さいテレビだったので、リビングにある大きいテレビを父がすぐにつけた。大画面（とは言っても小さいけど）に映し出されたあの映像は恐ろしさをそのまま表したような画だった。
それからは多分テレビで神戸の様子を見ながらお昼を食べたと思う。何を食べたのかも思い出せないけどいつもと違う食事に微妙な気持ちだったに違いない。
明石のライフラインはすぐに復旧され、それからの生活は困ることもなかった。感謝の気持ちでいっぱいである。

３、おじいちゃんとおばあちゃん

祖父と祖母の家は２つあった。１つは夏のお盆の時期になると墓参りなどで親戚が集まる宍粟にある一軒家。今でもそこは夏になると行くところで、川と木と虫の宝庫のような場所だ。そして、もう１つが被害にあった灘区の家だ。その家に住んでいたのは仕事場が近いからだったと思う。よく遊びに行ったらしいが私はその家にあった大きな電卓のことしか覚えていない。私の遊び相手の電卓だった。祖父の家に遊びに行くと兄はおばさん受けがいいというか、昔から大人の人には愛想がよく「女の子みたいね」とその容姿と共に可愛がられていたので退屈はしなかったみたいだが、対照的に人見知りが激しくすぐに泣いてしまい挙句男の子に間違われる私はその電卓に遊んでもらったのだ。と言っても適当に数字を入れて足し算をしたり掛け算をしたりするだけだった。しかも特別算数が好きだった訳でもない。現に今も数学は苦手科目だ。
祖父の家が潰れたといわれてもまずその電卓のことが思い浮かんだ。もちろん二人のことを忘れたわけではない。二人が助かった前提の考えである。実際助かっているわけだが、周りの方々はたくさん亡くなったらしい。一歩間違えれば死んでいた可能性があるのだ。祖母はその時の後遺症で確か手を動かしにくそうにしていた。薬も飲んでいた。私が少し大きくなって祖母が私の家に遊びに来てくれた時も甘いフィルムに粉薬を包むのを手伝った記憶がある。
地震から二日経って父は自転車で灘区の二人の元に行っている。この時、今の父からは考えられないくらい多くの移動をしていた。父は大阪に通勤していたのだが、もちろんのこと阪神間の電車は運行しておらず加古川まで戻って上をグルッと迂回して会社に行っていた。最初のほうは長田区の方も通った

らしく焦げ臭いに匂いは鮮明に覚えているという。震災の時に会社へ行く人は色々な意味で大変だったろうということは父の話にしかり、今まで話を聞いた外部講師の方々の事柄からも容易に想像できる。どこかに出かけている人の安全な道も早い段階で必要だなと思った。

祖父と祖母はポートアイランドの仮設住宅で震災後しばらく過ごした。また、休みになると遊びに行きもした。小石が多い砂利道を通って似たようなたくさんの家の間を行った。いろんな人がいたと思う。どこか疲弊しているような顔・家族が会いに来てくれる羨望のまなざし、そのようなことをその時感じた。久し振りに会った二人はとても元気そうだった。しかし、私にとってはそこも決して面白い場所ではなかった。二人に会えて嬉しかったが、それで何かを話すかと言えばそうでもないのだから仕方がない。

今だったらもう少し話せることもあるのだろうが…。

しばらくして二人は六甲道にあるマンションに入った。何回か私の家の方にも遊びに来てくれた。私は祖父母のことが好きだったが何故か素直に甘えすぎることができなかった。甘えていたと思うがどこか遠慮の気持ちがあったと思う。私の心には甘えすぎないことが良い子であるというような微妙な事を考えていた時期だった。今の私にはその反動があるような気がする。

その後、どうしてだったのかは忘れたのだが、祖母が貰った【神戸ポートピアランド】の優待券を貰って家族４人で遊びに行った。それは、私の記憶に残る内での初めての遊園地だった。２歳くらいの時にもたくさん行ったらしいが、前述の通りそんなに小さい時の事を覚えている程私の記憶のメモリーは多くない。その日はとても楽しかった。祖母のおかげで遊びに行ける!!それだけで胸を躍らせた。現在、あの遊園地がなくなったことは一部の思い出の喪失感につながっている。

祖母は兄が震災を体験した年齢、私が小学二年生の時に癌で亡くなってしまった。

それはとても悲しいことだけれど、地震で死なないで少ないながらも思い出が残る年まで生きてくれて今は嬉しく感じる。地震などの災害は数多くの笑顔を消し去ってしまう恐ろしくも悲しい事象だろう。けれど、少なくとも私のなかの“おばあちゃん”は笑顔でいっぱいの人だった。

４、環境防災科

上記の事以外は平凡な小学生・中学生となっていった。明石は神戸ほど学校の総合の授業などで震災や地震を多く取り上げていた訳では無いので、そこまで防災などということを考えたことはなかった。

私が環境防災科に出会ったのは小学５年生だった。兄が母のすすめで舞子高校を受験し合格したことだった。私の家族はかなり変わり者であると、このことからもつくづく思う。私は兄がどこの高校を受験していたのかすら知らなかったので、環境防災科という言葉に驚いた。その時の私は「環境防災科って何よ？変な学科。お兄ちゃんもようわからんことするなぁ」と小バカにしたような心持だった。まさか、現在このように私も舞子高校・環境防災科の一員になるとはその時全く思っていなかった。

しばらくすると私も受験生になり、最初の〔進路〕という壁にぶち当たる。

毎日が陰鬱としたような気分になった。中学時の私の成績は並より少し上くらいで生徒会役員の文化委員長を務めたこともあり、先生と両親からは「好きな学校に行きなさい」と言われていた。そうなると自分でも何をしたらいいのかわからなくなるものだ。そのため私はたくさんのオープンハイスクールを見て回った。ただし、私は人見知りが激しいので絶対一人では行かなかった。友達が「ここは行きたい学校とは違うわ」と言えば私も止めるといったような誰かの考えのままに動くことがあった。その気持ちに勇気を振り絞って行ったオープンハイスクールが舞子高校だった。兄が行っていた所がどんな学校か見てみたいという気持ちから見に来ていたのだが、今までやってきた授業と違う新鮮さを感じたし、来てよかったという気持ちにもなった。その時私は自分から全く知らない人に話しかけた。その子は多分今、同じクラスの子だったと思う。違っていたら申し訳ないが。とにかく私は何かを感じ、受験しようと思った。私たちの年５期生は 70 人以上が受験した。その中で 40 人しか受からない。そう思うと何かを感じただけで受験している私は受かる訳がないと合格発表の日まで思っていた。結果はその逆になったのだが。その時は一人心の中でガッツポーズをした。

２００６年春、期待と不安に胸躍らせながら、高校生活をスタートさせた。

入学するとしばらくは様々な事を考えていた。

1 年生はたくさんの方の震災体験を聞き、全く知らない知識を得た。その人その人の体験・考え・思

い…たくさんのことがあり、それ自体には興味を持ち、触れていくことがとても楽しかった。しかし、その人の気持ちが伝わるはずのところで私の心は何も感じなかった。感想を書いていても何か嘘を並べているだけのような気がしてならなかったし、友達からも無神経な言葉ととられるような言動が多々あった。それを悩んだ事もあった。なぜ自分はこういう考えで気持を考えられないのか、と。悩んでも答えは見つからなかった。無神経な言動は結局今もなおってはいない。けれど、地震で特に目立った被害を受けたわけではない私が気持ちまでわかる訳はないのかな？と考えるようになった。それは自分の中での言い訳に過ぎないのかもしれないが、一つの真実でもある気がする。

でも、それではいけないのだと感じ、想像するようになった。２年生になっていた。想像してもわからないことはたくさんあるけれど、前よりは自分の気持ちが嘘ではなくなっていた。少ないながらもボランティア活動に参加するようにもなっていた。人見知りの所為でなかなかうまく人と接することができないこともあったが、だんだんと慣れていき、学ぶことも多かった。

これを書いている時私は３年生だ。これからまだまだ悩むこともたくさんあるだろうと思うし、１年生の時のように他人の気持ちを想像できずに失敗を犯すこともあるはずだ。それでも、これからも多くの人との触れ合いを大事にしたい。と、高校生活を通して思った。

５、夢とこれから

今でも震災にあったマンションに住んでいる。マンションは若干工事をして誤魔化してはいるけれどいくつもヒビが入っていたりする。ふとした瞬間、あのような大規模な地震が起きたらこの家は崩れるのだろうかと、漠然とした不安に襲われることは少なくない。けれど、そのヒビが同時に防災意識を高めてくれている気がする。見たら地震のことを考えるのだから防災なのだろう。でも、その考えを与えてくれたのはこの学校で環境防災科という存在だ。環境防災科が軸になって私は少し変わったと思う。ここはそんなすごい場所である。

私には夢が２つある。１つは情報を伝える人になることだ。どのような職種に就くかはわからないが、あのテレビがついた時の気持ちが忘れられず、他の人にも情報の大切さと共に震災体験や想いも伝えていきたい。これからもっと情報が必要になると思っている。災害の時にも役に立つことは多いはずだ。

もう１つは恥ずかしさもあり、あえてここではふせておきたいと思うので書かないでおく。とにかく私はそれらに向かって進んで行こうと思っている。

『語り継ぐ』を書くにあたり私は何百年も昔の事を思い起こしたような気分になった。それこそカラカラの雑巾からまだ絞ろうとしているくらい一生懸命言葉をつないできた。それが１３年の月日という時間の長さなのだ。これから先『語り継ぐ』を書いていくこともさらに大変になっていくだろう。震災の時、生まれてきていない子も後には入学し卒業していくと思う。それでも絞りだすのにかかる苦労は一緒だと私は思っている。私たちがつないできたリレーがこれから先も絶えることなく続いていくだろう。私自身語り部の人から聞いた出来事を覚えている。それをまた誰かに話し伝えていく。情報が伝わっていくということだ。

想いは巡る。それを忘れずに私は私の夢・道を歩みたい。

あの日を振り返って

神戸市垂水区つつじヶ丘
三木　陽平

～１９９５～

１９９５年僕は大好きな友達と毎日楽しい日々を過ごしていた。僕は昼間毎日のように近所の友達と鬼ごっこをしたり探検をしたりして遊んでいたことやその頃の友達のことくらいしか覚えていない。震災を体験したといっても被害は小さくあまり苦労はしなかった。しかしあの時の大きな揺れとテレビで見た悲惨な映像だけはしっかりと覚えている。

～地震発生前～

地震発生の少し前僕と母と妹の三人で父の両親の家へ行っていた。その帰り道、ユニバー競技場の前を通った時に工場の煙のような雲を見た。その雲は煙突から立ち上るっている真最中のような縦に立ったものすごく長い雲だった。妹は寝ていたので僕と母で車をいったん止めてその雲を眺めていた。その雲は、何とも言えない不気味さで見ている僕と母を無言にさせた。震災に関する記憶でいえばこの雲の記憶が一番はっきりと残っている。しかし、僕も母もこの雲が地震の予兆だと知るのはもう少し先のことだった。

それから数日母は近所の人と最近鳥がいない、不気味な雲を見た、なにか不吉なことが起こったら怖いなぁなどと話していたそうだ。

～地震発生直後～

当時僕は四歳、父と母と妹の四人で一軒家に暮らしていた。まだ小さかった僕たち兄妹は父と母に挟まれるような形で川の字になって寝ていた。
部屋には大きな箪笥が一つ。その上には衣装ケースが二つ乗っていた。

平成７年１月１７日午前５時４６分、僕はすさまじい揺れや音には気付かずにまだ夢の中だった。しかし、顔の目の前で騒がしく聞こえる聞き覚えのある声。僕は夢と現実の狭間を行ったり来たりしながらゆっくりと意識を取り戻していった。だから僕の体験した揺れはほんの１、２秒ではないだろうか。地震という言葉を知らなかった僕は何が起きたのか全く理解できなかった。

目をあけるとそこには大きな父の顔。僕は何が何だかわからなかった。
ふと横の妹のほうに顔を向けるが妹の姿はなく妹の代わりにそこには丸まった母の姿があった。目を凝らしてよく見るとその中には小さな妹が気持ちよさそうに「スースー」と寝息を立てている。その光景に疑問を抱きながらもう一度父の大きな顔に視線を戻す。そこで僕は初めて横の光景と同じように父が僕に覆いかぶさっていることに気がついた。
僕はまだ何が起きたのか理解していなかったがすぐ近くにあるこわばった父の顔を見るとただ事じゃないことが起こったのだということだけ理解できた。
しかし、今僕の目の前には大きくたくましい父の体。僕は安心したのかまたすっと目を閉じた。

次に目を開けるのにさほど時間はかからなかった。「大丈夫か？」「すごかったな」などの父と母の会話で僕はまた目を開けた。幸い誰一人怪我をしていなかったし、固定されていなかった箪笥も倒れていなかった。地震というものの存在を知らなかった僕はさっきの揺れを少し楽しく感じていたような気がする。

後から聞いた話だが、父と母の両方とも地震が来る直前は遠くから馬の大群が走ってきている夢を見ていたそうだ。そして父は目が覚めて地震が来たのだと認識した時、「家がつぶれる！！！！ローンが残ってしまう！！！」と焦っていたらしい。そして僕たち家族は急いでいったん外に出た。その時僕は

寝ぼけていて訳のわからない言葉を発しながらどこかに歩いて行こうとしていたらしい。しばらくして安全を確認してから僕たち家族はまた家の中へ戻った。

～夜が明けて～

ついさっきものすごい揺れに見舞われたにもかかわらず母はもう一度寝ようとしていた。が、先に一階に下りて一服していた父が母を呼んだので母はぶつぶつ言いながら僕たちを連れてみんなで一階におりていった。そこには目立った地震の傷跡はなかったが食器棚から食器がこぼれおち床が破片でいっぱいだった。父と母はそれを無視してよけながらテレビの前まで行きテレビをつけた。するとその時電話が鳴った。僕はこんなに朝早くから誰だろうと不思議に感じた。

電話の相手は父のほうの祖父からだった。祖父の家は中央区の荒田町というところにあったが大した被害はなくお互いの安全を確認しあった。その後すぐに父の会社の後輩から電話がかかってきた。後輩の話によると垂水のマンションが倒れたそうだと父が言っていた。その話を聞いて父も母も僕もこの家が大丈夫だったのだからそんなはずないだろうと信じていなかった。しかし僕たちはテレビから映し出される悲惨な映像で現実を目の当たりにすることになる。その時テレビを見ていた母がいきなり「見てみ！」と言った。テレビに目をやるとそこにはつぶれた家やビル、燃え広がる炎やモンモンと立ち上る煙などが映し出されていた。両親はテレビを見つめたまましばらく何も言わなかった。しばらくして母のほうの祖父母の家に電話をかけたが全く繋がらなかった。

それからすぐに、父は会社に行ってくると言い出した。当時銀行員だった父は長田区方面の銀行に勤めていたので母が危険だからやめといたほうがいいと言ったがその反対を押し切って家を出て行った。父が出て行ったあと、母は「こんな大事な時に家族を置いて・・・」と愚痴をこぼしていた。

少しして母が割れた食器を片づけ始めた。何に対しても興味を持つ年頃。割れた食器を近くで見たかったので母の近くに寄って行って割れた食器に触れようとして母に怒られたのを覚えている。仕方なく少し遠くから食器の破片を見ていると、僕の茶碗が割れていた。当時から食べることが好きだった僕は割れた茶碗を見て少し寂しくなった。

日も沈みかけたころ父がぐったりした顔で帰ってきた。交通機関がすべてストップしているので会社が近かったこともあり近所の人と一緒に車で会社に行っていたそうだ。道はとても混雑しており、会社に行くまでに相当な時間を用いたようだった。

父の話によると、須磨を通って行こうとしたら当時は古い家が多かったためか周りがグチャグチャだったそうだ。そして長田方面に近づくにつれて街並みが変貌していった。映画のセットの中にでもいるような感じだったらしい。横を通り抜けていく原付はノーヘルや二人乗りだったそうだが目の前に広がる光景を目の当たりにしていたので違和感はなかったと言っていた。

まず初めに父の会社に寄った。会社に着くと入口に張り紙がされておりその紙には「自宅待機」と書いていたそうだ。そして次に一緒に行っていた人の勤め先に行った。そこはとてもガス臭くその人の会社が大変なことになっていたらしく、父に「私は会社に残るので私の車で先に帰っていてください。」とだけ言い残しグチャグチャの会社の中へ消えていったそうだ。

父は仕方なくその車で帰ることにした。しかし渋滞で車が一向に動かなかった。その原因は地震で信号がつぶれていてパニックになっていたからだということだった。なんとかそこを切り抜けると今度は二号線の橋の倒壊を目撃したそうだ。このとき父は改めてとんでもないことが起こったのだと実感したそうだ。そうして長い時間をかけて昼の一時位に帰ってきたとのことだった。

～水が出ない！！～

父が家を出てからすぐに僕は洗面台へと向かった。しかし水が出ない。僕は母に「水が出えへん」と大声で呼びかけると「やっぱりか」と拍子抜けた返事が返ってきた。母は「なんでなん」という僕の問いかけに面倒くさかったのか、それどころではなかったのか、その問いかけを無視して風呂場に連れて

行き風呂の湯で手を洗わせてくれた。それから水の出ない生活が１ヶ月ぐらい続いた。お風呂に入れないので、知人の家にもらい湯をしに行く毎日だった。毎日いろんな人に会えるしいろんなお風呂に入れる。僕はそれが楽しくて仕方がなかったのを覚えている。その日に電気もガスもストップしてしまいとても生活に困った。幸い電気はその日の晩に回復していたので電気ポットで湯を沸かしてカップラーメンを作って食べた。しかし後からグチャグチャになってしまった所にまで急いで電気を通したために、火災がひどくなったという話を聞いて、僕たちみたいに助かった所もあればそれが原因で命を落とした人もいるという差にとても残酷さを感じた。

～次の日～

昨日あんなにすごい揺れを体験したにも関わらず、ぐっすりと眠れた。そして僕はいつもと変わらない朝を迎えた。しかし朝いつものようにカーテンを開け南の空を見上げると、一部の部分だけ真っ赤に染まっていた。次の日もその次の日もその部分だけ朝から晩までずっと赤色だった。父になぜかと尋ねてみるとあの赤いところの下には長田の町があって、そこは今ものすごい火災が起こっているんだと教えてくれた。あの時はまだ幼かったのだ「すごい」などしか感じていなかったが、今もう一度あの光景を見るようなことがあれば怖くてまじまじと見ることはできないと思う。

地下鉄が止まってしまい父は会社に行けず、ずっと家にいた。ガスも水道も止まったままだったのでその日もまたカップラーメンだった。その日から毎日のようにカップラーメンの日が続いた。

～数日後～

数日たってもライフラインは回復しておらず、毎日のようにインスタント食品、給水車のところへの水汲み、もらい湯などの不便な毎日が続いた。北野町に住んでいる祖父母は何の被害もなく無事に過ごしていたのだが、荒田町に住んでいる祖父母の家は近くまで火災の火が迫ってきていた。その話を聞いて僕たちが実際は 30 分くらいで行ける道のりを数時間かけて祖父母の家を訪ねたとき祖父は会社に行っていて家にはおらず、祖母は体を小刻みに震わせながら座っていた。その時僕はよっぽど怖かったのだろうなと思った。さすがに父もこれは危険だと感じたらしく、祖母に貴重品や着替えなどの必要最低限の物だけをまとめてもらい、祖父の勤める会社に祖父を迎えに行き僕たちの家へと向かった。それから一か月位の間僕たちと一緒に住んだ。僕は祖父のことも祖母のことも大好きだったので、とても嬉しかった。そのころには父も会社へ出勤するようなり祖父と祖母が家にいること以外いつも通りの生活に戻りつつあった。

～水が出た！！！～

一か月を過ぎたころだろうか、とうとう水道のライフラインが復活した。父は水が出なくなってから、「水が出たら風呂いっぱいに湯をためて、その中に飛び込みたい。」といっていた。
そしてとうとうその夢がかなう時がきて、母に湯をためてくれと頼んだ。
そしていざ入る時になると、急にお湯がもったいなく感じ湯船に飛び込むどころか、湯につかることもせずに風呂桶で少しずつすくって湯を使っていたそうだ。
その時僕は、ちゃっかりと風呂の中に飛び込んだ。

～未来へ～

今回、「語り継ぐ」を書くにあたって、父や母にたくさんの話を聞いた。その話を聞いて改めて自分の記憶の少なさを実感した。しかし、話を聞いていくうちに、所々だが「そんなこともあったなぁ」と思い出すことが出来た部分もあった。震災当時近所の人たちはとても優しくどんなことがあってもみんなで助け合って、震災を乗り越えてきた。それは普段からの地域のコミュニティがしっかりしてないと出来ないことだと思った。だからこれからもご近所付き合いは大切にしていきたいと思った。

日ごろやっていないことはとっさに出来ないといわれているが震災の時の父と母の僕たち子どもの上に覆いかぶさって守ってくれたこと、水が出るうちに出来るだけ水をためていたこと、まだまだ一杯あるけれど、それらの数々のとっさの行動にはとても感心した。そして知識というものの大切さを強く

感じた。だから僕は日ごろやっていなくても命の危機を感じた時や窮地に追い込まれた時には、人は思いがけない強さや行動力を発揮できると思う。しかしそればかりに頼ってしまっていてはまた同じ様な地震が起こった時にその時と同じくらいの被害、いやそれ以上の被害が出てしまうかもしれない。そうならないためにも僕たちはこの教訓を生かして学ばなければいけない。そしてこれから誕生してくる新たな時代を生きていく子供たちに語り継いでいかなければいけない。これは震災を体験した僕たちに課せられた使命だと僕は思う。

～環境防災科に入って～

僕は中学二年生の時に初めて環境防災科の存在を知った。初めはあまり興味がわかなかったけど、環境防災に行っていた先輩が環境防災科のことを色々教えてくれてとても楽しそうに教えてくれたこともあってか、僕も環境防災科に入りたいと思うようになった。

そして僕は環境防災科に入ってからたくさんの人に話を聞かせてもらったし、ボランティアに参加させてもらった。環境防災科に入っていなかったら家族と震災の話などすることはなかっただろう。それによって自分の中で今までは考えなかったことや目を向けなかったことに目を向けられるようになったと思う。妹も環境防災科に入って家族の中で防災について話したり考えたりする機会が増えた。

こうやって僕の家族のように防災に興味のない人も少しの情報があることで家族の中で話題にもなるだろう。そうやって少しでも震災に興味を持ち防災を考えていき、大切なものを守ってほしいと思う。僕は環境防災科に入って防災が身近にあり、いかに自分の大切なものを守るために必要なことなのかを学んだ。そうやって学んできたからこそ、僕は三年間学んできた知識を無駄にしないように、このことをこれからたくさんの人に伝えていきたいと思う。そしてみんなに少しでも防災に興味を持ってもらえればとてもうれしく思う。

阪神・淡路大震災と私の家族

明石市二見町
三好　彩香

阪神・淡路大震災の時私はまだ４歳になったばかりだった。住んでいた所もそんなに被害が大きかったわけではない。だからあのころの記憶は、ほとんどといっていいほど無い。唯一残っている記憶は身近にいた家族のことだけだ。

私の家は、家族仲が昔からすごくいい。今も昔も会話が途絶えることはない。父は複雑な家庭環境で育ったため、母は両親が共働きだったため、寂しい思いもたくさんしたそうだ。だから両親は休みのたびにご飯に行ったり、遊びに連れて行ってくれたりした。祖父母とも比較的仲は良かったので、よく遊びに行った。祖父と祖母は離婚や再婚のおかげで３人ずついる。自慢にするのはおかしいが小さい頃友達より祖父と祖母が多いことがすごく自慢だった。私はこんな家族が大好きだ。

環境防災科と私

私の知っている中では、直接震災の被害で亡くなった人はいなかった。

しかし、震災の後に間接的な被害を受けて大好きだった曾祖父を亡くした。私が環境防災科に合格したとき、みんなが喜んでくれた。そして伝えることの大切さを学んだ私たちだからこそ、震災を知らない周りの人たちに広めていきたいと思った。

入学してから日本でも何度か大きな地震が起こった。私は募金活動や、ボランティアに何度か参加させてもらった。自分で見て聞いて肌で感じるのと、紙に書いた文章や映像で学ぶのは大きな違いがあることにすごく驚いた。実際の被災地は私が思うほど甘くなかった。少し時間がたって落ち着いた状況の被災地に行ったので、人々も普通の生活をしていると思っていた。

実際行ってみると、子どもたちの中には心を閉ざしている子やまったく親から離れない子…大人の中にも「しあわせ運べるように」を聞いて涙を流している人…花を植えかえただけなのにすごく喜んでくれた人々…そんな人々を見て本当に驚いた。帰ってきてから自分の考えの甘さにショックを受けた。

それまでは高校生という今の自分に何ができるのかもわからなかった。けど、ボランティアに行って周りがもう復興したと思っていても、被害を受けた人たちにとっては本当の意味での復興なんてないということがわかった。被災した人だけでなくその周りの人にとってもきっと本当の意味での復興はないと思う。

私の家

震災が起こったとき私は母の隣で寝ていた。母は、足の上に壁時計が落ちてきて小さな地震じゃないと思ったそうだ。父は仕事に行っていたため母が私に布団をかぶせてくれたそうだ。私は揺れがおさまるまで何もなかったかのように寝ていた。

私が目を覚ました時母は、リビングに飛び散った割れた食器やガラスの破片で足を切って血を流していた。私は「布団の中にいなさい」と言われていたので、ドーナツをもらって何が起こったのか理解できないまま布団の中からテレビを見ていた。母も片付けをある程度済ますとテレビをずっと見ていた。

私の家は明石だった為ガラスが割れた位の被害ですんだが神戸に祖父母が２人ずついたし父も仕事に行っていたのですごく心配だったと、母は言っていろんな所へ電話をかけたりしていた。そして母は父がここにいるとテレビを見ながら教えてくれた。でも正直それがどういうことかはわからなかった。ただ時間がたつにつれて、父が帰ってこないことが寂しかったのだけは覚えている。震災から１週間ほど父は帰ってこなかった。いや、帰ってこなかったのではなくて帰ってこられなかったのだろう。

帰ってきたときの父は正直鬚も伸びて、お風呂にも入れなかったらしくとても臭かったそうだ。見た目も現場で働いたままだったので汚い姿だった。その時は父が帰ってきたことが嬉しくてたまらなかったのを覚えている。父が言うには帰ってくるときに、明石市内に入ったところからすごく平和な光景に見えたそうだ。また次の日には、消防署に戻っていってしまったけれど、それからは消防署と家を行き来する生活だった。だから寂しくなかった。１ヶ月ほどそんな生活が続いた。

私には弟がいる。震災の時まだ生まれて３か月だった弟はベービーベットで寝ていた。母に聞いた話では弟の上には空の衣装ケースが落ちてきていてとても泣いていたそうだ。本当に空の衣装ケースでよかったと言っていた。もし震災が夏に起こっていたら弟の上に落ちてきていた衣装ケースは中身が入っていただろう。そう考えるとあの時、落ちてきたのが空の箱で、弟が無事で本当によかったと思う。

環境防災科に入ってから弟に震災のこと覚えているのか聞いたところ、人に聞いた話や、学校で習った話などはちょっとくらいならわかるけど、やっぱり自分の上に落ちてきていた衣装ケースのことなどは覚えていなかった。私でも、記憶が薄れている中で当時赤ちゃんだった弟や震災後に生まれてきた子供たちが覚えているはずもなく、知っているはずもない。このとき、せめて家族には学校で学んだことの一部でもいいから伝えよう思った。

垂水の家

当時垂水に住んでいた祖父母はよく私の家に来ていたし、私も垂水の家にはよく行っていた。だからすごく思い出もたくさんあった。垂水の家に行くには駐車場から長い階段を上がる。よく祖父が抱っこして上がってくれた。家の近所にある駄菓子屋さんや、焼鳥屋さん、公園などにもよく連れて行ってもらった。垂水の家には曾祖父も一緒に住んでいた。私は曾祖父が大好きで昔から垂水の家に行ってはずっとくっついていた。

震災が起こる前の年の１２月にずっと入院していた曾祖母は亡くなった。私が物心ついたころには、すでに曾祖母は入院していたから、あまり曾祖母のことは記憶にない。この頃、曾祖父も入院していたので私はよく病院へお見舞いに行った。けどいつも曾祖父が「病院に入れて病気でもうつったら困るから」と言うため、祖父とお見舞いが終わるのを待っていた。ただ自分だけ曾祖父に会えないのが寂しかった。それからしばらくして曾祖父は退院が決まった。私はすごく嬉しかった。なのに、震災が起こった。曾祖父の入院していた病院は震災の影響で暖房機器が何時間かつかなかった。体力も落ちていた曾祖父は、肺炎を再発させ、どんどんひどくなり退院することなく亡くなってしまった。

震災の起こる前の日曾祖父は祖母に鍋焼きうどんが食べたいと、言っていたそうだ。あとから母に聞いた話では、曾祖父が亡くなったとき祖母があの日鍋焼きうどんを作っていってあげたらよかったと後悔していたそうだ。それと曾祖父には曾祖母が亡くなったことを伝えていなかった。退院してきたら話そうと決めていたそうだ。

私は母に曾祖父はまた病気がひどくなって死んでしまった、と聞かされていたのでこの話を知ったのは中学校に入ってからだった。その時すごく震災を憎んだ。直接の被害でなくなったわけではないが、震災から間接的に亡くなった曾祖父も十分震災の被災者だと思う。今まで曾祖父の亡くなった話は家族以外のだれにもしたことがなかった。自分の大好きだった曾祖父のことを思い出すのが辛くて悲しかったからだ。でも、これからは震災の被災者は直接的な被害を受けた人だけではなく間接的な被害で亡くなった人もいるということを伝えていこうと思う。

震災直後祖母は垂水の家が傾いていて住んでいるのが怖かったために、私の家まで歩いて来たそうだ。私たちも震災後落ち着いてきてから、車で垂水の家に何度か行ったけど傾きが酷く祖父母たちは、私の家の近所に一軒家を建てた。家が建つまでの間は私と同じマンションにしばらく引っ越して来ることになった。私は、垂水の家にもう行けないなんてわからなかったので、ただ毎日祖父母に会えるという事が嬉しかった。今考えると、たくさんの思い出が詰まったあの垂水の家を離れるのはとても辛かっただろうなと思う。舞子高校に通いだしてから１度だけ私は垂水の家の横をバスで通った。何年もたっているのに、道も雰囲気も変わっているのにすごく懐かしかった。垂水の家は屋根しか見えなかったけどまだ確かに残っていた。祖父母に話すと、今は違う人が傾いたまま住んでいると話してくれた。少し寂しそうに思えた。

長田の家

長田にも祖父母が住んでいる。祖父母の家はお寺がある幼稚園だったために庭が広かった。火災がたくさん起こった長田の街で祖父母の周りの家や建物も何軒も燃えていたそうだ。祖父母の家と幼稚園はひびが入って中に入れなかった。お寺は中も外壁もグチャグチャになったそうだ。幼稚園も私の大好きだった屋上のプールも、ひびがはいって建物の中にいるのは危なかったから幼稚園のバスで寝泊まりしていたそうだ。寒かったし、トイレにも苦労したし、知り合いとか近所の人でも連絡のつかない人がいたりして、本当に大変だったと父は祖父から聞いた話を私に聞かせてくれた。父は、庭が

広かった事と幼稚園という教育施設の為に耐震とかがしっかりしていたからよかったのだろうと言っていた。

震災の後幼稚園の遊具が新しくなった。壊れた所とかがあったりしたからだと聞いた。でも、新しい遊具が嬉しかった。今思うと、震災の頃私は小さかったから仕方ないのかもしれないけど、大変な体験をした祖父母を傷つけることを言っていたのかも知れない。

小学校の頃長田の家に行く時に、空き地を見て父から震災でこの辺がすごく変わったという話をきいた。震災で火災があったのは知っていたけど、まさか小さなころから行っていた長田の町が火の海になっていたなんて知らなかった。

昔から長田の町に住んでいた祖父母。きっとたくさんの知り合いがいただろう。バスの運転もしていた祖父はきっと、幼稚園に通っていた子供の死も受け入れなければならなかっただろう。私は祖父が乗り越えてきたことを考えると震災のことを深くは聞けない。きっと祖父から話を聞けばもっとたくさんの事が見えてくるのかもしれない。けど、私はこれからも震災体験を祖父に聞けそうにない。

父と叔父と祖父

私の家族は近い家系に消防職員が３人いる。当時祖父は既に退職して新しい仕事に就いていた。その新しい仕事場も震災でフロアー内がぐちゃぐちゃだったと言っていた。いつも高速道路を通る時祖父はその会社を見ながら震災の話をしてくれる。すごく悲しそうだ。震災から１５年たって今は新しく建て替わっているけど、祖父の悲しそうな顔はなくならない。

また祖父は阪神高速を通るたびに自分の兄弟の話をしてくれる。祖父は兄弟が多い家族で長男だった為に面倒見も良かったのだろう。いつも話してくれる兄弟の話はあの５時４０分頃の話だ。トラック運転手をしていた兄弟はサービスエリアでご飯を食べたそうだ。食べ終わっていつもなら少し仮眠を取ったりするのにその日はなぜか走っていたという。あの地震で阪神高速が倒れた部分を少し過ぎたところで４６分を迎えたそうだ。車で走っていても分る位だったので少し危ないなとは思ったらしい。結局倒れた部分から少し離れていたから怪我もなく無事だったが本当に怖かったと祖父に話していたそうだ。祖父はいつも「本当によかったよなぁ」と呟いている。高校に入って学んだことでいかに危険な状況だったかとかが分るようになったので私も祖父の話を少し理解できるようになったなと思う。

叔父も消防隊をしている。当時は須磨消防署で勤務していて、家が垂水だったので震災が起こってすぐに歩いて消防署に向かったそうだ。叔父とはあまり震災の話はしないが私が環境防災科に行きたいと話した時に、あの日に、たった何秒かの揺れでたくさんの人が死んでいった悲しい事実を学ぶことでいい経験になる、というニュアンスの言葉をかけてくれたことを覚えている。叔父とは環境防災科に入ってから今まで以上に仲良くなった。叔父は祖父がいつも私の話を嬉しそうにするとよく教えてくれる。祖父は私が今まで興味もなかったことや、嫌いだった消防士という職業をまっすぐ見られるようになったことが嬉しいのだと思う。

父は環境防災科を受験すると決めてから私にできるだけたくさんの話を聞かせたり、いろんな記事を持って帰ってきて見せてくれたりした。それがうざったかったりもしたけど、やっぱり父はすごいと思う。普段口にはしないけど、環境防災科に入って学んだことでそれは自分でも分るようになった。

父の見てきた神戸

父は震災の当時、長田消防署に勤務していた。当日は、年に何回かしか消防隊としての勤務をしないのにたまたま消防隊として勤務していて出動から帰ってきて消防署の受付に１人で座って仕事をしていたそうだ。そしてあの５時４６分。父はすごい勢いでごぉぉっという音がして最初は消防署の前を大型のトラックかなにかが走ったのかと思っていたが体が宙に浮き消防署の前のアスファルトがぼこぼこと浮かんでいた。気がつけば床にたたきつけられていて、受付に置いてあった資料などが全部降ってきたそうだ。まともに立ってなどいられないし、資料に埋もれた中で揺れがおさまるのを待ったという。狭い事務所の中にいた父は腰を痛めた。しかし、痛いなどと言っている暇もあるわけがなく受付から出て見ると仮眠をとっていたほかの隊員たちも次々２階から降りてきて長田の町の北方向を見ると火柱が数本上がっていた。

そしてすぐに出動命令が入った。しかし、出動しようにも消防署のシャッターが潰れていてシャッターを開けるのに苦戦した。割れたアスファルトを乗り越えながら火災現場へと向かったが、消火栓からは水が出なかった。水を求めて近くの小学校のプールへ行った。小学校の水もなくなり西代の県

民スポーツプールまで水を取りに行き、そこから西に向かって須磨の境界まで２４時間以上かけて消火活動を行った。水はすぐになくなるし、燃えさかる炎の中からプロパンボンベや酸素ボンベの排除を行いながら、埋もれている人を救助し続けた。

消防職員の中には家族が死んだしまった人や、体調不良があっても救助を続け災害と向き合っていた人がたくさんいたそうだ。そこからは消防署に戻って駆けつけてくれた全国の消防隊員を引率して救助活動をした。

父が生まれ育った家は全焼で、家財道具や思い出も全て燃えて灰になったそうだ。小さい頃からの友達もたくさん亡くなり自分の家が燃えている中で救助活動をしていくストレスと、最初に放水しているときにがれきの下で助けを求めてきていた人に「後で絶対助けに来るから頑張って」と約束していたのに、がれきの下から救出したときにすでに死んでいたりするのがとても辛かったそうだ。何人か生存している人も救助したが時間が経つにつれて生存者の救出よりも遺体を見つけ出すことのほうが多くなり辛かったそうだ。その家族や友人の泣き崩れる姿も何度も見た。やっぱり自分の友人や、たくさんの人々の死を見て相当なストレスだったのだろう。

今でも助けてあげると言ったのに助けてあげられなかったという後悔からか疲れている時や、震災前後になると夢に見ることがあるそうだ。でも今でも父は現場で人の命と向き合っている。

震災から時間がたって学んだこと

私は小学校に入って「幸せ運べるように」という歌をきいた。それまで私は父の仕事が大嫌いだった。それは台風とかで学校が休みの日に一緒に遊んでいたり、ご飯作る約束をしていたりしていても、緊急招集がかかり仕事に行かないといけないからだ。緊急招集がかかるような台風の時は、小さいうちは風の音や雷が怖かったから一緒にいてほしかった。変な言い方だが小さい頃は、消防士という職業に父を取られるような気がしていた。だからこの仕事が大嫌いだった。

「なんで家族より他の人が大事なん？」などと真剣に思っていた頃もある。けどこの曲を聴いたときに震災の映像を見せてもらった。そこには必死で働いている消防職員の姿があった。今までニュースの映像や新聞記事などでは見ていたのだが、消防士という職業をなかなか理解することができなかった。私はその時、なにがどうわかったか？と聞かれたら困るけど、父がこの仕事を誇りに思っているのが少しわかった気がした。

環境防災科の面接で受験理由を聞かれてひとつに父と祖父の仕事をもっと知りたいと思うといった。環境防災科に入って父達消防職員が震災の時、本当に悔しくて辛くて大変だったのかが前よりは少しわかった気がする。

たくさんの外部講師の話をきいた。消防職員の話も聞いた。どの外部講師の方々もたくさんの映像や資料を見せてくれた。その中にもたくさんの消防職員が映っていた。火の中で聞こえる悲鳴や、救助活動の映像…なぜか今まで父の職業を嫌っていた自分が恥しくなった。きっと私は震災を通して学んだことよりも、震災から時間がたって学んだことのほうが多いと思う。

私にとっての家族

私が辛い時や悩んだ時、悲しい時、嬉しい時、楽しい時いつでも私の側にはこんなに温かい家族がいてくれる。私はそんな家族が大好きだ。震災で大好きな曾祖父を亡くした悲しさも、父が乗り越えてきた事も環境防災科に入っていなかったらこんなにも深く考えなかっただろう。

日常生活の中で防災は切っても切れない関係にあることを学びどんな職業についても、防災にはかかわっていけるとも知った。だから私は父や祖父のような、直接防災に関わる職業を目指すわけではないけれど、自分の進んだ道で伝えていこうと思う。環境防災科に入って考えるきっかけを与えてもらえたからこそ、自分の大切なものを守るすべを学んだからこそ、伝えていかなければならないし、この学科に入ってたくさんの人に支えられて学んだことへの感謝、亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていくということや大好きな家族を大切に思う事にそれが繋がっていくのだと思う。

語り継ぐ

神戸市垂水区舞子台
山口　郁美

・震災発生

「重い…」
私は、そう感じて目が覚めた。目をあけると母が私の上に、そしてそのまた上に父がいた。その時は「重く、苦しい」ということしか頭になかった。
しかし今となっては、両親が、自分達も初めて経験するようなすごく大きな地震の中で、私を必死に守っていてくれたことにとても感謝する。

大きな揺れがおさまると、両親は私の上から降り、私を連れて外へ逃げようとした。
しかし、こんな地震が起こるなど予想もしていなかったため、逃げると言ってもなにを持っていけばいいのかわからない。
真っ暗だから「懐中電灯をつけよう」と懐中電灯を探すが、その懐中電灯さえどこにあるのかわからない。そして、家具の固定などしているわけもないため、タンスは倒れ、食器棚も倒れ、ひどい状況だった。
倒れているタンスを起こしたりしてようやく、父が懐中電灯を見つけ、母と私に靴を履かせ、外へ連れて行った。外はガスの臭いがひどく、誰かが「火をつけるなよ！」と叫んでいた。
この時、両親は、自分の家の被害が一番大きいと思っていたため、「あれだけ揺れたのに、この程度か。」と思ったらしい。
だから、父は、次の日に控えていた大事な仕事のために、もう一度家に戻ってスーツに着替え、用意をしていたという。

・安否確認

父の着替えが終わり、まず安否確認をするために叔母の住んでいるアパートへ行った。しかし、もう叔母達は避難した後だったのか、家にはいなかった。

次に、父方の祖父母の家に行こうとした。当時、祖父母の家は長田にあり、わたしの家から、祖父母の家に行くまでには山道を通らなければいけない。いつものように行こうとするが車は全くすすまない。やっと山の上に来たところくらいで下のまちを見下ろすと、まちは煙だらけで、つい先日までの町並みは消えていた。
その時に両親も、ようやく「大変なことが起きている」というのがわかったのだ。
そして、なんとか祖父母の家に到着したが、いつもなら３０分もあれば着くはずが、この日は出発してから到着するまで４時間もたっていた。

ところが、やっとのことで着いたというのに祖父母の家一帯は燃えていたのだ。父はすごく不安になったが、すぐに近所の人が「お父さんとお母さんなら避難所におる！生きとるから安心しろ！」と教えてくれたので、ひとまず安心できたと言っていた。私はこの話を聞いて、やっぱり近所付き合いを大切にしているといいなと思った。

近所の人が教えてくれたので避難所へ行こうとしたが、避難所と言っても避難所はたくさんあり、どこの避難所かわからず、とにかく、小学校などの近くの避難所を探しまわった。そして何件も何件も探し、ようやく祖父母のいる避難所を見つけたのだ。
祖父母にどのように逃げたのか、話を聞くと「地震直後にすぐ家を出たが、服を取りに戻ろうともう一度家に入った。でも壁が崩れてきたから何も取らずまた逃げてきた」という。

そして「服よりも家よりも、なにより、昔のアルバムや思い出の品が全て燃えて無くなったのがすごく悲しい」と言っていた。

父方の祖父母の安全は確認できたので、私たちは次に、母方の祖父母のところへと行こうとした。しかし、道路が割れていたり、火災がおこっていたりと、通れる道など１つもなく、家まで行くことができなかった。だから、母方の祖父母の安全が確認できたのは、電話がつながるようになってからだった。

・父の会社

これは父から聞いた話だ。
当時、父の会社は新長田にあった。父は地震が起きてから、お金や大事な書類を取りに会社へ行った。会社の中に入ると、目の高さぐらいまで一階の天井の一部分が落ちていた。会社は五階建てで、お金や書類は最上階にあったため階段をのぼり五階まで行くが、常になだめだった。

また、震災が起きてからの会社というのはすごくひどくなっていったらしい。当時は災害で建物が壊れても、もらえる金額が少なかったため、会社の借金はすごく増えていった。
阪神・淡路大震災があってから、災害手当としてもらえる金額も増えたが、もうちょっとはやくに増やしていてほしかったと言っていた。

・救援物資

私たちのところへの、救援物資は食料や衣服だった。
近くのスーパーも開いていないし、非常食なども準備していなかったので、食料を送ってくれることは、とても嬉しかったし、助かっていた。
しかし、救援物資として送られてくる食料にも限りがあるため、物資だけでは足りない時もあった。その時は、近くのスーパーは閉まっていて使えないから、遠くのスーパーまで行って食料を手にいれていたので、すごくしんどい思いをした。
私たちの家は大きな被害がなかったので、衣服はあまり必要ではなかったが、家が全壊した方や焼けてしまった方は、着るものが全くない状態なので、とても喜んでいた。

・復旧

私たちの住んでいたところは、ガスがプロパンガスだったため、はやく風呂に入れた。しかし、最初のうちは、またいつ地震がくるかわからないため、怖くて風呂に入ることができなかった。

ライフラインの中で、無くなって一番困ったのはやっぱり「水」だった。
トイレ・洗顔・歯磨き…1 日で自分たちが、どれだけの水を必要としているのかがよくわかった。同時に、水はいつも当たり前に出るわけじゃないのだから、大切に使わないといけないと思った。

震災時、私たちの家の水は、当時加古川に住んでいた母に友人宅が、水も普通に出ていたので、そこへもらいに行っていた。今でも「本当に助かった。感謝している。」と、両親は言っている。
しかし、私たちが住んでいたところは四階で、エレベーターがなかったため、水をもらいに行っても家まで運ぶのがすごく重たく、大変だった。

・避難生活とその後

＜両親・私＞
私の家に被害はなく普通に住める状態だったが、地震後は家にいるのが怖く、避難所で生活をしていた。しかし避難所にいても、すぐに逃げられるように寝るときは服のまま寝たり、何もないのに夜に目が覚めたりと、恐怖心が消えることはなかった。
母は、避難所で一番辛かったのは、プライバシーがないことだと言っていた。全く知らない人やそれほど仲の良くない人が隣で寝ているのだから、すごく辛い状態だ。
そして私たちは家が大丈夫だったため、１ヶ月もしないうちに自宅へと戻った。

＜父方の祖父母＞
祖父母の家は焼けてしまったので、区役所に避難していた。そこも私達と同様、プライバシーなど全

くなかったという。しかし、祖父母の場合は、それ以上にトイレなどの臭いがきつく、とても不衛生だったと言っていた。
　そして、父方の祖父母は新しい家をみつけ、約３ヶ月で避難所をでた。

＜母方の祖父母＞
　母方の祖父母の家も倒壊してしまって、住めない状態だったので、避難所生活を送っていた。
　私は、ここの避難所が大好きだった。周りの人たちがみんな笑顔だったからだ。私が行くと、飴をくれたりしていた。その人達も食料がなく大変な時だったのに、笑顔で小さい私の相手をしてくれていて、今考えても、すごく優しい人達だったなと思う。
　そして、母方の祖父母は、一年も経たないうちに仮設が建ったので仮設へと引っ越した。そして約二年間仮設で暮らしていた。仮設では、近所の方とも仲良くなり、畑をしたりして、祖父母は有意義に過ごしていたそうだ。そして、抽選で市営住宅が当ったので仮設に来てから二年後、やっと市営住宅に引っ越しすることができた。

・震災後

　私は、小学校三年生くらいのときに祖父が持っていた阪神・淡路大震災の本（写真集）を見せてもらった。当時幼稚園だったこともあり記憶が薄れていたので、その本を見たときすごく衝撃的だった。
　その時、私は阪神・淡路大震災当時、小さくてよかったと思った。
　でも、小さかった私でさえ「こわかった」という記憶が少し残っていて、今小さな地震が起きるだけでもすごく不安になることがあるから、自分の家を失くした人や、すごく辛い・怖い体験をした人は、どれだけ怖いのだろうとすごく思う。

・両親の話

　「震災当時は神戸に地震は起こらないと言われ、みんなそれを信じていた。
　だから、備えなんてできているはずもなかったし、震災が起きた時はどうしたらいいのかもわからなかった。
　その時は、神戸に地震は起こらないという情報を誰が、何を根拠に言ったのかと思い、全てをその情報を流した人のせいにしていた。しかし今となっては、神戸にも地震が起こる可能性があるということは、考えたらわかるわけで、その情報を鵜呑みにしてしまった自分たちが悪いと思うようになった。もっとしっかり考えてちゃんと備えをしていたらよかった。」と言っていた。

・　追悼式

　環境防災科に入り、初めて東遊園地で行われている追悼式へ行った。
　1 月 17 日の 5:46 に起きて震災のことを考えるということさえも初めてのことだった。
　追悼式は、雨だったため、竹筒の中に１本ずつろうそくを入れて、火をつける作業がすごく大変だった。
　また、マスコミの方も来ていたが、自分達が経験していないからかもしれないが、追悼式へ参加しているのではなく、記事になるインタビューをするためだけに来ている感じがして、少し悲しかった。
　同時に、私は今までここに来なかったことに対してすごく後悔した。
　震災のときに亡くなった方に対して、自分ができることは何もないのではないかと思っていたが、ここへ来て、黙祷するだけでも十分に意味があるのではないかと思う。
　だから、震災を経験したけど記憶にない人や忘れかけている人はここへ来て、あの時のことを思い出して何かを感じてこれからの生活に生かしてほしい。また、震災を経験したことがない人でも、ここへ来て、どれだけ辛く・悲しい思いをした人がいるのか実感してほしいと思う。
　そして、私はこれから先なにがあってもこの式を続けていってほしいと強く思う。
　また、卒業してもこの行事に参加しようと思う。

・まとめ

　まず私は「語り継ぐ」を書いて、あらためて周りの人の優しさを実感した。

周りの人が支えてくれていたから私たち家族はバラバラにならず、今も幸せに暮らすことができていると思う。
今、私に「毎日とても辛かった･･･」「毎日とても苦しかった･･･」という思いがあまり残っていないのも、周りの方々が手助けをしてくれたおかげだと思っているから、本当に感謝している。
そして、このことから、環境防災科が行っているうちの１つ、「ボランティア」がどれほど大きな力を持っていて、どれだけ必要とされているのかというのがわかった。
自分が震災時に手助けをしていただいた感謝の気持ちも込めて、次は私が被災して苦しんでいる人たちの手助けをしていきたいと思った。

また、「語り継ぐ」を書いて、防災・備えというものがどれほど大事かということもよくわかった。
当時は、地震がきたときに、なにがどこにあるのかわからなくなったり、タンスや食器棚が地震によって倒れたりするのが当たり前だったと思う。これは、しっかりと防災をしていない証拠だ。
祖父母の安否確認の時も、震災が起こる前に「もし震災がおきたらここへ避難する」と決めていたらすぐに見つかったのだ。
本当にあのときは私たちも、世の中もなにもできていなかったのだな、と感じた。
震災から 13 年経った今「もうあんな大きな地震は、自分のところにはこない。」と思っている人も多いと思う。
そう思ったら、また 13 年前と同じことが起こるのだ。
もう絶対にあの様な被害をださないためにも、私達が呼びかけていく必要があると思うし、なにより私達が率先して、防災を行っていくことが大切だと思った。

私は、今「あのときこうしておけばよかった。」と後悔するより、もし次に震災がきたときに「あのときこうしておけばよかった。」と後悔しないように、しっかりと防災をして、家族や友人達と話し合いをしたりしていきたいと思う。

・環境防災科

私は、環境防災科に入ってはじめて震災時の「体験談」を聞いた。消防士の方や、娘を亡くした方、震災時ライフラインの復旧に関わった方など、たくさんの人の話を聞いたが、どの話もすごく重く、濃い内容で、震災から１０年以上たったときに、やっと本当の震災の怖さ・大変さがわかった気がする。これは、環境防災科へ入学することができたから、わかったことで、普通に暮らしていても全く気づけなかったと思う。また、防災の大切さや、周りの人達の大切さも同じだ。
環境防災科に入って、たくさんの人と出会い、いろんなことに気づくことができて、本当によかったと思う。

これから、3 年間という短い間だったが、環境防災科で学んだこと・気づかされたことは一生忘れず、出会ったたくさんの人々に感謝していきたいと思う。
そして、今私達ができることをしっかりとやり、もう二度とあのときのような被害が出ないように活動していきたいと思う。

これから先何年たっても、あの日起こった出来事を私は忘れない。
そして、あの日起こった出来事を知らない人がいないように、しっかり語り継いでいこうと思う。

震災から・・

神戸市垂水区学が丘
山中　麻衣子

あの日、小さかった私は何を思っていたんだろう。あの日を境に変わった神戸は、強く成長している。当時、何もできなかった私が、今こうして震災を語り継ぐことができて本当にうれしく思う。

当時私の家族は、母が専業主婦で、父は消防士、妹は２歳だった。妹は震災の記憶が一切ないと言っている。家の家具は母が心配性ですべて固定されていた。私の家では、非常持ち出し袋を用意していた。母がそこに通帳を入れていたからよく覚えている。玄関に一番近い部屋の入口にいつも置いてあった。薄い紫色のリュックが…。

● 震災前日

幼かった私は、当時４歳。母と２歳になる妹と、前日叔母の家に遊びに行っていた。叔母の家は西神中央にある。私たちはよく電車とバスを乗り継いで、１時間以上かけて遊びに行っていた。その日も、いつもと変わらず夜には叔母の家から家に帰っていたそうだ。父は仕事帰りなのか、それとも休みなのか帰った時には家にいた。私と妹は遊び疲れて、家に帰るとすぐに寝てしまったそうだ。

父から聞いた話、いつもはみんな一緒にリビングで寝ている。なぜかその日は、私と父がリビングに布団を引いて、母と妹は隣のタンス部屋で寝ていたらしい。その夜、母が奇妙な月を見たと言っていたのを覚えている。それが今思うと、震災の前兆だったのか、たまたまだったのか、さだかではない。

● 震災直後

震災直後のことははっきりとは覚えていない。ただ覚えているのは、父が大きな声を出していたことぐらいだ。ここからは父と母に聞いた話を書きたいと思う。

“ゴォォォォォー”こんな音が聞こえたそうだ。この音は地震の揺れの音だ。私は団地に住んでおり、すごく揺れたそうだ。その時、父は幼かった私を守るので必死だったらしい。私たちの寝ているそばには、キッチンがあった。もしもキッチンにある包丁やお皿が飛んできていたら、大けがをしていただろう。隣の部屋で寝ていた母と妹は、タンスを固定していたおかげか大丈夫だった。震災で、私たち家族は全員無事だった。唯一、残念だったのが飼っていた金魚が亡くなったことだった。お祭りで持って帰ってきた金魚だった。お世話は母がしていたけれど本当に悲しかった。金魚鉢は、キッチンとリビングの間に置いていたため、金魚鉢が倒れキッチンは水だらけになっていた。次に“ガシャン”という音。食器が割れる音だった。大きな食器棚に入っている食器が棚からこぼれ落ちていた。キッチンには入れないような状態だった。

揺れの後、私たち家族はリビングの中心に一度集まり、様子を見て外に出た。私の記憶では、家の外にいるところからの記憶しかない。だけど、かすれかすれだが父が私を守るように覆いかぶさっていてくれたこと、家の下まで抱っこして逃げてくれたことはしっかり覚えている。

● 父の出勤

父の仕事は消防士だ。震災が起きたらとりあえず、自分の所属している署に出勤しなければいけなかった。父はもう私たちに会えないと思っていたらしい。うっすら涙を眼に溜めていたと母が言っていた。仕事に行かなければならないけど家族のことが心配で、仕事にいきたくなかったらしい。

今思えば辛い仕事だなと思った。

私たちは、車もなく交通手段もなく近くに親戚もいなかったため、近くに住んでいる幼馴染の祖父の家にお邪魔することになった。幼馴染の父も公務員（救急士）だった。そして、私たちは幼馴染みの家族と一緒に姫路にある幼馴染の祖父の家に避難した。避難する途中に、私が通うはずだった小学校がある。その横を車で通った時、違和感を持った。なぜなら校舎に大きなひびが入っていたからだ。小さかった私はわけがわからず、何で校舎が割れているんだろうとしか思わなかった。今考えると、小学校がひび入っていたならみんなはどこに避難していたんだろう。もし、幼馴染がいなかったら私たち家族はどうなっていたんだろうと思う。

そして、もう一つ父には気になっていることがあった。それは父の両親やいとこだった。父の両親といとこは、兵庫区の山の奥のほうに住んでいる。横には川が流れているし、山が今にも崩れそうな危ない場所だった。父は、心配だったけれども仕事があり連絡はとれたもののなかなか行くことができなかったと行っていた。父の両親の家の行き方はいろんな方法があるけど、１つの行く道は崖が崩れていて

通れなかったらしい。車が入れなくて、途中から歩いていったという。火災はなかったものの、崖崩れが多かったらしい。

● 不自由ない生活

私たちは必要なものを持ち、お昼には車で姫路にある幼馴染の祖父の家に来ていた。姫路でも地震はあった。だけど、神戸よりは規模の小さな地震だったそうだ。テレビをつけるとずっと災害現場の様子。とにかく地震の話題でもちきりだった。テレビが面白くないし、ゲームもない。遊ぶものがなくてよく一つの大きなキリンのぬいぐるみの取り合いで喧嘩しているのを覚えている。私たち子供にとって震災はよく分らないもの。私が震災を体験して思ったことは、「さっきの揺れ怖かったね」だった。私を含め子供は四人いて喧嘩は絶えなかった。私たちは４～５日間、姫路の家にいた。その間、何回か母たちは家の中がぐちゃぐちゃだったので神戸の家に片付けに帰っていたそうだ。妹は母がいなくなると、これでもかというぐらい泣いていた。幼かった妹は怖かったんだろう。すごくかわいそうだった。毎日、朝・昼・晩ご飯を頂いて、お風呂もトイレも入れて、引っ越したみたいな感じだった。毎日幼馴染も家にいて遊んでいて、退屈でもなかった。ただ、幼稚園の友達に早く会いたいなとは思っていた。

４、５日たってから家に帰ると家の中はすごく片付いていた。小さかった私でも家がいつの間に片付いていたんだろうと思ってびっくりした。そして、まだライフライン全ては使えなかった。今思えば、不自由ない生活を送っていたんだなと思う。

私は震災を経験しているのにもかかわらず、避難所生活・救援物資・ライフライン・お風呂・トイレ・怪我・寒さ・誰かを失った辛さ・孤独・不安、どれも経験していない。私が唯一経験したのは、父に会えなかったことによる寂しさだ。母から父は仕事だと聞いていたけど、何週間も会えないのが今までなかったからすごく不安だった。なんの仕事をしているのだろう、いつ帰ってくるかも分らなかったので本当に不安だった。私自身も、自分の家ではないところで長い間暮らし、落ちつかなかった。だけど、今考えると私のわがままはどうでもなかったなと思う。

震災でできた傷。それは右足のふくらはぎにできた水ぶくれ。この傷は寝るときに足が寒く、アンカで足を温めながら寝たためできた。避難所では、寒い思いをして寝ている人がいたのに。自分の足に今も残っていて、見るたびに震災を思い出す。

● 父の仕事

父は、震災が起きて１時間もしないうちに緊急出動に行った。消防士という仕事をしているため、私たち家族をほってまで市民を助けなければならない。今考えると、とてつもなく辛く、過酷な仕事だ。でも、消防や警察、自衛隊や政府の人たちは市民を助けなければならない。私たちにとって公務員はいつでも助けてくれる存在であり、頼れる存在。災害現場では、リーダーとなる。家族がいても、仕事を放棄できない。震災を受けた時の私は、父の仕事を理解できなくてつらい思いをしたけど、今やっとわかる気がする。

● 父の一週間

「悔しかったなぁ。」初めに出てきたのがその一言だった。父は１週間ぐらい車の中で過ごしたらしい。毎日毎日人を助けると同時に、たくさんの人の死を目の当たりにした。助けられない悔しさ、水がなく火の手が上がっていても消せない喪失感、気力が失われるような日々だった。

父は、数人で救助活動にあたっていたらしい。家へたまに帰っていたけど、私たちは姫路にいたので会えなかった。助けることで毎日必死で、疲労感がすごかったそうだ。父たちは、救助活動をしていて疲れていても車の中で寝泊まりし、食事も全く取れなかったそうだ。疲労・空腹感・寝不足がたまっていたそうだ。そして、人を助けたくても助けられなくて、目の前で人の死を目の当たりにして思い出したくないそうだ。私の知らないところで、父は頑張っていたんだと思うと父の仕事にすごく感動した。

公務員という仕事をしている全てのお父さん方に感謝したい。もし、消防士・救急隊・警察に助けられて当たり前と思っている人がいたら、それは間違っていると教えてあげたい。みんな一人の人間として生きているから。

よく、「政府が動いてくれない」と聞く。政府が動かなかったら私たちが動けばいい。みんなが自然と動くようになったら、こんなことは言わなくなるだろうと思う。

● 姉の家

私たちは、震災前日も行っていた叔母の家に車で行った。まだ、家は安全ではなさそうだ。父が心配だからという理由だ。家に帰ったのは必要なものを取りに帰っただけだった。叔母の家には２～３週間

お邪魔することになった。叔母の家がある地域は、震災の被害が全くなかった。叔母は、私たちのことが心配だったけれど、連絡がなかなかつかなかったらしい。叔母の旦那さんは警察官で、叔母と犬のヴィッキーだけだった。テレビでしか震災の状況がわからなかったらしい。叔母の家は、西神中央にある。そこは、被害が全くなかったため近くの大きな公園に仮設住宅が建った。公園で遊べなかったことを覚えている。近くのお店に買い物に行っても、物が高かったり売り切れていたりしていた。ちょうど冬だったことで、叔母の家には送られてきた梅干しやみかんがたくさんあった。おやつ代わりにみかんを食べていた。いつもは静かな家の周りにはたくさんの車が止まっていたり、人がいつも以上に多かった。家の近所には、犬を飼っている方がたくさんいて、犬たちが車や人が通るたびに吠えていて騒がしかった。仮設住宅が建った公園は、飼い主さんたちの集まりの場であった。犬をロープから放したり、犬が走り回れる場所でもあった。しかし、公園は仮設住宅でいっぱいになっていたので、犬の散歩に行ってもたまに誰かに会うぐらいだった。公園は、けれど、毎日が犬の飼い主さんたちの憩いの場であった。その場がなくなったことで、飼い主さんたちの憩いの場がなくなってしまった。

叔母の家で、ようやく震災の凄さがわかった。テレビで長田の町が焼けているところが流れていたり、死者の数を聞いたり、たくさんの名前がテレビに映っていたことも。幼かった私は、よくわからなかったけど、震災の大きさがなんとなく伝わってきた。ヘリコプターで、神戸の街を上空から撮影している映像が流れたときに、「本当に私の住んでいるなんところなんだろうか」と思った。そんなことを思いながら、早く家に帰りたいなといつも妹と言っていたのをおぼえている。

姉の家を出たのは、地震発生日から３～４週間、姫路の家から２～３週間後だ。帰る時も車で送ってもらった。私の家の横の道路が、地震のせいで割れていたり、隆起していたけど車は通れていた。私たちが家に帰る頃、近所の人たちもみんないた。ただ、ごみステーションにはあふれるほどのゴミの山があった。私の家でもそうだったけれど、食器が割れたり、物が壊れたりして使えなくなったものだろう。写真盾が割れたりカーペットが汚れたりしてたくさんのゴミが出た。

建物には何の被害もなかったけれど、家のなかの被害は、相当大きかった。私のうちでは、食器をそろえていたのに何枚かわれてしまったり、食器が人数分なくてご飯を食べる時紙皿で食べていた。日常的に使うものが壊れてしまい母は相当困ったと言っていた。

● 震災後

私の気付かないうちに、家の前の道路のコンクリートの隆起した部分はなくなっていたり、近くにある学校は大きなひびまで入っていたけど、いつの間にか工事が進んでいて運動場には仮設校舎がたくさんあり、元の校舎はグレーのような布で包まれていた。私の知らないところで復旧作業が行われていた。私は２年後小学校に上がる予定だったので、小学校がどうなるんだろうととても不安だったのを覚えている。結局、校舎は新しく建て直された。私たちが入学した時に学校が完成した。在校生の人たちは２年間も仮設校舎で授業をしていたし運動場で遊べなかったと思うとすごく窮屈だっただろうなと思う。私たちの住んでいた所は幸い、大きな被害がなかった。けれど、震災後も避難していなかった人は何回も余震が続く中でいつ何が起こるか分からない団地で生活をしていた。でも、私たちの住んでいた周りの建物の崩壊や倒壊はなかった。

私は震災後幼稚園に久々に行った時、友達に会えて本当に嬉しかった。母たちもお迎えの時に楽しそうに話していた。私たちは震災後すぐに姫路に行き、家の近くの人や友達のお母さんが心配していたと言っていた。１か月近く連絡もしていなかったら心配になっただろうと思う。

● 父の帰宅

父は、震災当日から１週間家に帰れず、ずっと車の中で寝泊まりしていた。家に帰れたのは１週間後。久しぶりに家に帰ったが、家には4～5時間しかいることができなかった。父の生活は、震災前と震災後では大きく変わった。家に帰っても家には誰もいなくて毎日一人。自分のことは自分でしなければならなかった。お風呂に入りたくても入れなかったそうだ。私たち家族は、父と１か月近く会っていなかった。父は、震災直後から働きっぱなしだった。疲労はもちろん、「本当に復興するんだろうか。」と、父は不安だったという。

父は言う。震災を通して、まず災害の規模に対して消防力（人員・資機材）が劣性だった。そして、街のあらゆるところで建物が崩壊し焼損している中、消火したくても水利が乏しかった。また、救助するにもってものが大きく困難。さらに、数日間の活動を余儀なくされ個人力も明らかに力不足となった。これからは、資機材の整備や人材育成、地域住民との町ぐるみの力が欠かせない。さらに、あらゆる組

織でのチームワークが大切だ。

● 震災から１か月

私たち家族は、震災当日から１か月ぐらい、ライフラインが完全に復旧してから自分たちの家に帰った。特に変わったところはなく、家に帰った時は嬉しさでいっぱいいっぱいだった。自分の家が一番落ち着くと改めて感じた。私の家では、またいつ起こるか分からない地震に備えて、非常持ち出し袋を新しく作り用意していた。

父の忙しさは変わることがなかった。震災から１か月、まだまだ神戸のまちはぐちゃぐちゃだったそうだ。神戸のまちが元のように戻らないと思っていたらしい。それぐらい神戸のまちの被害は大きかった。

● 今の神戸

震災から１０年以上が経ち、今の神戸は復旧じゃなく復興できていると思う。まちはにぎやかで、長田の町の人たちは長田のまちを昔のように戻そうと努力している。神戸のみんなが震災を通して、よりよいまちづくりを目指している。震災前と比べ、防災意識や知識が増えたと思う。震災が神戸にもたらした被害はすごく大きかったけれど、私たちに大きなものを残してくれたんじゃないかとも思う。ただ、いいことばかりじゃない。例えば、心に傷を負った人がたくさんいる。震災は人の心にも大きな傷後を残していく。心の傷を防ぐこと。簡単なことじゃないけど、今まで経験した災害からの教訓を守り、経験を活かし、心の傷を受ける人を少なくはできると思う。震災で、目に見えるものは直せても、目に見えないものまでは、今の科学技術ではできない。

今、私たちができることは、後世に震災の経験を伝えること、震災での教訓を伝えること、そして、直せない傷を作らないことだと思う。

● 環境防災科に入って

環境防災科に入るまでは、そんなに防災に興味がなかった。ただ、理科が好きだという理由で受験した。学校に入り、勉強を積み重ねていくうちに、阪神・淡路大震災の規模を改めて実感したり、知らなかったことのほうが多くてびっくりした。でも、いろんなことを勉強していく中で、辛いこともあった。震災で家族を亡くした人や身体が不自由になった人の話を聞いた。自分の住んでいるまちであった震災の凄さに触れ驚いた反面、怖くなった。私が成長していくにつれて震災の恐ろしさが伝わってきた。私は、こんな大きな地震があったことを忘れてはいけないと思った。この“語り継ぐ”で伝えていけることに嬉しく思う。

● 今

今、世界のいろんなところで震災が起きている。“地震大国”と言われている日本が助けてあげられるときだと思う。そして、私たちにしかできない支援ができると思う。私たちの震災経験を活かし、教訓を被災地の人に教えてあげる。どのようにしたらいいか案をだす。こういったことは震災を経験したからこそ、分かることのほうが多いと思う。“地震大国”という日本が、震災に協力的にならないといけないし、世界的に引っ張っていけるような国造りをするべきだと思う。そこで、私にできることはなんだろうと考えた結果、今私にできることは語り継ぐということ。こうやって、この舞子高校のホームページで震災体験を後世に伝えていくことだと思う。

● これから

私は今当たり前のようにいる家族、友達、大切な人たちを大切にしていきたい。だから、少しでも多くの人に震災での教訓を知ってほしい。防災意識を高めてほしい。今の日本は経済的にまだ余裕があると思う。そして、個人にも余裕があると思う。二度とあの恐ろしい震災が繰り返されないように一人ひとりが意識するだけで未来は変わってくる。後悔だけはしてほしくない。みんなが今できる最低限のことをするべきだと思う。被害の大きさは変わってくるだろう。自分にできることから始める。震災の大きさは変えられないかもしれない。でも、日々の生活を変えることで命を守ることははできる。

震災で亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこうと思う。

“防災を環境防災科から世界へ”

震災の記憶

神戸市垂水区学が丘
吉田　菜摘

１　地震発生と教訓

阪神・淡路大震災が起きたのは、私が４歳のときだった。そのとき私の弟はまだ０歳で、とても小さかった。弟は４月生まれだったので、生まれたてというわけではなかった。

この地震が起きる前の日は、このあたりで小さな地震が頻繁に起きていたらしい。この大きな地震の予兆だった前日の地震で備えの意識があった家庭はどれくらいあったのだろうか。でも今ほどに、みんながみんな普段から「備えないといけない」という意識は薄かったみたいだった。私の近くの人たちもあのときは、いきなりのことで何がなんだかわからないまま、とりあえず逃げたと言っていた。

それから比べて今は、ほとんどの人たちの間で、大きな地震が起きる前に来る余震の意識が広まってきていると思う。私の身近な周りでも、今はこの辺りで小さな地震が続くと、「また大きな地震が来るかもしれないね」と、近所の人が心配しているのをよく聞くし、私の母も地震速報が流れるたびに「神戸も気を付けとかな」とよく言っている。

震災はいつ来るかが何日も前からわかるものではないし、準備をしていたとしても、完璧に防いでしまえるものではない。しかも突然くるとあわててしまうものだから、違う地域で余震とかのニュースが入った時に、神戸も人ごとではないと思うのは大切だなと思った。実際に今は私の周りに暮らしている人の、地震への防災意識は高くて、油断せずに、いつ大きな地震が来るかもしれないと備えている人は増えたと思う。

でも当時は、神戸では大きな地震はこないだろうと言われていて、私の家では家具の固定や耐震は一切されていなかった。懐中電灯くらいは家にも置いてあったらしいけど、急な地震に対応できるような身近にはなくて、逃げるのが先で余裕も全くなかった。母は、あのときに水だけでも家に備えていたら、飲み水とかいろんなところで役にたっていたのにと言っていた。

誰か一人くらいでも地震に対する備えの意識があるだけで被災後すぐの不便、便利が変わるんだなと改めて感じた。震災の時の水はとても貴重なものになってくるから、日常に少し備えているだけで被災中の生活にとても影響してくるんだということを感じた。

私の家は地震前日、本当に何の備えもされていなかったので家具は倒れ放題で、建物自体も少し傾いたりして大変だったらしい。

地震が起きた数時間前は、連休で父が休みだったので、姫路で暮らしていたおばあちゃんの家に、何日か泊まりにいっていた。だから、地震が起きた日の前の夜くらいに帰ってきたばかりでみんな疲れていた。家に帰ってきて、そのころはこんな大地震がくるなんて思ってもいなかったと思う。

そして１月１７日５時４６分、突然大地震が発生した。

数分の間で大きな揺れが起きて、街の建物や道路が崩されていった。同時にその倒れてきた建物や家具の下敷きになり、一瞬のうちにたくさんの人が圧死などで亡くなられた。突然大きな揺れがきて、一瞬のあいだにまちをボロボロにして、多くの被害者まで出して、地震は本当に恐ろしいと改めて思う。

数分間の間にそれぞれの人に大きな被害をもたらしたあとも、長い間余震は続いた。

最近でもよく当時の崩れた高速道路や、つぶれた建物や街が火で覆われた火災の様子などが写った写真をよく見る。あの写真は本当に今の復興してきた神戸では考えられないような風景だなと思う。きっと地震が起きる前も現在の神戸と同じくらい整ってきれいな街だったと思うから、こんな風に一瞬にして、大きな怪物にでも踏みつぶされたかのようにひどい状況になっていたということを思うと今でも考えられない。

そして地震発生前のあの日に私たちが、もしあのときにあのまま、もう一泊でも多く姫路のおばあちゃんの家に泊まっていたら、どうしていたんだろうと思った。姫路だから被害は起きていなかったのか、いつもと寝ている場所も違うだろうし、家具の位置も違ってくる。

私の近所の知り合いの人で、たまたま地震が起きた当日は旅行していて家にいなかったという人がいた。テレビで神戸が大変な状況になっているのを見たそうだ。悲惨すぎるほどに建物や道路が崩された、神戸のまちがマスメディアによって伝えられたのを見たんだと言っていた。旅行先の朝のニュースでい

きなりその神戸のくずれた街を見た時は、まさか自分の街がと信じられなかったそうだ。神戸にいる友達や知り合いが無事なのかどうかということをすぐに確認したくても、電話は混みあっていてつながらないし、テレビで状況を知るしかなかったと言っていた。

帰ってきたら、自分の家も崩れていたそうだ。もしあの瞬間に家にいたら、人まで一緒につぶされていたかもしれないと思うと、本当にこわいと言っていた。

そのとき近所の人が、出かけているのを知らずに助けに見に来ていたそうだった。家族は全員旅行していて家にはいなかっただけなのに、行方不明だと思われていたらしい。

自分のいない間に何が起こるかわからないのは本当にどうしようもないけど、どこか長い間出かけるときは近所の人に何かひとこと留守にすることを言っておかないといけないことも学んだ。

中には逆にその日にたまたま神戸に来ていたとかいう人もいたと思う。

連休明けすぐだから、里帰りや、旅行でたまたま神戸にいて、震災にあった人がいたらと思うと、災害はいつどのタイミングで起きるのか全く想像もつかないなと思った。

もしかしたら今大きな地震が起きるかもしれないし、どこか違う地域で起きているかもしれない。常に備えておこうという意識は本当に必要だ。

その日の寝方とかは一瞬の大きな地震で生死を大きく分けるということにびっくりする。地震が発生する直前は、朝も早い時間帯だったので、私の家族は全員誰も起きていなかったけど、大きな揺れがおきて、母と父が真っ先に目を覚まして飛び起きた。

私はたまたまその日は、父の隣で寝ていたから家具が直接おちてくることはなかったけど、あの時にひとりで寝ていなくてよかったなと思った。

弟はまだ小さかったのでベビーベッドで寝ていたそうだ。だから母はすぐに弟のところへ行って抱きかかえて地震がおさまるのを待って家族そろって家から出ようとした。

私の記憶では、大きく家が揺れていたという感覚がほんの少しだけ残っているくらいだ。ほんの少し、立ちにくいなと感じたような感じがあったくらいだった。

でも母の話では、父の隣で寝ていた私の頭の上にタンスが落ちてきそうになったらしい。父の隣にいたので何とか下敷きにはならずに済んだ。これも偶然のことで、あとで聞くとひやっとする。そして私は危機一髪で助かったが、もう少しで家具の下敷きになって圧死していたかもしれなかったと聞いた。当時のそのことは何も記憶にないが、今考えるともし落ちてきていたらと思うと怖くなった。

私たちの家族は幸運なことに、揺れがきて少しおさまったときには家族全員で家から逃げることができていた。揺れが少しおさまったとき、母と父は私たちを連れて、とりあえず家から脱出しようとした。でも玄関近くにある食器棚の中身が全部とびだしていて、中の食器が割れて破片が周りに飛び散っていて、家から出るのも大変だったそうだ。破片が足に刺さらないように布団などを踏み台にして、父は私をおんぶして、母は小さかった弟を抱きかかえて家から出た。

とりあえず家から出ると、そのあとは家を出て隣の人と、１２階から父と母が、私たちをおぶったまま近所の人たちと、建物から脱出していたらしい。地震にすぐ気付いた母と父のおかげで、家族は全員無事に外に出ることができた。仲の良かった隣の家の人も全員無事だったので、一緒に同じ階の人たちをみんな確認して、下におりた。私たちの階に住んでいた人たちは全員無事に出ていけることができたエレベーターが使えなくて、１２階から私と弟をおんぶしながら階段で下りるのは大変だっただろうなと思う。

私と同じ階の人たちはなんとか家から脱出できたが、私の住んでいる建物のちょうど真ん中に住んでいた人達は、家の玄関ドアが開かなくて、ほかの階から助けに行ったという話も聞いた。地震が起きたら怖くてすぐに外に出て避難したいのに、ドアが開かなくてドアに閉じ込められていたら、もっと恐怖感でいっぱいだっただろうなと思う。

私の友達にも７階にすんでいた子がいた。その子の家は窓ガラスが全部割れて、玄関が中途半端に傾いて、全く開かなかったそうだ。蹴ったり押したり何をしても開かないから、ほかの階からたくさんの人が助けに来てくれたと言っていた。

同じ隣の人同士だったら、だれだれがまだ避難できていないということにも気付くだろうけれど、同じ階の人たちは、みんなドアが開かないからお互いが助けに行くのも難しいし、助かっていなくても見落とされやすいのに、ほかの階の人たちが助けに来てくれて、全員の安否も取りこぼしのないように確認してくれたそうだ。

私たちの住んでいた建物は完全に住民だけで、知り合いや近くの人の安全を確認していったことを知ってびっくりした。普段からこのような、近所の安否確認の訓練をしているわけでもないし、ほかの階の人同士はもっと関わりも少ないはずなのに、緊急事態の時は、まだドアがあいてないところの人がい

たら、自然に助けに行くという感じがすごくいいなと思った。
　でもその時、ドアが開いていなかった家を無理やりあけても誰も出てこなくて、結局その家の人は留守にしていたという家も何軒かあったらしい。
　こういうのを聞くと、もっと普段からのコミュニケーションをしっかりしないといけないとはこういうことかと感じる。

　そして避難所に行くまでは、私たちは車の中で避難していた。外に出た瞬間、外にあるあらゆるものがたおれたり、壊れたりしていた。いつも夜中に公園の奥にある森でほえていた野犬も、その日は何を思ってどう過ごしたのかなと思った。揺れで道路がつぶれるくらいだから、外にいた生き物たちへの被害も、ものすごかったと思う。動物たちの立場になって考えると、人間より何が起きてどうなったのかすごく不思議だったと思う。人間はまだ避難所とかで過ごすことができたし、食べ物も届くようになったけど、野犬や飼い犬にはあまり対応がされていなかったらしいから、動物たちもすごく大きな被害を被っているなと思った。
　私の知り合いの犬を飼っている人が、地震が起きる前の夜にずっと吠えていたと言っていた。よく犬は異常現象に敏感だと聞くが、本当なんだなと思った。

２　避難

　避難した時の私のわずかな記憶は、避難所の小学校の体育館に避難した時に、余震が何回も何回も起きて、避難している人たちが怖がっていた場面である。部分的であいまいにしか覚えていないけど、余震の恐怖はとても印象的だった。
　「ゆれた。」周りの人たちが騒ぐと、「また余震がきてるなぁ。」って近所の人たちが私に言っていた。でも私は余震が何かよくわかっていなかった。だから母に何回も「余震って何？」って聞いていた。
　体育館に避難している間、よく雨も降っていたそうだった。
　地震発生何日後かとかは忘れたが、小学校の避難所におにぎりが届けられた。ご飯粒が手のひらにたくさんついて、一粒ひと粒食べていた記憶が残っている。
　長い余震と避難生活が過ぎて、自分たちの家に帰る人が増えてきた。自分の家が倒壊している人や、半分崩れている人などいろいろあった。地震からもなんとか落ち着いて、わたしたちも家にもどった。震災前、新しく買い替えたばかりだった炊飯器と電子レンジは棚から落ちていた。上に置いてあったものはすべて下に落ちていて、壊れていた。建物自体は倒れたりしていなかったが、１２階に住んでいたので家の中はものすごく揺れて、家の中は原形がなかった。
　私はその光景を見たのか見てないのかでさえ覚えていないけれど、すごく悲惨な光景だっただろう。地震で家の中のあらゆるものを倒して、壊していった地震がこわい。

３　防災学習

　この震災を経験したことで、私の通っていた幼稚園や小学校、中学校でも毎年、震災を忘れないために何らかの震災授業をしていた。
　幼稚園は避難訓練をしたということくらいしか、あまりよく覚えていない。でもそのころは、避難訓練とかをとても楽しんで遊びながらやっていた記憶がある。
　小学校では１月１７日の当日に、朝会があり全校生徒で黙祷し校長先生の話を聞いていた。朝会のあとは、各教室で震災についてのホームルームの保護者参観だったので、そのクラスの先生によって震災授業の内容はさまざまだった。
　一番記憶に残っているのは、５年生のときは「しあわせはこぼう」という本を読んで自分の感想を発表したり、保護者の人に当時のことを聞いてまとめて、震災体験を親と一緒に発表するという授業をしたことだ。
　内容はまず子供から自分の覚えている当時の記憶を話す。そのあとその子供の保護者から、子供の知らなかったエピソードなど、覚えている震災の記憶を話してもらうというものだった。私は地震で揺れたときにタンスの下敷きになりかけていたことをその時に初めて母から聞いて知った。
　この授業が終わるくらいになると避難訓練用の避難警報が鳴って先生の指示で机の下に隠れた。そのままじっとした状態で、「運動場に避難しなさい」という放送の指示が流れると、教室から「おさない」「走らない」「しゃべらない」の「おはし」を守りながらクラスのみんなで運動場に出た。
　先生方たちが全員出たのを確認すると、最後に校長先生の話があった。

それも終わると、全校生徒で「しあわせはこべるように」を歌って保護者の人と帰宅した。

私たちは小さなころに地震を経験したから、こうして小さなころから知らず知らずのうちに身近に防災を学んできた。何も考えずに私の中では毎年の恒例行事だった。

小学生の低学年のときは、防災授業を毎年なんとなく受けていた気がするが、今思うと、この経験をあまり覚えていない私たちの記憶の中から、わずかでも覚えていることを母と一緒に発表するというようなこの授業のおかげで、忘れてしまうはずの記憶が自分のなかで忘れずにまだ残っていることがあるのだと思う。たとえば、避難所で余震を感じたというのはほんの少しの場面を少し覚えていただけなのに、小学校のこのような授業で何回も発表していたりするうちに、今でもよく思い出せる。毎年の恒例行事となっていたが、すごく貴重で大切な行事だったなと思った。

４　これから

私たちより当時の記憶がはっきりとしている先生たち大人の人が、当時小さくてあまり周りの状況も覚えていない私たちに防災学習をする機会を与えてくれたり、自分たちの震災体験を語り継いでくださったことを、次は私たちより下の世代のまだ生まれていなかった人たちに、私たちの震災経験のわずかな記憶と、先輩達から語り継いでもらってきたことを逆に語り継いでいかないといけないと思う。震災当時の記憶は鮮明に残っていない人が多い私たちの世代でしか伝えられないことを何か見つけて伝承していかないといけないなと思った。

先生たちは震災のときに避難所となった小学校などで避難所の運営をしていたときの話をたくさんしてくれた。母たちにただ連れられてきた小学校の避難所で炊き出しなどのランティア活動をしていたというのをはじめて知った時は本当に驚いた。小学生のうちは避難所に特別関心を持ったりしてなくて、避難所は当たり前の存在という感じだったから、小学生のときの学校の先生にあのお世話になった小学校の避難所で、掃除とかしてくれていたのかと思うと、あの震災はたくさんの人たちの支援があったことを感じる。

これからも阪神・淡路大震災が薄れることのないように小さいうちから防災教育をする習慣がこのまま続くといいなと思う。

これからの未来のために

神戸市垂水区小束山
吉村　昇悟

1　震災前・震災後

僕の小さい頃は「食べたら寝る」を繰り返していたらしい。そのため、小さい時のことはほとんど覚えていない。

僕は地震が起こる２日前に高熱を出したため、ポートアイランドの市民病院に搬送され入院していた。市民病院は看護師が常時勤務しているわけではなかったので、母が付き添ってくれていた。

地震が起こる前日に「ドラえもん」の映画を同じ病室の子と見ていた。その時は映画を見ることに集中していたし、まさか次の日に大地震がくるとは全く思わなかった。

1月 17 日午前 5 時 46 分。あの大地震が発生した。しかし、僕は揺れが起きている中で平然と寝ていた。だから、どのくらい揺れたのか、どんな揺れだったのかが全く分からない。もし、地震が発生した時に起きていたら、地震が発生するたびに震災当時を思い出し恐怖を感じていることだろう。最近感じることだが、寝ていて良かったとつくづく思う。

何時頃に目が覚めたのか分からないが、病院の中が慌ただしく、異様な雰囲気で覆われていたことははっきりと覚えている。何が起こったのか全く分からず、ベッドの上でじっとしているだけだった。しかし、僕のそばに母がいないことに気付き、心配になったのでベッドから抜け出した。泣きながら病院の廊下を歩いていると前方から母が現れ、僕を抱っこしてベッドに戻してくれた。あの時の安心感は今でも覚えている。後から母の祖母に聞いたことだが、地震が起こった時、僕がベッドから飛ばされないように母が必死でベッドを抑えていたらしい。その話を確かめるために母に聞いてみると、「無我夢中で、勝手に体が動いていた。息子はどんなことをしてでも守らないといけない！」と思ったらしい。もし母がいなかったらと考えると寒気がする。

2　家族の行動

僕と母は無事であったが、父や兄弟の安否はわからない状況だった。母は家族や祖父母のことが心配で安否確認をしようと電話をかけたが繋がらなかった。すぐに実家に帰りたかったに違いないが僕がまだ退院できる状態ではなかったので帰れなかった。震災 2~4 日目にしてようやく安否確認ができ、安心したそうだ。病院に届けられた物資を仕分けしようとして、母が病院の外へ出ると地面が水で覆われていた。母は雨が降ったのではないかと思ったらしいが、それは、「液状化現象」だった。

地震が起きた時、父は自宅で寝ていた。地震の揺れで目が覚めたらしい。タンスも倒れていなかったから、それほど大きな地震ではなかったと思ったらしいが、揺れが止まるとすぐに車に乗り、多聞台にある母の実家に向かった。母の実家には、僕の兄弟も熱を出してしまい安静にしていたからである。地震が起きた時、祖父母は僕の兄弟を助けるために兄と弟の上に覆いかぶさり物が落ちてきても当たらないようにしたらしい。弟は 1 歳という幼さだったため、全く地震のことについては覚えていない。一方、兄はというと、地震の揺れで目が覚めたが恐ろしくて身動きがとれなかったそうだ。幸い怪我人もでず、無事であった。唯一の被害といえば、皿が大量に割れたことと、石の階段にひびがはいっていたことぐらいであった。

3　父の実家、親戚の家

父の実家は東灘にあり、祖父母が住んでいた。地震により家は全壊になるという大打撃を受けたが、祖父母は毎日 2 階で寝ていたので助かった。揺れがおさまると祖父母は防寒具とわずかな食料を持ち、本山南中学校に避難した。貴重品等は 1 階においていたから、瓦礫の下に埋もれてしまい、取り出すことができなかった。祖父母に震災のことで話を聞くと、「2 階で寝ていて良かった。もし、1 階で寝ていたらと考えるだけで怖くなる。今、生きていることが奇跡」と語ってくれた。今でも、再建された家の 2 階で寝るようにしている。

父には兄妹がいて、父は末っ子だった。二人の兄妹は東灘と六甲道駅付近に住んでいた。東灘に住んでいた姉の家族は全員無事であった。奇跡的に姉が住んでいたマンションは倒壊せずに残っていた。姉の家と父の祖父母の家は非常に近かったので、無事だった姉や、姉の息子・娘が祖父母の家に行き安否確認をすることができた。家が無事だったので、家から食べ物や毛布等を持って祖父母がいる避難所を何度も往復したそうだ。

六甲道駅付近に住んでいた兄の家は倒壊してしまったが、幸い全員無事であった。六甲道といえばＪＲ六甲道駅がつぶれてしまったことで知られている。震災直後の六甲道駅付近は、ほとんどの建物が倒壊し、道路には家の破片が飛び散っていたらしい。そんな悪条件の道を何も履かずに歩いて避難所に行ったため、足の裏が血だらけになってしまったようだ。兄に当時の話を聞くと、あたり一面が真っ暗で何も見えなかったのでここがどこなのかがわからなかったらしい。目が慣れてくると周りが見えてくるようになり、自分の眼を疑い、現状を受け入れることができなかったようだ。避難所には知っている人もいたが、とくに会話もせずこれからどうなるのかが心配で自分のことで精いっぱいだったらしく、各地からの支援物資が届けられた時は本当に感謝したそうだ。阪神・淡路大震災でほかの方に助けられたので、恩返しがしたいという気持ちがでてきた。だから震災から復興してからは募金活動等に積極的に参加している。

4　避難所から自宅、そして泉佐野市へ

本山南中学校に避難していた祖父母は 2 か月ほど、震災当時から現在も僕が暮らしている家にやってきた。祖父母に会いに行くには車で東灘まで行っていたので、祖父母がいつも家にいることが、ただ単純にうれしかった。祖父母の家が全壊になったことなど知らなかったので普通に過ごしていた。祖父母は辛かったに違いないが、僕たち子どもといる時は優しく接してくれた。親はもちろん、祖父母もまた、子供には心配をかけないようにと接していたことを聞いて祖父母に感謝している。

家族が住んでいる家に祖父母が来て、2~3 ヶ月経った頃に祖父母が大阪の泉佐野市へ引っ越した。引っ越した家の近所には目立った建物もなく、家と家の間隔が多少あり、一言でいえば「田舎」である。でも、家のすぐ裏手には小さい川が流れており、自然はとても豊かだった。５月頃に家族全員で遊びに行った時には親戚も全員集まっていた。親戚のお兄さんやお姉さんと遊んだことを覚えているが、祖父母の家が倒壊したことも、なぜ泉佐野市へ引っ越したのかがわかっていなかった。ただ、楽しく遊んだことは覚えている。祖父母は泉佐野市へ引っ越してから、今までの生活の違いに戸惑ったそうだ。僕が祖父母に１つだけ震災のことについて質問をしたことがある。それは、「避難所に移ってから嫌だった事はなかったか？泉佐野市へ引越しをしてから困ったことはないか？」と聞いた。すると祖父母は、「避難所ではたくさんの人で埋まっていて、１人１人のスペースが狭く、圧迫感を感じてしまった。でも、各地から支援物資が届けられるようになると安心した。泉佐野市へ引っ越してからは、物がないことに多少は困ったが、自然が美しかったので心が安らいだ」と話してくれた。

5　幼稚園・小学校・中学校

震災から少し経ってから幼稚園に通い始め、地震があったことも忘れて無邪気に遊んでいた。それは自分が小さかったのもあるし、家族や親せきが、誰も亡くならなかったからだと思う。誰かがもし、亡くなっていたら、幼稚園には行けなかっただろうし、震災のことを忘れることも、話すことも出来なかっただろう。大切な人を亡くすという事を体験したことがない。

小学生になり震災のことについて勉強するようになった。小学１年生の１月 17 日に阪神・淡路大震災のことについて勉強した。その時に習ったことは、震災でたくさんの人が亡くなり、神戸の街が壊滅的な被害を受けたことくらいであった。また、「どっかんグラグラ」を読み、震災で亡くなった人がいることも知ったし、遺族の方々が深いショックを受けながら生きていることを知った。その時は、「遺族の方々がどんな気持ちで生きているのか？」と考えたこともしたが、その日のうちに全て忘れてしまっていた。学年が 2 年 3 年 4 年と徐々に上がっていくにつれて震災のことについてより詳しく勉強するようになった。1 年生の時とは考え方がまるっきり違っていた。1 年生の時は「そんなことがあったのか。」で終わらせていたが、高学年になり、「なぜ、あんなにも大きな被害がでてしまったのか？」、「家族を失った人たちはどうしているのか？」というような疑問を持ち始めた。さらに、テレビを見るようになり、１月 17 日頃になると震災の時の映像が流れ、それを見て言葉を失ってしまった。長田の町の

家が全壊になっていて、至るところから赤い炎がでており、黒い煙が空を覆っていた。そして最も驚いたのが、阪神高速が倒壊していたことである。阪神高速が途中で寸断されていて、バスが半分飛び出している映像だった。あの状態で止まるのは奇跡に近いと感じた。その後も他のテレビ局の震災に関連する内容を見て初めて、地震の恐ろしさが理解できたような気がした。しかし、恐ろしさだけではなく、いい経験をすることができた。小学生３年生の時に「しあわせ運べるように」という歌を歌い、その歌詞を聴いて、「震災のことは決して忘れてはいけない」と強く思うようになった。「しあわせ運べるように」は僕の大好きな曲の１つで、その歌詞の中で好きな詩がある。それは、「亡くなった方々の分も、毎日を大切に生きていこう」だ。この歌詞を歌うだけで涙が出てきてしまう。本当にこの歌詞のように生きていかなければ、亡くなった方々に対して失礼だと思うし、それを亡くなった方々も望んでいると思った。この曲を歌うときは、震災のことを忘れず、未来につなげていこうと思うようになった。逆に言えば、歌を歌っているときしかそんなことは考えていなかったことになる。たった１日しかしない授業のことなんて記憶に残らない。記憶が残っている人というのは、震災で大切な人を亡くしたという特別な経験をした人たちだと思った。こんなことを思ったことは失礼だと思うが、あの時の僕はそのように感じてしまったのだ。

中学生になってからも小学生のころとあまり変化が無かったが、中学１年生か２年生の時に、舞子高校で行なわれた「1.17 メモリアル行事」に参加した。「メモリアル行事」の１つに防災に関するディスカッションをする時間があり、舞子高校と多聞東の生徒の代表者が討論をし、防災について考えるものだった。僕は代表者が話す内容を聞いているだけだったが、そのディスカッションの中で舞子高校の先輩が、「災害時にはどうすればいいのか？」、「万が一の時のために何を用意しておくべきなのか」を具体的に説明をしてくれたので行動に移すことが出来た。まず、家に帰ってから親に話し、非常持ち出し袋の準備をすることにした。その中には、水と食料を３日分用意し、懐中電灯やラジオ、それを使うための電池等をいれた。中学生になって初めて、防災というものに関心を持ち始めたような気がする。やはり、「1.17 メモリアル行事」に参加したことが大きかったのだろう。中学３年生の時に、環境防災科の説明会を聞きに行った。その説明会で先輩方１人１人が目標を持っていることに驚いた。さらに、目標を持つようになったきっかけや、その目標を実現するために何をするべきなのかを話してくれた。僕も環境防災科に入ったら先輩たちのように、自分がしたいことが見つかるのではないかと思ったから舞子高校環境防災科に入ることに決めた。

6　環境防災科に入って・・・

環境防災科に入ってから最初の方は、消防士になろうと思っていた。でも、1~3 年でたくさんのことを学び、将来したいことが変わった。１年生の時にやった「災害と人間」という授業の中で、たくさんの外部講師を招き、それぞれの阪神・淡路大震災の時にどんな活動をしたのかを聞いた。ライフラインの中では水道が１番早く回復したそうだ。また、自衛隊の話を聞いてみると災害対応が出来ていなかったから出動の遅れにつながり、消防では人命救助するための資機材が無かったために、シャベル等でコンクリートを必死で壊し、やっとの思いで人命救助をすることができたそうだ。しかし、１人助け出すのに数十時間もかかってしまい、多くの人を救うことが出来なかった。「あの時、ジャッキ等の人命救助用の資機材があればもっとたくさんの人を助けることができたのに・・・」とすごく後悔していた。このような、当時震災の時に救出活動を行っていた人の話を聞き、災害時にどんなことをしたらいいのかを自然に考えるようになった。１番驚いたのは、この震災時に他の県や地域の方からボランティアとして神戸にきて活動してくれる人や、神戸には来ることが出来ないけれど、募金活動をしたり、支援物資を送ってきてくれる人等のこういったボランティア活動 が全国的に広まったことだ。「災害と人間」以外にも「環境と科学」という授業では、阪神・淡路大震災を襲った地震や、スマトラ島沖地震で大量の被害を出した自然災害のメカニズムについて学んだ。地震のメカニズムには２種類あり、プレートが移動することにより発生するものと、断層が動いて発生する地震とがある。阪神・淡路大震災の時は断層型の地震だと学んだ。また、スマトラ島沖地震で発生した津波のメカニズムについても学んだ。津波は、地震が発生すると起きるもので、波が引いていく時と、波が引かない時とがあり、スマトラ島沖地震のときは波が引いていき、魚が海岸線に飛び跳ねていたから、現地の人はその魚を取りに行ってしまい逃げ遅れてしまった。チリ沖で地震が発生し、地震で生じた津波が日本を襲った。津波についての知識を持っておくだけでも危険から命を守ることができると感じたから、ここで学んだことは絶対に忘れないと心に決めた。

日本だけでなく、日本以外にも災害が多く起きる災害大国が存在する。その存在を知ったのは「アンデス災害医療研修団」との交流をした時だった。「アンデス災害医療研修団」は南米から来られていて、僕が話をしたのはペルー出身の方だった。ペルーはアンデス山脈付近にあり、地震が頻繁に起こっているらしい。「ペルーでは災害が起こる前や、起こった後に災害対策をしているわけでも、災害対応が優れているわけでもない。だから、災害が起こると被害が大きくなってしまう。」と話してくれた。日本では考えられない現状を突き付けられた。このディスカッションを通して、ペルーはもちろん、他の国で起こる災害に対しても興味を持ち始めるようになった。自分で調べて、その国の現状を知った。日本は災害対策が進んでいるほうで、日本のように災害対策が進んでいる国もあるが、無い国のほうが多かった。アメリカで起きたハリケーン・カトリーナもその一つである。政府が災害対応をしなかったからたくさんの被害を出してしまった。

7　僕の将来

この現実を知ったから、日本だけでなく世界にも防災を広げていこうと思った。具体的には世界で活動している団体に入ろうと思う。JICA がその代表的な団体で、JICA は発展途上国に対して技術協力を無償で行っている。また、災害が発生した際には現地に行き復旧・復興を支援している。僕は災害が起こる前に現地に行き、様々な自然災害に対する備えを伝えていきたいと考えている。なぜなら、阪神・淡路大震災やスマトラ島沖地震のような未曾有の被害を繰り返さないために、災害から学んだことを次世代に伝えなければ亡くなった方々に申し訳なくなってしまう。ほんの少しの防災に関する知識を教えて、学習するだけで被害を減らすことができる。特に災害弱者と呼ばれる子供たちを中心に教えていきたい。子供は 1 番学習能力があり、吸収力があるからだ。世界で活動するにあたってしなければならないことがある。それは外国語を学ぶことだ。英語はもちろん、中国語、スペイン語も覚えたい。この 3 ヶ国語を覚えれば、世界を周りながら、自分の言葉で防災を広げていくことができる。何よりコミュニケーションがとれるということが防災をしていくうえでの絶対条件だと思う。今までに学んできたことの中から伝えることができるものは全て伝えていき、被害の規模を小さくできるように頑張っていきたい。それが、阪神・淡路大震災で生き残った僕にできる「語り継ぐ」だと思う。